昭和十年四月十五日印刷
昭和十年四月二十日發行
昭和十三年十月十日再版

國譯一切經 瑜伽部 十
【改正定價金壹圓廿五錢】

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者 長尾文雄
東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦二丁目三番地

發行所 株式會社 大東出版社
東京市芝區芝公園地七號地十番
振替東京一九四七一番
電話芝三九四四番

兩角製本所 製本所

眞如の轉依を證得するが故なり。施に於て倦有りとは、謂く施を修せんが爲めに、長時の難行苦行を誓受するが故なり。乞求を憎惡するとは、謂く共れ自ら取るを欲して、彼の乞求を厭ふが故なり。暫少も施無しとは、謂く一切の時に一切の物を施すが故なり。施を遠離するとは、謂く常に報施等を期することを遠離するが故なり。

又餘の經に說く。菩薩摩訶薩は、五法を成就せば、梵行者第一の淸淨の梵行を成就すると名づく。何等をか五と爲すや。一には當に求めて以て離欲を欲す。二には欲を捨斷する法なり。三には欲貪已に生ずれば、卽便す堅執す。四には欲を怖治する法なり。五には二二數會す。第一の淸淨の梵行を成就するとは、謂く出世間道なり。常に求めて以て離欲を欲するとは、謂く卽ち此の如實遍知を以て永く彼を斷ずるが故なり。此の如實遍智とは、謂く能く此の眞如に通達する智なり。欲を捨斷するとは、謂く恒に非梵行を捨斷する方便を觀察す。欲貪已に生じて卽便ち堅執するとは、謂く內に於て欲貪已に生ぜば、卽便ち堅執して外を擯出するなり。欲を怖治するとは、謂く、欲の過患を說いて諸の有情を怖れしめ、對治道を立てて一切を拔濟するなり。二二數會すとは、謂く染淨因果差別なる四眞諦の中に於て、世・出世の二道と、奢摩他と毘鉢舍那との二道とを以て數數證會するが故なり。何が故に此の論を名づけて大乘阿毘達磨集と爲すや。略して三義有り。謂く、等しく集むる所なるが故に。遍く集むる所なるが故に。正しく集むる所なるが故に。

釋詞の理に由りて、以て得名を顯はすが故に、此の問を爲す。等しく集むる所とは、眞現觀を證する諸の大菩薩が共に結集するが故なり。遍く集むる所とは、謂く、遍く一切の大乘阿毘達磨經の中の諸の思擇の處を攝するが故なり。正しく集むる所とは、謂く無倒に結集する方便に由りて乃至佛の菩提を證得するが故なり。（畢）

は施等を行ぜざるが故なり。二には恩を知らずして不善を順生す。往恩を顧みず、世理に違越して母を害す等の所有ゆる惡行を起すが故なり。身業の下劣とは、謂く竊盜を行じて牆窓の處を[三]致す。最も輕賤すべきものなり。語業の下劣とは、謂く妄語等の最も輕賤すべし。最も輕賤すべきものなり。活命の業の故なり。受用の下劣とは、謂く鬼犬烏等は好んで所吐を食ふが故なり。善衆の中に於て容れざる所なるが故なり。云何んが此の文字を轉じて無上の義を顯はすや。謂く不信等の言を轉變して密に餘の勝義を顯はすが故なり。信ぜずとは、謂く解脫智見自ら理に證するが故なり。恩を知らずとは、謂く涅槃智の有爲を恩と名づくるは、無爲は恩に非ず、非恩なりと知るが故に恩を知らずと名づく。斷密とは、謂く永く後有の續因の煩惱を斷ずるが故なり。容るる處無しとは、謂く當來諸趣の苦處に於て復た生ぜざるが故なり。食吐とは、謂く現法の中に於て資具力を假りて暫く身を持すると雖も、而も命財に於て欣樂を生ぜざるが故なり。若し能く是くの如きは是れ最上の丈夫なり。

又經に說くが如し。

不堅を覺して堅と爲し、善く顚倒に住し、

極めて煩惱に惱され。最上の菩提を得。

此れは前に說けるが如し。然も其の體は、謂く諸の菩薩は三摩地に依り、見と修との二道に由りて大菩提を證するなり。

又餘の經に說く。菩薩摩訶薩は、五法を成就せば、施波羅蜜多速に圓滿するを得と。何等をか五と爲すや。一には慳悋の法性を增益し、二には施に於て倦有り、三には乞求を憎惡し、四には暫少も施無く、五には施を遠離す。

慳悋の法性を增益するとは、謂く永く慳悋の隨眠幷びに彼の習氣を斷ずるに由りて、彼の法性

【三】致の字は麗本には攻となるも明本には致となる今は明本を可とすべし。

す。何等か世間共可の極重の罪惡なるや。謂く尊人及び大衆を逆害するなり。尊人に二有り、一には別、二には共なり。共に又二種あり、一には護世間、二には應供養なり。別に亦二種あり、謂く父及び母なり。護世間とは、謂く王なり。應供養とは謂く多聞の梵志なり。世間共に最清淨なりと許すが故なり、若しは總じて殺害するを尊人を逆すと名づけ、若しは國人及び隨行の畜生を誅するを大衆を害すと名づく。此の義を顯はすは、世間共可の極重の罪惡を詮表する文字と名づく。云何んが此の文字を轉じて密に清淨の義を顯はすや。謂く父母を逆害する等の言を轉變して、密に永く愛等を斷ずる餘の義を顯はすが故なり。所以何んとならば、若しは愛、若しは業、若しは有取の識、戒見の二取、眠等の六處及び所行の境を、其の次第の如く母父等と名づく。法の相似するが故なり。愛を發因と爲し、業を生因と爲し、此れに由りて能く習氣種子を植えるは、世間の父に類す。此の二因に由りて有取の識をして流轉して絕えざらしむ。流轉の時に於て解脫を求むと雖も。然も二種の非方便の法に由りて解脫の得を障ふ。謂く妄に清淨最勝を計度す。戒・見の二取は、猶ほ世間の多聞梵志の恒に妄に最勝清淨に計著するが如し。此の有取識の所依・所緣の六處の境界は、猶ほ世間の國及び隨行の如し。若し能く永く是くの如き等の法を斷ぜば、當に知るべし、是の人を最も清淨と爲す。

又經に言ふが如し。

信ぜず、恩を知らず、密を斷じ、容るる處無し。

恒に人の所吐を食す、是れ最上の丈夫なり。

今此の頌の中、世間極下劣の義を宣說する所有ゆる文字を轉變して、密に餘の最上の義を顯はす、世間の下劣に凡そ四種有り。謂く意業の下劣と、身業の下努と、語業の下劣と受用の下劣となり。意業の下劣に、復た二種有り。一には不信は善の生ずると相違す。後世等を信ぜざる

せんと欲すとは、聲聞等の行と別せんが爲めに、諸の菩薩は利他の行を以て勝と爲すに由るが故なり。是くの如く菩薩の自利利他の行具足し、已に速に無上正等菩提を證す。

又此の經の中の諸句義の意は、謂く論を興す時、大乘の法性は無上甚深にして、若しは諍心無くしてすら解すること尙難しと爲す。況んや諍競を爲すをや。凡そ諍論を興すに、請問を起すと雖も、心に解を求むること無くして、但た過失のみを求め。又傍證の者は、心賢直ならず、宗門を善くせずして僻執に樂著す。凡そ言論する所に、多く六失を具す。所以何んとならば、凡そ論を興す時、或は私心有りて邪宗に執著し、或は矯方便を以て他の誤失を求め、或は言の竟を待たずして、便ち亂語を興し、或は敵論者の言、正理に稱ふといへども、反つて相ひ誹撥し、或は麁言を作して敵論者及び時の衆の心を惱し。或は復た彼に於て自ら恚怒を懷く。多く是くの如き六種の過失を具す。

又論を興す時、身心寂靜なること甚だ得難しと爲す。寂靜ならざるが故に、二事成り難し。謂く善く他心を護り、善く自心を護る。此れに由りて他をして心に淨信を得せしめ、解脫の處に於て正しき勤方便を以て、自心をして定めしむ。又論を興す時、多く此の心を起すは、云何ぞ我をして勝を得、他をして負處に墮せしむるや。若し心を遂げざれば、卽ち熱惱を懷く。此れ有るに由るが故に、安樂に住せず。此れに由りて能く無間に善を修すること能はず。是の故に彼の增上の證法に於て未だ退するを得ざる有り。

祕密決擇とは、謂く餘義を說く名句文身を隱密轉變して、更に餘義を顯はす。經に言ふが如し。

父母と王と及び二多聞とを逆害し、
國及び隨行を誅す、是の人を清淨と說く。

今此の頌の中、世間共可の極重の罪惡を詮表し、文字を轉變して、密に餘の淸淨の義を顯は

三には辯才なり。此れに由りて諸の問難に於て、皆善く辯答するに堪能なり。

復た次に若し自ら利益安樂を求めんと欲せば、諸の論軌に於て、應に善く通達すべし。應に他と諍論を興すべからず。薄伽梵・大乘阿毘達磨經中に於て、是くの如きの言を說くが如し。若し諸の菩薩よ、勤めて精進して諸の善品を修せんと欲し、[一]眞實の法・隨法行を行ぜんと欲し、速に阿耨多羅三藐三菩提を證するを得んと欲せば、當に正しく十二處法を觀察すべし。應に他と共に諍論を興すべからず。何等か十二なるや。一には無上の義を證して、微妙の法を宣說する時、其の信解する者の甚だ得難しと爲す。二には受教の心を作して請問する者甚だ得難しと爲す。三には時衆の賢く善く德失を觀察すること甚だ得難しと爲す。四には凡そ興す所の論の、能く六失を離るること甚だ得難しと爲す。何等をか六と爲すや。謂く邪宗に執著する失と、矯亂語の失と、所作の語言、時に應ぜざるの失と、言退屈する失と、麁惡語の失と、心恚怒するの失となり。五には凡そ論を興す時、獷毒を懷かざること甚だ得難しと爲す。六には凡そ論を興す時、善く他心を護ること甚だ得難しと爲す。七には凡そ論を興す時、善く定心を護ること甚だ得難しと爲す。八には凡そ論を興す時、己劣にして、他に勝ることを得しめんと欲するの心、甚だ得難しと爲す。九には凡そ己劣にして、他勝れるに、心煩惱せざること甚だ得難しと爲す。十には凡そ心已に煩惱して、安隱住を得ること甚だ得難しと爲す。十一には既に安住せずして、常に善法を修すること甚だ得難しと爲す。十二には諸の善法に於て、既に恒に修せず、心未だ定を得ずして、能く速に定を得心已に定を得て、速に解脫すること甚だ得難しと爲すと。

此の經の中に於て、已に勤めて精進して諸の善品を修せんと欲せばと說く。何が故に復た[二]眞實の法隨法行を行ぜんと欲せば、と言ふや。意樂の淸淨なるを顯はさんが爲めの故なり。所以何んとならば、利養恭敬等の事を爲して、聞思等の諸の善品を修せざるが故なり。善く有情を攝益

【一】麗本には貞實と作るも元明兩本には眞と作る。今は元明兩本を可として之によれり。

【二】眞は麗本に貞となれること前の如し。

は、謂く言詞重疊して所說の義理、或は增し、或は減ずるなり。非義と相應とは、謂く略して五種有り。一は義無く、二は義に違し、三は理を損じ、四は所成と等しく、五は過難を招き集む。義得べからざるが故に、義相應せざるが故に。決定せざるが故に、能成の道理復た成ずべきが故に。一切の言論・非理・非諦の隨逐する所なるが故なり。時に應ぜずとは、謂く應に說くべき所の前後次ならざるなり。決定せずとは、謂く立ち已つて復た毀し、毀して復た立つること速疾に轉換して、了知す可き難きなり。顯了ならずとは、謂く闡陀論の相を越えて、領せずして答へ、或は典、或は俗の言詞雜亂するなり。相續せずとは、謂く中間に於て、言詞斷絕するなり。

論出離とは、謂く德失を觀察して、論をして出離せしめ、或は復た作さざるなり。

負處に墮するを恐るるが故に、論を興さず。設しは復た、興起して能く善く究竟す。又、若し敵論法器に非ずして、時衆に德無く、自ら善巧無きを知らば、應に論を興すべからず。若し敵論是れ法器にして、時衆に德有り、自ら善巧有るを知らば、方に論を興すべし。

敵論法器に非ずとは、謂く彼、不善處を出でて善處に安置する能はざるなり。時衆に德無しとは、謂く淳質ならず、僻執を樂しみ、偏黨有る等なり。自ら善巧無しとは、謂く論體乃至論莊嚴の中に於て、善く通達せざるなり。此れと相違するを、敵論は是れ法器なり等と名づく。

論多所作法とは、謂く略して三種有り。

將に論端を興し、定んで須ふる所の法なり。何等をか三と爲す。

一には善く自他宗に通達す。此れに由りて遍く談論を興すに堪能なり。

遍く言事に於て論を興すが故に。

二には無畏なり。此れに由りて、一切の衆に處して、論端を興すに堪能なり。

自他の宗を善くするとは、謂く、自宗と他宗との若しは文、若しは義に於て、前後、無間に淳熟して明らかに解す。言音圓滿とは、謂く善く聲論を解して方に論端を起し、當に所說の言音の過失を離れ、所發の言音に雜亂等なきなり。無畏とは、謂く大衆に處して、無量の僻執を爲し、英俊謀を結び、圍遶して發する所の言詞なりと雖も、坦然として畏るる無きなり。辯才とは、謂く言詞に滯り無きなり。敦肅とは、謂く言に卒暴無く、敵論者の言詞究竟するを觀て、方に乃ち言を發するなり。應供とは、謂く、性を立つること賢和に、言を發すること溫善にして、方便を以て敵論者の心に隨順するなり。

論負處とは、謂く言を捨て、言屈し、言過るなり。

此の三種に依りて、諸の立論者は負處に墮在し、他の屈伏を受く。

言を捨つるとは、謂く、自ら言を發して、己が論の失を稱し、他の論の德を稱ふるなり。

謂く、我・不善にして、汝を善等と爲すを謂ふ。

言屈するとは、謂く假りに餘事に託し、方便して退し、或は外事を說いて、本宗を捨て、或は忿怒を現はして憍慢覆藏する等、經に廣く說くが如し。

假りに餘事に託し、方便して退するとは、謂く餘事に託して、所說の義を亂す。經に說けるが如し。長老闡鐸迦は、諸の外道と共に論じ、或は毀し已つて宗を立て、或は宗を立て已つて毀す。

言過るとは、謂く略して九種有り。一には雜亂、二には麁獷、三には不辯了、四には無限量、五には非義と相應、六には時に應ぜず、七には決定せず、八には顯了ならず、九には相續せず。

雜亂とは、謂く所論の事を捨てて、廣く異言を設くるなり。麁獷とは、謂く憤發、卒暴にして言詞躁急なるなり。不辯了とは、謂く所說の法義を衆及び敵論の領悟せざる所なり。無限量と

是くの如く我の顚倒を遮破し已りて、即ち此の道理に由りて常等も亦無しと說く。此の言は是れ合なり。後に此の道理に由りて、是の故に五蘊は皆是れ無常、乃至無我なりと說く。此の言は是れ結なり。

現量とは、謂く自ら正しく明了にして迷亂無き義なり。自ら正しき義の言は、自ら正しく取る義を顯はす。眼に由りて正しく色等を取るが如し。此の言は世間の現に所得の瓶等の事の共許して、現量所得の性と爲すを簡ばんが爲めなり。彼は是れ假なるに由るが故に、現量の所得に非ず。明了の言は、有障等の不可得の因に由るが故に、現前せざる境を簡ばんが爲めなり。無迷亂の言は、旋火を輪と爲すと、幻・陽・燄等とを簡ばんが爲めなり。

比量とは、謂く現の餘の信解なり。此れ云何。謂く現量所得を除く餘の現はれざる事決定し、倶轉して、先に見て成就せば、現に彼の一分を見る時、所餘の分に於て、正しき信解を生ぜしむ。謂く彼は此に於て決定して當に有るべし。倶轉するに由るが故に。遠く烟を見て、彼に火有るを知るが如し。是れを現量を先と爲す比量と名づく。

聖敎量とは、謂く二量に違はざるの敎なり。此れ云何。謂く、所有ゆる敎は、現量・比量と皆相違せず、決して移轉無く、定んで信受すべきが故に聖敎量と名づく。

論莊嚴とは、謂く、論の正理に依りて、論端を發し、深く善美を爲すを論莊嚴と名づく。此れに復た六種あり。一には自他の宗を善くす、二には言音圓滿、三には無畏、四には辯才、五には敦肅、六には應供なり。

事に於て、我論者に對して、先づ諸法は無我なるべしと說く。此の言は是れ立宗なり。次に若し蘊に於て施設すれば四の過得べきが故にと說く、此の言は是れ立因なり。所以何んとなれば若し諸蘊に於て實我を施設するとは、此の所の計する所の我は、即蘊の相と爲さんや、蘊の中に於てすと爲さんや、餘處に於てすと爲さんや、蘊に屬せずして施設すると爲さんや。若し蘊相に即して施設せば、蘊は自在ならず、衆緣に從ひて生ず。是れ生滅の法なり。若し彼の相に即せば、我は成就せず、是れを初過と名づく。若し蘊中に於て施設せば、所依の諸蘊は旣に是れ無常なり。能依の我も亦應に無常なるべし。是れ第二の過なり。若し蘊を離れて餘處に於て施設せば、我は所因なく、我は亦用無かるべし。是れ第三の過なり。若し蘊に屬せずして施設せば、我は應に獨り存すべし。自性解脫なるに更に解脫を求めば、其の功唐捐ならむ。是れ第四の過なり。次に現在に於て過去を施設する如く說く、此の言は是れ立喩なり。所以何んとなれば、若し現在相に同じく實有の過去を施設すとは、此の計する所の過去は、現在の相に即すると爲さんや、現在の中に於てすと爲さんや、餘處に於てすと爲さんや、現在を待たずして施設すと爲さんや。若し現在の相に即して施設せば、已生・未滅は是れ現在の相なれば、過去の法體は亦應に已生未滅を相と爲すべし。是れ初過なり。若し現在の中に於て施設せば、未滅の中に於て滅體を施設して相應せざるが故に、道理に應ぜず。是れ第二の過なり。若し現在を離れて餘處に於て施設せば、現在を除いて外に餘實有ならば、事を爲すこと少分なるも、亦得べからず。云何んが彼に於て施設する。是れ第三の過なり。若し現在を待たずして施設せば、亦應に無爲を施設して過去世と爲すべし。是れ第四の過なり。然るに過去世は相・滅壞の故に、相無きの義成ず。若し現在に同じて施設せば、即ち四過を成ず。是の故に過去は相成就せず。諸法の無我も亦爾り。若し蘊に於て施設せば、即ち四過を得べきが故に、無我の義成ず、次に

に立宗と名づくべし。若し宣示を言はざる者が、身を以て此の義を表示するは、應に立宗と名づくべし。若し他をして解了せしむるを言はず、聽者未だ此の義を解せざるは、應に立宗と名づくべし。若し安立する所の如く、一切の過無き量なるが故なり。我法の自性の、若しは有、若しは無と、我法の差別の遍・不遍等を建立して、前の相を具足する、是れを立宗と名づく。

立因とは、謂く卽ち所成の未だ顯了ならざる義に於て、正しく現量の可得・不可得等の信解の相を說くなり。

信解の相とは、謂く是れは信解の因の義なり。所以何んとなれば、正しく現量可得・不可得等の相を宣說するに由るが故なり。應に成ずべき所の未だ顯了ならざる義に於て、信解生ずるを得。是の故に彼の相を說いて、乃ち立因と名づく。現量可得・不可得とは、謂く自體と及び相貌とに依りて說く。

立喩とは、謂く所見の邊を以て未所見の邊と和會して正說す。

所見の邊とは、謂く已に顯了の分なり。未所見の邊とは、謂く未顯了の分なり。顯了の分を以て未了の分を顯はし、義平等ならしむる所有ゆる正說を、立喩と名づく。

合とは、謂く所餘の此の種類の義を引いて、此の法に就いて、正しく理趣を說かしめんが爲めなり。謂く、三分に由りて、前の如き所成の義を成立し已つて、復た餘の此の種類の所成の義を成立せんが爲めの故なり。遂に彼の義を引いて此の法に就いて正しく道理を說かしむる、是れを合と名づく。

結とは、謂く究竟趣に到る所有ゆる正說なり。此の道理に由りて、極めて善く成就す。是の故に、此の事決定して異無なく結會して究竟する、是れを結と名づく。

已に立宗等の相を說けり。今當に事に就いて略して顯はすべし。無我論者の如きは、卽ち此の

る者には辯脫を得しむる所有ゆる言論なり。

論處とは、或は王家に於て、或は執理家に於て、或は淳質にして量を爲すに堪ふる者に對して、或は善伴に對して、或は善く法義を辨する沙門・婆羅門等に對して、論端を起すなり。

王家に於てとは、謂く是くの若き處に、王自ら降臨するなり。執理家とは、謂く是くの若き處に王事を處斷するなり。淳質にして量を爲すに堪ふる者とは、謂く商人等なり。善伴とは、謂く伴侶中に於て、立論者と敵論者とが其の言を越えざるなり。善く法義を辨する沙門・婆羅門等とは、謂く彼彼の論中に於て善く文義に通達するなり。

論依とは、謂く此れに依りて論を立つるに、略して二種有り。一には所成立、二には能成立なり。所成立に二有り。一には自性、二には差別なり。能成立に八種有り。一には立宗、二には立因、三には立喩、四には合、五には結、六には現量、七には比量、八には聖教量なり。所成立の自性とは、謂く我の自性と法の自性となり。

若しは有り、若しは無なり。

所成立の差別とは、謂く我の差別と法の差別となり。

若しは一切に遍じ、若しは一切に遍ずるに非ず、若しは常、若しは無常、若しは有色、若しは無色、是くの如き等の無量の差別あり。

立宗とは、謂く、應に成ずべき所を、自ら許す所の義を以て、他に宣示し、彼をして解了せしむるなり。

所以何んとなれば、若し言ふに應に成ずべき所を以てせざるもの、自宗已に成じて、他に說示するを、應に立宗と名づくべし。若し自ら許す所の義を言はざる者、他宗の應に成ずべき所の義を說示するは、應に立宗と名づくべし。若し他に言はざる者が、獨り此の言を唱ふるは、應

勝解決擇と道理決擇と論決擇と通達決擇と清淨決擇と引發決擇と句差別決擇と功用に由らず、暫く作意する時、一切の義成ずる決擇となり。

成所作決擇とは、謂く能く世間の種種の養命を成辨する方便等を決擇するなり。趣入決擇とは、謂く能く我れ三乘に於て、當に何の乘に入り、云何にして他をして亦趣入を得せしむるかを觀察するなり。勝解決擇とは、謂く聞慧に由りて所聞の教の如く勝れたる信解を起すなり。道理決擇とは、謂く思慧に由りて、前後所說の意趣を稱量するなり。論決擇とは、謂く聞・思する所の如く問論の道理を建立し、展轉して法樂を受用せしめんが爲めなり。通達決擇とは、謂く見道にて能く諦理に通達するが故なり。清淨決擇とは、謂く修道にて能く餘す無く諸の煩惱を淨むるを以ての故なり。引發決擇とは、謂く勝進道にて能く勝れたる功德を引發するを以ての故なり。句差別決擇とは、謂く二三四句等の差別の引發門にて無邊の法義の差別を演說するを以ての故なり。功用に由らず、暫く作意する時、一切の義成ずる決擇とは、謂く如來の智は先の功用を離れ、一切の義に於て暫く作意する時、無著無礙の智見轉ずるが故なり。

論軌決擇とは、略するに七種有り。一には論體、二には論處、三には論依、四には論莊嚴、五には論負、六には論出離、七には論多所作法なり。

此の七門に於て、方便善巧なるを論軌決擇と名づく。

論體は復た六種有り。一には言論、二には尙論、三には諍論、四には毀論、五には順論、六には教論なり。言論とは、謂く一切世間の語言なり。尙論とは、謂く諸の世間の隨聞する所の論なり。世智の尙ぶ所なるが故なり。諍論とは、謂く互相ひに違反して立つる所の言論なり。毀論とは、謂く更に相ひ憤怒して麁惡の言を發するなり。順論とは、謂く清淨の智見に隨順する所有ゆる決擇の言論なり。教論とは、謂く有情を教導して、心の未だ定らさる者には其の心を定らしめ、心已に定れ

り。智甚深とは、謂く無分別智なり。云何んぞ此の智は分別有ること無くして、能く分明に眞如の性を觀ずるぞ。生甚深とは、謂く諸の菩薩は業煩惱力に由らずして、示現し、受生するなり。菩提甚深とは、謂く無漏界の中に於て、諸佛の菩提は一性を建立すべからず。無量に相續して證する所なるが故に、種種を建立すべからず。性の所依には差別無きが故なり。諸佛甚深とは、謂く一大集會の中に於て、無量無邊の諸佛世尊の種種の身種種の意樂有れども、然も自他の差別有りと謂はず。又化身佛は佛相に住せずして、能く種種の佛事を造るなり。教甚深とは、謂く大乘教の中に於て、種種の秘密意樂の差別有り。三解脫門及び一切法は欲を根本と爲す等は、已に其の相を說けり。復た重ねて釋せず。

任持方便とは、謂く資糧に於ける所有ゆる方便なり。瑜伽方便とは、謂く奢摩他・毘鉢舍那なり。相方便とは、謂く止・擧・捨の相の中に於ける所有の方便なり。決擇方便とば、謂く順決擇分の中に於ける所有の方便なり。隔越方便とは、謂く卽ち任持方便なり。隣次方便とは、謂く卽ち決擇方便なり。隣次隔越方便とは、謂く卽ち瑜伽と及び相との二種の方便にして、順決擇分の中に於けるを隣次と名づけ、任持方便の中に於けるを隔越と名づく。聖道を去ること遠きが故なり。通達と修と圓證とは餘處に已に說けるが故に、重ねて釋せず。

智究竟とは、謂く盡無生智なり。斷究竟とは、謂く一切の煩惱餘り無く永く斷ぜるなり。畢竟究竟とは、謂く出世間道に由るなり。不畢竟究竟とは、謂く世間道に由るなり。下劣究竟とは、謂く聲聞と獨覺となり。廣大究竟とは、謂く諸の佛と菩薩となり。菩薩究竟とは、謂く最後位に於けるなり。諸佛究竟とは、謂く無障智生ずる時、猶ほ百千俱胝等の日の一時に出現するが如きなり。二十種の引發は、前に已に廣く說けり。

攝決擇とは、謂く十處に由りて諸の決擇を攝す。何等か十處なるや。謂く成所作決擇と趣入決擇と

他性と相應して已性に非ず。不相違の相應とは、謂く他性と相應すると雖も、然も相違せず、相違するも、貪と瞋と樂と苦との如くには非ず。是くの如き等なり。遍行の相應とは、謂く觸と想と思と作意とは、一切の心に於てし、無明と我慢と我愛と薩迦耶見の此の四煩惱は、染汚の意に於てす。不遍行の相應とは、遍行を除く所餘の貪等・信等なり。所治の相應とは、謂く諸の煩惱が更互に相應す。能治の相應とは、謂く對治道所攝の善法が更互に相應す。曾習の相應とは、謂く出世間及び出世の後の所得の法を除く餘の相應法なり。未曾習の相應とは、謂く前の所除の諸の相應法なり。下劣の相應とは、謂く聲聞獨覺乘の所攝の諸の相應法なり。廣大の相應とは、謂く諸佛・菩薩所有の相應法なり。成就・雜染・識等、乃至七種の淸淨は、已に其の相を說けり。復た重ねて釋せず。

八の何の詞とは、謂く、何誰か信じ、何の信ずる所ぞ。何を用つて信じ、何の爲めに信じ何に由りて信じ、何の信か、何に於て信ずるか、幾何の信あるかなり。八の苦の詞とは、謂く、若しは能く信ずるや。若しは信ぜらるるや。若しは用つて信ずるや。若しは爲めに信ずるや。若しは由りて信ずるや。若しは彼を信ずるや、若しは於に信ずるや。若しは爾所の信なりや。是くの如き等の無量の法門に皆八種あり。

不畢竟出離とは、謂く世間道に由る。畢竟出離とは、謂く出世間道に由る。前の四は解し易きが故に、重ねて釋せず。

相甚深とは、謂く三自性なり。雜染甚深とは、謂く眞如は云何んぞ染にして不染なるなり。淸淨甚深とは、謂く眞如は云何ぞ淨にして不淨なるなり。緣起甚深とは、謂く有法の生起する所に於て實の作用有ること無し。然るに彼の諸法は種種に生起す、是くの如き等なり。又實に無我にして我に似て顯現するなり。業甚深とは、謂く有業の果報は有れども作者は得べからざるな

て增上力有るが故なり。執受の增上とは、謂く四大種を所造の色に望めるなり。界の所依とは、謂く欲界等の所攝の身なり。趣の所依とは、謂く五趣所攝の身なり。洲渚所依とは、謂く贍部洲等なり。林田所依とは、謂く若し此れに依りて村田而も有れば卽ち此れを用ひて所依と爲す。補特伽羅所依とは、謂く若し此れに依りて補特伽羅而も有れば、卽ち此れを用ひて所依と爲す。無病所依とは、謂く若し無病に依りて、而も有れば卽ち此れを用ひて所依と爲す。尸羅所依とは、謂く若し尸羅に依りて、而も有れば、卽ち此れを用ひて所依と爲す。莊嚴の所依とは、謂く若し彼彼の沙門の莊嚴に依りて、諸の功德生ずれば、卽ち彼れを用ひて所依と爲す。

衆具依とは、謂く四依にして、卽ち衣服等なり。善友依とは、謂く若しは此れに依りて善等生起す。法依とは、謂く契經等の十二分教なり。作意依とは、謂く七種の作意にして、卽ち了相作意等なり。三摩鉢底の依とは、謂く七依なり。定んで經に言ふが如し。我れ說く、初靜慮に依りて、能く諸の漏を盡す。乃至無所有處に依るも亦爾り。

界の攝とは、謂く諸の界の種子なり。此れに由りて能く種所生の法を攝す。相の攝とは、謂く諸法の自相は還つて能く自ら攝す。種類の攝とは、謂く色の種類に約して十色處有れども、色蘊の所攝なりと、是くの如き等なり。分位の攝とは、謂く順樂受等の分位の所攝なり。助伴の攝とは、謂く色は五蘊の所攝なり。彼れは眷屬なるが故にと、是くの如き等なり。時の攝とは、謂く過去等は過去等に攝す。方の攝とは、謂く此方に於て所有の蘊等は卽ち此方に攝す。具分の攝とは、謂く欲・色・無色の無漏の諸色には一切の色を攝す。一分の攝とは、謂く眼根を色蘊に攝す。是くの如き等なり。更互の攝とは、謂く蘊と界と處とが、更に互に相攝するなり。勝義の攝とは、謂く諸法は無常・苦・不淨・空・無我・眞如の所攝なり。他性の相應とは、謂く

となり。作隨作行相とは、謂く所作を作し已つて、復た更に隨つて作す。此の行に由りて、善く守護し、已つて復た更に餘の隨つて守護する行を起すが如し。

自類の等無間とは、謂く貪の無間に、還りて復た貪を生ず。瞋等も亦爾り。各ゝ別の種類の等無間より生ずるが故なり。異類の等無間とは、謂く貪の無間に瞋等生じ、欲界の無間に色界生じ、色界の無間に無色界生ず、是くの如き等なり。三摩鉢底の等無間とは、謂く三摩鉢底の無間に相ひ生ず。欲界の善の無間に初靜慮に入り、初靜慮の無間に還つて欲界に生ずるが如し。是くの如く第二靜慮等と及び無色定とに於けるも理の如く應に知るべし。退の等無間とは、謂く靜慮等從り、退時の無間に生起する所なり。生の等無間とは、謂く受生の時の無間に生ずる所なり。欲界從り、無間に色界等を生ずるが如し。隣次の等無間とは、謂く諸の心・心法の無間に次第して生じ、其の中間に於て心斷絶無きが故なり。隔越の等無間とは、謂く滅定等を起す時、前生の心・心法が、後後の心心法に望めて、中間隔越するが故なり。起の等無間とは、謂く若しは此の法の無間に彼の法次第に生ず。滅の等無間とは、謂く此の法の無間に彼の法次第に滅す。心・心法の無間に滅し已つて、或は滅盡定に入り、或は無想定等に入り、或は無餘涅槃界に入るが如し。

取の增上とは、謂く眼等の根が、能く境界を取るに望めて增上力有るが故なり。生の增上とは、謂く男女の根が胎孕を生ずるに望めて增上力有るが故なり。住の增上とは、謂く命根が身等の住に望めて增上力有るが故なり。受用雜染の增上とは、謂く五受根が所受用に望めて增上力有るが故なり。又貪等の爲めに隨眠せらるるが故なり。謂く、樂は貪に隨眠せられ、苦は瞋に隨眠せられ、不苦不樂は癡に隨眠せらる。清淨增上とは、謂く信等の五根と未知欲知等の三根とが世・出世の清淨法に望めて增上力有るが故なり。田增上とは、謂く共業が器世間の生ずるに望め

卷の第十六

決擇分中、論品、第四之二

實の自性とは、謂く諸法實有の性なり。假の自性とは、謂く諸法假有の性なり。世俗の自性とは、謂く諸法世俗有の性なり。勝義の自性とは、謂く諸法勝義有の性なり。生因とは、謂く因等の四緣なり。成因とは、謂く三量、一には現量、二には比量、三には聲量なり。轉因とは、謂く順緣起なり。還因とは、謂く逆緣起なり。有相の境とは、謂く眼等の五識所緣の色等の五境なり。此れを緣じて生ずる所は、唯だ無分別の相有るに由るが故なり。有分別の境とは、謂く意識所緣の境なり。此の境を緣じて分別して生ずる有るに由るが故なり。對治の境とは、謂く此の境を緣じて雜染を棄捨す。能く對治するに由るが故なり。安住の境とは、謂く此の境を緣じて、能く聖天梵を生じて住す。衆聖の所住に由るが故なり。增益の境とは、謂く此の境を緣じて、能く轉〻勝進す。是れ增勝の因なるが故なり。損減の境とは、謂く此の境を緣じて、能く無想定と滅盡定とに入る。是れ心心法を損減する因なるが故なり。自在の境とは、謂く此の境を緣じて神通等の勝品の功德を發す。是れ自在の因なるが故なり。

分析行相とは、謂く種種の品類に分析する諸法にして、有色・無色・有見・無見、是くの如き等の如し。差別行相とは、謂く諸法の差別の義なり。一信相を或は心淨と名づけ、或は喜樂と名づけ、或は忍可と名づく、是くの如き等の如し。正解行相とは、謂く種種の行相を以て、正しく所緣の境を解す。了別の行相を識と名づけ、取像の行相を想と名づけ、領納の行相を受と名づく。是くの如き等の如し。觀察の行相とは、謂く十六行、卽ち無常等の四と、因等の四と滅等の四と道等の四となり。或は世俗の六行とは、謂く麁行と障行と苦行と靜行と妙行と離行

塗想と離散想と骨鎖想と空觀想となり。作意に七種有り、謂く了相作意と勝解作意と遠離作意と攝樂作意と觀察作意と方便究竟作意と方便究竟果作意となり。智に十種有り、謂く、法智と類智世俗智と他心智と苦智と集智と滅智と道智と盡智と無生智となり。遍知に九種有り、謂く欲繋見苦集所斷斷遍知と、色無色繋見苦集所斷斷遍知と欲繋見滅所斷斷遍知と、色無色繋見滅所斷斷遍知と欲繋見道所斷斷遍知と、色無色繋見道所斷斷遍知と、順下分結斷遍知と、色愛盡遍知と無色愛盡遍知となり。

清淨に七種有り。謂く、戒清淨と心清淨と見清淨と度疑清淨と道非道智見清淨と行智見清淨と行斷智見清淨となり。詞に八種あり、謂く、八の何詞と八の若詞となり。出離に六種有り、謂く、世間出離と聲聞出離と獨覺出離と大乘出離と不畢竟出離となり。甚深に十種あり、謂く、相甚深と雜染甚深と清淨甚深と緣起甚深と業甚深と智甚深と生甚深と菩提甚深と佛甚深と敎甚深となり。解脱門に三種有り、謂く空と無願と無相となり。入一切法に八種有り、謂く、一切の法には欲を根本と爲し、作意の生ずる所、觸の集起する所、受の引攝する所、定を上首と爲し、慧を最勝と爲し、解脱を堅固と爲し、出離を後邊と爲すとなり。

方便に七種有り、謂く、任持方便と瑜伽方便と相方便と決擇方便と隔越方便と隣次方便と隣次隔越方便となり。通達に五種有り、謂く、有相文字通達と所攝能攝通達と遲迎達と速通達と法性通達となり。修に四種有り。謂く、得修と習修と除去修と對治修となり。圓證に四種有り、謂く、果圓證と離欲圓證と根滿足圓證と功德圓證となり。究竟に六種有り。謂く、智究竟と斷究竟と畢竟究竟と不畢竟究竟と下劣究竟と廣大究竟となり。引發に二十種有り。謂く、無量引發と乃至、一切種妙智引發なり。

り。
識等の六とは、一には識、二には受、三には想、四には作意、五には智、六には遍知なり。淸淨等の六とは、一には淸淨、二には詞、三には出離、四には甚深、五には解脫門、六には入一切法なり。方便等の六とは、一には方便、二には通達、三には修、四には圓證、五には究竟、六には引發なり。

自性に四種有り、謂く實自性と、假自性と、世俗自性と、勝義自性となり。因に四種有り、謂く生因と成因と轉因と還因となり。境界に七種有り、謂く有相境と有分別境と、對治境と安住境と增益境と損減境と自在境となり。行相に五種有り、謂く分析行相と差別行相と正解行相と觀察行相と作隨作行相となり。等無間に九種有り。謂く、自類等無間と異類等無間と三摩鉢底等無間と退等無間と、生等無間と隣次等無間と隔越等無間と起等無間と滅等無間となり。增上に七種有り、謂く取增上と生增上と住增上と受用雜染增上と淸淨增上と田增上と執受增上となり。所依に八種有り、謂く、界所依と趣所依と洲渚所依と村田所依と補特伽羅所依と無病所依と尸羅所依と莊嚴所依となり。依に五種有り、謂く衆具依と善友依と法依と作意依と三摩鉢底依となり。攝に十一種有り、謂く、界攝と相攝と種類攝と分位攝と助伴攝と時攝と方攝と具分攝と一分攝と更互攝と勝義攝となり。相應に十種有り、謂く他性相應と能治相應と曾習相應と未曾習相應と下劣相應と廣大相應となり。成就に三種有り、謂く種子成就と自在成就と現行成就となり。雜染に四種有り、謂く、煩惱雜染と業雜染と生雜染と障雜染となり。

識に六種有り、謂く、眼識と耳・鼻・舌・身・意の識となり。受に三種有り、謂く苦と樂と不苦不樂となり。想に二十種有り、謂く、無常想と無常苦想と苦無我想と厭離食想と一切世間不可樂想と過患想と斷想と離欲想と滅想と死想と不淨想と青瘀想と膿爛想と破壞想と膖脹想と食噉想と血

なる。謂く勝解行地、乃至第十菩薩地に於てなり。幾何の無所得なる。謂く十一種なり。一に已生・已滅、二に未生、三に現前、四に因力所生、五に善友力所生、六に一切法の無所得、七に空性の無所得、八に我慢有る、九に我慢無き、十に未だ資糧を具せざる、十一に已に資糧を具せるなり。是くの如き十一の無所得は、所有の過去・現在・未來、若しは內、若しは外、若しは麁、若しは細、若しは劣、若しは勝、若しは遠、若しは近の次第に隨ひて應に知るべし。何の詞の如く、若の詞も亦爾り。謂く若しは能無所得、若しは所無所得なりや。若しは用つて無所得、若しは爲めに無所得、若しは由りて無所得なりや。若しは彼に無所得、若しは於に無所得、若しは爾所く無所得なりや。是くの如く一切處を盡して當に知るべし。

復た四種の等論決擇の道理有り。謂く能破と能立と、能斷と能覺となり。

能破とは、謂く他の宗を遮破し、彼は惡說にして善事爲るに非ずと言ふ。能立とは、謂く、自の宗を建立し、此れは善說にして眞に善事爲りと言ふ。能斷とは、謂く能く種種の他所生の疑を決す。能覺とは、謂く愚情を開曉して妙義を解せしむ。

復た五種の等論決擇の道理有り。謂く頌に言ふが如し。

自性・所依・識
淸淨・方便等
當に知るべし五に各六あり。
所知の諸法を觀ず。

自性等の六とは、一には自性、二には因、三には境界、四には行相、五には等無間、六には增上なり。

所依等の六とは、一には所依、二には依、三には攝、四には相應、五には成就、六には雜染な

識蘊の相を攝すること有ること無きが故なり。或は界數にして蘊數に非ず。謂く法界なり。

三句とは、謂く所問に於て唯だ三句を以て答ふ。問の言有るが如し。若しは蘊數にして亦處數なりや。設しは處數にして亦蘊數なりや。此れには應に三句を以て答ふべし。或は蘊數にして處數に非ず。謂く色蘊なり。或は處數にして蘊數に非ず、謂く法處なり。或は蘊數にして亦處數なり。謂く識蘊と意處となり。倶に數に非ざるものは、蘊處中に於て決定して有らず。

四句とは、謂く所問に於て、四句答を作す。問の言有るが如し。若しは根を成就せりや。亦耳根なりや。設しは耳根を成就せりや、亦眼根なりや。應に四句を以て答ふべし。初句は、謂く聾者の眼根は已に生じて捨てず。第二句は、謂く盲者の耳根は已に生じて捨てず。第三句は、謂く眼と耳との根已に生じて捨てず。第四句は上の爾所の相を除く。

述可句とは、謂く所問に於て順爾して答ふ。是くの如きの言を以て所問を述可するなり。問の言有るが如し。諸の無常は皆是れ行なりや。設しは當に是の行は皆無常なりや。應に述可して所問は是くの如しと、答ふべし。

遮止句とは、謂く所問に於て爾らずと答ふ。不爾の言を以て所問を遮止するなり。問の言有るが如し。蘊の外の諸行は幾ばくか諦の攝なりや。應に遮止して蘊の外に行無しと答ふべし。

等論決擇とは、謂く八何・八若の詞に依つて、一切の眞僞を問答し決擇す。

八何の詞とは、且く問の言の如し。何の誰か無所得なる。謂く已に般若波羅蜜多を得たる菩薩摩訶薩なり。何の所に無所得なる。謂く所取の相と能取の相となり。何を用つて無所得なる。謂く般若波羅蜜多を用つてなり。何の爲めにか無所得なる。謂く一切の有情を救脱して、無上正等菩提に住せしめんが爲めなり。何に由りてか無所得なる。謂く佛の出世に遇ひて正法を聽聞し、如理作意法隨法行に由る。何の無所得なる。謂く一切法の無所得なり。何に於て無所得

し。若し眼處を成就せば、亦色處なりや。設し色處を成就せば、亦眼處なりや。此れには應に順前句答を作すべし。若し眼處を成就せば、亦耳處なりや。此れには應に四句答を作すべし。是くの如く、乃至意處に對して理の如く應に說くべし。若し眼處を成就せば、亦法處なりや。此れには亦應に順前句答を作すべし。若し色處を成就せば亦眼處なりや。設し眼處を成就せば亦色處なりや。此れには應に順後句答を作すべし。若し色處を成就せば亦耳處なりや。此れには應に順後句答を作すべし。是の如く乃至法處に對して理の如く應に說くべし。若し耳處を成就せば亦眼處なりや。此れには應に四句答を作すべし。是くの如く乃至法處に對して理の如く應に說くべし。是くの如く一一次第に漸く減じて、諸處更に互に理の如く應に說くべし。

順前句とは、謂く諸法の中に於て、隨つて二法を取り、更に互に相ひ問はば、前法に依止して以て所問に答ふ。問の言有るが如し。若しは智にして亦所知なりや。設しは所知にして亦智なりや。此れには應に順前句答を作前すべし。諸の智は亦所知なり。所知にして智に非ざる有り、謂く餘法なり。

順後句とは、謂く卽ち二法展轉して相ひ問へば、後法に依止して以て所問に答ふ。問の言有るが如し。若しは所取にして亦能取なりや。設しは能取にして亦所取なりや。此れには應に順後句答を作すべし。諸の能取は亦所取なり。所取にして能取に非ざる有り、謂く色等の五境と及び法處となり。相應を除く。

二句とは、謂く所問に於て應に二句を以て答ふべし。餘有ることを得ず。蘊に依りて建立し、界に依りて建立するなり。而して問の言を發する有るが如し。若しは蘊數にして亦界數なりや。設しは界數にして亦蘊數なりや。此れには應に二句答を作すべし。或は蘊數にして界數に非ず、謂く色蘊と識蘊となり。何を以ての故に。一界として全うじて色蘊の相を攝し、或は全うじて

毀たず、三には相を分別せず、四には劬勞を堪忍す。是くの如き四法は、所依と及び無罣礙心の差別とを顯はす。誰をか所依と爲す。謂く、過去生に修する所の慈なり。云何んが無罣礙心の差別なるや。謂く邪行に住する所に於て、心に違毀無く、怨家の所に於て怨相を分別せず、他を利益せんが爲めに精勤して懈ること無きなり。

又諸の菩薩、四法を成就して常に能く諸の菩薩衆を攝益す。一には自ら稱量せず、二には正しく教誨して轉じ、三には柔和にして共に住す可き易く、四には精勤して承事供養す。是くの如き四法は、所依と及び攝益の差別とを顯示す。何等をか依と爲す。謂く、憍慢を摧伏するなり。云何んが攝益の差別なるや。謂く後の所說の三句が劣・等・勝の三種の菩薩の所に於けるは、其の次第の如し。

又諸の菩薩は、四法を成就して、能く無染心を以て廣く法施を開く。一には善く障難に達し、二には善く愚癡沈沒を除遣し、三には歡喜して攝受し、四には依怙と爲る法を愛樂す。是くの如き四法は、所依及び廣く法施を開く差別を顯示す。何等をか依と爲す。謂く、善く利養・恭敬は是れ障難の法なり通達す。云何んが廣く法施を開く差別なるや。謂く、示現と教導と讃勵と慶喜となり。示現は愚癡沈沒に於てす。教導讃勵は放逸に著し、自ら輕んじて下劣なるに於てす。慶喜は正行圓滿なるに於てす。性として法を愛樂するに由るが故なり。是くの如く前の四句の中、一一の句に復た四句の差別を引發す、是くの如き等を引發門と名く。

分別顯示決擇とは、謂く所說の如き蘊等の法の中に於て、其の所應に隨ひて一行と順前句と順後句と二句と三句と四句と述可句と遮止句と等を作す。

一行とは即問論の法なり。謂く一法と餘法とを以て、一一互に相ひ問ひ已りて此の法を除き、更に第二法と餘法とを以て、互に相ひ問ふ。是くの如く一一に一切法を問ふ。問の言有るが如

如意足を說く。是くの如きは方便善巧なり。

引發門とは、謂く〔是くの〕若きの處は一一の句の中に四句を宣說し、是の一一の句に復た四句を分ち、是くの如く展轉して無邊に引發するを顯示す。引佛經に言ふが如し。諸の菩薩は、四種の淨有りて、菩提の法を修す。一には善く空性を修し、二には諸の衆生に於て、心に罣礙無く、三には常に攝して諸の菩薩衆を利益し、四には無染の心を以て廣く法施を開く。是くの如きの四法は自利利他門に於て淨く菩提を修す。四種の所治の障を對治することを欲するが爲めの故なり。何等をか四と爲す。一には定味に貪著し、二には瞋恚、三には慢、四には利養に愛著す。又差別有り。初めは煩惱の斷對治を顯はし、餘は下劣乘を遠離することを顯はす。諸の菩薩は三種の因緣に由りて下劣乘を遠く。一には一切の有情を攝受し、二には已入法の者をして成熟せしめ、三には未入法の者をして正法に入らしむ。

又差別有り。初めは智の資糧を顯はし、餘は福の資糧を顯はす。此の三の差別とは、攝受し成熟して三門に入らしめ、各〻能く勝品の福を生長するが故なり。

又二緣の差別に由る。一には意樂に由る、謂く慈心と倶なり。二には正行に由る、謂く證教の二行を說く。

又諸の菩薩は四法を成就して、能く空性を修す。一には內に於て心に動搖無く、二には信解擇力に持せられ、三には一切法に於て如實に通達し、四には一切の障を解脫す。是くの如きの四法は、修の所依及び修の差別を顯はす。何を以て依と爲すや。謂く靜慮波羅蜜多なり。云何んが修の差別なるや。一には異生道に由る、謂く聞思力に持せらる。二には學道に由る、謂く諸法の實性に達す。三には無學道に由る、謂く一切の障を脫す。

又諸の菩薩、四法を成就し、諸の有情に於て、心に罣礙無し。一には慈を修し、二には正行を

遍知等の障礙法の相とは、謂く是くの如く三轉して實の如く知らざるなり。遍知等の隨順法の相とは、謂く安立する所の如く、色等の法の中、味等の相を觀察するなり。不遍知等の過失に於ける相とは、謂く解脫せず、乃至無上正等菩提を證覺せざるなり。此れと相違するを遍知等の功德に於ける相と名づく。

力無力門とは、謂く「是くの」若きの處は、諸の一一の句皆功能有り、若し一句を說かされば、義卽ち了せざることを顯示す。緣起經に說けるが如し、此れ有るが故に彼れ有り、此れ生ずるが故に彼れ生ず、所謂る無明は行に緣たり等、是くの如き諸の句は、一一皆功能有り、前の緣起の相の中に說けるが如し。

別別引門とは、謂く「是くの」若きの處は、先に經の一句を標し、後に無量の義門を以て廣く釋することを顯示す。經に言ふが如し。若し比丘・六法を成就せば、尙能く口風を以て高廣の大雪山王を吹碎す、況んや無明の死屍をや。何等をか六と爲す。若しは諸の比丘の心生善巧、乃至方便善巧なり。云何んが比丘の心生善巧なるや。所謂る比丘の惡不善の法を離欲するなり。乃至第四靜慮に具足して住す。是くの如きは、比丘の心生善巧なり。云何んが比丘の心住善巧なるや、所謂る比丘善く修習するが故に、所有の順退分の靜慮轉じて順住分と爲る。是くの如きは比丘の心住善巧なり。云何んが比丘の心起善巧なるや。所謂、比丘善く修習するが故に、所有の順住分の靜慮轉じて順勝進分と爲る。是くの如きは比丘の心起善巧なり。云何んが比丘の生長善巧なるや、所謂る比丘、未生の善法を方便して生ぜしむ、乃至廣く二正斷を說く。是くの如きは比丘の生長善巧なり。云何んが比丘の損減善巧なるや、所謂る比丘已生の惡法を方便して斷ぜしむ、乃至廣く二正斷を說く。是くの如きは比丘の損減善巧なり。云何んが比丘の方便善巧なるや。所謂る比丘、三摩地の斷行を成就せんと欲して、如意足を修す、乃至廣く四

由りて、遍く色等の事を知るが故なり。遍知とは、謂く五取蘊に於て是くの如く三轉するに由りて、如實に遍知す。遍知の果とは、謂く此の諸天・世間に從ひて乃至並びに天人が皆解脫乃至極解脫を得るなり。彼證受とは、謂く、自ら我れ已に無上正等菩提を證覺せるを證知するなり。

遍知等の門とは、謂く〔是くの〕若きの處は、眞實相に依りて、遍知相の義と、永斷相の義と作證相の義と、修習相の義と卽ち此の眞實の相等の品類差別相の義と能依所依相屬相の義と、遍知等の障礙法相の義と、遍知等の隨順する法相の義と、不遍知等及び不遍知等の過失と功德との相に於ける義とを宣說するを顯示す。此れ亦、愛味經に廣說せるが如し。眞實相とは、謂く取蘊所攝の苦諦の相なり。遍知相とは、謂く卽ち此の有味等に於て如實に知るなり。永斷相・作證相とは、謂く一切世間に從ひて解脫を得、永く諸の障を斷じて轉依を證得するに由るが故なり。修習相とは、謂く轉倒心を離れて多く修習して住するなり。品類差別相とは、眞實相に五種の差別有り、謂く色乃至識なり。遍知相に三種の差別有り、謂く味・味に由るが故に、乃至出離・出離に由るが故に如實に知るなり。永斷相・作證相に、各〻二種の差別有り。謂く煩惱の解脫と苦の解脫となり。此の諸天・世間に從ひて乃至並びに天人、皆解脫を得とは、煩惱の解脫を顯はす。此の差別の義を顯はさんが爲めの故に、次に出離の言を說く。何を以ての故に。餘經に言ふに由る。出離とは云何、謂く是くの如き處は、貪欲永く滅し、貪欲永く斷ず、貪欲を超過するが故なり。是くの如く能く未來の苦を生じ、煩惱は離繫を得るに由るが故に、苦亦解脫す。此の差別の義を顯はさんが爲めの故に、次に離繫縛・極解脫を說く。修習相に二種の差別有り、謂く見道と修道となり。顚倒心を離るとは、見道を顯示す。多く修習して住すとは修道を顯示す。能依所依相屬相とは、謂く眞實相等が後後の所依の性たることを顯示す。

應知應斷と爲す。第二句は、謂く色蘊に於て常淨樂我の顚倒の增益有り、又彼を觀じて不應知・不應斷と爲す。第三句は、謂く色蘊に於て常・淨・樂・我の顚倒の增益有ること無く、又彼を觀じて應知・應斷と爲す。第四句は、謂く、受等の四蘊に於て常・淨・樂・我の顚倒の增益有り、又彼を觀じて不應知・不應斷と爲す。色に因りて四句を作すが如く、是くの如く受等の一切處に因りて、應に廣說すべし。乃至說いて言はん、若し所作已辨の者ならば一切自ら後有を受けずと謂ふや、設し自ら後有を受けずと謂はば、一切所作已辨なるや。此れ應に四句を作るべし。初句は、謂く諸の異生は乃し命終に至るまで恒に妙行を行ず。第二句は、謂く斷見の者。第三句は、謂く無學。第四句は、謂く上の爾所の相を除く。

理趣門とは、謂く〔是くの〕若きの處は、六理趣の義を顯示す。何等をか六と爲す。一には眞義理趣、二には證得理趣、三には敎導理趣、四には離二邊理趣、五には不思議理趣、六には意樂理趣なり。是くの如き六種の前の三は、其の次第の如く應に後の三に隨ひて決了すべし。愛味經の中の如し。佛、諸の比丘に告げたまはく、色に於て味有り、乃至廣說す。此の中增益損減の二邊を遠離する理趣に由りて、眞義理趣を決了するを顯示す。有味・有患・有出離とは、損減の邊を離るることを顯はす。色に於ける、乃至識に於けるは、增益の邊を離るるを顯はす。染汚と淸淨とは、唯だ諸の蘊に依り、我に依らざることを顯示するに由るが故なり。乃至諸の比丘に告ぐ、我れ自ら證知す、此れに由るが故に、乃至已に無上正等菩提を證覺せりとは、不思議理趣に由りて、證得理趣を決了せることを顯はす。此れ眞に內の自の所受を證せるを顯はすが故なり。是くの如きの一切の經は皆是れ敎導理趣なり。應に意樂理趣に隨ひて決了すべし。謂く、所遍知の事と、所遍知の義と、遍知と遍知の果と彼れ證受する意樂とに依りて、此の經を說く。所遍知の事とは、謂く色等なり。所遍知の義とは、謂く有味等なり。此の差別の義に

壞と彼の二方便と彼の二差別とを顯示すること、善生經に說けるが如し。失壞とは、謂く內外の依事に染著するなり。

內の依事は五取蘊を相と爲し、外の依事は田宅妻子等を相と爲す。不失壞とは、謂く此の二種の染著を遠離するなり。失壞方便とは、謂く出家せず、復た出家すと雖、而も放逸を行じ、漏盡を得ず。此れと相違するは是れ無失壞の方便なり。佛・善生・族姓子に告げたまふ、二種の事有り、俱に美妙と爲す。若しくは鬚髮を落し、乃至非家に趣き、若しくは諸の漏を盡し、乃至自ら後有を受けずと稱するは、此れ正に不失壞及び彼の方便を顯はし、兼ねて失壞及び彼の方便を顯はす。此の相と相違するに由るが故なり。不失壞の差別とは、伽陀の中に顯はるが如し。謂く「諸の比丘、美妙寂靜にして諸漏を離る」と。此れ出家及び漏盡を顯はすなり。漏盡を顯はさんが爲めに、復た餘句を說く。謂く繫縛を離欲して、無執受の涅槃に最後身を任持し、魔の使ふ所を摧伏すとは、此れ世間道に由りて離欲し、出世道に由りて永く順下分結を斷じ、永く順上分結を斷じ、永く內の依事を斷ずることを顯はす。此れ則ち略して因の盡くると、果の盡くるとを說き、亦兼ねて失壞の差別を顯はす。此の相と相違するに由るが故なり。安立數取趣門とは、謂く〔是くの〕若きの處は爾所の補特伽羅に依りて、是くの如きの言を說くことを顯示すること、水喩經の中の如し。二の數取趣に依りて、三種四種の差別の言を說く。何等をか二と爲す。謂く異生と及び見諦となり。異生の差別に三有り、謂く白法無きと、白法少きと、白法多きとなり。見諦の差別に四有り、謂く四果に住するなり。三は有學、一は無學なり。安立差別門とは、謂く〔是くの〕若きの處は四句等の所問の義を顯示するなり。無常經に說くが如し。若し正觀の者は一切色を觀るや。設し色を觀る者は、一切、正觀なるや。應に四句を作るべし。初句は、謂く受等の四蘊に於て、常淨樂我の顚倒の增益有ること無く、又彼を觀じて

遮止門と、轉變字門と、壞不壞門と、安立數取趣門と、安立差別門と、理趣門と、遍知等門と、力無力門と、別別引門と、引發門となり。

攝釋門とは、謂く是くの若きの處は、諸經の緣起・所以・句義・次第・意趣・釋難を宣說するなり。攝事門とは、謂く是くの若きの處は、學事・聖諦・事等に約して、諸經を撝釋するなり。「諸の惡は作すこと莫れ、諸の善を奉行すべし、自ら心を善く調伏するは、是れ諸佛の聖教なり」と說くが如し。此の伽陀の中、三學に依りて說く、是くの如き等なり。總別分門とは、謂く「是くの」若きの處は先づ一句を以て總標し、後に餘句を以て別釋するを顯示するなり。十二暇總集經の中に先に說けるが如し。自圓淨・他圓淨の二句の後に、其の次第の如く五句に五句を以て別釋する、是くの如き等なり。後後開引門とは、謂く「是くの」若きの處は能く後後の開引の所依と爲すが故に、此の諸法は是くの如き次第に說くことを顯示す。信等の五根の先後次第するが如し。必ず先に信受して、乃ち精進を發し、精進を發し已りて然る後に念に住し、念に住し已りて心に安定を得、心安定し已りて方に如實に知る、是くの如き等なり。遮止門とは、謂く「是くの」若きの處は此の事に依止して此の事を遮止することを顯示するなり。斤柯喩經の中の如處し。漏盡に依止して四種の補特伽羅を遮止す。一には正法の外に處し、二には正法の中にするは、但だ聞思を得て、便ち喜足を生ずるなり。三には修慧の中に於て、心に怯弱を生じ、四には資糧未だ滿たざるに、諸の比丘に告げて、我れ我見を知り、我が漏盡きたりと說けるなり。是くの如き等の一段の經文は第一を遮止し、勸めて精進して觀行を修習せず、とは第二を遮止し、斤柯の喩を說くは第三を遮止し、船筏の喩を說くは第四を遮止す。轉變字門とは、謂く「是くの」若きの處は、餘の顯了の字の義を轉じて餘の義を變成するを顯示すること、不信・不知恩等の伽陀の如し。後に當に說くべし。壞不壞門とは、謂く「是くの」若きの處は、失壞・不失

と爲すや。一には聚結相應、二には隨逐相應、三には連綴相應、四には分位相應、五には轉變相應なり。

聚結相應とは、謂く、舍等に於て木石等有るなり。隨逐相應とは、謂く隨眠等の因、此れ有るに由るが故に、煩惱等現行せずと雖も、而も彼と相應すると說くなり。連綴相應とは、謂く親屬等の展轉して相應するなり。分位相應とは、謂く攝受益等の相續の分位にして、此の分位現前するを說いて、樂と相應す、乃至不苦・不樂と相應すと名づくるに由るが故なり。轉變相應とは、謂く客塵煩惱等の現前して、此れ有るに由るが故に貪等信等と相應すと說くなり。

轉の義とは、謂く五種あり、一には相轉、二には安住轉、三には顚倒轉、四には不顚倒轉、五には差別轉なり。

相轉とは、謂く生等の三の有爲相、彼の三相差別して轉ずるに由るが故なり。安住轉とは、謂く所持の法、能持の中に住して、轉ずるが故なり。顚倒轉とは、謂く雜染の法、不如實に轉ずるが故なり。不顚倒轉とは、謂く淸淨の法、如實に轉ずるが故なり。差別轉とは、謂く一切の行が過去・未來・現在・內外等に差別して轉ずるが故なり。

釋決擇とは、謂く、能く諸經の宗要を解釋するなり。彼の義を開發するが故に。

此れ復た云何。略して六種有り、謂く所遍知事と所遍知義と遍知因緣と、遍知自性と、遍知果と彼證受となり。此の六義に由りて、其の所應に隨ひて遍く諸經を釋するが故に、釋決擇と名づく。

所遍知の事とは、謂く蘊等なり。所遍知の義とは、謂く無常等なり。遍知の因緣とは、謂く淨尸羅の根門を守る等なり。遍知自性とは、謂く菩提分法なり。遍知の果とは、謂く解脫なり。

彼を證受すとは、謂く解脫智見なり。

又十四門ありて釋決擇を辯ず。何等か十四なるや。謂く攝釋門と攝事門と總別分門と後後開引門と

卷の第十五

決擇分中、論品、第四之一

云何んが論決擇なるや。[一]略して說くに七種あり、謂く義決擇と釋決擇と分別顯示決擇と等論決擇と攝決擇と論軌決擇と秘密決擇となり。

義決擇とは、謂く、六義に依りて、而も決擇を起すなり。何等か六義なる。謂く自性の義と因の義と果の義と業の義と相應の義と轉の義となり。自性の義とは、謂く遍計所執等の三の自性なり。因の義とは、謂く三因なり、一には生因、二には轉因、三には成因なり。

　生因とは、謂く因等の四緣なり。此れに由りて能く諸の有爲を生ずるが故なり。轉因とは、謂く此れに由りて次第に彼の法の轉ずること、無明の行に緣たる等乃至集滅の如し、此れに由りて次第に染淨に轉ずるが故なり。成因とは、謂く現量可得・不可得等の正說の所攝にして、此れに由りて能く先に未だ了せざりし所の所成の義を成立するが故なり。

果の義とは、謂く五果なり。何等をか五と爲すや。一には異熟果、二には等流果、三には增上果、四には士用果、五には離繫果なり。

　異熟果とは、謂く阿賴耶識等なり。等流果とは、謂く前生の諸の善法に起さるる所の自相續の後の諸の善法なり。增上果とは、謂く一切有情の共業の增上力の所感の器世間なり。士用果とは、謂く稼穡等なり。離繫果とは、謂く聖道に由りて隨眠の永く滅するなり。

業の義とは、謂く五種の業あり、一には取受業、二には作用業、三には加行業、四には轉變業、五には證得業なり。

此の五業の義は、前の業染の中に釋せるが如し。相應の義とは、謂く五種の相應あり、何等をか五

【一】以下、決擇分中の論品なり。

名づけば、色等は應に是れ無分別智なるべし。彼れは分別の自性に非ざるが故なり。若し所緣に於て加行を作すが故に無分別と名づけば、卽ち分別の性は應に是れ無分別智なるべし。若し此れは是れ無分別なりと謂はば、此の加行の相は卽ち分別の相なるが故なり。是の故に無分別智は彼の五相に非ず。

若し爾らば、當に云何に無戲論無分別の相を觀ずべきや。謂く所緣に於て加行を起さざるなり。

此れ復た云何。若し諸の菩薩〔一〕遇々敎に隨順し、諸法の若しは性、若しは相、皆眞實ならざるを觀察せんに、此の觀察串習力の持する所に由るが故に、加行に由らず、如實無戲論界一切法の眞如の中に於て、內心寂定たり。是くの如きを、乃ち無戲論無分別智と名づく。

復た次に、若し諸の菩薩、性是れ利根ならば、云何んが復た、練根を修せしむるや。謂く利の軟根に依りて、利の中根を引發し、復た利の中根に依りて、利の利根を引發せしむるが故なり。前に已に一切の菩薩は、性是れ利根なりと說けり。而して復た時時の中に於て、應に練根を修すべしと說くことは、自の種類に於て復た軟等の三品有りて、後後に相ひ引發するに由るが故に說いて練根と名づく。若し此れに異りては、諸の利根種性の補特伽羅は、應に根は唯だ一品なるべし。諸の菩薩等の根品の差別は應に得べからざるべし。然るに得可き有り。是の故に利根に復た差別有るなり。

〔一〕遇の字、麗本には過に作るも、宋・元・明三本、及び宮內省本には遇に作る。今は遇に從ふを可と思ひ過とあるを遇となせり。

義に隨ふ名の分別を對治せんが爲めの故に、是くの如きの言を說く。菩薩は是くの如き一切の名に於て、正に隨ひて觀ぜず、正に隨ひて觀ぜざるが故に、執著を生ぜず。義に隨ひて、名に於て見ず、執せざるに由るが故なり。

無分別とは、略して三種有り。一には知足無分別、二には無顚倒無分別、三には無戲論無分別なり。此くの如き三種は異生・聲聞・菩薩なりと、次第の如く應に知るべし。

諸の異生は、一の無常等の法性に隨ひて、究竟して思ひ已つて、便ち喜足を生じ、是の事必ず然り、更に異望なしと謂ふに由りて、是れを知足無分別と名づく。爾の時、一切の尋思の分別、皆止息するが故なり。諸の聲聞は諸蘊の中に於て、常等の顚倒を對治せんが爲めの故に、如理に唯だ色等の法有りと觀察する時、便ち出世間の智を得て、無我の性に通達するに由りて、是れを無顚倒無分別と名づく。諸の菩薩は、色等の法の唯だ戲論なるのみを知り已つて、遂に能く一切の法相を除泯し、最極寂靜の出世間智を得て、遍滿眞如に通達するに由りて、是れを無戲論無分別と名づく。

此の無分別智は、復た五相を離る。謂く作意無きに非ざるが故に。超過に非ざるが故に。寂止に非ざるが故に。自性に非ざるが故に。所緣に於て加行を作すに非ざるが故なり。

無分別と名くるは、所以何んとならば、若し作意無きが故に無分別と名づけば、熟眠・醉等は應に是れ無分別智なるべし。彼れは諸法の相を思惟せざるに由るが故なり。若し超過の故に無分別と名けば、第二靜慮より已上の一切地は、應に是れ無分別智なるべし。彼は尋思を超過するに由るが故なり。若し爾らば、三界の心・心法は是れ分別の體なりとの言は、卽ち相違と爲る。若し寂止なるが故に無分別と名づけば、滅受想定は應に是れ無分別智なるべし。分別の心・心法は彼れに於て寂止するが故なり。若し爾らば智も亦應に無かるべし。若し自性の故に無分別と

を隨觀せず。何を以ての故に。所計度の彼彼の諸法に於て、假りに客の名を立て、客の名に隨ふに由りて言説を起す。是くの如き、是くの如きの言説に隨ひて、是くの如き、是くの如きの執著を起す。菩薩は是くの如き一切の名に於て、正に隨ひて觀ぜず、正に隨ひて觀ぜざるが故に執著を生ぜず。此の經の中に於て、無性分別を對治せんが爲めの故に、是くの如きの言を説く。是の菩薩には實に菩薩有り。是くの如き等なり。實有の言は是れ有性の義なるに由るが故に。有性分別を對治せんが爲めの故に、是くの如きの言を説く。正に菩薩を隨觀せず。乃至正に不行を隨觀せず。補特伽羅及び法の二性を遣るに由るが故に。增益分別を對治せんが爲めの故に、是くの如きの言を語く。所以何んとなれば、名の自性空は不實の遍計所執の自性を遣るに由るが故に。損減分別を對治せんが爲めの故に、是くの如きの言を説く。空性に非ず、此の名に於て遍計所執自性遠離の性は一切時に有るに由るが故に。一性分別を對治せんが爲めの故に、是くの如きの言を説く。此の色の空性は即ち色に非ず、乃至此の識の空性は、即ち識に非ず、自性異るに由るが故に。所以云何んとなれば、色等は是れ遍計所執の自性にして、空性は是れ圓成實の自性なるが故に。異性分別を對治せんが爲めの故に、是くの如きの言を説く。亦色を離れて別に空性有らず、乃至空性は即ち是れ識なり。遍計所執の自性無相なるに由るが故に、彼彼の無を離れて、性は得べからざるが故に。自性分別を對治せんが爲めの故に、是くの如きの言を説く。此れは唯だ名のみ有り、所謂る此れは是れ色なり、乃至此れは是れ識等なり。能詮を離れて決定の所詮の自性有ること無きが故に。差別分別を對治せんが爲めの故に、是くの如きの言を説く。彼の自性は生無し、乃至、正に淨を隨觀せず、生等の差別の相を遣るに由るが故に。名に隨ふ義の分別を對治せんが爲めの故に、是くの如きの言を説く。所計度の彼彼の諸法に於て、假りに客の名を立て、客の名に隨ふに由りて、言説を起す。是くの如き等なり。

所居處所受用識なり。是れ所取の相なるが故なり。彼れ復た其の次第の如く、諸の色根と器世界なる色等の境界を以て相と爲す。相顯現分別とは、謂く六識身と及び意となり。前所說の所取の相の如く、而して顯現するが故なり。相變異分別とは、謂く前所說の身等の相の如く變異して生起するなり。相顯現變異分別とは、謂く前所說の眼識等の相の如く顯現し、苦樂等の位に於て差別して生起するなり。他引分別とは、謂く敎法所攝の名句文身の相なり。此に復た二種有り。一には惡說法律を體と爲す。二には善說法律を體と爲す。此の增上力は、其の次第の如く二の作意の所攝を引くに由る。謂く不如理分別と如理分別となり。執著分別とは、謂く不如理分別所起の六十二見の所攝の所有ゆる分別なり。散亂分別とは、謂く如理分別所起の無性等の執を相と爲す所有ゆる分別なり。

此れに復た十種あり、謂く、無性分別と有性分別と增益分別と損減分別と一性分別と異性分別と自性分別と差別分別と隨名義分別と隨義名分別なり。

是くの如き十種分別は、般若波羅蜜多の初分に依りて宣說す。終に言ふが如し。舍利子、是の菩薩は實に菩薩有り、正に菩薩を隨觀せず、正に菩薩の名を隨觀せず、正に般若波羅蜜多を隨觀せず、正に菩提を隨觀せず、正に行を隨觀せず、正に不行を隨觀せず。所以何んとなれば、名の自性は空にして空性に非ず、色の自性は空にして空性に非ず、乃至識の自性は空にして空性に非ず。何を以ての故に。此の色の空性は卽ち色に非ず、亦色を離れて別に空性有るにあらず。色は卽ち是れ空性にして、空性は卽ち是れ色なり。乃至識も亦爾り。何を以ての故に。此れは唯だ名のみ有り。所謂る此れは是れ菩薩の名なり。此れは是れ菩薩なり。此れは是れ般若波羅蜜多なり。此れは是れ菩提なり。此れは是れ色なり、乃至此れは識なり。彼の自性は無生・無滅・無染・無淨なるに由りて、菩薩は般若波羅蜜多を行ずる時、正に生を隨觀せず、乃至正に淨

虛妄分別に於て應に善巧を修すべし。無分別に於て應に善巧を修すべし。時々の中に於て應に根を修練すべし。所知の境に、略して六種有り。一には迷亂、二には迷亂の所依、三には不迷亂の所依、四には迷亂不迷亂、五には不迷亂、六には不迷亂の等流なり。

迷亂とは、謂く能取と所取との執なり。迷亂の所依とは、謂く、聖智の所行は唯だ行相のみ有れば虛妄分別を體と爲す。此れ有るに由るが故に一切の愚夫の迷亂の執轉ず。不迷亂の所依とは、謂く、眞如は是れ無分別智の所依處なるが故なり。迷亂不迷亂とは、謂く、出世智に隨順する所有の聞慧等の諸の善法は、所知の境を分別するが故に、無分別智に隨順するが故なり。不迷亂とは、謂く、無分別智なり。不迷亂の等流とは、謂く、聖道の後所得の善法なり。

方便善巧とは、略して四種有り。一には成熟有情善巧、二には圓滿佛法善巧、三には速證神通善巧、四には道無斷善巧なり。

成熟有情善巧とは、謂く四攝の事なり。彼を攝受して善法に處せしむるに由るが故なり。圓滿佛法善巧とは、謂く慧波羅蜜多なり。經の言の如し。若しは菩薩摩訶薩、施波羅蜜多より乃し一切種妙智の性に至るまで、圓滿することを得んと欲せば、當に般若波羅蜜多を學すべきが故にと。速證神通善巧とは、謂く日夜六時に諸惡を發露し、功德を隨喜し諸佛を勸請し、善根に廻向する等、廣說すること聖者彌勒所問經の如し。道無斷善巧とは、謂く無住處涅槃なり。此れに由りて數々究竟じて、斷無く、十方の一切世間に周遍し、所應の化に隨ひて一切の佛菩薩の行を示現す。

虛妄分別に、略して十種有り。謂く根本分別・相分別・相顯現分別・相變異分別・相顯現變異分別・他引分別・不如理分別・如理分別・執著分別・散亂分別なり。

根本分別とは、謂く阿賴耶識なり。是れは一切分別の種子なるが故なり。相分別とは、謂く身

轉依を證得するに由るが故なり。

復た次に、無餘涅槃界に於て、聲聞獨覺の一切の聖道は、頓に捨所捨に由る、諸の菩薩には非るなり。是の故に唯だ諸の菩薩を、無盡善根者、無盡功德と爲すと說く。

頓捨所捨とは、是れ究竟して現行せざる捨の義なり。諸の菩薩の所得の聖道は、是くの如きの捨有るに非ず。一切の有情を利益し、皆涅槃を得「せしめ」んと欲するが爲の故なり。此の因緣に由りて無盡慧經等に、諸の菩薩を、無盡善根者盡功德者と爲すと說く。

復た次に何の故に、諸の無記の事を建立するや。彼れが所問は不如理に由るが故なり。何の故に、所問は不如理なるや。因と果と染と淨との應に思ふべき所の處を遠離するが故なり。

此の中、如來は諸の外道所問の世間の常、無常等の事の中に於て、十四の不可記の事を建立することを顯示す。彼が所問は、正理の如くならず。能く無義利を引くに由るが故なり。何等の問論が能く義利を引くや。謂く、四聖諦に依る所有の問論なり。此の問論は因と果と染と淨との應に思ふべき處の所攝なるに由るが故なり。

復た次に、何に緣りて菩薩已に菩薩の超昇離生の位に入れども、而も預流に非ざるや。不住道を得て、一向に預流の行を成就せざるに由るが故なり。何に緣りて亦一來に非ざるや。故らに諸有の無量の生を受くるが故なり。何に緣りて亦不還に非ざるや。靜慮に安住して還つて欲界に生ずるが故なり。又諸の菩薩、已に諦現觀を得て、十地の修道位に於て、唯だ所知障の對治道のみを修す。煩惱障の對治道には非ず。若し菩提を得るの時、頓に煩惱障及び所知障を斷じて頓に阿羅漢及び如來と成る。此れ諸の菩薩は。未だ永く煩惱を斷ぜずと雖も、然も此の煩惱は猶ほ呪藥に、伏さるる所の諸毒の如し。一切の煩惱の過失を起さず。一切の地中に、阿羅漢の已に煩惱を斷じたるが如し。

復た次に、諸の菩薩は、所知の境に於て應に善巧を修すべし。諸の方便に於て應に善巧を修すべし。

永斷習氣は何業を作すや。謂く、諸の煩惱を離れて亦諸の煩惱に似る所作の事業顯現せざるなり。
阿羅漢比丘の猶ほ誤失等の事現ずるが如きには非ず。
大悲は何業を作すや。謂く、日夜六時に遍く世間を觀ずるなり。
誰が減じ、誰が退し、誰が增し、誰が進むやと、是くの如き等を種々に觀察す。
不共佛法は何業を作すや。謂く、身語・意業・淸淨なるにより不退を得するを以て、若しは行じ若しは住して、一切の聲聞獨覺を映蔽するなり。
此くの如きの諸句は、前の所說に依る。不共の三業が淸淨なることを具足する等の相に於て、
應の如く配釋すべし。
一切種妙智は何業を作すや。謂く、能く一切有情の一切の疑網を絕ちて、正法眼をして時に住することを得せしむるなり。此れは有情の未成熟のものをして成熟せしめ、已成熟のものをして解脫せしむるに由る。
疑網を絕ちてとは、一切處に於て智礙無きが故なり。正法眼をして久しく住することを得せしむとは、彼々の時に於て方に所化の有情の疑惑を斷ぜんが爲に種々の法門の差別を宣說するなり。諸の結集の者次第に結集して滅せざらしむるが故に、此の法眼に依り未成熟の有情をして
は速かに成熟せしめ、已成熟の者をしては速かに解脫せしむ。
復た次に、諸の現觀の位に於て、後々の勝品の道を證得するの時、前の所得の下劣品の道を捨す。
此の果所攝の道を證得するの時、此の向所攝の道を捨するが如し。復た現前せざるを以ての故なり。
又卽ち此の時、集斷作證す。
果を得るの時、永く此の所治の種類なる煩惱品の麁重を斷じて餘無からしむるが故に、勝品の

す。宿住隨念智力に由りて、一切の資糧に悟入す。前生に集むる所の聖道の因緣、是れを資糧と名づく。死生智力に由りて、一切の當來の功能の性に悟入す。漏盡智力に由りて、一切の三界の出離に悟入す。是くの如く悟入し已るに由りて、其の所應に隨ひて、解脫出世の聖道を宣說す。此の十を力と名づくることは、善く能く諸魔を降伏するが故、善く能く一切の問論を記別するが故なり。諸魔を降伏するとは、此の十力に由りて、能く蘊魔煩惱魔天魔死魔を降伏して最勝と爲るが故なり。所知障を斷ずと雖も礙と爲ること能はざるが故に最勝と名づく。一切の問論を記別するとは、謂く處非處より乃し漏盡一切處の所有の問論に至るまで、記別して滯ること無きが故なり。

無畏は何業を作すや。謂く、大衆の中に處して、自ら正しく建立して我を大師と爲し、一切の邪難外道を摧伏するなり。

大師とは、自利利他の衆德圓滿するが故なり。邪難外道を摧伏するとは、謂く、如來の所說に於て等正覺を成じて、永く諸の漏と障とを斷ずる道法の中に於ける邪難外道を摧伏するが故なり。

念住は何業を作すや。能く染汚ならずして大衆を攝御するなり。

恭敬聽聞等に於て愛恚等の諸の煩惱無きに由るが故に。

不護は何業を作すや。謂く、能く間斷すること無くして所化の徒衆を敎授し敎誡するなり。

自の過を藏護して、顯彰を慮ふこと無きに由るが故に。

無忘失法は何業を作すや。謂く、能く一切の佛事を捨離せざるなり。

所以何んとならば、此れ諸の有情の現前に應に利益すべき事に於て、能く放逸なること無く、一切刹那を越えざるに由るが故なり。

清淨は何業を作すや。謂く此の勢力に由るが故に、生有を取る。其の樂欲するに隨ひて、或は住すること一劫、或は復た劫餘なり。或は壽行を捨す。或は諸法に於て自在にして轉じ、或は諸定に於て自在にして轉じ、或は諸佛の正法を任持するなり。

此の中、所依清淨に由りて、其の所樂に隨ひて所依の身に於て、取と住と捨との自在なることを顯示す。卽ち三句を攝す。謂く故に生有を取る等なり。境界清淨に由りて、諸法の中に於て自在を得て轉ず。心清淨に由りて、三摩地に於て自在を得て轉ず。智清淨に由りて、如來の無上正法を任持す。

力は何業を作すや。謂く無因惡因論、不作而得論を除捨せんが爲に、無倒に增上の生道を宣說するなり。一切有情の心行と正說と法器と意樂と隨眠と境界と資糧と當に能く出離すべきとに悟入して、其の所應に隨ひて決定の勝道を宣說し、諸魔を降伏し、善く能く一切の問論を記別するなり。

此の中、初の二力は、能く增上の生道を說く。餘の八力は、能く決定の勝道を說く。是くの如きの二種具足して、諸佛の所作を顯示す。所以何んとならば、世尊は處非處智力に由りて、一切世間の無因論者、惡因論者を折伏し、無倒の增上の生道を宣說す。諸の外道等は、增上生に於て或は無因と謂ひ、或は自性自在等を因と爲すと謂ふ、故に無因惡因論と名づく。自業智力に由りて、一切世間の不作而得論者を折伏し、無倒に善く正道に趣くことを宣說す。諸の外道等は、業を作さずして自然に報を得ると謂ふ、故に不作而得論と名く。靜慮解脫等持等至智力に由りて、一切有情の心行に悟入す。心の修行する所なるが故に心行と名く。根上下智力に由りて、一切の正說法器に悟入す。信等の根、若しは善く成熟すれば、能く法器と爲るを以ての故なり。種々勝解智力に由りて、一切の勝劣意樂に悟入す。種々界智力に由りて、一切の破す可き隨眠と諸の煩惱の性に悟入す。遍趣行智力に由りて、一切の大小乘敎法所攝の境界に悟入

無しとは、諸の有情を愍んで自身を顧ざるに由るが故なり。

解脱は何業を作すや。變化の事を引發し、淨不淨を變化するに於て艱難あることなく、寂靜解脱に於て滯礙あること無きなり。能く第一寂靜の聖住に住す。勝解の思惟に由るが故に。

此の中、初二の解脱は能く變化の事を引發し、第三の解脱に由り淨不淨を變化するに於て艱難有ること無く、四無色解脱に由り寂靜解脱に於て滯礙有ること無く、最後の解脱に由り第一寂靜の聖住に住することを顯示す。勝解の思惟に由るが故にとは、是くの如く是くの如く勝解の義は、是れ解脱なることを顯するなり。

勝處は何業を作すや。謂く能く前の三解脱の所緣の境界をして自在にして轉ぜしむ。勝伏の所緣に由るが故なり。

遍處は何業を作すや。謂く善く能く解脱の所緣が遍滿して流布することを成辦するが故なり。

無諍は何業を作すや。謂く所發の語音聞へて皆信伏す。他心を愛護するを最も勝と爲すが故に。其の所應の如く語音を發するが故なり。

願智は何業を作すや。謂く善く能く三世等の事を記別す。一切世間の咸く恭敬する所、一切衆の歸仰する所に達するに由るが故なり。

無礙解は何業を作すや。謂く善く法要を說きて衆生心を悅ばす。能く一切の疑網を絕つが故なり。

神通は何業を作すや。謂く身業語業記心を以て有情を化導して聖敎に入らしめ、善く有情の一切の心行ゝ及び過未を知り已つて、應の如く敎授し永く出離せしむるなり。

此の中、神境天耳より乃し漏盡通に至るまで、其の次第の如く、能く身業の化導等の用を起すことを顯示す。天耳通に由りて、一切言音の差別を解了し、能く語業を引くが故なり。

相と及び隨好とは何業を作すや。謂く能く暫く見せしむ。大丈夫が心に淨信を生ずるを謂ふなり。

若しは菩薩等は、四無量と五神通とを引發す。多分は邊際第四靜慮に依止して、若しは聲聞若しは菩薩、若しは如來等は、所餘の功德を引發す。何の因、是くの如きの功德を引發するや。謂く靜慮に依止して、數々隨ひて建立する所の法を思惟するが故なり。

此の中、是くの如き等の功德の引發の所依止は、能引發の補特伽羅と能引發の方便とを顯示す。云何んが能引發の方便なるや。謂く隨ひて建立する所の敎法に於て、衆多の作意定心を以て數々思惟の行相を起し、無量を引發せんと欲する時の如し。靜慮に依止して慈と倶なる心、無恨無怨等の敎法に於て修慧と相應する作意を以て、數々思惟し、神通等を引發せんと欲するの時、靜慮に依止して、一を變じて多と爲す等の敎法に於て、修慧と相應する作意を以て數々思惟す。是くの如く、一切の處に於て、數々思惟す。建立する所の如く、相に隨ひて應に知るべし。

又是くの如き等の功德に、略して二種有り。一には現前に發起する自の所作の用は、二には自性に安住するなり。若しは現前に發起する自の所作の用は、出世間後の所得の世俗智を以て體と爲す。若しは自性に安住する用は、出世間智をもつて體と爲す。

又現前に發起する自の所作の用とは、謂く諸の聖者、其の所應に隨ひて、所治の障を斷ずる等の種々の作業を發起するなり。自性に安住するとは、謂く最勝寂靜の無分別智所攝の無緣無量等の現法樂住なり。

復た次に無量は何業を作すや、謂く所治の障を捨し、哀愍して住するが故に、能く速かに福德の資糧を圓滿し、有情を成熟して心に懈倦無きなり。

所治の障を捨するとは、謂く其の次第の如く、四無量は能く瞋害・不樂・愛恚を捨するが故なり。哀愍して住するとは、謂く四無量は、有情利益の事に於て隨順して轉じて住し、一切有情を哀愍して住するに由るが故に、能く速かに福德の資糧を圓滿するなり。有情を成熟して心に懈倦

又阿羅漢は、或は一時に於て善の身業轉じ、或は一時に於て無記の身業轉ず。語業意業も亦爾り。如來の三業は、智を前導と爲すが故に、智に隨ひて轉ずるが故に、無記有ること無し。智を先導と爲すとは、智の等起する所なる故なり。智に隨ひて轉ずるとは、智と俱行するが故なり。

又阿羅漢比丘は、三世の所知の事に於て、心を起して卽ち解する事能はさるが故に、智見著有り。一切を悉く解すること能はざる故に、智見礙有り。如來は三世の境に於て暫くも心を起す時、卽ち遍く一切を知る。是の故に智見著無く礙無し。十八界の中、前の六は不共の身語意業清淨なることを具足する中に於ける所有の三摩地等を體と爲す。誤失有ること無しとは、身清淨なるに依りて說く。卒暴の音無しとは、語清淨なるに依りて說く。忘失の念無しと、不定の心無しと、種々の想無しと、不擇の捨無しとの此の四は、意業清淨なるに依りて說く。志欲退無しより乃し解脫退無しに至る此の六は、所依と及び果と根と未得と不退とを具足する中に於ける所有の三摩地等を體と爲す。所依とは、謂く志欲なり。果とは、謂く解脫なり。根とは、謂く精進等なり。一切の身語意業は智を前導と爲し、智に隨ひて轉ず。此の三は、不共業が現行することを具足する中に於ける所有の三摩地等を體と爲す。去來今を知るに著無く礙無き此の三は、不共智に住し具足する中に於ける所有の三摩地等を體と爲す。

一切種妙智とは、謂く蘊界處に於て、一切種妙智の性を具足する中に於ける、若しは定と若しは慧と、及び彼と相應する諸の心心法なり。

云何んが蘊界處に於て、一切種妙智の性を具足するや。謂く蘊等の自性差別の相に於て、一切の差別の邊際に通達する智成滿するが故なり。

云何んが是くの如き等の功德を引發するや。謂く淸淨の四靜慮に依止して、若しは外道若しは聲聞

導と爲して智に隨ひて轉じ、一切の意業は智を先導と爲して智に隨ひて轉じ、過去世を知るに無礙無著、未來世を知るに無著無礙、現在世を知るに無著無礙なり。彼の相を建立することは經に廣く說くが如し。如來は誤失有ること無しとは、謂く阿羅漢比丘は漏已に盡ると雖も、乞食の爲の故に城邑に出遊す。或は一時に於て惡象惡馬惡牛惡狗等とともに遊止を爲し、或は一時に於て棘刺を踐蹋し足を齊しくして坑を越し、或は一時に於て女人の家に入り正理に依らずして而して語言を作し、或は林野に於て正道を捨棄して而して邪經を行じ、或は盜賊猛惡獸等とともに遊止を爲す。是くの如き等の誤失の事、阿羅漢は猶ほ有り。如來には永く無し。

卒暴の音無しとは、謂く阿羅漢は或は一時に於て林野に遊行して道路を迷失し、或は空宅に入り聲を揚げ叫喚して大暴音を發す。不染汚習氣の過失に因りて脣齒を褰露して大笑を現ず。是くの如き等の卒暴の音、阿羅漢は猶ほ有り。如來には永く無し。

忘失の念無しとは、謂く阿羅漢は猶ほ不染汚有り。久遠の所作、久遠の所說を憶念することを忘失す。如來には永く無し。

不定の心無しとは、謂く阿羅漢は心を斂むれば方に定なるも出づれば卽ち不定なり。如來は一切の位に於て不定の心無し。

心に種々の想無しとは、謂く阿羅漢は有餘の生死に於て違逆の想を起し、無餘の涅槃に於て寂靜の想を起す。如來は生死涅槃に於て差別の想無し。第一大捨に住するに由るが故なり。

不擇の捨無しとは、謂く阿羅漢は智慧を以て簡擇せずして、有情利益の事も棄捨す。如來は此等の事無き故に、不擇の捨無し。

又阿羅漢は所知障を淨むるに於て、未だ得せずして退すること有り。謂く志欲退・精進退・念退・定退・慧退・解脫退なり。是くの如きの六退は、如來には永く無し。

自然に强力に折伏攝受して、教誡教授の方便を具足す。

無忘失法とは、謂く一切種の其の所作と所說に隨つて明記することを具足する中に於ける、若しは定と、若しは慧となり。乃至廣說す。

此の中化事門に依りて、所作等に隨ひて念ずることを具足する中に於ける、所有の三摩地等は、是れ無忘失法なることを顯示す。

永斷習氣とは、謂く一切智者が一切智の所作に非ざるものの不現行具足中に於ける、若しは定と若しは慧となり。乃至廣說す。

此の中、一切智とは、所有に於て能く餘の煩惱所知の障あることを表はす身語の所作の不現行具足中に於ける、所有の三摩地等にして、是れ永斷習氣なることを顯示す。

大悲とは、謂く無間の苦境を緣じて大悲に住することを具足する中に於ける、若しは定と、若しは慧となり。乃至廣說す。

此の中、一切の三界有情の無間の一切種の苦境を緣じて、大悲に住することを具足する中に於ける、所有ゆる三摩地等は、是れ大悲と名くることを顯示す。

不共佛法とは、卽ち十八不共佛法なり。彼れ復た云何ん。謂く不共の身と語と意の業淸淨なることを具足する中に於けると、所依と及び果根未得不退とを具足する中に於けると、不共業を現行することを具足する中に於けると、不共智に住することを具足する中に於けるとの、若しは定と、若しは慧となり。

何等か十八なるや、經の言の如し、如來は誤失有ることなく、卒暴の音無く、忘失の念無く、不定の心無く、種々の想無く、不擇の捨無く、志欲退無く、精進退無く、念退無く、定退無く、慧退無く、解脫退無く、一切の身業は智を先導と爲して智に隨ひて轉じ、一切の語業は智を先

何等をか三念住と爲すや、所謂る大師、一切を哀愍し、義利を欲求し、大悲心を起し、諸の弟子の爲に法要を宣說して、諸の比丘に告げたまふ、汝等當に知るべし此れは能く利益し、此れは能く安樂ならしむ。此れは能く利益し安樂ならしむると。爾の時、若しは諸の弟子衆有りて、恭敬聽聞し、聞き已て諦かに受け、奉敎の心に住し、精進して法隨法行を修行す。如來彼に於て歡喜の心を生ぜず、踊躍せず、但大捨を起す。念に住し正知し諸の聖衆の應に修習すべき所に隨つて敎誡し敎授す。是を初の不共念住と名づく。又復た大師、一切を哀愍し、義利を欲求し、大悲心を起し、諸の弟子の爲に法要を宣說したまふ。乃至此れは能く利益し安樂ならしむると。爾の時若しは諸の弟子衆有り、恭敬聽聞せず、乃至精進して法隨法行を修行せず。如來彼に於て恚恨を生ぜず、保任を捨せず、心悵恨無く、但だ大捨を起す。乃至廣說す。此れ第を二不共念住と名づく。又復た大師、一切を哀愍し、義利を欲求し、大悲心を起し、諸の弟子の爲に法要を宣說したまふ。乃至此れは能く利益し安樂ならしむると。爾の時一分の弟子は、恭敬聽聞し、乃至精進して法隨法行を修行す。一分の弟子は、恭敬聽聞せず乃至精進して法隨法行を修行せず。如來彼に於て歡喜を生ぜず、乃至心悵恨せず。是くの如き三念住は、大師、衆を御するの時、その次第に隨ひて一切種の愛恚と倶なる煩惱と幷に習氣との現行せざることを具足する中に於て、所有の定慧等を體と爲すことを顯はす。

不護とは、卽ち三不護なり。謂く大師が衆を御するの時、所欲に隨ひて敎授し敎誡する方便を具足する中に於ける、若しは定と若しは慧となり。乃至廣說す。

何等をか三と爲す。經の言の如し。如來の身業は淸淨に現行して不淸淨なる無し。現行の身業ありて、覆藏して他は我れの所有なりと知ること勿れと謂ふを須ゆ可し。語業と意業との現行も亦爾り。彼に由りて大師は、心に懼慮無く、善く所化の一切大衆を御し、其の所欲に隨ひて

する中に於ける、若しは定と、若しは慧となり。餘は前說の如し。

經の言の如し、我は諸漏永盡せりと、是くの如き等廣說すること前の如し。障法無畏とは、謂く靜慮に依止し、利他門に由りて、一切種の障礙の法を說くに自ら德號を稱し、建立し具足する中に於ける、若しは定と、若しは慧となり。餘は前說の如し。

經の言の如し、又我は諸の弟子の爲に障礙の法を說く。染は必ず障と爲る。乃至廣說す。出苦道無畏とは、謂く靜慮に依止し、利他門に由りて、一切種の出離道の法を說くに自ら德號を稱し、建立し具足する中に於ける、若しは定と若しは慧となり。餘は前說の如し。

經の言の如し。又我は諸の弟子の爲に出離の道を說く。諸の聖修習すれば、決定して出離し、決定して通達す。設ひ世間の沙門婆羅門、若しは天魔梵有りて、法に依りて難を立て或は憶念して「此の道を修するも、正しく出離するに非ず、正しく苦を盡し及び苦邊を證するには非ず」と言はしむるも、我は是の事に於て正見して緣無し。乃至廣說す。是くの如く四無畏に、略して二有り。謂く、自利と利他となり。前の二は是れ自利なり。智斷差別に由るが故に。後の二は是れ利他なり。所治の法を遠離して、能治の法を修するに由るが故に。正等覺無畏は內智の自他門に由るを以て、一切種の所知の境界の差別邊際に於て皆正等覺すと言ふ。一切世間の前に於て、自ら德號を稱し、正を立て難無きことを具足する中の所有の定慧なり。乃至廣說す。當に知る可し、餘の無畏も應の如く亦爾り。一切種の漏盡とは、謂く諸の煩惱幷に習氣永盡するなり。一切種の障礙の法とは、謂く一切雜染なる所對治の法なり。一切種の出離の道とは、謂く方便道より乃し究竟道に至るなり。

念住とは、卽ち諸の如來の三不共念住なり。謂く大衆を御するの時、一切種の煩惱現行せざることを具足する中に於ける、若しは定と、若しは慧となり。廣說すること前の如し。

は慧となり。餘は前說の如し。一切種の靜慮觧脫等持等至の智、無著無礙に現行する中に於ける、所有の三摩地等を體と爲すに由るが故なり。是くの如く根上下智力とは、謂く一切種の根上下の智、無著無礙に現行する中に於ける、所有の三摩地等なり。種々勝觧智力とは、謂く一切種の差別勝觧の智、無著無礙に現行する中に於ける所有の三摩地等なり。種々界智力とは、謂く一切種の差別界の智、無著無礙に現行する中に於ける所有の三摩地等なり。遍趣行智力とは、謂く一切種の遍趣行の智、無著無礙に現行する中に於ける所有の三摩地等なり。宿住隨念智力とは、謂く一切種の宿住隨念の智、無著無礙に現行する中に於ける所有の三摩地等なり。死生智力とは、謂く一切種の死生の智、無著無礙に現行する中に於ける所有の三摩地等なり。漏盡智力とは、謂く一切種の漏盡の智、無著無礙に現行する中に於ける所有の三摩地等なり。

無畏とは、謂く四無畏なり。

一には正等覺無畏、二には漏盡無畏、三には障法無畏、四には出苦道無畏なり。

正等覺無畏とは、謂く靜慮に依止して、自利門に由りて、一切種の所知の境界に於て正等覺し、自ら德號を稱し建立し具足する中に於ける、若しは定と若しは慧と、及び彼と相應する諸の心心法なり。

經の言の如し。我は是れ正等覺者なり。設ひ世間の沙門婆羅門、若しは天魔梵有り、法に依ひて難を立て、或は憶念して是の法に於て正等覺に非ずと言はしむるも、我れ是の事に於て緣無きを正見し、此事に於て由無きを正見するを以ての故に安隱住を得たり。怖無く畏無く、自ら我は大僊尊位に處すと稱して、大衆の中に於て正しく師子吼して大梵輪を轉ず、一切世間の沙門婆羅門、若しは天魔梵の轉ずる能はざる所なり。

漏盡無畏とは、謂く靜慮に依止し、自利門に由りて、一切種の漏盡に自ら德號を稱し、建立し具足

心清淨とは、謂く所欲の如く、三摩地門を自在に具足する中に於ける、若しは定と、若しは慧となり。餘は前說の如し。

所欲に隨ひて、剎那剎那に能く無量の三摩地の差別に入るに由るが故なり。

智清淨とは、謂く靜慮に依止して、所欲に隨ひて陀羅尼門を任持することを具足する中に於ける、若しは定と、若しは慧となり。餘は前說の如し。

陀羅尼門を任持することを具足するとは、謂く四十二字の中に於て、隨つて一字を思惟し、此れを以て先と爲して便ち能く一切法の差別の名言の善巧を證得するなり。

力とは、謂く如來の十力なり。

一には處非處智力、二には自業智力、三には靜慮解脫三摩地三摩鉢底智力、四には根上下智力、五には種々勝解智力、六には種々界智力、七には遍趣行智力、八には宿住隨念智力、九には死生智力、十には漏盡智力なり。

處非處智力とは、謂く靜慮に依止して、一切種の處非處智の具足する中に於ける、若しは定と若しは慧と、及び彼と相應する諸の心心法なり。

一切種の處非處智具足するとは、謂く一切種の因非因の智、無著無礙に現行する中に於ける、所有の三摩地等なり。

自業智力とは、謂く一切種の自業智の具足する中に於ける、若しは定と若しは慧となり。餘は前說の如し。

一切種の自業智の無著無礙に現行する中に於ける所有の三摩地等を以てなり。是くの如く餘力と、其の所應に隨ひて當に正に建立すべし。云何んが其の所應に隨ふや。靜慮解脫・三摩地・三摩鉢底智力とは、謂く一切種の靜慮解脫等持等至智の具足する中に於ける、若しは定と若し

は定と若しは慧と、及び彼と相應する諸の心心法と、並に彼の所起の異熟果となり。所以何んとならば、謂く佛世尊は定慧の增上力に由りて、諸の有情を化度せんと欲するが爲の故に、三十二大丈夫の相、及び八十種の隨好相を示現して色身を莊嚴す。然るに佛世尊は彼の自體には非ず、法身の所顯なるを以ての故なり。若し諸の菩薩能く是くの如く示現する者は、當に知るべし定慧を其の自性と爲す。若し所餘の大集會の中に於て生ずる者は、彼の所起の異熟果を用つて自性と爲す。

淸淨とは、謂く四淸淨なり。

一には依止淸淨なり、二には境界淸淨なり、三には心淸淨なり、四には智淸淨なり。是くの如きの四種は一切の相淸淨なり。唯だ佛世尊と及び已に大神道を得たる菩薩摩訶薩とのみの得る所なり。

依止淸淨とは、謂く靜慮に依止して、所欲の依止に隨ひて、取と住と捨とを具足する中に於ける、若しは定と、若しは慧と、及び彼と相應する諸の心心法なり。

取と住と捨とを具足するとは、謂く所欲の生に隨つて、卽便ち能く取るなり。旣に彼に生じ已れば、其の所欲に隨ふ壽行の分量、卽ち能く留住す。諸の壽行を捨せんと欲せば、卽ち能く捨す。其の次第の如く三種具足するなり。

境界淸淨とは、謂く所欲の境界に隨ひて變化智を具足する中に於ける、若しは定と、若しは慧となり。乃至廣說す。

變化智を具足するとは、謂く先に無くして今あるところの色等を、化と名く。先に已に生じたるところの色等を轉じて金銀等と成らしむるを、變と名く。一切種の境相の差別を悟るを、智と名く。其の次第の如く、三種具足するなり。

種々の神變の威德を具足するとは、謂く一を變じて多と爲す等、種々の神變自在に具足するなり。

天耳通とは、謂く靜慮に依止して、種々の音聲を隨聞する威德を具足する中に於ける、若しは定と若しは慧となり、餘は前説の如し。

　種々の聲とは、謂く人天等の聲なり。

心差別通とは、謂く靜慮に依止して、他の有情の心行の差別に入る威德を具足する中に於ける、若しは定と若しは慧となり。餘は前説の如し。

　他の有情の心行の差別に入るとは、謂く實の如く有貪等の心行の差別を知るなり。

宿住隨念通とは、謂く靜慮に依止して、前際の所行を隨念する威德を具足する中に於ける、若しは定と若しは慧となり。餘は前説の如し。

　前際の所行を隨念するとは、謂く過去の生の名字と、種族等の展轉差別の事を隨念するなり。

死生通とは、謂く靜慮に依止して、有情の死生の差別を觀ずる威德を具足する中に於ける、若しは定と若しは慧となり。餘は前説の如し。

　諸の有情の死生の差別を觀ずるとは、謂く天眼を以て、諸の有情の死時と生時と、好色と惡色と、當に善趣に往くべく當に惡趣に往くべき後際の差別とを觀ずるなり。

漏盡通とは、謂く靜慮に依止して、漏盡智の威德を具足する中に於ける、若しは定と若しは慧と、及び彼と相應する諸の心心法なり。

　漏盡智とは、謂く此の智は一切の漏盡の方便と、及び諸の漏盡に通達するに由る。威德を具足するとは、此の智成滿するが故なり。

相隨好とは、謂く靜慮に依止して、相隨好莊嚴の所依を示現することを具足する中に於ける、若し

名の差別とは、謂く無明等に依る無知、無見、不現觀等の差別の名の中に於て、無礙に具足する若しは定、若しは慧、乃至廣說するを、法無礙辯と名く。

義無礙辯とは、謂く諸相と及び意趣との無礙具足中に於ける、若しは定と若しは慧となり。餘は前說の如し。

相とは、謂く諸法の自相と共相となり。意趣とは、謂く別義等なり。若し此の中に於て通達し、無礙に具足するを、義無礙辯と名く。

訓詞無礙辯とは、謂く諸方の言音と及び諸法を訓釋する言詞の無礙具足中に於ける、若しは定と若しは慧となり。餘は前說の如し。

諸方の言音とは、謂く無量の國邑、各々自の想に隨つて起す所の種々の言音差別なり。諸法を訓釋する言詞とは、謂く「破壞す可きが故に世間と名く」、「變壞す可きが故に色と名く」、是くの如き等にして、若し是の中に於て、通達し無礙なるを、訓詞無礙辯と名く。

辯才無礙辯とは、謂く諸法の差別の無礙具足中に於ける、若しは定と若しは慧となり。餘は前說の如し。

諸法の差別とは、謂く實有と假有と世俗有と勝義有と、是くの如き等なり。若し此の中に於て、通達し無礙なるを、辯才無礙辯と名く。

神通とは、謂く六神通なり。

一には神境通なり、二には天耳通なり、三には心差別通なり、四には宿住隨念通なり、五には死生通なり、六には漏盡通なり。

神境通とは、謂く靜慮に依止して、種々の神變の威德を具足する中に於ける、若しは定と若しは慧と及び彼と相應する諸の心心法なり。

卷の第十四

決擇分中、得品、第三之二

復た次に無諍とは、謂く靜慮に依止して、他の應に起るべき所の煩惱を防護するに住し具足する中に於ける、若しは定と若しは慧と及び彼と相應する諸の心心法なり。

所以何んとならば、無諍に住するとは、若しは一切有情の應に見るべき所の處に往詣せんと欲せば、先づ自の所住の處に於て、願智の力を以て彼の有情を觀ず。「我が身に於て當來の煩惱現前し行ずと爲すや不や。」と。是くの如く觀じ已て、若し我が所に於て愛と恚と慳と嫉等の煩惱の當に起るべきを知れば、卽便ち往かず。若し當に起るべからざれば、乃し其の所に往く。能く他の諸の煩惱の諍を護り、當に起るべからざらしむるを以ての故に無諍と名くるなり。

願智とは、謂く靜慮に依止して、所知を了爲んとする願具足する中に於ける、若しは定と若しは慧となり。餘は前說の如し。

所以何んとならば、願智を得る者は、所有の三世等の應に知るべき所の事を了知せんと欲するが爲に由りて、先づ彼々の事に於て正願の心を發す。「我れ如實に是くの如く是くの如く了知せんことを願ふ」と。次に增上の靜慮に入り、彼より起ち已りて所願成滿す。謂く能く應に知るべき所を了知するが故なり。

無礙解とは、謂く四無礙なり。

一には法無礙解、二には義無礙解、三には訓詞無礙解、四には辯才無礙なり。

法無礙解とは、謂く靜慮に依止する、一切法の名差別無礙具足中に於ける、若しは定と若しは慧となり。餘は前說の如し。

無邊空處・無邊識處なり。皆悉く遍滿す。

問ふ、何が故に遍處に於て地等を建立するや。

答ふ、此の遍處は所依・能依の色皆遍滿するを觀ずるに由るが故なり。若し此の中に於て地等の遍處を立てざることは、即ち所依の大種を離れては亦、青等の所造の色の遍滿の相爲ることを觀ずること能はず。是の故に所依・能依皆悉く遍滿すると觀ぜんが爲めに地等を建立するなり。

餘は所應に隨ひて、解脫の中に說けるが如し。

謂く無邊空處等なり。當に知るべし。此の中解脫に依るが故に造修し、勝處に由るが故に方便を起し、遍處に由るが故に成滿す。若し彼に於て成滿するを得れば、即ち解脫に於て究竟するなり。

身の作證具足住從り出づる所なり。

此の中解脫は是れ意解の所緣にして、勝處は是れ勝伏の所緣なり。少多等の境、意に隨つて自在なり。或は隱沒せしむるが故に。或は欲するに隨ひて轉ずるが故なり。少色とは、有情の數色、其の量小なるが故なり。多色とは、非有情の數色なる舍林地山等、其の量大なるが故なり。好色・惡色とは淨・不淨の顯色の所攝なり。劣色・勝色とは、若しくは人、若しくは天、其の次第に隨ふ。彼の諸色に於て勝なりとは自在に轉ずるが故なり。知とは奢摩地の道に由るが故なり。見とは、毘鉢舍那の道に由るが故なり。如實の想を得とは、謂く已勝・未勝の中に於て、增上慢無き想を得るが故なり。若し青とは、是れ總句なり、青顯はるとは是れ俱生の青なり。青現ずるとは是れ和合の青なり。青の光ありとは、謂く彼の二、所放の鮮淨の光の青なり。青の如く黃・赤・白も廣說すれば、亦爾り。一處に於て二の譬喩を說くことは、俱生・和合の二の顯色を顯はさんが爲の故なり。謂く若し青とは總じて華衣の二青を擧ぐ。青顯はるるとは華青に依りて說く、俱生なるを以ての故なり。青現ずとは衣青に依りて說く、和合して方に成ずるを以ての故なり。青の光ありとは、二種に依りて說く、彼の二種俱に鮮淨の光有るが故なり。是くの如き二の譬喩の中、若し青には青顯はるる等の總句・釋句は、相の如く應に知るべし。青の如く黃等も亦爾り。餘は解脫の中の說の如し。何等をか餘と爲すや。謂く內の有色想、外色を觀ずる等なり。有色の諸色を觀ずる等の如し。相に隨ひて應に釋すべし。已に勝處の勝れたる所緣の境界を說けり。

遍處とは、謂く遍滿し、住し具足する中に於ける、若しは定、若しは慧及び彼と相應する心・心所なり。是れを遍處と名づく。

遍滿とは、其の量・廣大・周普・無邊なり。此れに復た十種あり、謂く地・水・火・風・青・黃・赤・白・

前の四勝處は二解脫に由りて建立せられ、後の四勝處は一解脫に由りて建立せらる。彼れ從り流るる所なるが故なり。所以云何となれば、謂く內の有色想の外色を觀ずること少く、若しは好く、若しは惡、若しは劣、若しは勝、彼の諸色に於て勝知・勝見し、如實の想を得る、是れ初の勝處なり。內の有色想の外色を觀ずること多く、若しは好、若しは惡、廣說し乃至如實の想を得る、是れ第二の勝處なり、此の二の勝處は有色が諸色を觀じて解脫する從り出づる所なり。內の無色想の外色を觀ずること少く、廣說し乃至如實の想を得る、是れ第三の勝處なり。內の無色想の外色を觀ずること多く、廣說し乃至如實の想を得る、是れ第四の勝處なり。此の二の勝處は、內の無色想が外の諸色を觀じて解脫する從り出づる所なり。是の故に前の四勝處は、二解脫に由りて建立せらる。內の無色想が外の諸色を觀じ、若し青には青顯はれ、青現じ、青の先あること猶し烏莫迦華の如く、或は婆羅痆斯の深染の青衣の若し、青には青顯はれ、青現じ、青の光あるが如し。是くの如く內の無色想の外の諸色の外の諸色を觀じ、若し青には乃至青の光あるも亦爾り。彼の諸色に於て勝知く・勝見して、如實の想を得る、是れ第五の勝處なり。內の無色想、外の諸色を觀じ、若し黃には乃至黃の光あり、猶し羯尼迦華の如し。或は婆羅痆斯の深染の黃衣の若しは黃の如し。廣說し乃至、如實の想を得る、是れ第六の勝處なり。內の無色想外の諸色を觀じ、若し赤には乃至赤の光あり。猶し般豆時縛迦華の如し、或は婆羅痆斯の深染の赤衣の若しは赤の如し。廣說し乃至、如實の想を得る、是れ第七の勝處なり。內の無色想外の諸色を觀じ、若し白には白顯はれ、白現じ、白の光あり、猶し烏沙斯星の色の如し。或は婆羅痆斯の極鮮の白衣の、若し白には白顯はれ、白現じ、白の光あるが如し。是くの如く內の無色想外の諸色を觀じ、若し白には白顯はれ、白現じ、白の光あることも亦爾り。彼の諸色に於て勝知・勝見して、如實の想を得る、是れ第八の勝處なり。是くの如き四勝處は、淨解脫

色の變化する障、及び此の中に於て煩惱の生起する障を斷ず。何等をか變化に於ける煩惱と名づくるや。謂く、淨色に於て變化する加行功用と、不淨色の變化するとは相違するが故なり。

云何んが無邊虛空處解脫なるや。謂く解脫に隨順して無邊虛空處に住し、具足する中に於ける若しは定、若しは慧なり。餘は前に說けるが如し。無邊虛空處解脫の如く、無邊識處・無所有處・非想非非想處の解脫も亦爾り。乃至寂靜解脫無滯礙の障を解脫する爲めなり。

是くの如き四種、若し聖弟子の所得の、能く無漏に順ずる、是れ淸淨なる性を、方に解脫と名づく。愛味を解脫するが故なり。寂靜解脫とは、謂く色無色を超ゆるなり。中に於て淸淨なるを無滯礙と名づく。無色を味著するは是れ此の障なり。

云何んが想受滅解脫なるや。謂く非想非非想處解脫に依止して、諸餘の寂靜解脫住を超過し、眞解脫に似て具足し住する中に於て、心心所滅するなり。想受滅の障を解脫する爲めなり。

此れ想受滅解脫は、非想非非想處を以て所依と爲し、境異無く、行相・助伴の心心所無きが故に、心心所の滅を以て自體と爲すことを顯はす。又此の解脫は、眞解脫に似て圓滿するを性と爲す。聖弟子は出世間道に由りて已に轉依を得、諸の心心所暫く現起せず、此の位の中に於て、極めて寂靜なるが故に、染汚の意現行せざるを以ての故に。

此の八解脫を亦聖住と名づく。諸聖の住する所なるが故なり。然るに諸の聖者は、多く二住に依る。謂く、第三と第八とが最勝なるを以ての故なり。是の故に經の中に、此の二解脫に於て身の作證を具足して住するの言有り、餘には非ず。此の二種に由りて、其の次第の如く有色・無色の解脫の障を斷じて餘無きが故に、轉依を證得し、圓滿するが故に、說いて最勝と名づく。

勝處とは、謂く八勝處なり。

廣く說くこと經の如し。

の心心所なり。乃至變化の障を解脫せんが爲めなり、

有色とは、謂く内身に於て未だ無色定に依りて伏除せざる見者の色想なるが故に、或は見者の色想安立して現前するが故なり。諸色を觀ずるとは、謂く意解を以て好惡等の色を觀見するが故なり。解脫とは、謂く能く一切の變化の障を解脫するが故なり。

云何んが内の無色の想が、外の諸色を觀じて解脫するや。謂く、内に已に伏する見者の色想或は現に安立する見者の無色想が、所見の色を觀じて、住し具足する中に於ける、若しは定、若しは慧なり。餘は前に說けるが如し。

内の無色想とは、謂く内身に於て已に無色定に依りて、伏除せる見者の色想なるが故なり。或は見者の無色想安立して現前するが故なり。謂く見者の名想現在前して行ず。餘は前に釋せるが如し。

云何んが淨解脫身を作證し、具足して住するや。謂く内の淨・不淨の諸色に於て、已に展轉相待の想、展轉相入の想、展轉一味の想を得るが故に。彼れに於て已に具足を得る中の、若しは定、若しは慧なり。餘は前に說けるが如し。乃至淨・不淨變化の煩惱の生起する障を解脫せんが爲めなり。

此の中、淨・不淨の諸色に於て、展轉相待の想、展轉相入の想に依りて、展轉一味の想を得ることを顯示す。所以云何んとならば、諸の淨色に待して、餘色中に於て謂うて不淨と爲し、不淨の色に待して、餘色中に於て謂うて淸淨と爲す。相待せざるに非ず。何を以ての故に、唯だ一類を見る時は淨・不淨の覺無きが故なり。又淨中に於て不淨性は隨入せられ、不淨中に於て淨性は隨入せらる。何を以ての故に。薄皮に覆はるれば共に謂うて淨と爲すに於て、中に現に髮毛等の三十六種の不淨物有るが故なり。是くの如く、展轉して總じて一切の色を合して一味の淸淨の想解と爲す。是くの如く已に所樂の色に隨ひて解脫自在を得る者は、能く淨・不淨の

慈とは云何。謂く、靜慮に依止して、諸有情與樂相應の意樂に住し、具足する中に於ける、若しは定、若しは慧、及び彼と相應する諸の心心法なり、

此の中、慈無量は、靜慮を以て所依と爲し、有情を境界と爲し、彼の樂を與ふるに相應することを願ふを行相と爲し、定慧を自體と爲す。一切の功德は、皆奢摩他・毘鉢舍耶の所攝なるが故に、諸の心心所を助伴と爲す。當に知るべし、悲等の一切の功德は其の所應に隨ひて、亦爾り。

悲とは云何。謂く、諸有情離苦の意樂に住し、具足する中に於ける、若しは定・若しは慧なり、餘は前に說けるが如し。

所依と自體と助伴とは、慈と相似するが故に。

喜とは云何。謂く、諸有情、不離樂の意樂に住し、具足する中に於ける若しは定・若しは慧なり。餘は前に說けるが如し。

捨とは云何。謂く、靜慮に依止し、諸有情利益の意樂に住し、具足する中に於ける若しは定若しは慧なり。餘は前に說けるが如し。

利益意樂とは、謂く樂と相應す等の有情の所に於て、愛等を棄捨して、是の思惟を作し、當に彼をして煩惱を解脫せしむべし。是くの如き意樂を捨行相利益意樂と名づけ、行相圓滿を住し具足と名づく。

解脫とは、謂く八解脫なり。

廣く說くこと經の如し。

云何んが有色觀諸色解脫なるや。謂く靜慮に依止し、內に於て未だ伏せず見者の色想、或は現に安立する見者の色想、所見の色を觀じ、具足する中に住する若しは定・若しは慧及び彼と相應する諸

煩惱障・所知障を斷ずるが故なり、和合作業差別とは、謂く一一の有情を化導する作用は皆一切の佛の增上力なるが故なり。方便示現成等正覺入般涅槃差別とは、謂く十方一切世界に於て、其の所應に隨ひ、乃し後際に至るまで、數數成正覺等を示現し、一切の所化の有情をして成熟解脫せしむるが故なり、五種の拔濟差別とは、謂く災橫等の五事を拔濟す。一には災橫を拔濟す。謂く如來城邑等に入る時、盲聾等をして眼耳等を得せしむるなり。二には非方便を拔濟す、謂く世間の正見を得て、一切の邪惡見を遠離せしむるが故なり。三には惡趣を拔濟す、謂く見道を生じて諸の惡趣を越えしむるが故なり。四には薩迦耶を拔濟す、謂く阿羅漢果を證して永く三界を脫せしむるが故なり。五には乘を拔濟す、謂く諸の菩薩をして下乘を樂はざらしむるなり。問ふ、經に說くが如き。

四無量等の最勝の功德は、何の現觀の所攝なりや。

答ふ、後現觀と究竟現觀との所攝なり。

所以云何んとなれば、是くの如き最勝の功德は、諸の聖弟子等或は修道に於て或は究竟道に於て之を發起する所なり。是の故に二の現觀の所攝なり。

彼れ復た云何。謂く、無量と解脫と勝處と遍處と無諍と願智と無礙解と神通と相隨顯淸淨と力と無畏と念住と不護と無忘失法と永斷習氣と、大悲と、十八不共佛法と、一切種の妙智となり。是くの如き等の功德を、如來は諸經の中に於て、

或は聲聞乘に依りて說き、或は大乘に依りて說きたまふ。此の諸の功德は、其の所應に隨ひ、略して五門を以て其の相を顯示す。謂く所依と境界と行相と自體と助伴となり。

無量とは、謂く四無量なり、

一には慈無量、二には悲無量、三には喜無量、四には捨無量なり。

有情と已れと平等なること猶し自身の如しと通達し、誓願して攝益するが故なり。出離差別とは、謂く十地に依りて、而して出離するが故なり。攝受差別とは、謂く無住涅槃に攝受せらるるが故なり。建立差別とは、謂く善く諸佛の淨土を修治するが故なり。眷屬差別とは、謂く一切の所化の有情を攝受して眷屬と爲すが故なり。勝生差別とは、謂く世間の、腹に孕む所の子が父の種族を繼ぎ、斷絶せざらしむるが如く、是くの如く菩薩は佛種を紹隆して斷絶せざらしむるなり。是れ佛の眞子の相なるが故なり。生差別とは、謂く如來の大集會の中に於て生ずるが故なり。果差別とは復た十種有り、謂く轉依差別と功德圓滿差別と、五相差別と、三身差別と、涅槃差別と、證得和合智用差別と、障淸淨差別と、和合作業差別と方便示現成等正覺入般涅槃差別と、五種拔濟差別となり。

轉依差別とは、謂く染・不染の一切種の所依の麁重永く斷ずるが故に。一切の無上功德の所依永く轉ずるが故なり。功德圓滿差別とは、謂く力・無所畏・不共佛法等の無邊の功德永く成滿するが故なり。五相差別とは、謂く淸淨等の五相の差別なり。一には淸淨差別なり。謂く、永く一切の煩惱并びに習氣を斷ずるが故に、二には圓淨差別なり。謂く、遍く佛の淨土を修治するが故に。三には身差別なり。謂く、法身圓滿の故に、四には受用差別なり。謂く、一切時に大集會に處り、諸の菩薩と種種の大法樂を受用するが故に、五には業差別なり。謂く、其の所應に隨ひて種種の變化を起し、遍く十方無量無邊の諸の世界の中に於て、諸の佛事を作すが故に。

三身差別とは、謂く圓滿なる自性と受用と變化身を證得するが故なり。涅槃差別とは、謂く無餘涅槃界に於て、一切の有情を利樂せんと欲するが爲めに、一切の功德斷絶無きが故なり。證得和合智用差別とは、謂く最極淸淨法界一味を證得するが故に、彼の能依の一切種の妙智用に於て、一一の佛の功能は一切の佛の功能に等しきが故なり。障淸淨差別とは、謂く永く一切の

るが故に、此れが所對治の地獄の異熟等は必ず復た行ぜず。地獄等永く盡きて行ぜざるに由るが故に、不行現觀と名づく。

究竟現觀とは、道諦中の究竟道に說けるが如し。

謂く、已に一切の麁重を息め、已に一切の離繫得を得る、是くの如き等なり、

聲聞現觀とは、謂く前の所說の七種の現觀なり。

他音を聞くに從りて、而して證得するが故に聲聞現觀と名づく。

獨覺現觀とは、謂く、前の所說の七種の現觀なり。他音に由らずして、而して證得するが故に、獨覺現觀と名づく。

菩薩現觀とは、謂く諸の菩薩は前の所說の七現觀の中に於て修集の忍を起し、而して作證せざるなり。

聲聞と獨覺との調伏方便の中に於て、善巧を得るが故に衆生を哀愍す。下乘に於て出離せずと爲すが故なり。

然も菩薩は、極喜地の中に於て、諸の菩薩の正性決定に入る。是れを菩薩の現觀と名づく。

已に現觀を說けり。差別を今當に說くべし。

問ふ、聲聞と菩薩との現觀には、何の差別有りや。

答ふ、略說するに十一種有り。謂く境界差別と任持差別と、通達別と、誓願差差別と、出離差別と、攝受差別と、建立差別と、眷屬差別と、勝生差別と、生差別と、果差別となり。

境界差別とは、謂く方廣大乘を緣じて境と爲すが故なり。任持差別とは、謂く大劫阿僧企耶を滿じて資糧圓滿するが故なり。通達差別とは、謂く補特伽羅法無我の理の增上法の方便に引かるるに由り、出世間の智は倶に二無我に通達するが故なり。誓願差別とは、謂く、能く一切の

なり。　此の忍は順決擇分の位に居す。
所以は何となれば、卽ち上の如き所說の法の中に於て、如理の作意增上緣の力にて、苦等の諦境に於て、已に最後の順決擇分の善根所攝の上品の諦察法忍を得るに由るなり。此の諦察法忍は、三種の如理作意に顯發さるるに由るが故に、復た三品を成ず。謂く上軟と上中と上上となり。
上軟とは、謂く卽ち此の生の時の軟位なり。
上中とは、謂く頂忍の位なり。上上とは謂く世第一法の位なり。
眞現觀とは、謂く已に見道の十六心刹那の位の所有ゆる聖道を得、又見道中に於て現觀邊の安立諦世俗智を得るなり。
出世智增上緣の中は、彼の種子を長養するに由るが故に。此の智を得て現前せずと名づく。見道の十六心の刹那は、間斷有ること無く、世間の心を現起するを容さざるを以ての故なり。
修道位に於て、此の世俗智方に現在前す。
後現觀とは、謂く一切の修道なり。
見道の後の、一切の世間・出世間の道を皆後現觀と名づくるに由るが故なり。
寶現觀とは、謂く佛に於て、證淨、法に於て證淨、僧に於て證淨なるなり。
佛の聖弟子は三寶の所に於て已に決定して淸淨信を證することを得。謂く薄伽梵は是れ眞の正等覺者なり。法毘奈耶は是れ眞の善妙說なり。聖弟子衆は是れ眞の淨行者なり。
不行現觀とは、謂く已に無作の律儀を證得するが故に、學位に居ると雖も、而も我今已に地獄畜生・餓鬼・顚墜惡趣を盡くす。我復た能く惡趣業を造るも、惡趣の異熟を感ぜずと謂ふなり。
已に無作の律儀を得とは、謂く、已に聖所愛の戒所攝の律儀を證得するなり。此れを得るに由

乃し軟軟品に至るなり、頓に三界を斷ずるとは、見道所斷の如し。世間道界地の漸次に品品別に斷ずるが如きには非ず。此の義は何を以て證と爲すや。指端經に說くが如し。諸の所有ゆる色乃至識の若しは過去、若しは未來、若しは現在は廣說す、乃至若しは遠、若しは近、此の一切を總じて一分・一團・一積・一聚と爲す。是くの如く略し已りて應に一切は皆是れ無常なり、一切は皆苦なりと觀ずべし。乃至廣說す。是くの如く觀ずるに依りて初後の二果を建立す可し。此の二果は、其の次第の如く、永く三界の一切の見・修所斷の煩惱を斷ず。無餘に顯はるるに由るが故、第二第三の兩果を立てず。此の二果は、已に見諦の者は唯欲界の修道所斷の有餘・無餘に顯はるるに由るが故なり。又是くの如く頓に出離する者に依りて、如來は分別經の中に於て預流果の無間に卽ち阿羅漢果を建立したまふ。

是くの如く補特伽羅は、多くは現法、或は臨終の時に於て、善く聖旨を辯ず。設し辯ずる能はざれば願力に由るが故に、卽ち願力を以て還つて欲界に生じ、無佛世に出でて獨勝の果を成ず。

設し辯ぜずとは、未だ無餘に諸欲を離るる能はざるが故なり。卽ち願力を以て欲界に生ずるとは彼れ能く速に般涅槃を證するが故なり。

現觀を建立するに略して十種有り。謂く、法現觀と、義現觀と眞現觀と、後現觀と、寶現觀と、不行現觀と、究竟現觀と聲聞現觀と獨覺現觀と菩薩現觀となり。

法現觀とは、謂く諸諦の增上法の中に於て、已に上品の淸信勝解を得、信に隨つて行ずるなり。

所以云何とならば、諸諦增上の契經等の法の中に於て、他音を聞く增上緣の力從り、已に最後の順解脫分の善根所攝の上品の淸信勝解を得るに由り、是くの如く淸信勝解を得るに由るが故に、說いて法現觀を以て諸諦を現觀すると名づく。

義現觀とは、謂く卽ち諸諦增上法の中に於て、已に上品は諸諦の境に於て諦察法忍することを得る

一切の菩薩の所行とは、謂く都史多天宮に示現して從り、乃し大神變を現じて魔軍を降伏するに至るまでなり。諸佛の所行とは、謂く成等正覺を示現して從り、乃し大般涅槃を示現するに至るまでなり。

勝解行菩薩とは、謂く勝解行地中に住して、菩薩の下中上忍を成就するなり。

其の菩薩種性に安住して、始め初發大菩提願從り、乃し未だ極歡喜地に入らざるに至るまでは、未だ出世の眞實內證を得ざるに由るが故に、勝解行菩薩と名づく。

增上意樂行菩薩とは、謂く十地の中の所有ゆる菩薩なり。

已に出世內證の清淨の意樂を證得するに由るが故に。

有相行菩薩とは、謂く極喜・離垢・發光・燄慧・極難勝・現前地の中に住する所有ゆる菩薩なり。

此の六地は喜樂せずと雖も、諸相が爲めに間雜する所なるに由るが故に。

無相行菩薩とは、謂く遠行地の中に住する所有ゆる菩薩なり。

此の菩薩は若しは功用を作し、乃至其の欲樂に隨ひて、能く諸相をして現行せざらしむるに由るが故に。

無功用菩薩とは、謂く不動・善慧・法雲地の中に住する所有ゆる菩薩なり。

此の菩薩は、已に純熟なる無分別智を得たるに由るが故に。

復た次に設くが如き預流補特伽羅は、此れに二種有り。一は漸出離なり、二は頓出離なり。漸出離とは、前に廣く說けるが如し。頓出離とは、謂く諦現觀に入り、已に未至定に依止して、出世間道を發し、頓に三界の一切の煩惱を斷ずるなり。品品別に斷ずるは、唯だ二果を立つ。謂く預流果と阿羅漢果となり。

品品別に斷ずるとは、謂く先に頓に欲・色・無色界の修道所斷の上上品の隨眠を斷じ、是くの如く

なることを說かず。是れ利根なるが故なり。

堪達阿羅漢とは、謂く鈍根の性なり。若しは遊散し、若しくは遊散せざるも皆能く現法樂住を退せず。能く練根に堪ふ。

不動法阿羅漢とは、謂く利根の性なり。若しは遊散し、若しは遊散せざるも、皆能く現法樂住を退せず。

欲界異生の補特伽羅とは、謂く欲界に於て、若しは生じ、若しは長じて聖法を得ざるなり。

欲界有學の補特伽羅とは、謂く欲界に於て若しは生じ、若しは長じ、已に聖法を得るも、猶ほ餘の結有るなり、欲界無學の補特伽羅とは、謂く欲界に於て、若しは生じ、若しは長じ、已に聖法を得て、餘の結有ること無きなり。欲界に三有るが如く、是くの如く色・無色界にも、各々三種有り。相に隨ひて應に知るべし。

欲色界の菩薩とは、謂く無色界の生を滅離せる靜慮と相應し、靜慮の樂に住し、而して欲界に生じ或は色界に生ずるなり。

問ふ、何に緣りて菩薩は無色界に生ぜざるや。[三] 答ふ、若し已に最勝の威德を證得せる菩薩は、凡そ所受の生皆衆生を利益し、安樂せんことを欲す。無色界は衆生を成熟する處に非ざるが故なり。無色界の生を滅離する靜慮とは、謂く能く無色界の生を除遣する所有ゆる勝定なり。靜慮の樂に住すとは、謂く靜慮を退せざるなり。此の菩薩は善巧廻轉するに由るが故に。所化の有情を成熟せんと欲する爲めに或は欲界に生じ、或は色界に生ず。

欲界の獨覺とは、謂く佛の出世無き時、欲界に生じ、自然に獨覺菩提を證得するなり。

不思議如來とは、謂く且く欲界に於て、始め都史多天の妙寶宮殿に安住するを示現して從り、乃し大般涅槃を示現し、一切の諸佛・菩薩所行の大行を示現するに至るまでなり。

【三】同學鈔七之四に「中陰經大小」の論題あり、經に佛の無色の中陰に入りて無色の衆生を化する記事に就き今論と相違せる論あり。

上流補特伽羅とは、謂く色界の地地中に於て、皆生を受け已り、乃至最後に色究竟に入り、彼に於て無漏の聖道現前して苦際を盡すことを得るなり、復た乃至有頂に往到し、聖道現前して苦際を盡すことを得る有り。

此の中、二種の上流を顯示す。一は極めて色究竟に至り、二は極めて有頂に至る。極めて色究竟に至るとは、謂く愛味多き、補特伽羅は、多く軟等の靜慮差別の愛味を生起するに由るが故に、始め梵衆天從り乃ち色究竟に至り、一切の處に於て次第に各々一生を受け、乃至色究竟に入りて般涅槃を得るなり。極めて有頂に至るとは、謂く第四靜慮を雜修せず、唯だ淨居をのみ避けて、前の如く次第に一切の處に生じ、乃至有頂にて方に般涅槃するなり。

又第四靜慮を雜修するに五品の差別有り。一には下品修なり、二には中品修なり、三には上品修なり、四には上勝品修なり、五には上極品修なり。此の五品は、第四靜慮を雜修するが故に、其の次第の如く五淨居に生る。退法阿羅漢とは、謂く鈍根の性なり。若しは遊散し、若しは遊散せざるも、若しは思惟し、若しは思惟せざるも、皆現法樂住を退失す可し。

思惟とは自身を害せんと欲するなり。不思惟とは自身を害せんと欲せざるなり。現法樂住を退するとは、謂く世間の靜慮等の定を退くなり。

思法阿羅漢とは、謂く鈍根の性なり。若しは遊散し、若しは遊散せず、若しは思惟せずんば卽ち現法樂住を退失す可し。若し思惟し已れば能く退失せず。護法阿羅漢とは、謂く鈍根の性なり。若し遊散すれば便ち現法樂住を退失す可し。若し遊散せざれば卽ち能く退せず。

住不動阿羅漢とは、謂く鈍根の性なり。若しは遊散し、若しは遊散せざるも、皆能く現法樂住を退せず。亦能く練根せず。

練根とは、謂く下の鈍根を轉じて、上の利根を成ず。是の故に不動の法なり。能く練根する性

涅槃することを得るが故なり。唯だ一隙有りて此の一生を容るるが故に、一間と名づくるなり。

中般涅槃補特伽羅とは、謂く生結已に斷じ、起結未だ斷ぜず、或は中有纔に起りて卽便ち聖道現前して苦際を盡すことを得るなり。或は中有起り已りて生有に趣かんが爲めに纔に思惟を起し、卽便ち聖道現前して苦際を盡すことを得。或は思惟し已りて生有に發趣して未だ生有に到らず、卽便ち聖道現前して苦際を盡すことを得。

此の中三種の中般を顯示す。煩惱の力に由りて生處に往趣して、生有をして相續せしむ。此の煩惱已に盡きて、唯だ隨眠力に由りて命終の後の諸蘊をして續かしむ。此れを起す隨眠の餘は、猶ほ未だ盡きず。或は中有纔に起り、串習力に由りて聖道現前し、餘の隨眠を斷じて、卽ち此の位に於て般涅槃に入る。或は中有起り已りて生有に往かんが爲め、纔に思惟を發し、聖道現前して餘の隨眠を斷じて般涅槃に入る。或は思惟し已りて生有の處に往き、未だ生有を得ず、聖道現前して餘の隨眠を斷じて般涅槃に入る。是くの如き三種は、生有の處に望めて、未だ發せざると、纔に發すると、已に遠く去れるとの位あり、差別の建立は七善丈夫趣經に隨順す。

生般涅槃補特伽羅とは、謂く二結俱に未だ斷ぜず、纔に色界に生じ已りて、卽便ち聖道現前して苦際を盡すことを得るなり。

無行般涅槃補特伽羅とは、謂く彼れに生じ已りて、加行に由らず、聖道現前して苦際を盡すことを得るなり。

加行に由らずとは、宿し串習力に由りて、無漏の聖道任運に現前して功用無きが故なり。

有行般涅槃補特伽羅とは、謂く彼に生じ已りて、加行力に由りて聖道現前して苦際を盡すことを得るなり。

加行に由るとは、上と相違するが故に。

邪見と戒禁取と、疑とを以て最勝の因と爲し、諸の有情をして下趣を越えざらしむるが故に。
貪欲と瞋恚とを以て最勝の因と爲し、諸の有情をして下界を越へざらしむるが故なり。
阿羅漢果向の補特伽羅とは、謂く已に有頂八品の煩惱を永斷して、彼の道に安住するなり。
阿羅漢果の補特伽羅とは、謂く已に有頂第九品の煩惱を永斷して、彼の究竟道に安住するなり。
問ふ、若し阿羅漢は三界一切の煩惱を永斷せば、何が故に但だ一切五の順上分の結を永斷して、阿羅漢果を得すると言ふや。
答ふ、最勝の所攝なるが故なり。云何んが最勝なるや。此の五結は是れ上分を取るの因及び上分を捨てざるの因なるに由るが故に、最勝と名づくるなり。

所以云何んとなれば、色無色の愛は欲界の上の色無色界の生を取るに由るが故に。掉と慢と無明とに由りて、此の上生を捨せざるが故に。愛と慢と疑との上の靜慮の者は彼が爲めに惱まさるるを以ての故なり。

極七返有の補特伽羅とは、謂く卽ち預流なり。人天の生に於て往來雜受し、極めて七返に至つて苦際を盡すことを得ればなり。
家家補特伽羅とは、謂く卽ち預流なり。或は天上に於て、或は人中に於て、家より家に至つて苦際を盡すことを得るなり。

所以云何んとなれば、預流果進んで一來果向に至り、或は天上に於て、或は人中に於て決定して往來し、極めて二有を受け方に般涅槃するが故なり。
一間補特伽羅とは、謂く卽ち一來なり。或は天上に於て唯だ一有を受けて苦際を盡すことを得るなり。

所以云何んとなれば、卽ち一來果進んで不還果向に至り、或は天上に於て唯だ一有を受けて般

一來果向の補特伽羅とは、謂く修道中に於て已に欲界の五品の煩惱を斷じて、彼の道に安住するなり。

所以何んとならば、見道以後には已に欲界乃至中中品の煩惱を斷じ、及び彼の斷道に住するに由るが故なり。

一來果の補特伽羅とは、謂く修道中に於て、已に欲界第六品の煩惱を斷じて、彼の道に安住するなり。

所以何んとならば、已に永く中軟品の煩惱を斷じて、斷道究竟するに由りて此を建立するが故なり。

不還果向の補特伽羅とは、謂く修道中に於て已に欲界第七第八品の煩惱を斷じて、彼の道に安住するなり。

所以云何んとならば、一來果の後已に欲界の軟上と軟中品との煩惱を斷じ、及び彼の斷道に住するに由りて、此を建立するが故なり。

不還果の補特伽羅とは、謂く修道中に於て、已に欲界第九品の煩惱を斷じて彼の道に安住するなり。

所以何んとならば、彼れ永く欲界軟軟品の煩惱を斷じて、斷道究竟するに由りて、此を建立するが故なり。

問ふ、若し已に永く一切見道所斷の煩惱を斷じ及び永く欲界修道所斷の一切煩惱を斷ずれば、不還果を得す、何が故に但だ永く五の順下分の結を斷じて、不還果を得と言ふや。

答ふ、最勝の所攝なるが故なり。云何んが最勝なるや、此の五結能く下趣下界の勝因と爲るが故に、最勝と名づくるなり。

所以何んとならば、下趣とは、謂く地獄と畜生と餓鬼となり。下界とは、謂く欲界なり。薩迦

の位に至りて、預流果を得す。

若し倍離欲の者にして後に正性決定に入らば、一來果を得ん。

謂く、先づ世間道を用ひて、已に欲界の修道所斷の六品の煩惱を斷ずるを倍離欲と名づく。彼れ後に正性決定に入り、第十六心の位に至りて一來果を得す。

若し已離欲の者ならば、後に正性決定に入りて不還果を得すべし。

謂く、先に世俗道を用ひて已に欲界の修道所斷の九品の煩惱を斷ずるをば、已離欲と名づく。

彼れ後に正性決定に入り、第十六心の位に至りて不還果を得す。

問ふ、若し已に永く見道所斷の一切の煩惱を斷じて預流果を得すれば、何が故に但だ永く三結を斷じて預流果を得すると言ふや。

答ふ、最勝の所攝なるが故なり。

此の三種の障解脱に由りて、最も殊勝と爲すことを得。

所以何んとならば、解脱に於て是れ不發趣の因なるが故なり。已發趣と雖も復た邪出離の因と爲すが故に、及び不正出離因なるが故なり。

薩迦耶見に由りて五取蘊を執じて我我所と爲し、深く愛樂を生ずるが故に大苦聚に於て厭背を生ぜず、勝解脱に於て發趣の心無し。或は衆生有り、已に解脱を發趣すると雖も、然も戒禁取と及び疑とに由りて邪道を僻執し正道を疑ふが故に、便ち邪出離と及び不正出離となり。

又此の三結は是れ迷所知の境の因なるが故に、迷見の因なるが故に、迷對治の因なるが故なり。

所以何んとならば、薩迦耶見に由りて所知の境に迷ひ、大苦聚に於て虚妄に我我所の相を増益するが故に。戒禁取に由りて能知の見に迷ひ、顚倒の見に於て謂うて清淨出離の因と爲すが故に。疑に由りて正對治に迷ひ、三寶の所に於て決定せざるが故なり

隨信行の補特伽羅とは、謂く資糧已に具し、性是れ鈍根にして他教に隨順し諦現觀を修するなり。
隨法行の補特伽羅とは、謂く資糧已に具し、性是れ利根にして、自然に諦增上法に隨順して諦現觀を修するなり。
信解の補特伽羅とは、謂く隨信行の已に果位に至れるなり、見至の補特伽羅とは、謂く隨法行の已に果位に至れるなり。
身證の補特伽羅とは、謂く諸の有學の、已に具に八解脫定を證得するなり。卽ち不還果を說きて、身證と名づく。身に八解脫定を證得するに由る。
具足して住するが故なり。八解脫とは、謂く有色に諸色等を觀ずるなり。後に當に廣說すべし。
慧解脫の補特伽羅とは、謂く已に諸漏を盡し、而も未だ八解脫定を具證せざるなり。
唯だ究竟に慧所對治の煩惱障を斷ずるが故に。
俱分解脫の補特伽羅とは、謂く已に諸漏を斷じ及び八解脫定を具證するなり。
煩惱障の分及び定障の分を俱に解脫することを得るが故に。
預流果向の補特伽羅とは、謂く順決擇分の位に住し、及び見道十五心刹那の位に住するなり。
此の中の意に說かく、始め一座順決擇分より乃至未だ初果を得せざるを皆預流果向と名づく。
預流果の補特伽羅とは、謂く見道第十六心刹那の位に住するなり。卽ち此れ見道なり。亦入正性決定とも名づく、亦於法現觀とも名づくるなり。
問ふ、誰か見道最後心の位に於て初果を得るや。
答ふ、
若し欲界未離欲の者に於ては、後に正性決定に入りて預流果を得す。
謂く次第の者は、少分に欲を離ると雖も亦未離欲と名づく。彼れ後に正性決定に入り第十六心

せざるに由る。卽ち此れが生ずる時の定にて現觀に入れば、前位に非ざるが故に下中品の順解脫分、順決擇分從り可退の義あり。此れ唯だ現行を退するにて、習氣を退するに非ず。已に涅槃に依りて先に善根を起す者は、復た新に起さざるが故なり。

此の下品の順解脫分の善根に依りて、薄伽梵は說きたまへり、若し世間に增上品の正見を具せるもの有らば、千生を經歷すと雖も三惡趣に墮せじと。

又四種の順解脫分あり。一には依憑順解脫分なり、二には勝解順解脫分なり、三には愛樂順解脫分なり、四には趣證順解脫分なり。善法欲從り乃至解脫を求むる爲めのあらゆる善根をば皆依憑順解脫と名づく。彼の相應の敎法に於けるあらゆる勝解と俱行する善根、是れを勝解順解脫分と名づく。解脫の境を緣ずる作意相續し、淸淨喜と俱なるあらゆる善根、是れを愛樂順解脫分と名づく。卽ち此の生に於て決定して順決擇分のあらゆる善根を發起す、是れを趣證順解脫分と名づく。

復た六種の順決擇分あり、謂く隨順順決擇分と勝進順決擇分と通達順決擇分と餘轉順決擇分と一生順決擇分と。一座順決擇分となり。若し最初の所起として、諦境を緣じ、下品の善根を行ぜば、是れを隨順順決擇分と名づく。卽ち此の善根轉じて中品と成れば、是れを勝進順決擇分と名づく。前の下品に望むるに、是れ增勝なるが故に、卽ち此の善根增して上品に至り、此の生の中に於て決定して能く諦理に通達するに堪ふれば、是れを通達順決擇分と名づく。又卽ち此の位の中、不定種性の者は、最勝の菩提に廻向する爲めに、及び諸の獨覺は、無師にして自證菩提を求むる爲めに轉じて餘の生に趣く、[二]是れを餘轉順決擇分と名づく。若し此の生に於て、定んで能く通達すれば、是れを一生順決擇分と名づく。若し此の座に於て、定んで能く通達すれば、是れを一座順決擇分と名づく。

【二】同學鈔十之一に於ける論題「獨勝部行」往見せよ。

て所緣の境と爲し、精進して法隨法行を修行し、衆生を成熟し、淨なる佛土を修し、大記を得受し、無上正等菩提を證成するなり。

大記を得受するとは、謂く第八菩薩地に住すれば、無生法忍を證得するが故なり。

未具資糧の補特伽羅とは、謂く諦增上法を緣じて境と爲し軟品の淸信勝解を發起し、軟品の順解脫分を成就する未定生の時なり。

已具未具資糧の補特伽羅とは、謂く諦增上法を緣じて境と爲し、中品の淸信勝解を發起し、中品の順解脫分を成就する已定生の時なり。

已具資糧の補特伽羅とは、謂く諦增上法を緣じて境と爲し、上品の淸信勝解を發起し、上品の順解脫分を成就する卽ち此生の時なり。

又未具資糧とは、謂く諦增上法を緣じて境と爲し、諸諦中に於て、下品の諦察法忍を成就し、下品の順決擇分を成就する未定生の時なり。

已具未具資糧とは、謂く諦增上法を緣じて境と爲し、諸諦中に於て中品の諦察法忍を成就し、中品の順決擇分を成就する已定生の時なり。

已具資糧とは、謂く諦增上法を緣じて境と爲し、諸諦中に於て上品の諦察法忍を成就し、上品の順決擇分を成就する卽ち此生の時なり。

是くの如き三種の補特伽羅は、順解脫分と順決擇分とに(於て)、各々三品を成就するに由るが故に、能く順決擇分と及び諦現觀とを引生するに約して、其の次第の如く未生と已生と卽ち此生の時とあり。諦增上法に於ける淸信と勝相とは、是れ順解脫分なり。卽ち此の法に於ける諦察法忍の相は是れ順決擇分にして、其の次第の如く信增上なるが故に、慧增上なるが故なり。

此の中、三品の順決擇分とは、謂く世第一法を除くなり。世第法一の性は唯一刹那にして必ず相續

薄塵行の補特伽羅とは、謂く自性位微薄の煩惱に住するなり。

前に說く所の自性位の煩惱の相の如し。

今此の煩惱を彼れに望むるに、是れ微薄なるが故なり。增上なる所緣の境界に於て、而も微薄性の煩惱現行すと雖も、昔に修習せし所の勝對治力に摧伏せらるるが故なり。

聲聞乘の補特伽羅とは、謂く聲聞法の性に住する若しは、定にもあれ(若しは)不定性にもあれ、是れ鈍根にして自ら解脫を求め、弘正願を發し、貪を厭離し解脫意樂を修し、聲聞藏を以て所緣の境と爲して精進し、法隨法行を修行して苦際を盡すことを得るなり。

當に知る可し、此の中、種性と根と願と意樂と境界と行と果との差別を以て、聞聲乘を說く。獨覺と菩薩との根性に對して、此を說きて鈍と爲す。若し爾らずんば、卽ち隨法行等の利根の言と相違するなり。

獨覺乘の補特伽羅とは、謂く獨覺法の性に住する若しは、定にもあれ(若しは)不定性にもあれ、是れ中根にして自ら解脫を求め、弘正の願を發し、貪を厭離し解脫意樂を修し、及び獨證の菩提意樂を修し、卽ち聲聞藏を所緣の境と爲して精進し、法隨法行を修行し、或は先に未だ順決擇分を起さず、或は先に已に順決擇分を起し、或は先に未だ果を得せず、或は先に已に果を得し、無佛の世に出で、唯だ內に思惟して聖道現前し、或は麟角の如く獨り住し、或は復た獨勝部行にして苦際を盡すことを得るなり。

若し先に未だ順決擇分を起さずば、亦果を得ず、是の如きは方に麟角獨住し、所餘は當に獨勝部行を成ずべし。

大乘の補特伽羅とは、謂く菩薩法の性に住する、若しは定にもあれ(若しは)不定性にもあれ、是れ利根にして一切有情の解脫を求むる爲めに弘大の願を發し、無住處涅槃の意樂を修し、菩薩藏を以

病行差別に復た七種有り、謂く貪行と瞋行と癡行と慢行と尋思行と等分行と薄塵行となり。
出離差別に三種有り、謂く聲聞乘と獨覺乘と大乘となり。
任持差別に三種有り、謂く未具資糧と已具未具資糧と已具資糧となり。
方便差別に二種あり、謂く隨信行と隨法行となり。
果差別に二十七有り、謂く信解と見至と身證と慧解脫と俱解脫と預流向と預流果と一來向と一來果と不還向と不還果と阿羅漢向と阿羅漢果と七極返家と家家と一間と中般涅槃と生般涅槃と無行般涅槃と有行般涅槃と上流と退法阿羅漢と思法阿羅漢と護法阿羅漢と住不動阿羅漢と堪達阿羅漢と不動法阿羅漢となり。
界差別とは、謂く欲界の異生と有學と無學となり。欲界に三有る如く色界無色界も亦爾なり。又欲色界の菩薩あり、又欲界の獨覺不可思議如來あり。
修行の差別に略して五種あり。一には勝解行の菩薩なり、二には增上意樂行の菩薩なり、三には有相行の菩薩なり、四には無相行の菩薩なり、五には無功用行の菩薩なり。是くの如き等の補特伽羅、無量の差別あり。
貪行の補特伽羅とは、謂く猛利にして長時の貪欲あるなり。
　下劣可愛の境界と雖も、而も能く上品の貪を發起するが故に、起れば卽ち長時に斷絕すること無きが故なり。
貪行の者の如く、乃至尋思行の者も亦爾なり、各々自の境に隨ひて猛利長時なり。理の如く配釋すべし。
等分行の補特伽羅とは、謂く自性位の煩惱に住するなり。
　猛劣を遠離して平等位に住する諸の煩惱の故に、境界の勢力に隨ひて煩惱現行するが故に。

巻の第十三

決擇分中、得品、第三之一

[一]云何んが決擇を得するや、略して說くに二種あり。謂く補特伽羅を建立し、現觀を建立するなる。前を能證と爲す。後は是れ所證なり。補特伽羅は實有なるに非ずと雖も、四種の緣に由りて、是の故に建立す。謂く言說し易きが故に世間に順ずるが故に、怖畏を離るるが故に、自他の德失を具することを顯示するが故なり。

言說し易しとは、若しは無量の色等の差別、無量の差別の相想の法の中に於て、總合して一の假なる有情を建立せば卽ち呼召し往來する等種種言說すること、遂に難しと爲さざるなり。

世間に順ずるとは、諸の世間は唯だ法の想に依りて言說を起すに非ず。多分には有情の想に依りて言說を起す。是の故に聖者は世間を化せんが爲めに、必ず應に彼に同じ方便を以て補特伽羅を建立すべきなり。

怖畏を離るるとは、世間の有情は未だ甚深緣起の法性を會せず、若し一切の有情は無我なりと聞けば便ち怖畏を生じて正化を受けざればなり。

自他の德失を具するを顯示すとは、若し假立の有情の差別を離れて、唯だ諸法染淨の相のみを說かば、是れ則ち一切に差別有ること無くして、是くの如き身中に、此くの如き過失の若しは斷(若しは)未斷も、是くの如き身中の此くの如き功德の若しは證 若しは)未證も了知すべからず、是の故に補特伽羅を建立するなり。

云何んが建立するや。略するに七種あり、謂く病行差別の故に、出離差別の故に、任持差別の故に、方便差別の故に、果差別の故に、界差別の故に、修行差別の故なり。

【一】以下決擇分中得の得品第三。

復た次に方廣分中、法三摩地に於ける菩薩の相は云何んが知るべきや。謂く五種の因に由るが故なり。一には刹那刹那に一切麁重の所依を消除す。二には種種の想を出離して樂法樂を得す。三には無量の無分別相大法光明を了知す。四には淸淨分に順ずる無分別相の恒現在前なり。五には能く轉上轉勝にして、佛の法身を圓滿し成就する因を攝受す。

是くの如き五種を、諸の菩薩の三種の稱讃功德に依りて說く。謂く、奢摩他稱讃功德と毘鉢舍那稱讃功德と此の二倶分の稱讃功德となり。奢摩他稱讃功德に、復た二種あり、一には刹那刹那に勝進し輕安にして間缺あること無し。所依遍ずるが故に刹那刹那に一切麁重の所依を消除す二には勝解を以て諦らかに一切の敎法を觀ずるに差別あること無し。同一味なるが故に種種縕界處等の諸の義相の想を遠離し、契經等の喜樂法樂を得す。毘鉢舍那稱讃功德にも、亦二種あり。一には所擇の法に隨ひて間缺あること無く、忘失せざるが故に、憶念門に由りて無量の無分別相の契經等の法に於て、慧を以て二轉依を照了し、前のあらゆる色像、無分別無加行の相、恒に現在前す、第五の一種は是れなり。此の二倶分稱讃功德法身とは、謂く所知障永斷の轉依所攝なり。此れは第十地に於て圓滿と名づけ、如來地に於て成就と名づく。法身をして速に圓滿し成就を得せしむるが爲めの故に、轉上轉勝等流習氣を引植するが故に彼の因を攝受すると名づく。是くの如き五種は、卽ち五修の能く五果を得することを顯はす。何等をか五と爲す。謂く、息相修と和合修と無相修と無功用修と轉相修となり。

問ふ、聲聞藏の法と菩薩藏の法とは、等しく法身より流るる所なり。何が故に衆生は香鬘等を以て菩薩藏の法を供養し、便ち廣大無邊の福聚を生ずるに、聲聞藏の法には非ざるや。

答ふ、菩薩藏の法は、是れ一切衆生の利益安樂の所依處なるを以ての故に、能く大義を建つるが故に、無上無量の大功德聚所生の處なるが故なり。

ずと雖も、然も彼の衆生も亦天趣に生ずと。不定種種性の者、聲聞下劣の意樂を捨離する爲めの故に、大聲聞は當に作佛を得すべしと記し、又一乘にして更に第二無しと說く。

復た次に、四種の秘密あり。此の秘密に由るが故に、方廣分中に於て一切如來のあらゆる秘密は、應に隨ひて決了すべし。何等をか四と爲す。謂く、令入秘密と相秘密と對治秘密と轉變秘密となり。是くの如き四種もて、大乘中に於て、略して如來の一切所說の秘密道理を攝す。

令入秘密とは、謂く聲聞乘に於ては色等の諸法には皆自性ありと說く。怖畏なからしめて、漸に聖教に入らしむる爲めの故なり。

相秘密とは、謂く三自性に於て、一切法は皆無自性にして無生無滅なり等と說く。

對治秘密とは、謂く諸の過失を調伏する者の爲めに、如來は種種の密教を宣說したまふ。八種の障を對治せんが爲めの故に、最上乘を說きたまふが如し。何等をか八と爲すや、謂く佛法を輕んずると、懈怠と、少善を以て喜足を生ずると、貪と慢との行と、惡作と、不定性と、差別となり。廣く說きて事を指し、其の所應に隨ふことは、四意趣に說けるが如し。

轉變秘密とは、謂く經に說く所の隱密の名言なり。說の如く不堅に於て堅覺し、深く顚倒に住し、極煩惱に惱まされて最上の菩提を得するなり。此の中密意とは、謂く不散動に於て堅固の勝覺を起すなり。所以何んとならば、堅に二義あり、一には貞實、二には散動なり。此の散動に由りて心をして剛逸ならしむるが故に、亦堅と名づく。深く顚倒に住するとは、謂く常樂我淨の四倒を翻じて無常等と爲すが故に、顚倒と名づく。此れに於て不退なるが故に深く住すと名づく。極煩惱に惱まさるとは、謂く長時に於て苦行を精勤し、極めて勞倦に逼惱せらるる爲めの故なり。最上の菩提を得るとは、若し上所說の如き三事を具すれば、定んで速に當に無上菩提を證すべし。

が故に名づけて無性と爲す。圓成實の自性は、淸淨の所緣なるが故に、依他起中に於て遍計所執の相なし。所顯の自體なるが故に、勝義を自體と爲すが故に、無性の所顯なるが故に、勝義無性と名づく。勝義無性なるが故に名づけて無性と爲す。此の道理に由りて、是の故に如來は一切法には皆自性無しと說きたまふ。一切種の性相の俱に無なるを、說いて無性と爲すには非ざるなり。

又彼れ說いて言く、一切の諸法は、生もなく滅もなく、本來寂靜自性涅槃なりと、此れ何の密意に依りて說きたまふや。無自性の如く無生も亦爾なり。無生の如く無滅も亦爾なり。無生無滅の如く本來寂靜も亦爾なり。本來寂靜の如く自性涅槃も亦爾なり。

又次に四種の意趣あり。此の意趣に由るが故に、方廣分の中、一切の如來のあらゆる意趣隨つて決了すべし。何等をか四と爲すや、謂く平等意趣と別時意趣と別義意趣と衆生意樂意趣となり。

平等意趣とは。我れ爾の時に於て、曾て勝觀如來應正等覺と名づくと說けるが如し。彼の法身と差別なきが故なり。

別時意趣とは、若しは極樂世界に生ぜんと願ふものあれば皆往生を得す、若しは暫く無垢月光如來の名を聞くことを得る者卽ち阿耨多羅三藐三菩提に於て決して退轉せずと說けるが如し。是くの如き等の言の意は別時に在るが故なり。

別義意趣とは、一切諸法は皆自性なしと說けるが如し。是くの如き等の言は、文の如く便ち義を取る可らざるが故なり。

衆生意樂意趣とは、謂く一善根に於て、或る時には稱讚す。爲めに歡喜して勇猛に修せしむるが故なり。或る時には毀呰す。少善を得、喜足を生ずることを遮せんが爲めの故なり。貪行者の爲めには佛土の富樂莊嚴を稱讚し、慢行者の爲めには諸佛を稱讚す。或は增勝有り、恒に悔惱して善を修することを障ふる者の爲めには、是くの如き言を說く、佛菩薩に於て輕毀を行

故に、即ち堅固愚癡見を不可與言見と名づく。空を邪執する者、與に言ふべからず、徒に多詞を設けて經に所益なきが故に、即ち根本見を廣大見と名づく。此の當來の諸の惡見の類、うたた增廣なるに由るが故に、即ち上に說く所の二十七見を皆增上慢見と名づく。並に能く虛妄無實の增上慢を發起するが故なり。此れ云何んが知るや。彼の經の中、即ち次後に是くの如き諸見は、十七即ち十、十は即ち十七、二十七は即ち一、一は即ち二十七なりと說けるに由るが故なり。

復た次に、方廣分に說けるが如し、[1]一切諸法は皆自性無しと。此の言は何の密意に依りて說けるや、謂く無自然性なるが故に、無自體性なるが故に、無體自體なるが故に。無なること愚夫所取の相性の如くなるが故なり。

　無自然性とは、自然性無きに由るが故に無自性と說き、待緣の性を遮せざるが故に無自性と說く。無自體性とは、此の自體は曾つて經る所有なるに由り、即ち此の自體復た有なる可からざるが故に、說いて無性と爲す。無住自體とは、體は現在にして未だ壞相に至らず、次には必ず滅すべし、體は無住の義なるが故に無性と說く。無なること愚夫所取の相性の如しとは、諸の愚夫の如き未見諦の者は、名言戲論熏習門に依止して妄に諸法の性相を取りて遠離す、是くの如き所取の自性なるが故に、無性と說く。

復た次に遍計所執の自性に於て相無性なるが故に、依他起の自性に於て生無性なるが故に、圓成實の自性に於て勝義無性なるが故なり。

　更に異門に依りて無性の義を顯はさんが故に、復た次にと言ふ。一切法とは即ち三の自性なり、謂く遍計所執の自性と依他起の自性と圓成實の自性となり。遍計所執の自性は定んで自相なし。自相なきが故に、相無性と名づく。相無性なるが故に、名づけて無性と爲す。依他起の自性は、衆緣を待つが故に自然生にあらず。自然生なきの性なるが故に、生無性と名づく。生無性なる

【一】解深密經卷二、無自性相品第五の所說なり。

て顚倒して建立す。又是の思惟を作す、若し能く是くの如き法性に悟入せば或は他をして一切に入り、皆無量の功德を生ぜしむべしと。是くの如き二種は、卽ち次の二見なり、謂く顚倒見と出生見となり。若し他、彼の所起惡見に於て、理の如く詰責するに、彼れ爾の時に時に於て竟に樂欲せず、自の宗を建立して反つて譏弄の妄理を以て他を詰責す。是くの如き二種は卽ち次の二見なり、謂く不立宗見と矯亂見となり、彼れ又是くの如き增上慢を起す。謂く、若し能く是くの如く修行するは、是れ眞に諸佛世尊を供養し恭敬するなりと。是くの如き見を敬事見と名づく。諸の善を有し、無倒の法性に達する者は、彼の惡見を捨離せしめんが爲めの故に、種種の眞實を以て道理を成立し、方便開悟すと雖も、堅く愚見を守りて曾つて捨心無く、唯だ此れのみ眞にして餘は並に邪妄なりと謂ふ。是くの如き見者を堅固愚癡見と名づく。上に說く所の如く、諸の見のあらゆる習氣麁重是れを根本見と名づく。上に說く所の如き十七種の見の諸の過失の門を開示せんと欲する爲めに、復た餘の見を說く、謂く卽ち相見を於見、無見見と名づく。此れは實に堅く無性等の相を執じて而も起る、一切相の想を執ぜざるが故に、卽ち損減施設見と損減分別見と損減眞實見とを捨方便見と名づく、彼れ一切法の性を誹謗するに由りて、勤精進に於て無用の想を起すが故に、卽ち攝受見と轉變見とを不出離見と名づく。非方便にして修學し、證果すること能はざるが故に、卽ち無罪見と出離見とを障增益見と名づく。行ずる所邪僻にして障を容盡することなきが故に、卽ち輕毀見と憤發見とを生非福見と名づく。正法同梵行所に於て邪行門を起すに由りて、便ち能く大衰損を引發するが故に、卽ち顚倒見と出生見とを、無功果見と名づく。安立する所の非正法の性に於て、授者も受者も、俱に勝進の果を證すること能はざるが故に卽ち不立宗見と矯亂見とを受辱見と名づく。非理の興論に勝つことを得べきことなきが故に、卽ち敬事見を誹謗見と名づく。說くべからざる所、强く增益するが

相見とは、謂く大乘經中所說の一切の諸法は、皆自性なく、無生無滅本來寂靜自性涅槃等といへる言を聞き、密意を善くせず、但だ此の言の義に隨ひて便ち勝解を生ずるなり。謂く、佛所說の一切諸法は、定んで自性無く、定んで生等無しと。是くの如く無性等の相に執著する、是れを相見と名づく。彼れ是くの如き無性等の相に執著するの時、便ち三自性を謗るべし。謂く、遍計所執の自性と依他起の自性と圓成實の自性となり。遍計所執の自性とは、謂く諸の愚夫、色等の相に於て周遍計度して增益の執を起すなり。謂く、此れは是れ色なり、乃至此れは是れ涅槃なりと。此の所執の義は實なく體なく、唯だ名言の施設する所あるのみなり。依他起の自性とは。謂く、即ち此の色等は唯だ是れ虛妄分別の自體なり。又因果の性にして或は異（或は）不異なり。圓成實の自性とは、謂く一切法の眞如實性なり。此の三性に於て誹謗の行を起すは、卽ち次の三見なり。謂く、損減施設の見と損減分別の見と損減眞實の見となり。彼れ是くの如く一切種一切法を誹謗するの時、此の邪見を成立せんと欲する爲めの故に、便ち復た少分の道理を攝受す。又次に、あらゆる離言なる諸法の實性を開示する了義の契經に於て、廣く方便を說き、皆悉く轉變して己が見に順ぜしむ。是くの如き二種は、即ち次の二見なり、謂く攝受見と轉變見となり。彼れ又是くの如き見を起す、若し此の見に依りて善不善を行ずるも、定んで皆罪なく過失あることなし。一切の所行は皆妙善に歸し、先に積習する所の一切の障垢は皆出離を得す。是くの如き二種は、卽ち次の二見なり。謂く、無罪見と出離見となり。彼れ是くの如く自己を執じ已りて、便ち此の見と相違して蘊等の諸法を安立し、聲聞藏中に妄に輕毀を生ず。又不信に於ける是くの如きの邪見は、聲聞人等は深く憎嫉を生ず。是くの如き二種は、卽ち次の二見なり（謂く）輕毀見と憤發見となり。彼れ又自の惡邪見に隨順して、我れ當に如實の空無相無願を建立すべしと謂ひて、彼の相に非るものに於て彼の相の想を起し、而も彼の相に於

や。法性を遠離するに由るが故に、未だ善根を種ゑざるが故に、惡友に攝せらるるが故なり。法性とは、謂く菩薩種性は、是れ彼れの自體なるが故に。一分の衆生は菩薩の種性無きに由るが故に、心性下劣にして廣大甚深の敎に於て勝解すること能はず、是の故に怖畏するなり。又一分の衆生は、菩薩の種性ありと雖も、而も大菩提に於て、未だ正願等の諸の善根を種ゑざるが故に、此に於て勝解すること能はず、是の故に怖畏す。又一分の衆生は、已に善根を種うと雖も、而も大乘の衆生を誹謗して惡友に攝めらるるが故に、此に於て勝解すること能はず、是の故に怖畏す。

復た次に、何に緣りてか一分の衆生は、方廣分の廣大甚深に於て勝解を生ずと雖も、而も出離を得ざるや。深く自の見取に安住するに由るが故に、常に堅く如言の義を執著するが故なり。深く自の見取に安住するとは、更に進んで了義の經を求めざるが故なり。常に堅く如言の義を執著するとは恒に堅く不了義の經を封執するが故に、一切の法は、畢竟して自性なしといふ言を聞くが故に、便ち一切諸法の性相は皆所有なしと撥するが如し。是くの如く餘の不了義經に於て如言の義を堅執するも亦爾なり。是の故に大乘を信ずると雖も、而も出離を得ず。大乘經には種種の意に由りて說けるを以つての故なり。

此の密意に依りて薄伽梵は、大法鏡經中に於て是くの如き言を說きたまへり。若しは諸の菩薩、言に隨ひて義を取り、正理の如く法を思擇せざるが故に、便ち二十八の不正見を生ず。何等をか名づけて二十八の不正見と爲す。謂く、相見と損減施設見と損減分別見と損減眞實見と攝受見と轉變見と無罪見と出離見と輕毀見と憤發見と顚倒見と出生見と不立宗見と矯亂見と敬事見と堅固愚癡見と根本見と於見と無見見と捨方便見と不出離見と障增益見と生非福見と無功果見と受辱見と誹謗見と不可與見と廣大と增上慢見となり。

れ施波羅蜜多なり。或は施波羅蜜多ありて戒波羅蜜多に非ず、謂く戒波羅蜜多には施波羅蜜多を攝せざる所なり。是くの如く乃至慧波羅蜜多を以て施波羅蜜多に對するに、皆應に順後の句を作すべし。餘を互に相望むるも、亦理の如く應に思ふべし。此の中、始業地に漸次に修する者に依りて、後は必ず前を待ち、前は後を待たずと說く。是の故に皆順後の句を作す。若し已に串習して六種頓に修するは、皆互に相攝す。菩薩地に說けるが如し。攝善法戒とは、謂く六波羅蜜多なり。若し純と雜と相ひ資助するに依りて說かば、應に四句を作すべし。復た次に諸のあらゆる施は、皆波羅蜜多なるや、設しは波羅蜜多は皆是れ施なるや。此の問に答へんが爲めに、應に三句を作すべし。或は是れ施にして波羅蜜多に非ざるあり、謂く行ずる所の施を大菩提に廻向せざるなり。或は亦は施にして亦は波羅蜜多なるものあり。謂く、行ずる所の施等を大菩提に廻向するなり。或は施にもあらず波羅蜜多にも非ざるものあり。謂く、上に說く所の法を除きたるなり。是くの如く乃至慧波羅蜜多に依りても、一一皆應に四句を作すべし。理の如く當に思ふべし。復た次に一切の行ずる施は皆能く波羅蜜多の種類の福を生ずるや。此れも應に四句を作すべし。初句は、謂く行ずる所の施を大菩提に廻向せざるなり。第二句は、謂く施波羅蜜多に於て勸勵讃美し隨喜慶悅するなり。第三句は、謂く行ずる所の施を大菩提に廻向するなり。第四句は謂く、上の爾所の相を除きたるなり。是くの如く乃至慧波羅蜜多に依りても、各四句を作す。理の如く應に思ふべし。

復た次に何に緣りて方廣分を說きて、廣大甚深と爲すや。一切種智性の廣大甚深に由るが故なり。謂く、此に得る所の一切種智性の果は、最も廣大にして甚深なるが故に。因に果の名を受く。是の故に別に方廣分を說いて廣大甚深と爲す。

復た次に、何に緣りてか一分の衆生は、方廣分の廣大甚深に於て勝解を生せず、反つて怖畏を懷く

なり。

更互決擇とは、略して三種あり、一には方便、二には差別、三には差別顯示なり。方便とは、謂く施方便中、一切得すべき內外の一切の身財を捨するが如きは、是れ施方便なり。此の方便の中、若し一切を捨するは是れ施波羅蜜多なり。卽ち此の中に於て、若し慈悲心を以て、一切の損害と逼迫と惱亂と他性とを遮防するは是れ戒波羅蜜多なり。卽ち此の中に於て、損害と疲倦とを忍受し遮礙するは是れ忍波羅蜜多なり。卽ち此の中に於て數〻勇勵の施心を發起するは是れ精進波羅蜜多なり。卽ち此の中に於て、其の心は純善にして、心を一境に繫けて外に流散せざるは、是れ靜慮波羅蜜多なり。卽ち此の中に於て、善く施行如實の因果を取りて異見を取らざるは、是れ慧波羅蜜多なり。是くの如く乃至慧波羅蜜多の方便の中其の所應に隨ひて當に能く建立すべし。無畏施は一切處に施有るに由るが故なり。

差別とは、略するに四種あり。一には自體差別、二には助伴差別、三には勸讃差別、四には種殖差別なり。施等の波羅蜜多の自體差別とは、其の次第の如く、棄捨と防護と堪耐と策勤と心住と決擇とを以て體と爲す。助伴差別とは、謂く施等の方便中、餘の波羅蜜多は悉く皆隨轉す前に廣く說けるが如し。勸讃差別とは、謂く施等に於て勸勵し讃美し隨喜し慶悅するなり。種殖差別とは。謂く他の相續中に於て施等の波羅蜜多を建立するなり。此の中施波羅蜜多は是れ財施なり。餘の五波羅蜜多は是れ無畏施なり。一切の六は是れ法施なり、皆他の相續の中に於て種殖するが故なり。

差別顯示とは、謂く一行等の差別に由りて、施等の波羅蜜多を顯示するなり。問の言あるが如きは、若しは施波羅蜜多なるや亦は戒波羅蜜多なるや。設しは戒波羅蜜多なるや亦は施波羅蜜多なるや。此の問に答へんが爲めに應に順後の句を作すべし、謂くあらゆる戒波羅蜜多は皆是

とは、願くは我當に阿耨多羅三藐三菩提を證せんとすとの謂なり。差別とは、願くは我が施波羅蜜多速に圓滿することを得ん、乃至慧波羅蜜多速に圓滿することを得んとの謂ひなり。當に知るべし、此の中差別發心に由りて諸の波羅蜜多を攝す、此れは是れ彼の因なるが故なり。三には自他利攝なり。謂く施攝に由るが故に一切富樂の自在を攝受す、是れを自利攝と名づく。此の施に由るが故に財物を引攝し、爲めに他を饒益す。是れを他利攝と名づく。是くの如き所餘の攝相は義に隨ひて應に知るべし。四には勝義攝なり。此れに復た多種あり、謂く或は法界に依りて說く、眞如は是れ施等の共相なるを以ての故なり。或は智の資糧に依りて說く、能く一切の智器を成辦するを以ての故なり。或は智の攝受に依りて說く、能く一切の智を成滿するを以ての故なり。或は智の隨轉に依りて說く。五波羅蜜多は慧波羅蜜多に隨ひて轉ずるを以ての故なり。或は智相に依りて說く、慧波羅蜜多は是れ正智の自體なるを以ての故なり。是くの如く勝義は眞如及び正智を以て體と爲すが故に、能く施等を攝す。此の略說に由りて、所餘の攝の義は理の如く應に思ふべし。

所治とは、謂く施等の六は、其の次第の如く慳悋と犯戒と忿恚と懈怠と散亂と惡慧とを以て所治と爲す。復た次に、乃至、一切の波羅蜜多所攝の善法の彼れが所對治と及び所知障とは、皆是れ波羅蜜多の所治なり。

功德とは　謂く五果に依る無量無邊の稱讚勝利を皆功德と名づく。謂く、能く永く自の所對治を斷ずる、是れ諸波羅蜜多の離繫果なり。現法中に於て、此の施等に由りて自他を攝受するは、是れ士用果なり。當來の世に於て後後に增勝にして展轉生起するは、是れ等流果なり。大菩提は是れ增上果なり。大財富を感じて善趣に往生し、無怨無壞にして多の諸の喜樂あり、有情中の尊にして身に損害なく、廣大の宗族にして其の次第に隨ふ。是れは施等の波羅蜜多の異熟果

二乘の心に同じ、安受苦忍の任持する所に由るが故に、方に此の心を捨するなり。善根無盡とは、謂く生死の際を窮め、恒に一切有情の利益安樂の事を作し、乃至無餘涅槃界に於ても亦棄捨せず、饒益有情精進の任持する所に由るが故なり。御衆業とは、謂く內證に依止するが故に、所化の有情を教授し教誡し、心未定の者には其をして定を得せしめ、心已定の者には其をして解脫せしむ、饒益有情靜慮の任持する所に由るが故なり。證入大地とは、謂く先に甚深の教法を信解し、資糧圓滿して速に初極喜地に證入す、緣世俗慧の任持する所に由るが故なり。所餘は了し易きが故に、重ねて釋せず。

又差別とは、謂く施に七種あり。一には根本施なり、謂く種性の位の菩薩のあらゆる施波羅蜜多なり。種性に依止して而も施を行ずるが故に、二には弘誓施なり、謂く發心位の菩薩のあらゆる施波羅蜜多なり。大願に依受して而も施を行ずるが故に。三には攝受施なり、謂く自他利行位に於ける菩薩のあらゆる施波羅蜜多なり。四には無執受施なり、謂く觀眞實義位の菩薩のあらゆる施波羅蜜多なり。施者等の分別の執受無きを以ての故に。五には無攝受施なり、謂く威德位の菩薩のあらゆる施波羅蜜多なり。外の資生の具を攝受せずと雖も、但だ虛空藏等の三摩地力に由りて、手を擧げ空を麾し、欲するに隨ひて皆珍寶等の物を雨ふらせばなり。六には隨所應施なり、謂く成熟位の菩薩のあらゆる施波羅蜜多なり。所化の宜しきに隨つて而も施を行ずるが故に。七には廣大施なり。謂く最勝菩提位のあらゆる施波羅蜜多なり。無上なるを以ての故に。施に七種あるが如く、乃至慧にも亦爾なり。其の所應に隨ふ。

攝とは云何ん、謂く菩薩地を攝する爲めの故に、中に於て略して、施等の波羅蜜多を說く。此の攝に略して四種あり。一には種性攝、謂く施波羅蜜多等の種性相應の隨順知なり。二には發心攝、謂く差別發心の所攝なるが故なり。發心に二種あり、謂く無差別と差別となり。無差別

乃至慧聚を以て得る所の果報を諸の有情に施し、自ら己が爲めに爲さず、又此の福を以て、諸の有情と共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是くの如き意樂を、是れを菩薩の修行する所の戒波羅蜜多乃至慧波羅蜜多に於ける善好意樂と名づく。

依止方便修に復た三種あり。謂く無分別智に由りて三輪皆清淨なりと觀察するが故なり。所以何んとならば、此の方便に由りて、一切の作意所修の諸行速に成滿するが故なり。

依止自在修に亦三種あり。謂く身自在の故に、行自在の故に、說自在の故なり。身自在とは、謂く諸の如來の自性と受用との二身なり。行自在とは、謂く諸の如來の變化身なり。此れに由りて能く一切の有情の一切種の同法の行を示現するが故なり。說自在とは、謂く能く六波羅蜜多の一切種の差別を宣說して滯礙あること無きが故なり。差別とは云何。謂く十八種の任持に由りて六波羅蜜多の差別を顯はすなり。何等かが十八なるや。謂く身任持と心任持と善法任持と善任持と菩提任持と悲任持と不捨有情任持と捨下劣心任持と無生法忍任持と善根方便任持と善根圓證任持と善根無盡任持と無厭倦任持と諸所思事成滿任持と御衆業任持と證入大地任持と引發佛性任持と建立佛事任持となり。施等の六種には、各三の差別あり。其の次第の如く三三の所攝なり。施の三種とは、謂く財施と無畏施と法施となり。戒の三種とは、謂く律儀戒と攝善法戒と饒益有情戒となり。忍の三種とは、謂く耐怨害忍と安受苦忍と諦察法忍となり。精進の三種とは、謂く被甲精進と方便精進と饒益有情精進となり。靜慮の三種とは、謂く現法樂住靜慮と引發神通靜慮と饒益有情靜慮となり。慧の三種とは、謂く緣世俗慧と緣勝義慧と緣有情慧となり。當に知るべし、財施は能く身を任持す、飲食等の諸の資生の具に由りて、受者所依の身を攝益するが故なり。無畏施は能く心を任持す、他の心を安慰して憂怖を離るるが故なり。是くの如く、餘句は義に隨ひて應に思ふべし。下劣心とは、謂く諸の菩薩、生死の苦を厭ひて

臥に、唯だ能く一刹那の戒波羅蜜多を修習し、或は乃至慧波羅蜜多を(修習す。)。是くの如く展轉差別して修習し、あらゆる戒聚乃至慧聚、究竟滿足して現に能く阿耨多羅三藐三菩提を證得す。是の諸の菩薩、是くの如く戒波羅蜜多乃至慧波羅蜜多を修行するの時、此の戒聚乃至慧聚に於て修習意樂猶ほ滿足せざるなり。是くの如き意樂を、是れを菩薩の修習する所の戒波羅蜜多乃至慧波羅蜜多に於ける無厭意樂と名づく。

又諸の菩薩の、是くの如き戒波羅蜜多乃至慧波羅蜜多を修行するの時、展轉相續して一刹那も退あり斷あることなく、乃至究竟して菩提の座に坐す。是くの如き意樂を、是れを菩薩の修行する所の戒波羅蜜多乃至慧波羅蜜多に於ける廣大意樂と名づく。

又諸の菩薩、是くの如く戒波羅蜜多乃至慧波羅蜜多を修行するの時、此の所攝の諸の有情の所に於て大歡喜を生ず。是の諸の有情、此の所攝に由つて歡喜を生ずと雖も、猶ほ及ぶこと能はず。是くの如き意樂を、是れを菩薩の修行する所の戒波羅蜜多乃至慧波羅蜜多に於ける歡喜意樂と名づく。

又諸の菩薩、是くの如き戒波羅蜜多乃至慧波羅蜜多を修行するの時、此に攝する所の一切の有情は、我が己身に於て大恩德ありと觀じ、己身は彼に於て恩あることを見ず、我が阿耨多羅三藐三菩提を資助するに由るが故にとす。是くの如き意樂を、是れを菩薩の修行する所の戒波羅蜜多乃至慧波羅蜜多に於ける恩德意樂と名づく。

又諸の菩薩是くの如き戒波羅蜜多乃至慧波羅蜜多を修行するの時、無量の諸の有情の所に於て大戒福乃至慧福を興すと雖も、而も報恩と當來の果報とを希はず。是くの如き意樂を、是れを菩薩の修行する所の戒波羅蜜多乃至慧波羅蜜多に於ける無染意樂と名づく。

又諸の菩薩、是くの如き戒波羅蜜多乃至慧波羅蜜多を修行するの時、修行する所の廣大の戒聚

る時も、菩薩の意樂は厭足せざるに由るが故に、是くの如き意樂を、是れを菩薩の施波羅蜜多に於ける無厭意樂と名づく。又諸の菩薩、是くの如き施波羅蜜多を修行するの時、展轉相續して一刹那も退有り斷有ることなく、乃至究竟して菩提の座に坐す。是くの如き意樂、是れを菩薩の施波羅蜜多に於ける廣大意樂と名づく。

又諸の菩薩、是の如き施波羅蜜多を修行する時、施所攝の諸の有情の所に於て大歡喜を生ず。是の諸の有情、施に攝受せられて歡喜を生ずと雖も猶ほ及ぶこと能はず。是くの如き意樂を、是れを菩薩の施波羅蜜多に於ける歡喜意樂と名づく。

又諸の菩薩、是くの如き施波羅蜜多を修行するの時、施所攝の一切の有情を、我が已身に於ては大恩德ありと觀じ、已身を彼に於て恩有りと見ず、我が阿耨多羅三藐三菩提を資助するに由るが故なり。是くの如き意樂を、是れを菩薩の施波羅蜜多に於ける恩德意樂と名づく。

又諸の菩薩、是くの如く施波羅蜜多を修行する時、無量の諸の有情の所に於て大施福を興すと雖も、而も報恩と當來の果報とを希はず。是くの如き意樂を、是れを菩薩の施波羅蜜多に於ける無染意樂と名づく。

又諸の菩薩、是くの如き施波羅蜜多を修行するの時、修行する所の廣大施聚によつて得るところの果報を以て、諸の有情に施して自ら已が爲めにせず。又此の福を以て、諸の有情と共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是くの如き意樂を、是れを菩薩の施波羅蜜多に於ける善好意樂と名づく。

又諸の菩薩の戒波羅蜜多乃至慧波羅蜜多を修行するの時の無厭意樂とは、謂く諸の菩薩、假使ひ殑伽沙等の生を經、是の一一の生に殑伽沙等大劫の壽量あり、此の長時に於て諸の資生の具常に匱乏せられて、三千大千世界に、中に熾火を滿して、恒に其の中に在りて、行に住に坐に

卷の第十二

決擇分中、法品、第二之二

云何んが修なるや。略して五種あり、謂く依止任持修と依止作意修と依止意樂修と依止方便修と依止自在修となり。

依止任持修に復た四種あり。一には依止因修なり、謂く種性の力に由りて波羅蜜多に於て正行を修習するなり。二には依止報修なり、謂く勝れたる自體力に由りて波羅蜜多に於て正行を修習するなり。三には依止願修なり、謂く本願力に由りて波羅蜜多に於て正行を修習するなり。四には依止簡擇力修なり、謂く慧力に由りて波羅蜜多に於て正行を修習するなり。

依止作意修にも亦四種あり。一には依止勝解作意修なり、謂く一切波羅蜜多相應の經敎に於て增上の勝解を起すなり。二には依止愛味作意修なり、謂く已に得たる波羅蜜多に於て勝れたる功德を見、深き愛味を起すなり。三には依止隨喜作意修なり、謂く一切世界の一切有情の所行の施等に於て深く隨喜を生ずるなり。四には依止喜樂作意修なり、謂く自他當來の勝品の波羅蜜多に於て、深く願樂を生ずるなり。

依止意樂修に復た六種あり、謂く無厭意樂と廣大意樂と頂喜意樂と恩德意樂と無染意樂と善好意樂とに由るが故に諸の波羅蜜多を修するなり。此の中、菩薩の施波羅蜜多に於ける無厭意樂とは、謂く、諸の菩薩は、一有情一刹那の頃に於て、假使ひ殑伽沙等の世界に中に滿てる七寶を以用つて布施し、又殑伽沙等の身命を以て布施し、是くの如く布施して殑伽沙等の大劫を經ん。一有情の所に於ける如く、是くの如く乃至一切の有情界に於てせん。是くの如く施す時皆彼の阿耨多羅三藐三菩提に於て、速に成熟することを得せしむ。是くの如く差別の施を修行す

次第に隨ひて能く諸の根門を引きて守護するが故に、是れ清淨の善趣に往く因なるが故に、能く無悔等と爲り、漸次に乃至涅槃の所依なるが故に、一切忿熱の灰を遠離するが故に、不捨怨害の心を遠離するが故に、損者は常に安隱なることを顯發するが故に、說て名づけて忍と爲す。怨害の心とは、謂く怨に報ゆるの心を起すなり。不捨とは、謂く此の心を棄てざるなり。能く怨心を壞るを、名づけて損者と爲す。此の無畏を顯はすが故に顯發と名づく。損者は常に安隱なるが故に、損害生長の作用と相應するが故に精進と名づく。損害の作用と相應すとは、謂く前の二の正斷は能く不善の法を損害するを以ての故なり。生長の作用と相應すとは、謂く後の二の正斷は、能く諸の善法を生長するを以ての故なり。能く持し能く息め能く靜にして能く調へ又能く引發するが故に、靜慮と名づく。能持とは、謂く境に於て心を繫くなり。能息とは、謂く諸の散亂を息むるなり。能靜とは、謂く心をして寂靜ならしむるなり。能調とは、謂く諸の纒を制伏するなり。能引發とは、謂く能く自在の作用を引發するなり。他所發の智なるが故に、內證智なるが故に、種別智なるが故に、寂靜を得する智なるが故に、勝德智なるが故に、名づけて慧と爲す。他所發の智とは、謂く他の言音より生ずる所の慧と及び如理作意相應の慧となり。內證智とは、謂く出世間の慧なり。種別智とは、謂く出世間後所得の慧なり。寂靜を得する智とは、謂く修道中に煩惱を治する慧なり。勝德智とは、謂く能く勝功德を引發する慧なり。

最勝と爲す。一には廣大最勝なり、一切世間の樂を求めざるが故に、又最上なるが故に。二には長時最勝なり、三大劫阿僧企耶を經て積習する所なるが故に、三には所爲最勝なり、一切の有情を利益し安樂する爲めの故に。四には無盡最勝なり、大菩提に廻向して空竟無盡なるに由るが故に。五には無間最勝なり、自他平等の勝解を得し。諸の有情をして施等の波羅蜜多に於て、速に圓滿ならしむるに由るが故に。六には無難最勝なり。ただ他の行ずる所の施等を隨喜し、波羅蜜多をして速に圓滿ならしむるに由るが故に。七には大自在最勝なり、虛空藏等の諸の三摩地を得し、布施等の波羅蜜多をして速に圓滿ならしむるに由るが故に。八には攝受最勝なり、無分別智に攝受せらるるが故に。九には發起最勝なり、謂く勝行地中、上品の忍位所行の施等の波羅蜜多なり。十には證得最勝なり、謂く初地中所得の施等の波羅蜜多なり。十一には等流最勝なり、謂く餘の八地中に行ずる所の施等の波羅蜜多なり。十二には圓滿最勝なり、謂く第十地と及び如來地にあるところの施等の波羅蜜多なり。其の次第の如く、菩薩圓滿するが故なり、佛圓滿するが故なり。

復た次に、最勝の所作なるが故に、最勝の所至なるが故に、波羅蜜多と名づく。一切の佛菩薩の所爲所到なるが故なり。

復た次に、所知彼岸に到るが故に、波羅蜜多と名づく。佛の性に安住するが故なり。

復た次に、自他の最極の災橫を濟度するが故に、波羅蜜多と名づく。能く自他をして生死の大苦海を越度せしむるが故なり

共詞は已に釋せり、不共をば今當に說くべし。能く捨施する者は當來の貪苦を能く捨し、受くる者は現在に熱惱す、故に名づけて施と爲す。能く諸根をして永く寂靜ならしむるが故に、能く清淨の諸善趣に趣くが故に、能く淸凉の所依處と爲るが故に、說て名づけて戒と爲す。其の

是くの如く忍力に由るが故に戒清淨なることを得。何を以ての故に、能く他の不饒益を忍受するに由りて、經に所學處を毀犯せざる故なり。精進に由るが故に忍清淨なることを得。何を以ての故に、勇猛力に由るが故に久しく生死に處して以て難と爲さず、能く衆生違逆等の苦を受くればなり。靜慮に由るが故に精進清淨なり。何を以ての故に、喜樂と倶なるに由り、能く勤めて一切の善法を修習して休息なきが故なり。慧を具するに由るが故に靜慮清淨なり、何を以ての故に、若し無量の門に由りて數〻諸法を觀ずれば、能く內に寂靜を證し、三摩地を增長すればなり。又伽他に說けり、靜慮として慧に因らざること有ることなし。

復た次に、麁細に由るが故に、波羅蜜多は前後次第す。所以何んとならば、諸の行の中に於ては施の行最も麁なるが故に、先に建立す。忍等の行よりも戒は復た麁と爲すが故に、次に建立す、乃至慧と靜慮とより麁と爲す。一切の行の中に慧を最も細と爲すが故に、最後に建立す。釋詞とは、謂く諸の菩薩の行ずる所の布施を施波羅蜜多と名づくる所以は、謂く大施に由るが故に、離過の故に、離垢の故に、施波羅蜜多を名づくるなり。大施とは、盡く一切の內外の事を捨するが故に、長時施の故なり。離過とは、不平等、追求等の過を遠離するが故なり。離垢とは、永く一切の所治の慳を斷ずるが故なり。無盡慧經施無盡中に說けるが如し。云何んが離垢なるや。永く所治並に習氣を斷ずるが故なり。是くの如き三句は、波羅蜜多の三種の最勝を顯はす。何等をか三と爲す。一には自體最勝並に積習なり。二には方便最勝なり、三には果最勝なり。積習とは、謂く長時施の故なり。施波羅蜜多に三種あるが如く、乃至慧波羅蜜多も亦爾なり。戒等の離過とは、謂く我の增益等を遠離するなり、其の所應に隨ふ。無盡慧經に廣く說くが如し。

復た次に、十二種の最勝と相應するに由るが故に、波羅蜜多と名づく。何等をか名づけて十二の

受すれば能く一切の薩伐若の事を爲す。是れを施波羅蜜多の相と名づく。是くの如きの四句、其の次第に隨ふ。發起に由るが故に、習氣の故に、自體の故に、等流の故に、波羅蜜多の相を顯はす。

發起とは、謂く一切智性に依止するなり。凡そ生起する所の一切の施行は、皆薩伐若の性に廻向するが故に。習氣とは、謂く能く一切智性を感ずるなり。卽ち行ずる所の施は、熏習相續して當來の世に於て能く薩伐若の性を感ずるが故に。自體とは、謂く一切智性を攝受するなり。卽ち行ずる所の施は究竟圓滿にして、爾の時に能く佛の法身を辨ずるが故に。等流とは、謂く能く一切一切智事を爲すなり。此れより後時には、受用變化身の等流門に由り一切の薩伐若の事を發起するが故に。施波羅蜜多の相の如く、乃至慧波羅蜜多の相も、皆應に是くの如く說くべし。

次第とは、謂く前前の波羅蜜が能く後後の所依止と爲るが故なり。所以云何んとならば菩薩摩訶薩は施波羅蜜多に由りて內外の事を捨施することを串習するが故に、身命を顧みず、大寶藏を棄て、禁戒を受持す。護戒に由るが故に、他の毀罵する所をも終に反報せず。是くの如き等に由り、遂に能く堪忍す。能く寒熱等の苦を堪忍するを以て、此の緣遭ふと雖も加行して息まず。勤精進を發し、精進方便して究竟の果を證し、靜慮を成滿す。靜慮滿ち已れば、淨定の心如實に知るに由るが故に、出世究竟の大慧を證得す。

復た次に、前前の波羅蜜多は、後後の所持なるが故に、謂く戒は能く施を持し、乃至慧は能く靜慮を持す。尸羅を具するに由りて施清淨なることを得。何を以ての故に、布施を行ずるに由りて有情を攝益し、尸羅を具するに由りて惱害を爲さず。是の故に菩薩は施を受くる者に於て惱害を離るるを以て、善く能く清淨の樂具を施與す。故に淨戒力に由りて施は清淨なることを得、

此の三種に由りて善く能く一切の有情を攝益し、精進に由るが故に、未だ永く一切の煩惱を伏せずと雖も、而も善品に依りて彼が對治を修す。靜慮に由るが故に永く煩惱を伏し、智慧に由るが故に永く隨眠を害す。此の三種に由りて善く能く一切の煩惱を對治す。

相とは、謂く諸の菩薩の波羅蜜多の相なり。云何んが施波羅蜜多の相なるや。謂く諸の菩薩、菩薩の法性に安住し、菩提心を依止と爲し、悲導の心を以て一切を捨する時の所有の身語意業なり。是くの如き種性に由るが故に、願の故に、意樂の故に、事の故に、自體の故に施波羅蜜多の相を顯はす。種種とは、謂く菩薩の法性なり。

願とは、謂く菩提心なり。意樂とは、謂く悲導心なり。事とは、謂く諸の所有を捨するなり。自體とは、謂く身語意業なり。

云何んが戒波羅蜜多の相なるや。謂く諸の菩薩、菩薩の法性に安住し、菩提心を依止と爲し、悲導の心を以て一切菩薩の戒を受持する時の所有の身語意業なり。

云何んが忍波羅蜜多の相なりや。謂く諸の菩薩、菩薩の法性に安住し、菩提心を依止となし、悲導の心を以て諸の怨苦を堪忍し安受する時の所有の身語意業なり。

云何んが精進波羅蜜多の相なるや。謂く諸の菩薩、菩薩の法性に安住し、菩提心を依止と爲し、悲導の心を以て一切の勝善法を引發するの時の所有の身語意業なり。

云何んが靜慮波羅蜜多の相なりや。謂く諸の菩薩、菩薩の法性に安住し、菩提心を依止と爲し、悲導の心を以て一切種の身語意業の自在の用を起す時の所有の一切の心、恒に安住するなり。

云何んが慧波羅蜜多の相なるや。謂く諸の菩薩、菩薩の法性に安住し、菩提心を依止と爲し、悲導の心を以て、一切種の身語意業の自在の用を起す時の所有の一切の諸法の簡擇なり。

復た次に、若し行ずる所の施薩伐若の性に依止すれば能く薩伐若の性を感じ、薩伐若の性を攝

所以云何んとならば、増上生に三種あり、一には大資財、二には大自體、三には大眷屬なり。施波羅蜜多には大資財の果を感じ、戒波羅蜜多には大自體の果を感ず。淨戒を持するに由りて善趣の中に生じ尊貴の身を得するが故なり。忍波羅蜜多には大眷屬の果を感ず、能く忍を行ずる者は、一切衆生の咸く歸附する所なるが故なり。

決定勝道に三種あり、一には諸の煩惱を伏して善品を修習する方便、二には有情を成熟する方便、三には佛法を成熟する方便なり。是くの如き三の中、隨ひて一種を闕くも、菩薩の決定勝道は必ず成熟せず。有情を成熟する方便とは、謂く靜慮波羅蜜多なり。此れによりて神通を發し有情を成熟するが故なり。

復た次に、波羅蜜多は是れ無上處涅槃の方便なるが故に、其の數は唯だ七のみなり。所以何んとならば、諸の菩薩は涅槃に住することに翻ずる爲めの故に、生死の中に於て増上生を攝し、生死に住することに翻ずる爲めの故に、卽ち生死に於て而も染汚ならず。是の故に前の三は是れ増上生を得るの方便にして、後の三は是れ不染汚の方便なり。其の所應に隨ひて前の如く應に知るべし。不染汚方便とは、精進に由るが故に對治を修習し、靜慮に由るが故に諸の煩惱を伏し、智慧に由るが故に永く一切の煩惱隨眠を害す。

復た次に、一切の有情を攝益する爲めの故に、一切の煩惱を對治するが故に、波羅蜜多は唯だ六のみあり。所以云何んとならば、菩薩摩訶薩は布施に由るが故に資財を引攝し、方便して一切の有情を攝益す。持戒に由るが故に侵損と逼迫と惱亂とを起さず、方便して一切の有情を攝益す。其の次第の如く、他の財と身と心とを毀壞せざるが故に。忍辱に由るが故に侵損と逼迫と惱亂とを堪受し、方便して一切の有情を攝益す、他の己が財を侵損する等を堪忍するに由るが故なり。

是の故に、世尊は住法の比丘に因りて是くの如き言を說きたまふ。若し比丘、法に於て究竟し、所謂る契經、應頌乃至廣說せん。已後に復た說いて言く、瑜伽を捨せずと。是くの如き等は應に理の如く知るべし。若し聞思修慧を具得し、二種に依りて住すること有れば、是れを住法と名づく。瑜伽を捨せず、是くの如き等とは、謂く三摩地方便を修して足るを知らざる修所生の慧を顯示するなり。

三摩地方便とは、謂く無間殷重方便と、及び無顚倒方便となり。此れ則ち二種の方便を顯示す。一には無間殷重方便の所攝なり。說の如く瑜伽を捨せざるが故なり。二には無顚倒方便の所攝なり。說の如く作意を捨せざるが故なり。說の如く、內心に奢摩他を捨てざるが故に。此れ則ち味著を生ぜざるが故に、及び上奢摩他方便を修するが故に名づけて不捨と爲すことを顯示す。

足るを知らずとは、謂く味著を生ぜずして上奢摩他方便を修するなり。

復た次に、何の因緣の故に十二分聖教中に、方廣分を菩薩波羅蜜多藏と名づくるや。此の分の中に、廣く一切の波羅蜜多の數を說くに由るが故に、相の故に、次第の故に、釋詞の故に、修の故に、差別の故に、攝の故に、所治の故に、功德の故に、更互決擇の故なり。問ふ、何の處に於て說けるや。答ふ、經の中に說けるが如し。大乘とは、卽ち是れ菩薩の波羅蜜多藏なり。云何んが波羅蜜多の數と相と次第とを宣說し、乃至更に互に決擇するや。數に二種あり、一には計算數、二には決定數なり。計算數とは、謂く六波羅蜜多なり。決定數とは、謂く波羅蜜多の數はただ六のみありて、增しもせず減じもせざるなり。何を以ての故に、一切の菩薩道に略して二種あり、一には增上生道、二には決定勝道なり、其の次第の如く三は三の攝なるが故に。

若し文と詞とに於て、俱に善巧を得ば、便ち能く妙善に所說を領受す、善く文詞を訓釋することを知るが故に。善く我我所等の世俗の言詞を知り、深く執著せずして隨順して說くが故に、卽ち能く無倒に文義を領受す。

云何んが前際後際密意善巧なるや。謂く能く善く前際を知り、後際を領受して出離するが故なり。若し前際後際密意に於て善巧なれば、便ち能く受け已り而して失壞せず、前際に受くるところの法に依止して後に能く出離を證得し、善く如來の密意を了知するに由りて便ち能く聖教を證取して堅實なり。

云何んが諸法の中に於て安住するや。若し修慧を得せず、唯だ勤方便して聞思を修するは、名づけて法に安住すると爲すを得ず。若し聞思を得せずして、唯だ勤方便して修慧を修習するも、亦法に安住すると名づくることを得ず。若し俱に二種方便の安住を得ば、是くの如きをば乃ち法に安住すると名づく。

經に言ふが如し、大德當に知るべし、若し諸の比丘の是くの如く法に住するをば、乃ち名づけて住法の比丘と爲すべしと。此の經の中に於て、世尊若し能く具に聞思修に依りて住するを方に住法と名づけ、隨ひて一に住して方便修習するを住法と名づくることを得るに非ずと顯示したまふ。

若しは唯だ法に於て受持し、讀誦し、他の爲めに宣說する等、是れを聞思所生の慧と名づく。說の如く若し是の處に於て多く其の文を究め、讀誦宣說し、又多く尋思し、唯だ聞思の慧を修めて修慧を修習せず、瑜伽を捨離する等は、建立して住法とは爲すべからず。

若し三摩地方便を修して足るを知らず、是れを修所生の慧と名づく。說の如く、若し聞思を得せず、唯だ修慧を修することあるも、亦立てて住法とは爲すべからず。

此の道理に依りて、佛薄伽梵は妙に善く宣說したまふ。菩薩は定位に於て、影は唯た是れ心のみなりと觀ず。義の想をば旣に滅除し、審に唯だ自の想のみなりと觀ず。所住の內心を知りて、所取の有に非ざる、次に能取も亦無なるを知り、後に無所得に觸る。

依とは、謂く轉依なり。一切の麁重を捨離し、淸淨の轉依を得するが故なり。

當に知るべし、此の中、因と果との兩位を以て瑜伽地を釋し、持等の四種は此の地の因を釋し、最後の一種は此の地の果を釋するに由る。

復た次に、云何んが諸法の中に於ける法善巧、云何んが義善巧、云何んが文善巧、云何んが詞善巧、云何んが前際後際密意善巧なるや。是くの如き五問は、經中に說くところの諸句に隨順す。尊者阿難の舍利子に告ぐるが如し。長老よ、當に知るべし、若し諸の比丘、五法を成就せば、卽ち能く速に受け、多く受け、善く受け、受け已つて失はさるべし。此の經中に於て、卽ち五法に由りて、其の所應の如く速に受等の四種の句義を成ずべし。

云何んが法善巧なるや。謂く多聞なるが故なり。

法に於て善巧なれば、便ち能く速に受け、多聞を具する者は多分に能く速に文句の差別を受くるに由るが故に。

云何んが義善巧なるや。謂く阿毘達磨と毘奈耶との中に於て善く其の相を知るが故なり。

義に於て善巧なれば、卽ち能く多く受く。若し善く阿毘達磨等の相を了知すれば、乃ち蘊界處等の所說の事の中に於て、便ち能く衆多の文を攝集するが故に。

云何んが文善巧なるや。謂く能く訓釋文詞を知るが故なり。

云何んが詞善巧なるや。謂く能く善く我我所等の世俗の言詞を知り。深く執著せず、隨順して說くが故なり。

復た次に、法に依りて三摩地を修する者の瑜伽地とは云何ん。當に知るべし、此の地に略して五種あり。謂く、持と任と鏡と明と依となり。

持とは、謂く已に菩提の資糧を積集し、煖等の位に於て、諸の聖諦所有の多聞に依るなり。多聞する所の如く止現所緣の境を安立するが故に、說いて名づけて持となす。又已に菩提の資糧を積集するとは、諦現觀を求むる爲めに、契經等の法を聽學するが故に多聞と名づく。

任とは、謂く此の境を緣ずる如理作意なり。此の作意に由り、多聞する所に依りて、無倒に所聞の義相を思惟し心を任持するが故なり。

鏡とは、謂く此の境を緣ずる有相三摩地なり。此の三摩地は卽ち多聞を緣じ、境の爲めに定相と倶なるが故に有相と名づく。此の三摩地は猶し所知の事の同分の影像の相を帶するに由るが故に。又此の三摩地は、能く審に所知の事質を照察するが故に鏡に譬ふ。

明とは、謂く能取所取無所得智なり。此の智は見道の所攝にして、現觀轉ずるに由るが故なり。云何んが菩薩は瑜伽地に依りて、方便修學して無所得を證するや。謂く、諸の菩薩は、已に善く福德智慧の二種の資糧を積集し、已に第一無數大劫を過ぎ、已に聞隨順して眞如に通達し、契經等の法を理の如く作意し、三摩地を發し、定心に依止し、定中所知の影像を思惟し、此の影像を觀じて定心に異らず、此の影像に依りし外境の想を捨し、唯だ定のみにして自想の影像を觀察す。爾の時に菩薩は、諸法は唯だ息のみなりと了知するが故に、內に其の心に住し、一切種の所取の境界の皆所有なるを知る。所取無きが故に、一切の能取も亦眞實に非ず。故に次に、能取の有に非ざることを了知し、次に復た、內に於て所得を捨離し、二種の自性は無所得なりと證す。

立てる因性なりと推求するなり。

能詮と所詮との相應とは、謂く此の二は互に領解の因性となるなり。所以何んとならば、名言を善くするものは、但だ能詮を聞き、憶念門に由り、便ち所詮に於て領解を生ずることを得。或はただ所詮を得し、憶念門に由り、便ち能詮に於て領解を生ずることを得。是くの如き種類の共に相應を立てる中に於て、眼等の自相は唯だ是れ假立のみなり。但だ肉團等の名言の因中に於て、此の名言を起すが故に、若しは是くの如く觀察す。是れを自體假立の尋思と名づく。

差別假立尋思とは、謂く諸法の能詮と所詮との相應の中に於て、差別は唯だ是れ假に名言を立つる因性なりと推求するなり。

所以何んとならば、能詮と所詮との相應の中に於て、若しは常・無常・有上・無上・有色・無色・有見・無見等の差別相は、唯だ是れ假に名言を立つる因性なりと推求するを以て、是くの如く觀察す。是れを差別假立尋思と名づく。

復た次に、法に於て正勤し、尋思を修し已れば、必ず諸法に於て如實智を往す。

云何んが而も如實智を起すや。

謂く四如實智を起すなり。一には名尋思所引の如實智、二には事尋思所引の如實智、三には自體假立尋思所引の如實智、四には差別假立尋思所引の如實智なり。

名尋思所引の如實智とは、謂く如實に名の不可得なることを知る智なり。事尋思所引の如實智とは、謂く如實に事相も亦不可得なりと知る智なり。自體假立尋思所引の如實智とは、謂く如實に實有自性は不可得なりと知る智なり。差別假立尋思所引の如實智とは、謂く如實に知實有の差別は不可得なりと知る智なり。

此の四如實智は、前に尋思する所の如く、名等を如實に皆不可得なりと了知す。

と作意等の緣を待つ、是くの如き等なり。

作用道理とは、謂く異相の諸法の各別の作用なり。

眼根等の如きは眼識等の所依の作用となり、色等の境界は眼識等の所緣の作用となり、眼等の諸の識は色等を了別し、金銀の匠等は善く、金銀業の物を修造する是くの如き比なり。

證成道理とは、謂く所應成の義を證成する爲めに諸量不相違の語を宣說するなり。

所應成の義とは、謂く自體差別の所攝の所應成の義なり。

法量不相違の語とは、謂く現量等の不相違の立宗等の言なり。

法爾道理とは、謂く無始時來、自相共相の所住の法中に於ける所有る成就法性の法爾なるなり。

火の能く燒き、水の能く爛すが如し是くの如き等は諸法の成就せるところにして法性法爾なり。

經に、眼は圓淨なりと雖も空にして常あること無し、乃至無我なりと言へるが如し。所以云何んとならば、其の性法爾なればなり。

復た次に諸法の中に於て正しく勤めて四の道理を觀察し已れり。云何んが而も尋思を起すべきや。

謂く、四種の尋思を起すなり。一には名尋思、二には事尋思、三には自體假立尋思、四には差別假立尋思なり。名尋思とは、謂く、諸法の名身と句身と文身との自相の皆實を感ぜざることを推求するなり。

名身等は是れ假有なるに由るが故に、彼の自相は皆實を成ぜずと觀ず。

事尋思とは、謂、諸法蘊界處の相は皆實を成ぜずと推求するなり。

諸の蘊等の名身等に宣說せらるる事の如きものは、皆實を成ぜざるに由り、是の故に彼の相は實を成ぜずと觀ず。推求とは是れ觀察の義なり。

自體假立尋思とは、謂く諸法の能詮と所詮との相應する中に於て、自體は唯だ是れ假にして言說を

善巧所緣とは、略すれば五種あり。謂く、蘊善巧と界善巧と處善巧と緣起善巧と處非處善巧となり。處非處善巧とは、應に云何が觀ずべきや。應に緣起善巧の如く觀ずべし。問ふ、緣起善巧と處非處善巧とは何の差別あるや。答ふ、諸法の流を以て諸法を潤し、無因と不平等因生を離れしむるが故に、是れ緣起善巧なり。

謂く、無明等の諸法の流を以て行等の諸法を潤すなり。彼の諸法は無因にして生ずるものには非ず、亦自在天等の不平等因生にも非ず。是くの如き觀智を緣起善巧と名づく。

因果相稱し、攝受生起するが故に、是れ處非處善巧なり。

謂く、唯だ有法を因と爲し、然も相稱の因を攝受するに由ると雖も、方に能く相稱の果を生起す。善行が可愛の異熟を感じ、惡行が不可愛の異熟を感ずるが如し。是くの如く比し、是くの如く觀ずる智をば、處非處善巧と名づく。

淨惑所緣とは、謂く下地の麁性と上地の靜性と眞如と及び四聖諦となり。

下地の麁性、上地の靜性とは、世間道に依り說く、此れに由りて諸の纏を制伏するが故なり。眞如と及び四聖諦とは、出世道に依りて說く、略するが故に眞如なり。廣くするが故に四聖諦なり。此れに由りて永く諸の隨眠を害するが故なり。

復た次に契經等の法を觀察することを辨じて、應に諸法の道理を解釋すべし。此の道理に依りて能く彼の法を觀ずるに由るが故なり。

問ふ、若し諸法に於て正勤し、審に觀察せんと欲せば、幾種の道理に由りて能く正しく觀察するや。答ふ、四種の道理に由るなり。謂く觀待道理と作用道理と證成道理と法爾道理となり。觀待道理とは、謂く諸行の生ずる時、要ず衆緣を待つなり。

芽の生ずる時、要ず種子と時節と水と田と等の緣を待つが如く、諸識の生ずる時、要ず根と境

は苦なり、乃至是れは道なりと了知す。或は行門を以て所知の境を了知す。謂く、一一の諦は、各々四行と及び一切法に差別有ること無きとに由りて、皆眞如行なり。或は諸法鄔柁南門を以て所知の境を了す。謂く、諸行無常、乃至涅槃寂靜なり。或は解脫門を以て所知の境を了す。謂く、空と無願と無相と是くの如き等なり。

所作成就所緣とは、謂く轉依なり。

已に轉依を得せる者には顚倒あること無し。所緣顯現するが故なり。

是くの如き轉依は不可思議なり。前に說ける如所有性中に十六行と及び三解脫門とあり。

是くの如き二種は更に互に相攝す。

問ふ、空は成行を攝するや。答ふ、二なり。

謂く、空行と無我行となり。

問ふ、無願は幾行を攝するや。答ふ、六なり。

謂く、無常行と苦行と因行と集行と生行と緣行となり。彼は三界に於て願求するところなきに由るが故なり。

問ふ、無相は幾行を攝するや。答ふ、八なり。

謂く、滅道の八行なり。彼は諸相を行ずること能はざるが故なり。

治行所緣とは、略して說かば五種あり。謂く、多貪の行者は不淨の境を緣じ、多瞋の行者は修慈の境を緣じ、多癡の行者は衆緣性諸緣起の境を緣じ、憍慢の行者は界差別の境を緣じ、尋思の行者は入出息念の境を緣ず。

何が故に多貪の行者等は不淨等を緣じて行所緣の境を修治するや。此れは能く增上の貪等を息除するに由るが故なり。

ふが故なり。復た此れより後時は習氣を所依止と爲す。後に串習する習氣の力の强きに由り、憶念を離るると雖も、而も彼れに似て顯現するが故なり。

何等か相應なるや。謂く、互に助伴と爲り所緣に於て行じ平等に解了す。

心心法が互に助伴と爲り、契經等の所緣の境界に於て、蘊等相應の義を以て行じて平等に解了なすに由るが故なり。

云何んが法に於ける所緣の差別なるや。若し略して說けば四種あり。謂く、遍滿所緣と治行所緣と善巧所緣と淨惑所緣となり。遍滿所緣に復た四種あり。謂く、有分別影像所緣と無分別影像所緣と事邊際所緣と所作成就所緣となり。

有分別影像所緣とは、謂く、勝解作意に由るあらゆる奢摩他毘鉢舍那の所緣の境なり。

勝解作意とは、一向に世間の作意なり。

無分別影像所緣とは、謂く、眞實作意に由るあらゆる止觀所緣の境なり。

眞實作意とは、一向に出世間及び此れが後所得の作意なり。

事邊際所緣とは、謂く、一切法の盡所有性と如所有性となり。盡所有性とは、謂く蘊と界と處となり。

所知の諸法の體事に唯だ爾所の分量邊際あることを顯はさんが爲めに是の故に蘊界處の三を建立す。

如所有性とは、謂く四聖諦と十六行眞如と一切行無常と一切行苦と一切法無我と涅槃寂靜と空と無願と無相となり。

是くの如き等の義差別門に由りて、所知の境を了するが故に、如所有性と名づく。或は諦門を以て所知の境を了す。謂く、即ち前に說けるところの諸の蘊界處なり。其の所應に隨ひて是れ

なり。問ふ、一々の法蘊其の量云何。答ふ、十百の數是れ法蘊の量なり。十百とは、千數の義なり。若し爾らば、何が故に直ちに是れ千數なりと說かざるや。一々の法蘊を建立するに、千數の因なることを顯はさんが爲めの故なり。所以何んとならば、初めの一數增して以て十數を成ず。十數復た增して以て百數千等の數量を成ず。因りて十百數方に成立することを得。謂く十百を千と名づけ、百千を百千と名づけ、百百千を俱胝と名づく。是くの如き等の一切の後後の數の位決定し、此の十百の二數の隨一を用つて因と爲す。是の故に此の中、唯だ總じて十百の兩數を取り、以用て一々の法蘊を建立す。此の數量總じて計するに八萬四千の法蘊なるに由り、八俱胝四十洛叉を成ず。

問ふ、是くの如き三藏所攝の法は誰の所行の境と爲すや。

答ふ、是れ聞思修し所生の諸の心心法所行の境行なり。

所行とは是れ所緣の義なり。

復た次に此の所緣と相ひ依る心心法に因りて有緣等の義を建立す。

經の中に說けるが如し、諸の心心法は、有緣と有行と有依と相應す。彼は此の法に於て何をか所緣と爲すや。謂く、契經等なり。

此れは名身・句身・文身所攝の契經等の敎法を、所緣の境と爲すことを顯はす。

何等をか行と作すや。謂く、蘊等と相應する義なり。

此れは蘊等の義に依りて起す所の言敎の法を顯はす。彼の心心法は此の行相を作す。

何らか所依止なるや。謂く、他の表了、憶念、習氣なり。

此れは正しく法を說くの時、他の表了を用つて所依止と爲すことを顯はす。說の如く他の言音從りなるが故なり。此れに次ぐ後時は憶念を所依止と爲す。所聞の如く已に念に隨つて數〻習

處處に諸法の差別、如實の相を廣釋するが故なり。

復た次に三種の學を開示せんと欲するが爲めの故に素怛纜藏を建立したまふ。

所以何んとならば、要ず此の藏に依りて所化の有情三學を解了するなり。此の藏の中に廣く三種所修の學を開くに由るが故に。

增上戒學と增上心學とを成立せんと欲するが爲めの故に毘奈耶藏を建立したまふ。

要ず此の藏に依りて二の增上學方に成立することを得るなり。所以何んとならば、廣く別解脫律儀の學道の聖敎を所依止と爲し、方に能く淨尸羅を修治することを釋するが故に。淨尸羅に依りて無悔等を生じて、漸次に修學し心定を得するが故に。

增上慧學を成立せんと欲するが爲めの故に阿毘達磨藏を建立したまふ。

要ず此の藏に依りて增上慧學方に成立することを得るなり。所以何んとならば、此の藏の中に、能く廣く諸法を簡擇する巧方便を開示するに由るが故に。

復た次に正法の義を開示せんと欲するが爲めの故に、素怛纜藏を建立したまふ。

此の藏に依止し、文義了し易きが故に。

法藏作證の安足處を顯はさんが爲めの故に毘奈耶藏を建立したまふ。

此の藏に依止して、能く二種の作證の學行を修するが故なり。毘奈耶は是れ法義作證安足の處なり。安足の處とは、是れ所依の義なり。

智者をして論議決擇し、法樂住を受用せしめんが爲めの故に、阿毘達磨藏を建立したまふ。

此の藏に依止する諸の智ある者、更に相ひ問答し、論議し、決擇して法樂を受けて住す。此の藏の中に、無量の門を以て諸法の自相共相等眞實の法性を開示するに由るが故なり。

是くの如きの三藏に具に八萬四千の法蘊あり、謂く聲聞乘に依りて、尊者阿難常に受持する所

論議とは、若しは是の處に於て顚倒あることなく、一切深隱の法相を解釋するなり。

　無顚倒の一切法相論議經等の深隱の義を以ての故に。

是くの如き契經等の十二分聖教は、三藏に攝めらる。何等をか三と爲すや。一には素怛纜藏、二には毘奈耶藏、三には阿毘達磨藏なり。此れに復た二あり、一には聲聞藏にして、二には菩薩藏なり。契經と應頌と記別と諷頌と自說との此の五は、聲聞藏中の素怛纜藏の攝なり。緣起と譬喩と本事と本生との此の四は、二藏中の毘奈耶藏幷びに眷屬に攝めらる。

　緣起とは、因緣ありて諸の學處を建立することを宣說す。是れ正しく毘奈耶藏に攝めらる。譬喩等の三は是れ彼の眷屬に攝めらる。

方廣と希法との此の二は、菩薩藏中の素怛纜藏に攝めらる。

　方廣は、文義廣博にして正しく菩薩藏の攝なり。希法は差別思ひ難く、廣大の威德ありて最勝と相應す。是の故に亦是れ菩薩藏の攝なり。

論議の一種は、聲聞と菩薩との二藏の中の阿毘達磨藏の攝なり。

問ふ、何が故に如來は三藏を建立したまへるや。

答ふ、[二]疑の隨煩惱を對治せんと欲するが爲めの故に素怛纜藏を建立したまふ。

　所化の有情の、種種の法に於て疑惑を發起することを斷除せんと欲するが爲めに、契經、應頌等を宣說するが故なり。

二邊の隨煩惱を對治し受用せんと欲する爲めの故に毘奈耶藏を建立したまふ。

　二邊とは、謂く、欲樂行邊と自苦行邊となり。對治受用とは、彼れが畜積等を受用することを遮せんが故に、彼が百千の如法の衣服等を受用することを開かんが故なり。

自の見を以て取執する隨煩惱を對治せんと欲するが爲めの故に阿毘達磨藏を建立したまふ。

【二】疑煩惱は唯識學上一般に貪、瞋、癡、慢、惡見と共に根本煩惱に攝せらるるなり。然るに『雜集論』に於ては根本煩惱のことを又隨煩惱と云ふ釋例あり。『論』卷七の初めを往見すべし。但し此の場合、隨煩惱と云ふは、一般に根本煩惱の等流なるもの、即ち根本煩惱に隨從せるものなるが故に隨煩惱と稱するのとは大いに異なる意味あり『雜集論』に根本煩惱のことを隨煩惱と云ふは、此の煩惱が心を隨惱して染より離れしめず、解脫をせしめず、障を斷ぜしめざるによるが故に隨煩惱と稱せるものなり。今此處に疑を隨煩惱と稱せるは、一見唯識學上奇異に感ぜらるるも、根本煩惱に對する隨煩惱ならざるを知ればよし。

謂く、是くの如き因緣に依り、是くの如き事に依り、乃至、廣說するなり。

譬喩とは、謂く諸經中にある比說の況なり。

　本義をして明了を得せしめんが爲めの故に諸の譬喩を說く。

本事とは、所謂る聖弟子等の前世の相應の事を宣說するなり。

本生とは、所謂る諸の菩薩行の本相應の事を宣說するなり。

方廣とは、謂く菩薩藏相應の言說なり。方廣と名づくる如く、亦廣破とも名づけ、亦無比とも名づく。何の義の爲めの故に、名づけて方廣と爲すや。一切有情の利益安樂の所依處なるが故に。廣大甚深の法を宣說するが故なり。何の義の爲めの故に名づけて廣破と爲すや。能く廣く一切の障を破するを以ての故なり。何の義の爲めの故に名づけて無比と爲すや。諸法の能く比類するものあることなきが故なり。

　此の方廣等は、皆是れ大乘の義の差別の故に。七種の大の性と相應するに由るが故に大乘と名づく。何等をか名づけて七種の大の性となすや。一には境大性なり。菩薩道を以て百千等無量の諸經を緣じ、廣大の敎法を境界と爲すが故に。二には行大性なり。正しく一切の自利利他廣大の行を行ずるが故に。三には智大性なり。廣大の補特伽羅法無我を了知するが故に。四には精進大性なり。三大劫阿僧企耶に於て方便勤修し、無量百千の難行を行ずるが故に。五には方便善巧大性なり。生死及び涅槃に住せざるが故に。六には證得大性なり。如來の諸の力無畏不共佛法等の無量無數の大功德を證得するが故に。七には業大性なり。生死の際を窮め、一切の

　成菩提等を示現し、廣大なる諸佛の事を建立するが故に。

希法とは、若しは是の處に於て聲聞。諸の大菩薩及び如來等の最極希有にして甚だ奇特の法を宣說するなり。

た猛利に、漸くにして能く諸法の實性に通達せしむるなり。

三寶の所に於て淨信を得證するとは、聖教の妙善なる建立を悟るに由り、說者等に於て淨信生ずるが故なり。

第一の現法樂住を觸證するとは、諸の如來の密意の深義に於て猛利に加行し、正しく思量と已り、增上を獲得し歡喜を證するが故なり。

談論決擇して智者の心を悅ばすとは、善く能く深隱の義を開發するが故なり。

聰明英叡なる者の數に預るを得とは、廣大の美稱十方に流布するが故なり。

當に知るべし後の二種を合して一勝利となす。

應頌とは、即ち諸經の中或は中、ごろ或は後に、頌を以て重ねて頌し、又不了義の經は、更に頌を以て釋すべし。故に應頌と名づく。

記別とは、謂く是の處に於て、聖弟子等が、過去に謝往する得失の生處の差別を記別するなり。又了義經を說いて記別と名づく。深密の意を記別し開示するが故なり。

諷頌とは、謂く諸經の中に句を以て宣說するなり。或は二句を以てし、或は三、或は四、或は五、或は六を以てす。

自說とは、謂く諸經の中、或る時に如來悅意を以て自ら說くなり。

伽他に、若し是くの如き法に於て、勇猛精進を發し、諍慮し靜に思惟すべし、爾の時に梵志と名づくと白へるが如し。

緣起とは、謂く請に因りて說くなり。

是くの如き補特伽羅に隨依して是くの如き說を起すが故に。

又、因緣あり學處を制立するをも亦緣起と名づく。

卷の第十一

決擇分中法品、第二之一

云何んが法の決擇なるや。法とは、謂く十二分聖敎なり。[一] 何らか十二なるや、一には契經、二には應頌、三には記別、四には諷頌、五には自說、六には緣起、七には譬喩、八には本事、九には本生、十には方廣、十一には希法、十二には論議なり。

契經とは、謂く長行を以つて綴緝し、略して所應の說義を說くなり。

問ふ、何が故に如來は、所應の說義を廣く開演したまはざるや。

答ふ、如來は十種の勝利を觀察して諸法を略說したまふ。謂く、建立すべき易く、宣說すべき易く、受持すべき易く、法を恭敬するが故に、菩提の資糧速に圓滿を得し、速に能く諸法の實性に通達し、諸佛の所に於て淨信を得證し、法と僧との所に於て淨信を得證し、第一現法樂住を觸證し、談論決擇して智者の心を悅ばし聰明英叡の者の數に預るを得るなり。

云何んが名づけて建立すべき易しと爲すや。諸の說法者は、無量の門を以て所應の說義を安立開示す。今略言を以てするは、建立し易きが故なり。

云何んが名づけて宣說すべき易しと爲すや。能く少言詞を以て廣大の義を顯はすが故なり。說の如く能く心をして等住に住建せしめんとて、是くの如く廣說す。

受持すべき易しとは、能聞者をして受持し易からしむるが故なり。

法を恭敬するが故に菩提の資糧をして速に圓滿を得せしむとは、佛法は深慧の所證なりと了知すれば、卽ち是の法に於て深く敬愛を生ず。敬愛門に由りて信等の資糧速に圓滿するが故なり。

速に能く諸法の實性を通達するとは、卽ち敬法の方便力に由るが故に、其の智慧をして轉た復

【一】義林章二本に十二分章あり、又瑜伽論二十五、八十一、顯揚論六、法華玄贊四等、或は舊譯家の釋ならば智度論三十七、大乘義章一、嘉詳の法華義疏四下等を併せ見るべし。義林章には、一に列名、二に辯相、三に釋總別名、四に通別、五に廢立、六に諸藏相攝、七に問答分別の七門を以て詳釋せり。

何が故に道相と名づくるや。此れに因りて眞實義を尋求するが故なり。

所以何んとならば、此の聖道は諸の聖者が眞の義を證する路なるに由り、是の故に道と名づく。

何が故に如相と名づくるや。能く諸の煩惱を對治するを以て故なり。

所以何んとならば、一切の煩惱は皆理の如くならず、道能く此れを除く、是の故に如と名づく。

何が故に行相と名づくるや。善能く心を成辦して顚倒せしめざるが故なり。

所以何んとならば、心に眞實の道理を覺悟せず、無常等の法に於て常等の顚倒を起す。善能く此の顚倒の心を修治し、顚倒を離れて眞實義を覺せしむ、是の故に行と名づく。

何が故に出相と名づくるや。眞常の迹に趣くが故なり。

所以何んとならば、此の聖道に由りて能く出離究竟の常迹に趣く、此の故に出と名づく。

問ふ、諸諦中に於て十六行あり。皆世間及び出世間に通ず。世と出世との行に何の差別あるや。

答ふ、所知の境に於て善く悟入せざると善く悟入するとの性の差別の故に。有障と無障との性の差別の故に。有分別無分別との性の差別の故なり。所以何んとならば、諸諦中に於ける無常・苦等の十六世間行は、所知の境界に於て眞如の性に通達せざるが故に、煩惱に隨眠せらるるが故に、名言の門に依り戲論を起すが故なり。

其の次第の如く善く悟入せざると有障礙と有分別となり。出世間の行は此れと相違して善く悟入と無障礙と無分別となり。此の道理に由り、世と出世との行に互に差別あり。

云何んが出世行は分別あること無く、而も善く所知の境界に悟入するや。彼の諸行現在前する時、復た現に無常の義を證見すと雖も、然も名言戲論門に依りて、此れは是れ無常の義なりと見ざるに由りてなり、無常行の無常の義に於けるが如く、餘の行が餘の義に於けるも、其の所應に隨ひて亦是くの如し。[10]

【一〇】以上を以て決擇分中の道諦品畢る。

を離るるが故に、名づけて轉依と爲す。即ち是れ眞如轉依の義なり。

道轉依とは、謂く、昔し世間道の現觀の時に於て、轉じて出世を成ずるを說いて有學と名づく。餘に所作あるが故なり。若し永く一切の所治を除き永く三界の欲を離るる時、此の道の自體の竟圓滿するを、立てて轉依と爲す。麁重轉依とは、謂く阿賴耶識が一切の煩惱隨眠を永く究遠離するが故に名づけて轉依と爲す。

盡智とは、謂く因盡くるに由りて得る所の智なり。或は盡を緣じて境と爲す。

所以何んとならば、盡ること有るに由るが故に、而も此の智を起すを名づけて盡知となす。或は盡を緣じて境と爲すが故に盡智と名づく。此の義意に言く、此の位の中に於て永く集を斷ずるに由りて、有餘なからしめて得たる所の智を盡智と名づく。或は因の盡くるを緣じて境と爲すが故に、盡智と名づく。

無生智とは、謂く果斷に由りて得る所の智なり。或は果の不生を緣じて境と爲す。

所以何んとならば、無生有るに由るが故に所得の智を無生智と名づく。或は無生を緣じて境と爲すを無生智と名づく。此の義意に言く、當來の一切の苦果畢竟して生ぜず、法性有るに由るが故に、而も此の智を得す。餘の諦を緣じて境と爲すと雖も、亦無生智と名づく。或は苦諦の無生を緣じて諦と爲すが故に無生智と名づく。

又、十無學法は、當に知るべし無學の戒蘊と定蘊と慧蘊と解脫蘊と解脫智見蘊とに依止すると說く。

何を以つての故に、無學の正語と正業と正命とは是れ無學の戒蘊なり。無學の正念と正定とは是れ無學の定蘊なり。無學の正見と正思惟と正精進とは是れ無學の慧蘊なり。無學の正解脫は是れ無學の解脫蘊なり。無學の正智は是れ無學解脫智見蘊なり。

た次に道諦に四の行相有り。謂、道相と如相と行相と出相となり。

說の如く、是くの如く行ずれば心解脫圓滿し、慧解脫圓滿し、身の麁重永く息む。念を成就するを因と爲すに由るが故に、最初の門に於て善く調ひ、善く護り、善く防ぎ、善く覆ひ、極めて善く修治す。謂く眼の所識の色に於てし、乃至意の所識の法に於けるも亦爾なり。
繫得とは、謂く麁重の積集に於て繫得の性を假立するなり。
離繫得とは、謂く麁重の離散に於て離繫得の性を假立するなり。
金剛喩定とは、謂く修道の最後の斷結道の位に居る所有の三摩地なり。
　此れに復た略して二種あり。謂く、
方便道に攝すると無間道に攝するとなり。
方便道に攝するとは、謂く此れ從り已去は一切の障の爲めに礙げられずして、而も能く一切の障を破するなり。
無間道に攝するとは、謂く此れ從り無間に盡智と無生智とを生ずるなり。又此の三摩地は無間堅固にして一味遍滿す。
　云何んが此の金剛喩定を無間と名づくるや。謂く、此れ相續して流れ、世間の行の間缺する所に非ざるが故なり。堅固とは、一切障の壞する所に非ずして、能く一切障を壞する極めて堅猛なるが故なり。一味とは、無分別性にして純一味なるが故なり。遍滿とは、一切の所知の法の共相眞如を緣じて境と爲すが故なり。
此の義を顯はさんが爲めに、薄伽梵は說きたまへり。大石山の無缺・無隙・無穴の一段の、極めて善く圓滿にして十方の猛風も動轉せざる所の如し、無間の轉依とは、謂く已に無學道を證得せる者の所有の三種の轉依なり。何等をか三と爲すや。謂く心轉依と道轉依と麁重轉依となり。
　心轉依とは、謂く已に無學道を得し、法性心の自性淸淨なるを證得し、永く一切の客塵隨煩惱

業の麁重とは、謂く有漏業の習氣なり
異熟の麁重とは、謂く異熟無堪能の性なり。
煩惱障の麁重とは、謂く猛利にして長時の煩惱性なり。
業障の麁重とは、謂く能く道を障ふる無間等の業障の性なり。
異熟障の麁重とは、謂く諦現觀と相違し地獄等の自體を得するなり。
蓋の麁重とは、謂く能く善品の方便を障礙し、貪欲等の性を盛んにするなり。
尋思の麁重とは、謂く出家を欣樂するを障礙する欲にして尋思等の性なり。
飮食の麁重とは、謂く極多少の食にして方便行に於て堪任なきの性なり。
交會の麁重とは、謂く兩兩形交り身心疲損の性なり。
夢の麁重とは、謂く睡眠に發せらるる身惛劣の性なり。
病の麁重とは、謂く諸界の互違より發せらるる不安隱の性なり。
老の麁重とは、謂く大種の衰變より起さるる不隨轉の性なり。
死の麁重とは、謂く命終の時に臨み諸根の亂する性なり。
勞倦の麁重とは、謂く遠行等のとき所作の支體の頓に弊するの性なり。
堅固の麁重とは、謂く無涅槃法の者の其の所應の如き所有の戲論の麁重等の性なり。
麁と中と細との麁重とは、謂く欲と色と無色との所有の麁重にして、其の次第の如し。
煩惱障の麁重とは、謂く聲聞と獨覺との菩提の所治なり。
定障の麁重とは、謂く九次第定所發の功德の所治なり。
所知障の麁重とは、謂く一切智性の所治なり。是くの如く其の所應に隨ひ、一切の麁重永く已に息むが故に究竟道と名づく。

初静慮地に依りて欲界の善を修する如く、是くの如く一切の上地に依りて修道を現ずる時、皆能く下界下地所有の善根を修習し、彼に於て自在を得するが故なり。

當に知るべし、此の中に說く所の義とは、謂く上地に依止して現前に道を修習する時、下界下地所有の善根は現前せずと雖も亦皆修習するなり。何を以つての故に、彼に於て自在を得するが故なり。自在とは、謂く轉た增勝し現行すること自在なるが故なり。

究竟道とは、謂く金剛喩定に依り一切の麁重永く已に、息むが故に一切の繫永く以て斷ずることを得るが故に、永く一切の離繫得を證するが故に。此れより次第し、無間に轉依して盡智及び無生智・十無學法等を證得するなり。何等か十と爲す、所謂る無學の正見と、乃至無學の正定と無學の正解脫と無學の正智とにして、是くの如き等の法を究竟道と名づく。

云何んが一切の麁重と名づくるや。略して說くに、二十四種あり。謂く一切遍行戲論の麁重と領受の麁重と煩惱の麁重と業の麁重と異熟の麁重と煩惱障の麁重と業障の麁重と異熟障の麁重と蓋の麁重と尋思の麁重と飲食の麁重と交會の麁重と夢の麁重と病の麁重と老の麁重と死の麁重と勞倦の麁重と堅固の麁重と麁の麁重と中の麁重と細の麁重と煩惱障の麁重と定障の麁重と所知障の麁重となり。

是くの如き二十四種を以て略して一切の麁重を攝す。

一切遍行戲論の麁重とは、謂く眼等の諸法を執ずる習氣なり。無始時來阿賴耶識に依附し相續して斷ぜず。即ち此れを名づけて戲論の習氣と爲す。此の習氣より眼等の諸法及び名言の執は數數生起す。

領受の麁重とは、謂く有漏の諸受の習氣なり。

煩惱の麁重とは、謂く煩惱隨眠なり。

（ト）道諦中、第七に究竟道を明す。

し、乃至周審に觀察す。第二は此れと相違す。第三は二俱に未だ得ずして雙進し修習す。云何んが修習なるや。謂く、法を聽聞し、受持門に由り、進んで正觀を修し此れを以つて先と爲し、進んで止を修む。第四は已に二種を得して相應俱轉す。

三根とは、謂く未知欲知根と已知根と具知根となり。未知欲知根とは、謂く方便道に於ける、及び見道に於ける十五心刹那中のあらゆる諸根なり。

此の中に、順決擇分に攝する所の方便道と、及び見道の十五刹那の所有る諸根とを顯示す。是れ未知欲知根の體なり。諸根と言ふは、謂く意根と信等の五根となり。未至等の地の所依の差別に由るが故に、其の所應の如く樂・喜・憂・捨の根の隨一にあり。憂根とは、謂く方便道の時、順決擇分の後、上の解脱に於ける希求と欲證と愁慼との所攝にして、是くの如き十根は、先に未だ眞を知らずして、知るを得んと欲するが爲めに修習して轉ずるが故に、未知欲知根と名づく。

已知根とは、第十六見道心の刹那從り已上、一切有學道中に於ける所有の諸根なり。

是れ已知根の體なり。所以何んとならば、卽ち前の十根の第十六見道心の刹那より乃ち金剛喩定に至る是くの如き有學道中に於て、知るべき所の境あらず、曾つて知らざる所〔なきが〕故に已知根と名づく。

具知根とは、謂く無學道に於ける所有る諸根なり。

諸根と言ふは、卽ち前に說く所の九根にして、憂根を除く。無學道中に於けるを說いて具知根と名づく。具知とは、謂く阿羅漢等の此に有する所の根を具知根と名づく。無學身中には憂根あること無し。學すべき所なきが故なり。

復た次に、修道に依止して修の義を分別すべし。謂く、

初靜慮地に依りて修道を現ずる時、亦欲界繫所有の善根を修し、彼に於て自在を得するが故なり。

らしむるが故なり。

一趣に專注すとは、精勤加行して間なく缺なくして相續し、勝三摩地に安住するが故なり。

平等に攝持すとは、善く修習するが故に加行遠離の功用に由らずして定心相續し、散亂を離れて轉ずるが故なり。

毘鉢舍那とは、謂く諸法を簡擇すると、最極の簡擇と、普遍の尋思と、周審の觀察となり。麁重の相結を對治せんと欲する爲めの故に、諸の顚倒を制伏せんと欲する爲めの故に、無倒の心をして善に安住せしめんが故なり。

此の中の諸句は、正行の所緣の境に依りて說けり。或は善巧の所緣の境に依りて說けり。或は淨煩惱所緣の境に依りて說けり。

諸法を簡擇するとは、所有を盡すが故なり。

最極の簡擇とは、所有の如くなるが故なり。

普遍の尋思とは、有分別作意の俱行する慧に由りて諸法の相を建立するが故なり。

周審の觀察とは、委しく具に推求するが故なり。

又奢摩他毘鉢舍那に依りて四種の道を立つ。或は一類有り、已に奢摩他を得して毘鉢舍那には非ず。此の類は奢摩他に依りて毘鉢舍那を進修す。或は一類有り、已に毘鉢舍那を得して奢摩他には非ず。此の類は毘鉢舍那に依りて奢摩他に進修す。或は一類有り、奢摩他を得せず亦毘鉢舍那にも非ず。此の類は專心に沈掉を制伏して二道を雙修す。或は一類有り、已に奢摩他及び毘鉢舍那を得す。此の類は奢摩他と毘鉢舍那との二道和合し平等に雙轉す。

此の中、止觀に依りて四種の道を說けり。初には已に止を得するが故に宴坐して心を住せしめ、乃至平等に攝持す。未だ觀を得せざるが故に、還つて復た宴坐し、三摩地に依りて諸法を簡擇

む。

貪恚門に因りて學處を毀犯せざるが故に。

正念は能く增上心學をして清淨ならしむ。

所緣に於て忘失あることなく、持心を定めしむるに由るが故に。

正定は能く增上慧學をして清淨ならしむ。

定心に由る者は、能く如實通知なるが故に。

奢摩他とは、謂く內に於て心を攝し、令住し、等住し、安住し、近住し、調順し、寂靜し、最極寂靜し、一趣に專注し、平等に攝持せしむるなり。

是くの如き九行の心をして安住せしむるを是れを奢摩他といふ。

令住とは、外の攀緣を攝し、內の散亂を離るゝ最初の繫心なるが故なり。

等住とは、最初に麁動の心を繫縛し已り、卽ち所緣に於て相續繫念し、微細に漸く略するが故なり。

安住とは、或る時には失念して外に於て馳散すれども、尋で復た斂攝するが故なり。

近住とは、初め從りこのかた、其の心をして外に於て散ぜざらしめんが爲めに親近念住するが故なり。

調順とは、先よりこのかた散亂の因たる色等の法の中に於て過患の想を起し、增上力の故に其の心を調伏して流散せざらしむるが故なり。

寂靜とは、擾動心・散亂・惡覺の隨煩惱中に於て深く過患を見、其の心を攝伏し、流散せざらしむるが故なり。

最極寂靜とは、或る時には失念し散亂するも、覺等率爾に現行して卽便ち制伏して更に起らさ

由り見に淸淨あることを了知す、正業に由るが故に往來進止正行具足し、此れに由り戒に淸淨あることを了知す。正命に由るが故に如法に佛の聽許し給へる衣鉢資具を乞求し、此れに由り命に淸淨あることを了知す。

正精進とは、是れ淨煩惱障支なり。

此れに由り、永く一切の結を斷ずるが故に。

正念とは、是れ淨隨煩惱障支なり。

此れに由り、正しき止擧の相等を忘失せず、永く沈掉等の隨煩惱を容受せざるが故に。

正定とは、是れ能淨最勝功德障支なり。

此れに由り、神通等の無量の勝功德を引發するが故に。

道支の助伴とは、謂く彼と相應する心心法等なり。道支の修習とは、覺支に說けるが如し。

謂く遠離に依止し、無欲に依止し、寂滅に依止し、棄捨を迴向して正見を修習し、乃至廣說す。

是くの如き諸句の義は、前所說の道理の如く應に隨つて順知すべし。

四正行とは、謂く苦遲通行と苦速通行と樂遲通行と樂速通行となり。初めは鈍根にして未だ根本靜慮を得せざるを謂ふ。第二は利根にして、未だ根本靜慮を得せざるを謂ふ。第三は鈍根にして、已に根本靜慮を得せるを謂ふ。第四は利根にして、已に根本靜慮を得せるを謂ふ。

苦正行とは、謂く未至及び無邊地に依りて、其の次第の如く奢摩他毘鉢舍那微劣なるが故なり。

樂正行とは、謂く靜慮に依りて雙道轉ずるが故なり。

遲通法とは、謂く鈍根の苦樂二地に依るなり。

速通とは、謂く利根の苦樂二地に依るなり。

四法迹では、謂く無貪と無瞋と正念と正定となり。無貪と無瞋とは能く增上戒學をして淸淨ならし

所以何んとならば、若し苦體を緣じて惱苦を爲す時、苦の境界に於て必ず遠離を求むるが故に、依止遠離と名づく。若し愛相の苦集を緣じて苦集と爲すの時、此の境界に於て必ず離欲を求むるが故に、依止離欲と名づく。若し苦滅を緣じて苦滅と爲すの時、此の境界に於て必ず作證を求むるが故に、依止寂滅と名づく。棄捨とは、謂く苦滅に趣く行なり。此の勢力に由り苦を棄捨するが故に、是の故に若し此の境を緣ずるとき、此の境界に於て必ず修習を求むるが故に、迴向棄捨と名づく。

覺支の修果とは謂く見道所斷の煩惱の永斷なり。

七覺支は是れ見道の自體なるに由るが故に。

八聖道支の所緣の境とは、謂く卽ち此れより後時の四聖諦の如實の性なり。

見道の後の所緣の境界は、卽ち先の所見の諸諦の如實性を體と爲すに由るが故に。

道支の自體とは、謂く正見と正思惟と正語と正業と正命と正精進と正念と正定となり。

是くの如きの八法は道支の自體なり。

正見とは是れ分別支なり、

先の所證の如く、眞實の簡擇なるが故に。

正思惟とは是れ他を誨示する支なり。

其の所證の如く、方便安立して語言を發するが故に。

正語と正業と正命とは、是れ他をして信ぜしむる支なり。

其の次第の如く、他をして證理者に於て決定して信あらしむるなり。

見と戒と正命との清淨性の故に。

所以何んとならば、正語に由るが故に自の所證に隨ひ、善く能く問答し、論議決擇す。此れに

七覺支所緣の境とは、謂く四聖諦如實の性なり。

如實の性とは、即ち是れ勝義なり。清淨の所緣なるが故に。

覺支の自體とは、謂く念と擇法と精進と喜と安と定と捨となり。

是くの如きの七法是れ覺支の自體なり。

念とは是れ所依支なり。

繋念に由るが故に諸の善法をして皆忘失せざらしむ。

擇法とは是れ自體支なり。

是れ覺の自相なるが故に。

精進とは是れ出離支なり。

此の勢力に由り、能く所倒に到るが故に。

喜とは是れ利益支なり。

此の勢力に由り、身調適するが故に。

安と定と捨とは、是れ不染汚支なり。此の不染汚に由るが故に、此の不染汚に依るが故に、體是れ不染汚なるが故に。

其の次第の如く、安に由るが故に不染汚なり、此れに由り能く麁重の過を除くが故に。定に依るが故に不染汚なり、定に依止して轉依を得するが故に。捨は是れ不染汚の體なり、永く貪憂を除き不染汚位を自性となすが故に。

覺支の助伴とは、謂く彼と相應する心心法等なり。覺支の修習とは、謂く遠離に依止し、無欲に依止し、寂滅に依止し、棄捨を迴向して念の覺支を修す。念の覺支の如く、乃至、捨の覺支も亦爾なり。是くの如きの四句は、其の次第に隨ひて四諦の境を緣じ、覺支を修習することを顯示す。

神足の修果とは、謂く已に善く三摩地を修治するが故に、所欲に隨ひて通達する所の法を證し卽ち能く心に隨ひて通達し變現するなり。又別別の處所の法中に於て、堪能自在の作用を證得し、願樂する所の如く能く種種の神通等の事を辨じ、又能く勝品の功德を引發す。

五根の所緣の境とは、謂く四聖諦なり。

　諦現觀の方便所攝に由つて此の行を作すが故に。

五根の自體とは、謂く信と精進と念と定と慧となり。

五根の助伴とは、謂く彼と相應する心心法等なり。

五根の修習とは、謂く信根は諸諦に於て忍可を起し修習を行ずるなり。精進根は諸諦に於て忍可を生じ、已に覺悟を爲すが故に精進を起し修習を行ず。

念根は諸諦に於て精進を發し已り、不忘失を起して修習を行ず。定根は諸諦に於て旣に繫念し已り心一境性を起して修習を行ず。慧根は諸諦に於て心旣に定を得し、簡擇を起し、修習を行ず。

五根の修果とは、謂く能く速に諦現觀を發するなり。

　此の增上力に由り、久しからずして能く見道を生ずるが故に。

又能く煖と頂とを修治し、忍と世第一法とを引發す。

　卽ち此の身を現じ已り順決擇分の位に入るが故なり。

五根の如く五力も亦爾なり。差別とは此れに由りて能く所對治の障を損減し、屈伏すべからざるが故に名づけて力と爲す。

　謂く、五力の所緣の境等と根とは相似す。然るに果には差別あり。所以何んとならば、說の如く、果とは謂く能く不信等の障を損減するが故に、前に勝過し、五根所緣の境界自體等と相似すと雖も、然も屈伏すべからず。義に差別あるが故に力分を立つ。

らば、欲求に由るが故に此の義を得んが爲めに勤精進を發す。是くの如き欲求は、有體等を信受するを離れざるが故なり。

攝受とは、謂く安なり。此の輕安に由りて身心を攝益するが故に。

繼屬とは、謂く正念と正知となり。所緣を忘れずして心を一境に安んずるに由るが故なり。若し放逸の生ずることあるも、如實に了知するが故なり。其の次第に隨ふ。

對治とは、謂く思と捨となり。策心と持心との二の加行力は已に生ぜる沈と掉とを能く遠離するが故に、又能く隨煩惱を離れ止等の相を引發するが故なり。

復た次に欲・勤・心・觀の修に二種あり。謂く并に因緣聚散の遠離修と不劣不散の彼の二の所依の隨順修となり。

此の中欲等が能く聚教及び因緣等の二種の修の義を顯示す。

聚因緣とは、謂く毘鉢舍那の故に懈怠門に由りて生ぜらるゝ沈沒を遠離するなり。

散因緣とは、謂く不淨想の故に掉動門に由りて生ぜらるゝ高擧を遠離するなり。

聚とは、謂く惛沈睡眠門に由り、內に於て跼踖するなり。

散とは、謂く隨順淨妙相門に由り外に於て馳散するなり。

不劣隨順修とは、謂く觀察相に依り諸法を觀察するなり。

不散隨順修とは、謂く不淨想に依りて髮毛等の事を觀察するなり。

彼の二の所依の隨順修とは、謂く光明想を修するなり。是くの如き次第に依り、薄伽梵の說かく、我が欲樂には下劣あることなく、亦高擧もなし。內に於て聚らず外に於て散せず。前後の想と及び上下の想とありて其の心を開發し、纏縛を遠離して光明と倶にあり。自らその心を修め當に我が心をして諸の闇蔽無らしむべし。

勤とは、謂く常に精進して時に暫間なきをいふ。

心三摩地とは、謂く先に定力を修したるに由りて、心一境性に觸るるなり。所以何んとならば、前生に於て數々定力を修したるに由り、彼の種子功能をして增長せしむ。〔此の增長の〕種子力に由り、心をして任運に三摩地に於て隨順轉變せしめ、此れに由りて速に心一境性を證す。

觀三摩地とは、謂く他の教法を聞き、內に自ら簡擇するに由りて心一境性に觸るるなり。

又欲三摩地とは、謂く欲を生ずるに由り心一境性に觸るるなり。

勤三摩地とは、謂く策勵に由りて正勤を發起し、心一境性に觸るるなり。

心三摩地とは、謂く持心に由り心一境性に觸るるなり。

觀三摩地とは、謂く策心に由り、心一境性に觸るるなり。

神足を發生する因の性を顯はさんが爲めの故に、正斷中の生欲策勵等の諸句を引修して、心を持し心を策す。是れは此の次第なり。

心三摩地とは、持心に由るが故に定を得て心を持し、內に於て寂靜略攝すれば速に定を證するが故なり。

觀三摩地とは、策心に由るが故に定を得、法觀門に依り其の心を策練し速に定を得するが故なり。

神足の修習とは、謂く數々八種の斷行を修習するなり。何等をか八と爲すや。謂く、欲と精進と信と安と正念と正知と思と捨となり。是くの如きの八種を略攝して四と爲す。謂く、加行と攝受と繫屬と對治となり。

加行とは、謂く欲と精進と信となり、欲は精進の依と爲り、信は欲の因と爲る。所以何んとな

く。

沈沒と掉擧とを損減せんと欲する爲めの故に正勤を發起す。

所以何んとならば、若し沈沒の隨煩惱の生ずる時、彼を損減せんが爲めの故に淨妙等の作意を以て其の心を策練す。若し掉擧の隨煩惱の生ずるとき、卽ち內の諸の略攝門を以て其の心を制持す、爾の時に名づけて正勤を發起すと爲す。卽ち此の沈と掉とを損減する善巧方便を顯はさんが爲めの故なり。

次に說いて策心と持心とを言ふ。

正斷の修果とは、謂く盡く一切の所治を棄捨し、能對治に於て若しは得し若しは增す。是れを修果と名づく。

初と〔第〕二との正斷は、盡く一切の所治を捨し、其の所應の如く、一切の已生と未生との惡不善の法を斷捨するが故なり。第三の正斷は能對治を得し、能く未生の諸の善法を生ずるが故なり、第四の正斷は、能對治を增し、已生の善法をして增廣ならしむるが故なり。

四神足の所緣の境とは、謂く已に成滿せる定の所作の事なり。

此れ復た云何ん。已に三摩地力を成滿せるに由りて種種神變等の事を發起す。是れ所緣の境なり。

神足の自體とは謂く三摩地なり。

神足の助伴とは、謂く欲・勤・心・觀と、及び彼と相應する心心法等なり。欲三摩地とは、謂く殷重の方便に由りて心一境性を證するなり。

殷重の方便とは、謂く猛利の樂欲と猛利の恭敬との方便に由りて三摩地を得するをいふ。

勤三摩地とは、謂く無間の方便に由りて心一境性に觸るるなり。

察するが故なり。又此の四種其の次第の如く四諦に趣入するを亦修果と名づく。身念住に由りて苦諦に趣入す。所有の色身は皆行苦の相麁重の所顯なるが故に、是の故に觀行を修する時、能く此れを治輕安は身に於て差別して生ずるが故なり。受念住に由りて集諦に趣入す、樂等の諸受は是れ和合、愛等の所依處なるを以ての故なり。心念住に由りて滅諦に趣入す。我を離れたる識を觀ずるに、當に所有なかるべし、我斷門を懼れ涅槃に怖を生ずることを永く遠離するが故なり。法念住に由りて道諦に趣入す。所治の法を斷ぜんが爲め、能治の法を修せんが爲めの故なり。又此の四種は其の次第の如く、能く身受心法の離繋果を證得す。此の修習に由り、漸く能く身等の麁重を遠離するが故なり。

四正斷の所緣の境とは謂く已生と未生と所治と能治との法なり。

初の正斷は、已生所治の法を緣じて境と爲す、已生の惡不善法を斷ぜんが爲めの樂欲生ずるが故なり。第二の正斷は未生の所治の法を緣じて境と爲す。第三の正斷は未生の能治の法を緣じて境と爲す。第四の正斷は、已生の能治の法を緣じて境と爲す。經に說ける所の如く、應に廣く配釋すべし。

正斷の自體とは謂く精進なり。

正斷の助伴とは、謂く彼と相應する心、心法等なり。

正斷の修習とは、謂く、經に說けるが如く欲を生じて策勵し正勤を發起して心を策し心を持するなり。此の中の諸句は、正勤を修すると及び所依止とを顯す。所依止とは、謂く欲なり。

樂欲を先と爲して精進を發するが故なり。

正勤とは、謂く策勵等なり。止と擧と捨との相作意等の中に於てす。

若し止等の相の作意に由りて所緣の境を顧戀せず、純に對治を修習する、爾の時に策勵と名づ

欲修習とは、謂く不作意の隨煩惱を對治せんが爲めなり。
勤修習とは、謂く懈怠の隨煩惱を對治せんが爲めなり。
策修習とは、謂く沈と掉との隨煩惱を對治せんが爲めなり。
勵修習とは、謂く心下劣性の隨煩惱を對治せんが爲めなり。
　心下劣性とは、謂く勝品所證の功德に於て自輕蔑門に由り、心に怯弱性を生ずるをいふ。
勇猛修習とは、謂く疎漏疲倦の隨煩惱を對治せんが爲めなり。
　疎漏疲倦とは、謂く能く蚊虻等の處より生ずる所の逼惱を引くをいふ。
不息修習とは、謂く少善法を得して知足の喜を生ずる隨煩惱を對治せんが爲めなり。
　少善を得して知足の喜を生ずるに由るが故に所餘の勝進の善品を止息す。
正念修習とは、謂く尊敎を忘失する隨煩惱を對治せんが爲めなり。
正知修習とは、謂く毀犯追悔の隨煩惱を對治せんが爲めなり。
　毀犯追悔とは、謂く往來等の事に於て不正知にして行ずれば、先に學處を越え後に悔惱を生ずるなり。
不放逸修習とは、謂く諸の善軛を捨する隨煩惱を對治せんが爲めなり。
　善軛を捨するとは、放逸の過失に由るが故に、造修する所の勝進の善品に於て勤方便を捨して究竟すること能はず。
念住修果とは、謂く四顚倒を斷じ四諦に趣入する身等の離繫なり。
　是れを修果斷と名づく。四顚倒とは、謂く四念住が其の次第に隨ひて能く斷ずる淨樂我常の四種の顚倒なり。不淨觀を修するが故に、諸の受は皆是れ苦なりと了知するが故に、諸識の依と緣との差別は念念に變異すと通達するが故に、染淨は唯だ諸法のみにありて作用者に無しと觀

く。

外身とは、謂く外の所有の外の色處なり。

外の色・聲・香・味・觸等は外處の所攝なるに由るが故に。非有情數なるが故に外と名づく。

內外身とは、謂く內處と相應するあらゆる外處にして根の所依止をいふ。

已身中の根等の五處と相應し、根の依住する所のあらゆる色等の外處は、有情數に墮するが故に、外處の所攝なるに由るが故に內外と名づく。

又他身中に於けるあらゆる內の色處をいふ。

處に約して建立し、身に約して建立し、說いて內外と名づく。

云何んが身に於て循身觀を修するや。謂く、分別影像身が本質身と平等なるを以つて循く觀ず。

身境に於て循く身の相似の性を觀ずるが故に、身に於て循く身觀すと名づく。分別影像身を循く觀察する門に由りて、本質身を審かに諦らかに觀察するが故なり。

內受とは、謂く內身に因りて生ずるところの受なり。

眼等の處を緣じて境界となすが故に。自身に依りて生ずるが故に、內と名づく。

外受とは、謂く外身に因りて生ずるところの受なり。

色等の處を緣じて境界と爲すが故に。他身に依りて生ずるが故に、外と名づく。

內外受とは謂く內外の身に因りて生ずる所の受なり。

自身中の外處を緣じて境と爲すが故に、他身中の內處を緣じて境と爲すが故に、內外と名づく。

受の如く心と法とも亦爾なり。身に於て循身觀を修するが如く、是くの如く受等に於て循受等の觀を修す。其の所應の如し。

又修習とは、謂く欲と勤と策と勵と勇猛と不息と正念と正知と及び不放逸との修習差別の故なり。

卷の第十

決擇分中諦品、第一之五

復た次に一切菩提分法に差別ある無し。皆五門に由りて而かも建立することを得。謂く所緣の故に、自體の故に、助伴の故に、修習の故に、修果の故なり。

初の四念住に五門あるが如く、所餘の菩提分法も亦爾なり。

四念住所緣の境とは、謂く身と受と心と法となり。復た四事あり。謂く、我所依の事と、我受用の事と我自體の事と、我染淨の事となり。

何が故に唯だ此れのみを建立して所緣の境と爲すや。顚倒の覺に由り、愚癡の凡夫多分に、我は有身根に依止し、苦樂等を受用し、境を取了するを相と爲し、貪等に由りて染汚し、信等に由りて清淨なりと計す。是の故に最初に正しく眞實の事相を觀察することを爲す。此の故に此の四種の事を建立して所緣の境と爲す。

念住の自體とは、謂く慧と及び念となり。

佛經中に身等を循く觀ずの言あるに由るが故に、及び念住の言あるが故に、其の次第の如し。

念住の助伴とは、謂く彼の相應する心、心法等なり。

彼とは、彼の念と慧との二法なり。

念住の修習とは、謂く內身等に於て循身等の觀を修するなり。內に於けるが如く、外に於ても內外に於ても亦爾なり。內身とは、謂く此の身中所有の內の色處に於けるをいふ。

自身中の眼・耳・鼻・舌・身根は內處の所攝なるに由るが故に。有情の數に墮するが故に內と名づ

るに由るが故に。
修治定とは、謂く四神足なり、是くの如く一切の障を淨除し已り、復た欲勤心觀門に由りて三摩地を修し、調順堪任の性を成ぜしむるが故に。
現觀方便道とは、謂く信等の五根なり。是くの如く三摩地を修治し已り、無漏の聖道を證得せんと欲して、增上緣の煖頂方便を勤修するが故に。
親近現觀道とは、謂く信等の五力なり。是くの如く、已に增上緣を得する者の無間に諦理に遍達せんと欲するが爲めに不信等の障を摧伏する忍と第一法との近方便を修習するが故なり。
現觀道とは、謂く七覺支なり。此れに由り最初に各別に內に眞理を證覺するが故に。
清淨出離道とは、謂く聖人支道なり。此れ從り後、修道所斷の煩惱をして永く清淨を得、出離道を修せしめんが爲めに由るが故に。菩提分法は是くの如く次第せり。
依根差別道とは、謂く四正行なり。近分と根本とに依る等地の差別と、及び利と鈍との根の差別に由るが故に。苦正行とは、未至と及び無色定とに依止し、其の次第の如く止觀劣なるが故に。樂正行とは、根本靜慮に依止し雙に道轉ずるが故に。二遲通とは、謂く鈍根の苦樂に依るを云ひ、二速通とは、謂く利根の苦樂に依るを云ふ。
淨修三學道とは、謂く四法迹なり。此れに由りて增上戒等の三學を淨修するが故に。無貪と無恚とが能く淨く增上戒學を修治すれば終に貪欲瞋恚門に於て所學處を毀犯せざるが故に。正念は能く淨く增上心學を修治す。所緣を忘れず、心を持して定ならしむるが故に正定は能く淨く增上慧學を修治す。心は定を得し能く如實智を證するに由るが故に。
發諸功德道とは、謂く奢摩他毘鉢舍那なり。此れに由りて能く一切の功德を成辦するが故に。攝諸道道とは、謂く三無漏根なり。此れに由りて能く初・中・究竟の一切の道を攝するが故に。未知欲知根は方便道と、及び見道とを攝し、已知根は修道を攝し、具知根は究竟道を攝す。

已に轉依を得せるに由り、未來世に於て彼の障を安置し、不生法に住せしむるが故なり。

又、四種の對治を具するに由るが故に對治修と名づく。謂く、厭壞對治と斷對治と持對治と遠分對治となり。

厭壞對治とは、有漏の諸行に於て多の過患を見るなり。

謂く、如病如癰等の行を以て五取蘊を厭壞するが故なり。

斷對治とは、謂く方便〔道〕と無間道とをいふ。

彼れに由り能く諸の煩惱を斷ずるが故なり。

持對治とは、謂く解脫道なり。

彼れに由りて斷得を任持するが故に。

遠分對治とは、謂く此の後の諸道なり。

彼れに由り、先に斷じたる所の煩惱を轉じ遠離せしむるが故に。是くの如き四種の對治差別は、是れ前の對治的の差別の義なり。

復た次に、道の差別に十一種あり。謂く觀察事道と勤功用道と修治定道と現觀方便道と親近現觀道と現觀道と淸淨出離道と依根差別道と淨修三學道と發諸功德道と遍攝諸道道となり。

當に知るべし、此の中、覺分等の差別に由るが故に、十一種を建立す。

道は其の次第の如し、謂く、三十七菩提分法と四種正行と四種法迹と奢摩他毘鉢舍那と三無漏根となり。

觀察事道とは、謂く四念住なり。此れに由りて最初に不淸淨行を以て一切の身・受・心・法の事を觀察するが故に、

勤功用道とは、謂く四正斷なり。遍く一切の事を觀察し已り、諸障を斷ずる爲め勤精進を發す

修[八]とは云何。

略して說かば四種あり。

謂く、得修と習修と除去修と對治修となり。

得修とは、謂く未生の善法を修習して生ぜしむるをいふ。

習修とは、謂く已生の善法を修して堅住・不忘・倍復、增廣ならしむるをいふ。

除去修とは、謂く已生の惡不善の法を修して永斷せしむるをいふ。

對治修とは、謂く未生の惡、不善の法を、修して生ぜざらしむるをいふ。

是くの如き四種の修の差別相は、其の所應に隨ひて四正斷に依りて說く。得する爲めの故に修するを名づけて得修となす。此の修力に由り、未だ得せざる所の諸の善法を得するが故なり。習卽ち是れ修なるを名づけて習修と爲す。此の修力に由り數々習ひ已りて諸の善法を得するが故なり。除く爲めの故に修するを除去修と名づく。此の修力に由り、現行位の諸の不善法を除去するが故なり。對治を修習するを對治修と名づく。未來の諸の不善法を對治し不生法を成ぜしむるが故なり。

又、道の生ずるとき、能く自の習氣を安立す、是れを得修と名づく。

此の種類より展轉增盛し、相續して生ずるが故なり。

又、卽ち此の道の現前修習する、是れを習修と名づく。

卽ち此の道が現前して行ずるに由るが故なり。

又、卽ち此の道の現在前する時能く自障を捨す、是れを除去修と名づく。

此れに由り、能く自の所對治の麁重の障を滅するが故なり。

又、卽ち此の道は旣に自障を捨す。又、彼をして未來の不生法中に住せしむ、是れを對治修と名づく、

【八】道諦中、第六に勢に乘じて諸道差別の修を明す。

是れを修道中の方便道と名づく。

無間道とは、謂く此の道の無間に永く煩惱を斷じ所餘なからしむるに由る。

所以何んとならば、此の道の無間に能く永く此品の煩惱と所生の品類と麁重とを除遣して餘あることなからしめ、又麁重の依を轉じて麁重なきことを得せしむるに由る。是れを修道中の無間道と名づく。

解脫道とは、謂く此の道に由り、煩惱を斷じ所得の解脫を證す。

所以何んとならば、此の道に由り能く煩惱を永斷し、所得の轉依を證するが故なり。

勝進道とは、謂く餘品の煩惱を斷ぜんが爲めの、あらゆる方便と無間と解脫道と、是れを勝進道と名づく。

所以何んとならば、此の品の後の餘の煩惱を斷ぜんが爲めのあらゆる方便〔道〕と無間〔道〕と解脫道とを此の品に望むるに、是れ勝進なるが故に勝進道と名づく。

又復た煩惱を棄捨し斷ずる方便、或は勤方便を以て諸法を思惟し、或は勤方便を以て諸法に安住し、或は進みて餘の三摩鉢底と諸のあらゆる道とを進修するをも勝進道と名づく。

又復たとは、餘の義を顯はさんが爲めなり。煩惱を捨斷する諸の方便道とは、但し契經等を正思惟するをいふ。或は復た先に思ふ所の所證の法の中に於て安住し、觀察するをいふ。或は復た餘の勝品の定に進入するなど、諸の是くの如き等を勝進道と名づく。

又勝品の功德を引發する爲め、或は復た諸のあらゆる道に安住するを勝進道と名づく。

所以何んとならば、若しは神通無量等の諸の勝品の功德を引發せんが爲めに、或は彼れ生じ已り、現前に安住する是くの如き等の道を勝進道と名づく。是くの如く已に廣く修道相の差別を說けり。今義勢に乘じ更に諸道の修の差別を辯ぜん。

所以何んとならば、諸の聖弟子、寂靜住に安住せんと欲するが爲めの故に、人趣等に於て此の滅定を引き現在前せしむ。若し已に無色界に生ずれば、功用に由らず、自然に第一寂靜解脫異熟に安住して住し、復た方便功用を發起して此の滅定を求めて現在前せしめず。

軟道とは、謂く軟軟と軟中と軟上品との道なり。此の道に由るが故に、能く三界所繫の地地中の上上と上中と上下との三品の煩惱を捨す。

中道とは、謂く中軟と中中と中上品との道なり。此の道に由るが故に、能く三界所繫の地地中の中上と中中の中軟との三品の煩惱を捨す。

上道とは、謂く上軟と上中と上上との三品の道なり。

此の道に由るが故に能く三界所繫の地地中の軟上と軟中と軟軟との三品の煩惱を捨す。

是くの如き軟・中・上品道を復た各別に分ちて軟等の三となし、九品を建立す。〔是れ〕修道所斷の煩惱の漸次斷なることを顯はさんが爲めの故なり。復た何の因緣にて軟軟品道が能く上上品の煩惱を斷ずるや。此の煩惱に由り、極めて猛利に慚愧を毀滅し、羞恥なき者の身中に於ても麁重の現行すること覺了すべき易く、分別すべき易し、是の故に此の上品の煩惱は猶し麁垢の如く、微少の對治も卽ち能く除遣す。若し下下品の煩惱ならば、上〔に述べたる者〕と相違する者の身中にありとするも、微隱の現行は覺了すべきこと難く、分別すべきこと難し。微隱の垢の如きは、大力の對治を以つてして方に能く除遣す。此の道理に由り、當に知るべし所餘の能治所治を相翻して建立すとも亦爾なり。

方便道とは、謂く此の道に由りて能く煩惱を捨す。

所以何んとならば、正しく是くの如き道を修する時に由り、能く漸く各別の上品等の煩惱と所生の品類と麁重の分とを捨離し漸く轉依を得す。

彼の想は羸劣にして猛利に所縁の相を取ること能はざるが故に無相と名づく。

復た云何んぞ非想非非想處に聖道あることなきを知るや。

世尊の說けるに由れり。乃至有想三摩鉢底方に能く如實に照了し通達す。滅盡三摩鉢底は、是れ出世間なり。聖道の後に證得せる所なるに由るが故に、要ず人趣に於て方に能く引發す。

引發と云ふは是れ初起の義なり。

或は人趣に於て、或は色界に於て能く現在前す。

先に已に生起し後に重ねて現前するが故なり。或は人趣に於てとは、謂く卽ち此の生に於てなり。或は色界に於てとは、謂く後に彼を生ずるなり。云何んぞ聖弟子已に無色定を得し已て色界の欲を離れ、復た色界に生ずるや。必ずしも永く色界の欲を離れ方に無色定に入らず、是の故に此の中、應に四句を作るべし。〔問ふ〕、若し已に色界の欲を離るれば、一切皆能く無色界寂靜解脫定に入るや。設ひ能く無色界寂靜解脫定入る者もあるも、一切已に色界の欲を離るるや。答ふ、此の初句ならば、謂く未至定に依りて已に色界の欲を離れ、而も無色界寂靜解脫定に入ることを得る能はず。第二句ならば、謂く諸の聖者、已に第四靜慮を得て無色界に生ずることを求めず、而も厭背を起し、第四靜慮の行、恒に現在前し、斷結道を捨し、勝進道に依りて漸次に能く無色界寂靜解脫定に入る。第三句ならば、謂く卽ち此の行者離欲を勤求し、斷結道に依りて漸次に能く無色界寂靜解脫定に入る。第四句ならば、謂く上の爾所の相を除く。問ふ、

無色界中には何が故に滅定現前を起さざるや。

答ふ、無色界に生ずるときには、此の滅盡定は多分に現前することを起さず。寂靜解脫の異熟に住するに由るとは、此の滅定に於ては多く勤方便を發起せざるが故なり。

名想建立とは、

謂く四靜慮中に於て、三摩地の差別無量にして、名字を以つて算數すべからず思議すべからず。

何を以つての故に。

初靜慮所攝の定中に於て、諸佛世尊及び究竟の大威德を得せる菩薩摩訶薩の所入の三摩地、彼の三摩地は一切の聲聞及び獨覺等は尙ほ其の名すら了せず、豈能く其の數を知らんや。況んや復た證入をや。

般若波羅蜜多經中に說けるが如く、三摩地は其の數、百を過ぎたり。是くの如く餘の大乘經中に於て說ける三摩地も其の數無量なり。

初靜慮所攝の定に於けるが如く、餘の靜慮と無色との所攝の定に於けるも亦爾なり。是くの如き所說は皆靜慮波羅蜜多に依れり。

淸淨とは、謂く初靜慮中の邊際定乃至非想非非想處の邊際定、是れを淸淨と名づく。

靜慮と無色との邊際定とは、勝品の功德を引發して自在等を得せんと欲する爲めに、堪任定を修し究竟處に到るが故なり。

出世間道とは、謂く修道中に於ける法智と類智品とに攝むる所の、苦智と集智と滅智と道智となり。

是くの如き八智の相は、見道中に於て已に廣く說けり。

及び彼と相應する三摩地等なり。或は未至定の所攝と、或は初靜慮乃至無所有處の所攝と、非想非非想處とは唯だ是れ世間なり。不明了想が恒に現行するが故なり。

不明了想の恒に現在前するに由りて極明了の現行の聖道の所依止にあらず。是の故に一向に世間の所攝なり。

此の道理に由り、

爲めに正方便を發す。遠離作意に由りて上品の惑を捨す。攝樂作意に由りて中品の惑を捨す。觀察作意に由りて、心をして所證に安んじ、增上慢を遠離す。方便究竟作意に由りて下品の惑を捨す。方便究意果作意に由りて彼れが所修の作意の修果を領す。初靜慮定に證入せんが爲めに七作意を修する如く、是の如く乃至非想非非想處定に證入せんが爲めに、應の如くまさに知るべし。又麁相とは、謂く一切の下地に於けると、欲界より乃し無所有處に至るとあり。是くの如き麁相に略して二種あり、一には重苦に住するなり、不寂靜住なるが故に。二には命行微少なり、壽命短促なるが故に。靜相とは、謂く一切の上地に於けるなり、〔卽ち〕初靜慮より乃し非想非非想處に至るなり。麁相と相違するが故に。

品類建立とは、初靜慮定に於て三品の熏修を具するをいふ。

謂く〔三品とは〕軟と中と上となり。

初靜慮の如く、餘の靜慮と及び無色の三品の熏修も爾なり。軟と中と上とに由りて初靜慮を熏修するに由るが故に、初靜慮中に於て還りて三の異熟を生ず。初靜慮の如く餘の靜慮中に於ても、若しは熏修、若しは生果、各々三品なることも亦爾なり。

諸の靜慮中にて三品の熏修が三の果を生ずるとは、謂く梵衆天と梵輔天と大梵天と〔の如き〕なり。是くの如き等を廣く說くことは前の如し。

無色界の中に於ては、別の處所なきが故に生果の差別を立てず。

所以何んとならば、無色界に於て安堵宮殿等の處あることなきが故に、生果の差別を建立せず。然るに三品に由りて無色定を熏修するが故に、彼の異熟生ずるとき高あり下あり劣あり勝あり。

彼の異熟生ずるとき高あり下ありとは、壽命等に差別あるに由るが故なり。劣勝ありとは、染汚と不染汚との多分と少分との差別あるが故なり。

等至建立[六]とは、謂く七種の作意に由りて靜慮に證入す。是くの如く乃至非想非非想處「に證入す」。何等をか名づけて七種の作意と爲すや。謂く了相作意と勝解作意と、遠離作意と攝樂作意と觀察作意と方便究竟作意と方便究竟果作意となり。

此れが廣分別は「瑜伽師地論本地分中」聲聞地より後の瑜伽處の如し。[七]云何んが初靜慮に證入する時、七作意に由るや。謂く定地の作意に由り、欲界中の過患等を見るが故に麁相に了達す。初靜慮中に此の相なきが故に名づけて靜相と爲し、是れを了相作意と名づく。是くの如き作意は猶ほし聞思の間雜する所なり。此れより已上は、聞思を超越し、一向に修相にして麁靜の相を緣じ、以つて境界と爲す。奢摩他毘鉢舍那を修し、尋思する所の如く麁靜の性相を數數思惟す、是れを勝解作意と名づく。此れを修習するに由るが故に、最初の斷道生ず。彼れと俱行する作意を、遠離作意と名づく。此れに由りて能く上品の煩惱を斷ずるが故に、及び能く彼の品の麁重を遠離するが故に、此の觀行者は復た上斷を欣樂し、上斷の功德を見、已に少分の遠離に觸れて喜樂す。惛沈と睡眠とを除去せんと欲する爲めに、時時に淨妙の作意を修習し、以つて其の心を悅ばず、是れを攝樂作意と名づく。是くの如き正修行者は方便善品の資持する所なるが故に、欲界繫の煩惱纏垢をして復た現行せざらしむ。此れに因り煩惱の斷と未斷とを審察せんと欲する爲めに、復た更に作意觀察して彼れ淨相に隨順して生ず、是れを觀察作意と名づく。是くの如き行者、數數觀察して對治を進修す。欲界の一切の煩惱をして暫時間に於て離繫を得しめんと欲する爲めの故なり。是の對治道相應の作意は、是れ初靜慮の最後の方便なるが故に、方便究意作意と名づく。此れより無間に根本を證得す。最初靜慮と俱行する作意、是れを方便究竟果作意と名づく。又了相作意に由りて希願の心を發するは、正しく所應斷と所應得とを了知せんが爲めなり。斷の爲めの故に、得の爲めの故に。勝解作意に由りて所求の義の

【六】麗本には「云何等至建立者」となすも三宮兩本には「云何」の文字なく「等至建立者」と云へり。三宮兩本に從ふを可とす。

【七】七種作意に關して瑜伽論卷三十三、本地分中聲聞地第十三第四瑜伽處之一、卷三十四、聲聞地第十三第四瑜伽處之二等に說き、又卷二十八、聲聞地第十三第二瑜伽處之三に於ける四作意中にも陰に之を說けり。又同學鈔六之七に「約利鈍別」なる論題ありて異論を分別せり、往見すべし。

建立とは、四種の建立あり。謂く支分建立と等至建立と品類建立と、名想建立となり。
法の靜慮に於て四の建立を具せり。諸の無色中には、唯だ三種のみありて支分「建立」を除く。
支分建立とは、謂く初靜慮には五支あり。何等をか五と爲すや、一には尋、二には伺、三には喜、四には樂、五には心一境性なり。第二靜慮には四支あり。何等をか四と爲すや、一には內等淨、二には喜、三には樂、四には心一境性なり。第三靜慮には五支あり。何等をか五と爲すや、一には捨、二には念、三には正智、四には樂、五には心一境性なり。第四靜慮には四支あり。何等をか四と爲すや、一には捨清淨、二には念清淨、三には不苦不樂受、四には心一境性なり。
問ふ、法に無量あり、何が故に唯だ尋等を立てて支と爲すや。
答ふ、對治支の故に、利益支の故に、彼の二の所依の自性支なるが故なり。
此の三種に由りて支分の滿足す。餘を待たざるが故に。初靜慮中の尋伺の二種は、是れ對治支なり。能く欲界の欲・恚・害等を斷ずる尋伺なるが故なり。喜樂の二種は是れ利益支なり。尋伺支に由りて所治を治し已り離生の喜樂を得するが故に。心一境性は是れ彼の二が所依の自性支なり。定力に依止して尋等轉ずるが故に、第二靜慮中の內等淨は是れ對治支なり。此れに由りて能く尋伺を治するが故に。喜樂は是れ利益支なり。心一境性は是れ彼れが二の所依なり。自性支の義は前に說けるが如し。第三靜慮中の捨と念と正知とは是れ對治支なり。此の三能く喜を治するに由るが故に。樂は是れ利益支なり。心一境性は是れ彼れが二の所依なり。自性支の義は前に說けるが如し。第四靜慮中の捨清淨と念清淨とは是れ對治支なり。此の二に由りて能く樂を治するが故に。不苦不樂受は是れ利益支なり。心一境性は是れ彼れが二の所依なり。自性支「の義は前に說けるが如し」。
諸の無色中には支分を立てず。奢摩地は一味性なるを以つての故なり。

所以何んとならば、諸佛の聖弟子、已に諦現觀を得し、此れより已上に〔於て〕餘の結を斷んぜんが爲めに、方便して數々世間道等を習ふ。是れを修道と名づく。

世間道とは、謂く世間の初靜慮と第二靜慮と第三靜慮と第四靜慮と空無邊處と識無邊處と無所有處と非想非非想處と、是くの如き等の靜慮なり。無色は四種の相に由りて應に廣く分別すべし、謂く雜染の故に、淸白の故に、建立の故に、淸淨の故なり。

雜染とは、謂く四無記根なり。一には愛、二には見、三には慢、四には無明なり。

此の四惑に由りて其の心を染汚にす。諸の染汚靜慮定門に於て、色無色界の一切の有覆無記の煩と隨惱煩惱とをして生長して絕えざらしむ所以は何ん。

有愛に由るが故に、上の靜慮を味はひて雜染に染せらる。

[五]靜定輕安の樂を貪味するが故なり。

有見に由るが故に、上の靜慮を見、雜染に染せらる。

靜慮に依止して先際等を計度する見を發起するが故なり。

有慢に由るが故に上の靜慮に慢じて雜染に染せらる。

勝定を證するに依りて高慢を起すが故なり。

無明に由るが故に上の靜慮を疑ひ、雜染に染せらる。

解脫を求むる者の未だ眞實の道理に通達せず、勝品の所證に於て常に疑惑を生ずるに由り、解脫を爲すや解脫をなさざるや〔抉擇せず〕。

是くの如き煩惱、恒に其の心を染し、色無色の大小の二惑をして相續流轉せしむ。

淸白とは、謂く淨靜慮の無色は、性善に由るが故に、說いて淸白と名づく。

是れ世間なりと雖も、纒垢を離るるが故に亦名づけて淨と爲す。

【五】 麗本には「淨定輕安」となせども明本には「靜定輕安」と云へり。明本に依る方可ならん。

見法とは、謂く諸の法忍なり。
　彼に由りて眞實の法に通達するが故に。
得法とは、謂く諸の法智なり。
　彼は轉依に於て能く作證するが故に。
法に極通達するとは、謂く諸の類忍なり。
　諸の聖法に通達するは、是れ此の二類なるが故に。
堅法を究竟するとは、謂く諸の類智なり。
　諸の所知に於て已に究竟せるが故に。
一切の希望を越度するとは、諸の忍智に由るなり。
　出世間道にて、長夜に希〔望〕せるところの聖果を證得す。
自の所證に於て希慮なきが故なり。
一切の疑惑を越度するとは、此の位の中に於ける他の所證に於て猶豫あること無きをいふ。
　謂く餘も亦能く此の勝位を證するが故なり。
他の緣を假らずとは、所修の道の中に於て他の導引なしと雖も、自然に善巧なるが故なり。
大師の敎に於て餘の引くこと能はずとは、佛の聖教に於て已に證淨を得すれば、餘生に轉ずと雖も、邪道の爲めに化引せられざるが故なり。
諸法の中に於て無所畏を得すとは、所證に依る問記法の中に於て、惡欲增上慢の者の怯劣の心の如きは、永く有ることなきが故なり。
云何んが修道なりや。謂く見道上のあらゆる世間道・出世間道・軟道・中道・上道・方便道・無間道・解脫道・勝進道等を皆修道と名づく。

【四】道諦中、第五に修道を明す。

謂く諸諦の中に於て是くの如き是くの如き忍、是くの如き是くの如き智あり。是くの如き等なり。

思惟とは、謂く正しく現觀方便を修習し、世間智を以つて所安立の如く思惟し數習するなり。

證受とは、謂く是くの如く數習し已り、自ら內に最初の見道を證受し、正しく出世間無戲論の位〔に至る〕なり。

圓滿とは、謂く此の位の後に、轉依を圓滿し、乃至究竟を證得す。彼既に究竟位を證得し已り、復た後得智に由りて、名句文身を以つて道諦を安立す。

是くの如き四相の眞實の道輪數數展轉し、相ひ依りて轉じて斷絕あることなし。

經に言ふが如し、塵を遠ざけ垢を離るれば諸法の中に於て正法の眼生ずとは、此れ見道に依りて說く。諸の法忍は能く塵を遠ざけ、諸の法智は能く垢を離る。

彼れ最初に諸諦中に於て妙聖の慧眼を自性と爲すに由るが故なり。法忍能く塵を遠ざくとは、諸の法忍に由りて永く一切煩惱の塵を遠ざくるが故なり。法智能く垢を離るるとは、諸の法智に由りて已に障垢を斷じ〔轉〕依を生ずることを得るが故なり。又此の忍智の兩位に於けることは、其の次第の如し。

遍智の故に、永斷の故に、道清淨なることを得。

此れに依りて遠塵と離垢とを說く。

又經に言く。法を見、法を得し、法に極めて通達し、堅法を究竟し、一切の希望と疑惑とを越度す。他の緣を假らず、大師の敎に於ては餘に引くこと能はず。諸法の中に於て無所畏を得す。此れ亦見道に依りて說く。

所化の有情に於て、聖諦現觀の無間に說くが故なり。

此の位の中に於て法忍法智に由りて所取を覺悟し、類忍類智に由りて能取を覺悟す。
所以何んとならば、出世間道に二の境界あり。謂く眞如と及び正智となり。法智品道は眞如を境となし、類智品道は正智を境と爲す。此の諸の忍智に由りて如實に了知するが故なり。
又此の一切忍智位中に於て、說いて無相觀に安住する者と名づくとは、
薄伽梵の說けるが如き、第六無相住補特伽羅とは、卽ち現に此の忍智位中に住する者是れなり。此の位の中に於ける一切の相は皆不可得なるが故なり。又無相住に六種あり、謂く空と無相と無願と滅定と有頂と見道となり。
是くの如き十六心の刹那を說いて見道と名づく。
所以何んとならば、是くの如き忍智所攝の十六心の刹那に、曾つて未だ見ざる所の四聖諦の境に於て各〻刹那を以つて見るに由るが故に名づけて見道と爲す。又心刹那とは、
謂く、所智の境に於て智生じて究竟するを一刹那と名づく。
唯だ本無今有に於て生ずる時を心刹那と名づくるのみに非ず。何を以つての故に、乃至所知の境に於て能知の智生じ、所作の究竟するを一刹那と名づくるが故に。苦のまさに遍知せらるべきを是れを一心刹那と說く如く、是くの如く集のまさに永斷せらるべき等も亦爾なり。又上に說けるが如く、見道の差別は皆假の建立にして、眞實に爾るに非ざるなり。何を以つての故に、出世の位の中には、各別に內證して戲論を絕するが故なり。
復た次に、一切の道諦は、四種の相に由り、隨ひて覺了すべし。謂く、安立の故に、思惟の故に、證受の故に、圓滿の故なり。
安立とは、謂く聲聞等は自の所證に隨ひて已に究竟を得、他にも亦了知せしめんと欲する爲めの故に、後得智に由りて無量種の名句文身を以つて道諦を安立す。

現に無漏を證する慧を起し、此の慧に由るが故に、永く見苦所斷の一切の煩惱を捨す。

今此の中に於ける所說の義とは、謂く方便道中に於て苦諦に依止して起るところの契經等の法を觀察し、如理の作意所攝の智の增上力の故に、自相續の苦諦の中に於て現に彼の眞如を證し、出世間の慧、正見の體生ず。此の慧に由るが故に、永く一切の見苦所斷の三界所繫の二十八隨眠を捨す。是の故に名づけて苦法智忍と爲す。

苦法智とは、謂く忍の無間に、此の智に由るが故に、前に斷じたる所の煩惱の解脫に於て、而も作證を得するなり。

所以何んとならば、先には忍に由るが故に、永く一切の見苦所斷の煩惱を斷じ、所依をして轉ぜしめ、此れ從り無間に是くの如きの智の生ずるに由りて、轉依を證得す。

是れを苦法智と名づく。

苦類智忍とは、謂く苦法智の無間に無漏の慧生じ、苦法智忍及び苦法智に於て各別に內證し、後の諸の聖法は皆是れ此の種類なるを言ふ。

所以何んとならば、初の二種の、若しは忍、若しは智に由りて、是の後の一切の學と無學との聖法の種類は、此れ從り彼れ生ずることを得るが故なり。是の故に無漏の慧生じ、各別に內證し、此れを緣じて境と爲すを、後の諸の聖法は皆是れ此の種類なりと言ふ。

是の故に名づけて苦類智忍と爲す。

苦類智とは、謂く此の無間に無漏智生じ、苦類智忍を審定印可するなり。

所以何んとならば、苦類智忍の無間に無漏智生ずるに由り、苦類智忍に於て內證印可す。

故に苦類智と名づく。

是くの如く餘の諦の中に於ても、其の所應に隨ひて諸忍諸智盡く當に知るべし。

卷の第九

決擇分中諦品、第一之四

[一]云何んが見道なるや。若し總じて說かば、謂く世第一法の〔起る〕無所得の三摩地鉢羅若及び彼と相應する等の法なり。

無分別に由る奢摩他毘鉢舍那等を體相と爲すが故に。

[二]又所緣と能緣と平等平等なる智を其の相と爲す。

此れ所取能取無性眞如に通達するに由るが故に。

[三]又各別に有情假と法假とを遣り、遍く二假所緣の法を遣る智を相と爲す。

云何んが各別に、有情は假なりと遣る所緣の法智を相と爲すや。此の智は自の相續の中に於て我の相を分別せざるに由るが故に。分別せずとは、是れ除遣の義なり。云何んが各別に法は假なりと遣る所緣の法智を相と爲すや。此の智由りて、自の相續中に於て色等の法の相を分別せざるに由るが故なり。云何んが遍く二は假なりと遣る所緣の法智を相と爲すや。此の智は由り一切の處に於て差別あることなく我と及び法との相を分別せざるに由るが故なり。

復た次に別して見道の差別を說かば、謂く世第一法の無間に、苦法智忍と苦法智と苦類智忍と苦類智と集法智忍と集法智と集類智忍と集類智と滅法智忍と滅法智と滅類智忍と滅類智と道法智忍と道法智と道類智忍と道類智との是くの如きの十六種あり。諸の聖諦の中に於て法類智忍と及び法類智とは、是れ見道の差別の相なり。

苦とは、謂く苦諦なり。苦法とは、謂く苦諦增上所起の敎法なり。法智とは、謂く方便道中に於て諦增上の法を觀察する智なり。智忍とは、謂く先に增上を觀察する力の故に、各別の苦諦中に於て

【一】道諦中、第四に見道を明す。見道に於ける唯識學上の異說は成唯識論卷九往見すべし。

【二】此の文は一心眞見の說文なり。

【三】此の文は三心眞見の說文なり。

世第一法とは、謂く各別に內證する諸諦の中に於て、無間に心三摩地鉢羅若及び彼れと相應する等の法なり。

此れより無間に必ず最初の出世道を起すが故に。

是くの如き五種は、道の自性と及び眷屬とに依り以つて道諦の差別を顯はせり。

資糧道とは、謂く諸の異生所有の尸羅根門を守護し、飲食は量を知り、初夜後夜には嘗つて睡眠せず、止觀を勤修し、正知にして住す。復た所餘の進習諸善あり。聞思修所生の慧が此れを修得するが故に、現觀解脫所依の器性を成ずることを得。

謂く諸の異生所有の尸羅、乃至正知にして住する等是れ資糧道の體なり。彼れ淨尸羅等を修習し極めて圓滿なるに由るが故に、復た所餘の進習の諸善ありとは、謂く無悔等聞思等所生の諸慧に由り、煗等を成ずることを得、次第に諦を見て永く諸の障を斷ずる相續堪任の性なり。

方便道とは、謂く所有の資糧は皆是れ方便なり。或は方便にして資糧に非ざるものもあり、謂く已に資糧道を積集せる者の所有の順決擇分の善根、謂く煗法と頂法と順諦忍法と世第一法となり。煗法とは、謂く各別に內證せる諸諦の中に於て、明らかに三摩地鉢羅若及び彼と相應する等の法を得するなり。

淨定心に由る諦增上に依りて契經等の法が意言問に於て諸義顯現し、彼れが所生の奢摩他毘鉢舍那等を緣ずる、是れを煗法と名づく。

頂法とは、謂く各別に內證せる諸諦の中に於て、明らかに三摩地鉢羅若及び〔彼れと〕相應する如き等の法を增すなり。

彼の頂法は展轉增進して上位に居するに由るが故に。

順諦忍法とは、謂く各別に內證せる諸諦の中に於て、一分三摩地鉢羅若及び彼と相應する等の法に已入し、隨順するなり。

一分已入すとは、無所取に於て一向に忍解するが故なり。一分隨順すとは、無能取に於て隨順通達する所依處なるが故なり。

【八】　道諦中第二に資糧道を明す。

【九】　道諦中第三に方便道を明す。此處に方便道と云ふは一般に云ふ加行道なり。

又現在の苦は、是れ能く餘の有の異熟を造作する諸の業煩惱の所依止の處なり。彼の相に翻ずる爲め、是の故に問うて言く。

何が故に此の滅を復た無作と名づくるや。現在の諸の業煩惱の所依處とならざるが故なり。

又苦相は後有の異熟が相續生起して間斷あることなし。彼の相に翻ずる爲め是の故に問うて言く。

何が故に此の滅を復た不生と名づくるや。永く未來相續の生を離るるが故なり。

復た次に滅諦に四種の相あり。謂く滅相と靜相と妙相と離相となり。

何が故に滅相と名づくるや。煩惱離繋の故なり。

謂く流轉の因たる煩惱が離繋するが故に滅と名づく。

何が故に靜相と名づくるや。苦離繋の故なり。

行苦所攝の不寂靜相の取蘊が離繋するが故に靜と名づく。

何が故に妙相と名づくるや。樂淨の事なるが故なり。

諸の惱煩苦が究竟して離繋し、自然に樂淨にして以つて自體となすが故に妙と名づく。

何が故に離相と名づくるや。常に利益の事なるが故なり。

復た退還せず最極安隱なるを其の次第の如く常に利益安隱利益最勝善性と名づく、是れ滅諦の相なり。

[六]云何んが道諦なりや。[七]謂く此の道に由るが故に苦を知り、集を斷じ、滅を證し、道を修す。是れ略して道諦の相を説く。

今此の中に於て、四聖諦に依り、其の作用を以つて道諦の相を顯はす。

又道に五種あり。謂く資糧道と方便道と見道と修道と究竟道となり。

【六】次に道諦を明す。
【七】道諦中、初に總説す。

老病死等の一切の怖畏なく聖住の所依なるが故に安隱と名づく。
何が故に此の滅を復た清涼と名づくるや。諸の利益の事の所依處なるが故なり。
一切の清涼善法の所依なるが故に、清涼と名づく。
何が故に此の滅を復た樂事と名づくるや。第一義樂事なるが故なり。
出世間の樂の所依の事なるが故に、樂事と名づく。
何が故に此の滅を趣吉祥と名づくるや。彼の易修を證得する爲めの加行所依の處なるが故なり。
涅槃易修を證せんが爲めの加行所緣の境なるが故に。
何が故に此の滅を復た無病と名づくるや。永く一切障礙の病を離るるが故なり、
煩惱等の諸の障礙の病を離るるが故に無病と名づく。
何が故に此の滅を復た不動と名づくるや。永く一切の散動を離るるが故なり。
諸の境界戲論の散動を離るるが故に不動と名づく。
何が故に此の滅を復た涅槃と名づくるや。無相寂滅大安樂住の所依處なるが故なり。
永く一切色等の諸想を離れ、究竟寂滅大安樂住の所緣の境なるが故に、名づけて涅槃と爲す。
復た次に滅諦に依りて無生等の名義差別を辯ず。苦諦の相と義相違するが故に。苦諦の相とは
彼彼の處の有情の類の中に於て相續して生ず。彼の相に翻ずる爲め、是の故に問うて言く。
何が故に此の滅を復た無生と名づくるや。相續生を離るるが故なり。
苦諦の相は、續生已後自身の衆分漸時に圓滿す。彼の相に翻ずる爲め、是の故に問うて言く。
何が故に此の滅を復た無起と名づくるや。永く此の後漸く生起する離るるが故に。苦諦の相は
宿業煩惱の勢力の造る所なり。彼の相に翻ずる爲め是の故に問うて言く。
何が故に此の滅を復た無造と名づくるや。永く前際の諸の業煩惱の勢力の所引を離るるが故なり。

何が故に此の滅を復た無漏と名づくるや。永く一切の煩惱魔を離るるが故なり。
何が故に此の滅を舍宅と名づくるや。無罪喜樂所依の事なるが故なり。
　解脫喜樂の所依止なるが故に舍宅と名づく。
何が故に此の滅を復た洲渚と名づくるや。三界を隔絶するが故なり。
　生死の大海に於て高原を挺出するが故に洲渚に譬ふ。
何が故に此の滅を復た弘濟と名づくるや。能く一切の大苦災横を遮するが故なり。
　此の滅を證得すれば、生老病等の諸の苦災横永く遠離するが故に。
何が故に此の滅を復た歸依と名づくるや。虛妄あることなき意樂加行の所依處なるが故なり。
　彼の滅に於て、所發の意樂と、及び正加行との無虛妄性の所依處となるに由るが故に。所依止の義は是れ歸依の義なり。
何が故に此の滅を勝歸趣と名づくるや。能く一切最勝聖性の所依處に歸趣と爲るが故なり。
　此の寂滅に由り、最勝聖性所依止の處に歸し趣くが爲めに、是れ阿羅漢の證得する加行所緣の境なるが故に。
何が故に此の滅を復た不死と名づくるや。永く生を離るるが故なり。
　諸の無生の者は必ず死せざるが故に。
何が故に此の滅を無熱惱と名づくるや。永く一切の煩惱の熱を離るるが故に。永く一切求不得苦の大熱惱を離るるが故なり。
何が故に此の滅を無熾然と名づくるや。永く一切の愁嘆憂苦諸の惱亂を離るるが故なり。
　一切の愁等の熾然永く息み極めて清凉なるが故に、無熾然と名づく。
何が故に此の滅を復た安隱と名づくるや。怖畏住を離るる所依處なるが故なり。

彼の修道に於て諸地の欲を離れ、漸時に顯はす所に由るが故に、離欲と名づく。是くの如き倶の離繫あるに由るが故に、當來の苦は滅するなり。故に次に問うて言く。

何が故に滅と名づくるや。當來に彼の果の苦生ぜざるが故なり。

能く未來の苦不生の法を成ずるが故に名づけて滅と爲す。又現法の憂惱に於て寂靜なるが故なり。次に問うて言く。

何が故に寂靜と名づくるや。現法中に於て彼の果の心苦永く行ぜざるが故なり。

何が故に沒と名づくるや。餘の所有の事永く滅沒するが故なり。

宿業煩惱の感ずる所の諸蘊自然に滅盡するが故に、名づけて沒と爲す。是くの如き等の別句に由りて、前の無餘永滅の總句を釋す。

何が故に此の滅を復た無爲と名づくるや。三相を離るるが故なり。

生滅住異の三有爲相と究竟して相違するが故に無爲と名づく。

何が故に此の滅を復た難見と名づくるや。肉眼と天眼との境を超過するが故なり。

唯だ聖人の慧眼のみの所行の境界なるが故に、難見と名づく。

何が故に此の滅を復た不轉と名づくるや。永く諸趣差別の轉を離るるが故なり。

地獄等往來の流轉を離れて恒常に安住するが故に、不轉と名づく。

何が故に此の滅を不卑屈と名づくるや。三愛を離るるが故なり。

永く欲と色と無色との三愛を離れ、諸有の中に於て卑屈するところなきが故に、不卑屈と名づく。

何が故に此の滅を復た甘露と名づくるや。蘊魔を離るるが故なり。

永く一切死所依の蘊を離るるが故に、甘露と名づく。

三明等の最勝功德の所莊嚴なきが故なり。
有莊嚴とは、謂く俱分解脫三明六通の阿羅漢等の所有の滅なり。
　無量種の最勝功德の最勝功德の所莊嚴あるが故なり。
有餘とは、謂く有餘事の滅なり。
無餘とは、謂く無餘事の滅なり。
最勝とは、謂く佛菩薩の無住涅槃に攝する所有の滅なり。常に一切有情利樂の事に安住するを以つての故に。
差別とは、謂く無餘永斷と永出と永吐と盡と離欲と滅と寂靜と沒との等しきなり。
何が故に無餘永斷と名づくるや。餘の句に依るが故なり。
　謂く、無餘永斷は是れ標句なり。餘は是れ釋句なり。是の故に說いて餘の句に由るが故にと言ふ。後の別句に由りて此の總を釋するが故なり。纏と及び隨眠とは皆悉く永斷するが故に、無餘永斷と名づく。
何が故に永出と名づくるや。永く諸の纏を出づるが故なり。
　此れ諸纏を斷ずるに依つて說けり、謂く已生の者皆遠離するが故に。
何が故に永吐と名づくるや。永く隨眠を吐くが故なり。
　此れ隨眠を斷ずるに依つて說けり。謂く根本を除き永く生ぜざるが故に。是くの如き諸の滅は見修道に於て對治別なるに由るが故に二種の盡と及び離欲とを建立す。故に次に問うて言く。
何が故に盡と名づくるや。見道に於て對治し離繫を得するが故なり。
　煩惱聚の中にて餘すこと少分なるが故に亦名けて盡と爲す。
何が故に離欲と名づくるや。修道に於て對治し離繫を得するが故なり。

法の滅を顯示す。是れ滅諦の相なり。

甚深とは、謂く彼の諸行の究竟寂滅なり。是くの如きの寂滅を彼の諸行に望むるに、異とも不異とも亦異亦不異とも非異非不異とも說く可からず。

所以は何んとならば、若し彼の諸行の究竟寂滅、是くの如きの寂滅と彼の諸行と異なりと說く可くんば、〔寂滅と〕諸行と相繫屬せず、條然として異體なるべし。若し不異ならば、〔寂滅は〕是れ染相なるべし。此の道理に由りて、倶にも非ず不倶にも非ず。

何を以つての故に。戲論無きが故に。此の義の中に於て若し戲論を生ぜば、正しき思議にあらず。〔何を以つての故に〕道に非ず。如に非ず、善巧方便思に非ざるが故なり。世尊の說きたまへるが如し、此の六觸處の盡と離欲と、滅と寂靜と沒等とを若しは有異〔若しは〕無異〔若しは〕亦有異亦無異若しは非有異非無異なりと謂はば、無戲論に於て便ち戲論を生ぜん。乃至六處あれば諸の戲論あるべし。六處既に滅し諸の戲論を絕す、卽ち是れ涅槃なり。

若し是くの如き諸の戲論を絕する寂滅涅槃に於て、不正に思議する、是れを戲論と名づく。異思議なるべきに於て乃ち異に思議するが故なり。云何んが異思議なるべきや。謂く正妙離等の種種の思議なり、

世俗とは、謂く世間道を以つて種子を摧伏して得たる所の滅なり。是の故に世尊は別名にて說いて彼分[五]涅槃と爲したまふ。

勝義とは、謂く聖慧を以つて永く種子を拔きて得たる所の滅なり。

不圓滿とは、謂く諸の有學或は預流果の攝、或は一來果の攝、或は不還果の攝等の所有の滅なり。

圓滿とは、謂く諸の無學阿羅漢果の攝等の所有の滅なり。

無莊嚴とは、謂く慧解脫の阿羅漢の所有の滅なり。

【五】彼分涅槃に關しては、唯識述記一本三十一左、演祕一本二十五右、其の他瑜伽論十一等に猶ほ多釋を出せり往見せよ。一般に彼分涅槃には略して二釋あり、第一には煩惱を伏す所顯の理は、是れ眞の涅槃の小分なるが故に、彼分と名づく。第二には、四禪等の淨定は煩惱を伏するに由りて寂靜の義あり、之を名づけて涅槃と爲す。是れ有爲なるを以ての故に名づけて彼分と云ふ。分とは相似流類の義にして惑なき邊によりて寂靜の義あり、眞の涅槃と稍相似せるが故に彼分と名づく、後解を本と爲す。

復た次に是くの如き集諦に、總じて四種の行相あり。所謂る因相と集相と生相と緣相となり。

因相とは云何。謂く能く後有を引發する習氣因、是れを因相と名づく。

　業煩惱は、是れ能く後有を引發する習氣因なるに由るが故なり。

集相とは云何、謂く彼彼の有情の所集の習氣が、彼彼の有情の類に於て等起因と爲る、是れを集相と名づく。

　諸の有情の所集の習氣に由り、人天等の有情の類中に於て、能く相似形貌の種類、平等の起因と爲るが故なり。

生相とは云何、謂く各別の內身無量の品類差別の生因、是れを生相と名づく。

　是れ諸の有情各別の內身の相續・決定・趣生・地等のあらゆる一切の品類差別、乃至有頂の生因なるが故なり。

緣相とは云何、謂く諸の有情の別別の得捨の因、是れを緣相と名づく。

　能く有情をして未曾得の自體を得、已曾得の自體を捨せしむるが故なり。

　是くの如きを名づけて集諦の體相と爲す。

[四]云何んが滅諦なるや、謂く相に由るが故に、甚深の故に、世俗の故に、勝義の故に、圓滿ならざるが故に、圓滿の故に、無莊嚴の故に、有莊嚴の故に、有餘の故に、無餘の故に、最勝の故に、差別の故に、滅諦を分別す。

相とは、謂く眞如聖道は、煩惱を生ぜず、若しは滅の依若しは能滅、若しは滅性是れ滅諦の相なり。世尊の說きたまへるが如く、眼と耳と及び鼻と舌と身と及び意とは、此の處に於て名色究竟に滅して餘なし。又說きたまへり、是の故に汝今當に是の處を觀ずべし。所謂る此の處には眼究竟に滅して色想を遠離し、乃至意究竟に滅して法想を遠離す。此の道理に由りて所緣の眞如の境の上の有漏

【四】次に滅諦を明す。

藥〔草〕に相應する業〔用〕とは、謂く此の藥〔草〕を執持すれば、形を藏隱する等をいふ。

呪に相應する業〔用〕とは、謂く此の呪を誦すれば、便ち燒けざる等をいふ。

術に相應する業〔用〕とは、謂く彼彼の術に由るが故に、熱病を治する等をいふ。

又諸の觀行者の威德業用は、不可思議なり。

云何ん〔が不可思議なるや〕、〔謂く〕彼の心の威德力の故に、能く大地を動し虛空に昇る等なり。

又諸の菩薩の自在業用は不可思議なり。所謂る命自在なるが故に、心自在なるが故に、財自在なるが故に、業自在なるが故に、生自在なるが故に、勝解自在なるが故に、願自在なるが故に、神通自在なるが故に、智自在なるが故に、法自在なるが故に、諸の大菩薩は是くの如き等の自在力に由るが故に、所作の業用不可思議なり、

謂く、諸の菩薩は命自在力に由つて、諸の壽行を持し、欲樂する所に隨つて、爾所くの時に住す。心自在力に由つて、其の所樂に隨ひ、三摩地に於いて入出自在なり。勝解自在力に由りて、大地等を轉じて水火等と爲して勝解自在なり。願自在力に由り、其の所樂に隨ひて能く無數の自利利他を引き。大願を圓滿にす。神通自在力に由り、無量の有情を攝化せんと欲するが爲めに種種の神通變現を顯示す。智自在力に由り、諸法の義に於て訓釋言詞無滯の辯說圓滿し究竟す。法自在力に由り、無量種の名句文身を以つて素怛纜等の無上の敎法を建立し、其の所應に隨ひて乃至一切の有情に、一時の間に於て能く彼の心をして皆大いに歡喜せしむ。

又一切佛の所作と諸佛の應所作との事の業用は不可思議なり。

云何ん〔が不可思議なるや〕。〔謂く〕如來究竟無功用の處に到り、清淨一味の法界を證得し、諸佛世尊の應に作すべき所の諸の有情を利益し安樂する事、時に隨ひて應の如く皆能く成立す。是くの如き諸佛及び佛の境界は不可思議なり。

議と名づく」。

卽ち此の業に由りて、諸の有情が、自身の異熟等に種種の差別を感ずるは不可思議なり。

謂く、內身等の異熟に、形色等の無量の差別有るは、思議すべきこと難し。一切智〔なる佛〕を除きて〔餘の者〕は、思議すること能はず。强ひて思議する者は狂等の過を發するが故に、〔不可思議と名づく」。

復た次に、卽ち善と不善との業の處の差別と事の差別と因の差別と異熟の差別と品類の差別との等きは、皆不可思議なり。

卽ち此の業の處の差別等は、無量無邊にして思議すべきこと難きに由るが故に、〔不可思議と名づく」。

處とは、謂く是くの如き處に住し、是くの如き業を造るなり。〔卽ち〕或は城邑に於てし、或は村落に於てする、是くの如き等の處〔を處と名づくる〕なり、

事とは、謂く〔善不善業の〕所依の事なり。〔卽ち〕或は有情數、或は非有情數なり。

因とは、謂く善不善根にして、其の所應の如し。

異熟とは、謂く異熟の內身なり、

品類とは、謂く種種差別の無量の品類なり。

又種種なる外事の差別有りて、〔其の〕能感の業用は不可思議なり。

何等の業に由りて、棘刺等の鋒鋭銛利を感ずるや、是くの如き等の類は、世間に墮在する不可思議の攝なり。世間を思議することは、佛の制したまふ所なるが故なり。

又末尼珠と藥草と呪と術とに相應する業用は不可思議なり。

末尼に相應する業〔用〕とは、謂く月愛珠等の能く水等を出す業用の思ひ難きをいふ。

謂く、諸の有情は、業の乖諍に由るが故に、業の乖諍する所なりと名づく。善と惡との業力に隨ひ、自の受くる所の異熟に、愛と不愛との別あるが故なり。問ふ、諸の有情が、自の作業により、愛不愛の異熟を受くる時、〔最〕初は何從り生ずるや。無因〔より生ずる〕と爲すや、世性のは自在等を因と爲して〔生ずると爲すや〕。答ふ、業從り生ずる所なり。

云何んが業從り生ずる所なるや。是れ諸の有情は、無因と惡因とを遠離し、唯業のみ從り生ずる所なるが故なり。

謂く、諸の有情は、無因と惡因とを遠離し、唯業等の因緣に由りてのみ生ぜらる。是の如く已に業に依りて流轉を說けり。滅に歸することを明さんが爲め、亦諸の業に依りて〔說けり〕。是の故に經には、業に依りて出離すと言へり。

云何んが業に依りて出離する。對治業に依りて業の縛を解くが故なり。

謂く、無漏業に依り能く有漏業を斷ずるが故に、唯だ業に依りてのみ出離することを得るなり。

云何んが有情に高下あるや。謂く、業に由るが故に、善惡趣に於て自體の差別を得るなり。

云何んが〔有情に〕勝劣あるや。謂く、諸の有情の成就せる功德と過失との差別〔に由るが故〕なり。

世尊の說きたまへるが如し、有情の業と異熟とは不可思議なり。

是くの如き經の意は。一切種皆不可思議なりといふには非ざるなり。

云何んが業と異熟とは不可思議なるや。云何んが可思議なるや。謂く、諸の善業は、人天趣に於て可愛の異熟を得るなり。是れ可思議なり。諸の不善業は、三惡趣に墮して不〔可〕愛の異熟を得るなり、是れ可思議なり。

善と惡との業に由りて、善と惡との趣に往き、可愛と不可愛との異熟を感得す。世間の智者は〔此の理を〕能く思議するが故に、〔又〕此れに由り、能く正見等の功德を引發するが故に、〔可思

謂く、梵行を同くし、尸羅を攝受し、歸趣に應ずるが故なり。

云何んが身語の應儀現行なるや。尊尊の位に於て憍慢を離るるが故なり。

謂く、尊長及び尊長に等しき〔者の〕所に於て、憍慢摧伏し、應の如く供事するが故なり。

云何んが身語の敬順現行なるや。尊〔長〕の教誨に於て、敬順にして受くるが故なり。

謂く、尊〔長〕の語言に於て、敬順にして受け、自の見取を離るるが故に、〔敬順現行と云ふ〕。

云何んが身語の無熱現行なるや。苦行の熱惱と下劣の欲解とを遠離するが故なり。

謂く、外道の下劣の欲解と、諸の苦行を行ずるとを離れ、自ら燒然せざるが故に、〔無熱現行と云ふ〕。

云何んが身語の不惱現行なるや。財業を棄捨し悔惱なきが故なり。

謂く、財業を棄捨し追悔有ることなく、彼れ後時に於て熱惱なきが故に、〔不惱現行と云ふ〕。

云何んが身語の無悔現行なるや。少分を得と雖も以て喜と爲さず、悔恨なきが故なり。

謂く、善品を修し、少分を獲ると雖も喜足を生ぜず、諸の悔恨を離れ、其の所能を盡して修習するが故なり。

世尊の說きたまへるが如し、是くの如き有情は、皆自の業に由るなり、〔又〕業の乖諍する所なり、〔又〕業從り生ずる所なり、〔又〕業に依りて出離す。業は能く一切の有情の高下と勝劣とを分判す。

云何んが有情は皆自の業に由るや。自の造業に由りて異熟を受くるが故なり。

謂く、諸の有情は、其れ自の〔造〕業に由〔りて異熟を受く〕るが故に、自業と名づく。自とは他と共ならざるなり。自業の異熟を受くるが故に自業と名づく。

云何んが業の乖諍する所なるや。自業に〔由り〕て得る所の異熟を受くる時、善と不善との業が互に違諍するが故なり。

彼〔の身語は〕正解に由りて攝持せらるるが故に、〔身語を防護すと名づけらる〕。

謂く、佛より聽ける所の如くんば、往來等の事に〔あたりて〕は、必ず先づ覺察し、〔然る後〕正に行くべきが故なり。

云何んが身語の具足圓滿なるや。終に毀犯する所を毀犯せざるが故なり。

謂く、清淨なる尸羅を違損せざる〔意〕なり。

云何んが身語の清淨現行なるや。無悔等に由りて漸時に修行し、乃至定を得て依止と爲すが故なり。

謂く、定力に依り、犯戒の垢をして極めて遠離せしむるが故に〔定を得て依止となすと云ふ〕。

云何んが身語の極善現行なるや。染汚の尋思の雜はらざる所なるが故なり。

謂く、染汚の尋思の雜はり能はざる所は、一向に〔淸〕淨なるが故に〔極善現行と云ふ〕。

云何んが身語の無罪現行なるや。邪願を遠離し、梵行を修するが故なり。

謂く、有及び資財を廻向せずして梵行を修行し、諸の聖賢の爲めに稱讃せらるるが故に、〔無罪現行と云ふ〕。

云何んが身語の無害現行なるや。他を輕陵せず、共に住し易きが故なり。

謂く、自ら高ぶるに由りて人を陵蔑せず、共に住し〔易き〕等を〔以て〕損害と爲し難きが故に、〔無害現行と云ふ〕。

云何んが身語の隨順現行なるや。能く涅槃に隨順することを得るに由るが故なり。

謂く、能く隨順して涅槃を得、能く聖道を引くことを得るが故に、〔隨順現行と云ふ〕。

云何んが身語の隨隱顯現行なるや。善を隱し惡を顯はすが故なり。

謂く、自の功德を隱し、自の過失を顯はすが故に、〔隨隱顯現行と云ふ〕。

云何んが身語の親善現行なるや。梵行を同じくする者尸羅を攝受するが故なり。

行ずる所皆悉く圓滿なると、微細の罪を見て大怖畏を生ずると、諸の學處に於て善く能く受學する〔との如きは如何ん〕。

云何んが尸羅を成就する〔意なる〕や。淨尸羅を能く受け能く護るが故なり。

謂く、淨戒を受持し、相應して缺くる無し。故に尸羅を成就すると名づく。

云何んが善く能く別解脫律儀を防護する〔意なる〕や。善く能く出離尸羅を護持するが故なり。

謂く、解脫を求めんが爲め、別別に所有る律儀を防護するが故に別解脫律儀と名づく。此の〔別解脫〕律儀に由り、能く速に生死の苦を出離するが故に、〔復た出離尸羅と名づく〕。

云何んが軌則と所行と、皆悉く圓滿なり〔と云ふ意なる〕や。淨尸羅を具する〔が故に、世間並に同法の者が〕毀責を爲し難し。故に〔圓滿と名づく〕。

軌則圓滿とは、諸の威儀等が、聰慧の人に呵責せらるるに非ざるが故なり。所行圓滿とは、五種の諸の比丘衆の行ずる處ならざる〔五種の〕所を遠離するが故なり。何等かを五と爲すや。謂く、唱令の家と、婬女の家と、酤酒の家と、王家と、旃荼羅羯恥那の家となり。

云何んが微細の罪を見て大怖畏を生ずるや。勇猛に所學の尸羅を恭敬するが故なり。

遮罪の中に於て、勇猛に修學〔の尸羅〕を恭敬し護持すること猶ほし性罪の如し。是の故に名づけて、微細の罪を見て大怖畏を生ずと爲す。

云何んが諸の學處に於て善く能く受學する〔意なり〕や。所學の尸羅を圓滿に受學するが故なり。

謂く、學處を受學すること具足圓滿す、是の故に名づけて諸の學處に於て善く能く受學すと爲す。

是れ從り已後、尸羅に依止し、佛經中〔所說〕の護身等の義を釋す。云何んが名づけて身語を防護すると爲すや。

無所依の施とは、謂く有及び資財を廻向せずして惠施を行ずるなり。田器とは、謂く、貪苦田と功德田となり。手を舒ぶるとは、廣く惠施を行じ手を潛縮せざるが故なり。常に祠祀すとは、祠祀を串習し以て性を成ずるが故なり。捨具足とは、慧を先と爲すが故なり。正施の時に於て〔平〕等に分布するを樂しむとは、來り求むる者に於て所施の物を以て等しく分布するが故なり。

云何んが應に施物の圓滿なることを知るべきや。謂く、所施の財物は、誑詐に〔より〕て得たるに非ざるが故に、所施の財物は、他の得たるを侵せるに非ざるが故に。所施の財物は、穢に非ず垢を離れたるが故に。所施の財物は淸淨なるが故に。所施の財物は、如法にして引〔起〕せられたる所なるが故に。是く〔の如きを以ての故に〕施物圓滿と名づくるなり。

此の義に依るが故に、經に是くの〔如き〕說を作す。〔謂く、正勤を發起して得たる所の財物と、手臂の力を運らして得たる所の財物と等きなり。〕正勤を發起して得たる所の財物とは、此れは施物を誑詐にして得たるに非ざることを顯はす。誑詐にして得るとは、謂く、正勤を起さずして財物を得る〔の意〕なり。〔卽ち〕自の住處に於て、他の寄する所の物を謀詐して得るが故なり。手臂の力を運らして得たる所の財物とは、此れは、施物は他の〔所〕得を侵したるものに非ざることを顯はす。他の〔所〕得を侵すとは、自ら手力を運動するに非ずして得るなり。〔卽ち〕他〔者〕が勤苦し種種の方便を以て獲得せる所の財物を、侵して陵取するが故なり。汚垢を離るる物とは、此れは施物の非穢離垢なることを顯はす。所施の物は汚垢染汚を遠離せるに由るが故なり。如法財とは、此れは施物の淸淨なることを顯はす。刀毒酒等の非淨の施を遠離せるが故なり。如法所得とは、此れは施物の如法所引なることを顯はす。

復た次に經の中に說けるが如き、尸羅を成就すると、善く能く別解脫律儀を防護すると、軌則を

が故なり。

又施等の諸の淸淨業有り。施業とは云何ん。謂く、因緣の故に、等起の故に處所の故に、自體の故に、施業を分別す。

因緣とは、謂く無貪と無瞋と無癡との善根なり。

等起とは、謂く彼と倶に行ずる思なり。

處所とは、謂く所施の物なり。

自體とは、謂く正しく施を行ずる時の身語意業なり。

云何んが施圓滿なるや。謂く、數數施すが故に。偏黨無く施すが故に。其の所欲に隨ひて圓滿に施すが故に、施圓滿なることを得。

此の義に依るが故に、經に是の說を作す。〔卽ち〕大施主と爲すとは、此れは數數施す義を顯はす。彼の串習に由りて性を成ずるとは、數數能く施すが故なり。一切の沙門婆羅門等とは、此れは偏黨無く施す義を顯はす、差別有ることなく一切に施すが故なり。若しは食、若しは飲等とは、此れは其の所欲に隨ひて、施の義を圓滿するを顯はす。意願する所の如く、一切の資財を皆施與するが故なり。

復た次に、無所依の施なるが故に、廣淸淨の施なるが故に、極歡喜の施なるが故に、數數施すが故に、田器の施なるが故に、善く新舊分布する施なるが故に、〔是くの如き六施に依りて〕施圓滿なることを得。

此の義に依るが故に、經に是くの〔如き〕說を作す。〔謂く〕、解脫捨と、手を舒べて施すと、遠離を樂しむと、常に祠祀すと、捨具足と、正施の時に於て〔平〕等に分布するを樂しむとなり。是くの如き諸の句は、其の次第に隨ひ、〔前の〕無所依の施等〔の六施の意〕を顯示せるものなり。

り、意樂の故に白なりとは、猶し一あり、子〔弟〕及び門徒をして、危より遠ざかり安に處らしめんと欲し、憐愍の心に由りて、現に種種の身語の麁惡を發し、遂に此の時に於て雜染を發生するが如し。

黑白に非ざる異熟の業にして能く諸業を盡すとは、謂く、方便無間道の中に於てする諸の無漏業なり。

方便無間道は、是れ彼の諸業の斷對治なるを以ての故なり。黑に非ずとは、煩惱の垢を離るるが故なり。白とは、一向に淸淨なるが故なり。異熟無きとは、生死と相違するが故なり。能く諸業を盡すとは、無漏業の力は、永に黑等の三る有漏業と異熟習氣とを拔くに由るが故なり。

復た次に、總じて一切の無漏業に約するに、差別有ること無し。所有の障礙と隨順との體性は其の次第の如く、曲と穢と濁との等き諸の染汚業と、淨と牟尼との等き諸の淸淨業を建立す。

曲業とは、若しは身語意業の、能く正直なる八聖道支を障へ、生長せざらしむる〔を言ふ〕なり。

穢業とは、若しは身等の業の、能く相續を汚し、此れに依りて是くの如き障を發生する業なり。

濁業とは、若しは身等の業の、外道の顚倒の見に依止して生ずる〔を言ふ〕なり。

一切の如來の淸淨なる聖敎の對治する所にして、不信混濁の所攝なるが故なり。

復た差別有り。斷常の邊に墮在し、處中の行に違する義を曲と名づけ。損減の見に攝せられ、淸淨所立の法を增惡する義を穢と名づけ。薩迦耶見に攝せられ、眞無我の見を障ふる義を濁と名づく。

淨業とは、是くの如き等の諸の雜染業と相違する類なり。三の淨業を解せば、謂く、善淨の尸羅にして、正直見に攝せらるる身語意業なり。戒を毀犯する見の垢を遠離するが故なり。

三牟尼業とは、謂く、學と無學との所有る無漏の身語意業なり。唯だ諸の牟尼のみ此の業有る

說いて順生受業と名づく。若しは業の此の生に於て造り、無間生を度りて已去に異熟の成熟するを、
說いて、順後受業と名づく。

若し是くの〔如き〕說を作せば、卽ち善く訶怨心經に順ずと爲す。彼の經に言へるが如し、無間業に由り、那落迦の中に於て數數生死に、大苦の異熟を受くと。

復次に、四種の諸業の差別有り。謂く、黑黑の異熟の業と、白白の異熟の業と、黑白黑白の異熟の業と、黑白に非ざる異熟の業にして、能く諸の業を盡すとなり。

黑黑異熟業とは、謂く不善業なり。

染汚に由るが故なり。不可愛の異熟なるが故なり。

白白異熟業とは、謂く三界の善業なり。

不染汚なるが故なり。可愛の異熟なるが故なり。

黑白黑白異熟業とは、謂く欲界繫の雜業なり。

善と不善と雜るが故なり。云何んが一業にして亦善と不善となるや。〔謂く〕此の中、生ずる刹那の相に約して、一種の業を亦善不善なりとは說かず。然るに意業及び方便に約して、總じて一業と說く。是れ此の經の意は、此の二種の若しは黑、若しは白の、互に相似せざるに約して、一種の黑白業を建立するが故なり。

或は業有り、意樂の故に黑なり、方便の故に白なり。或は業有り、方便の故に黑なり、意樂の故に白なり。

意樂の故に黑なり、方便の故に白なりとは、猶し一あり、他を誑さんと、欲して先に其の相を現じ、已を信ぜしめんが爲めの故に惠施を行ひ、乃至、出家するが如しと方便なるが故に黑な

順現法受業とは、謂く、若は業の、現法の中に於て異熟成熟するなり。謂く、慈定より起ち已り、彼の造作に於て、若しは損し、若しは益する〔業〕は必ず現に異熟を得す。慈定從り起つ如く、無諍定と滅盡定と預流果と阿羅漢果と從り起つも亦爾なり。又佛を上首と爲す僧の中に於て、善惡の業を造れば、必ず現に異熟を得す。又有餘の猛利なる意樂の方便所行の善不善の業も、亦現に異熟を得す。

名づけて現法受業と爲す所以は、若し業、此の生に於て作せば、即ち此の生に於て熟するが故に。

順生受業とは、若しは業の、無間生中に於て異熟成熟するなり。

無間生とは、即ち此の生に次ぐ〔生〕なり。

謂く、五無間業なり。

〔五無間業〕等は、能く〔次生に於て〕異熟を得生す。問ふ、若し一無間〔業〕を造らば、無間生中に於て、其の異熟を受く可きや。若し多無間業を造らば、無間生中に於て、云何んが其の異熟を得受すべきや。答ふ、一生中に於て、頓に一切所得の異熟を受くるに過失有ることなし。所以は何んとならば、若し衆多の無間業を造らば、所感の身形は最極めて柔軟にして、〔又〕所感の苦具は衆多にして猛利なり。此れに由りて頓に種種の大苦を受く。

又所餘の善不善業の無間生に於て、異熟熟する者有れば、一切皆順生受業と名づく。

順後受業とは、若しは業の無間生の位に於て異熟成熟するなり。

此の業の中に於て、初熟の復に從ひて順現法受等の名を建立す唯だ此の一位の異熟を受くるのみにはあらず。若しは業、此の生に於て造り、即ち此の生より已去に異熟の成熟するを、説いて順現法受業と名づく。若しは業、此の生に於て造り、無間生從り已去に異熟の成熟するを、

の性なり。
不律儀業とは、謂く、諸の不律儀の者は、或は彼の種姓中に生ずるに由るが故に、或は彼の事業を受持するに由るが故に、期する所現行して彼の業決定するなり。何をか名づけて不律儀者と爲すや。所謂る、羊を屠り、鷄を養ひ、猪を養ひ、鳥を捕へ、魚を捕へ、鹿を獵り、兎を罝り、劫盜し、魁膾し、牛を害し、象を縛り、壇を立てて龍を呪し、獄を守り、讒搆し、好んで損を爲す等なり。羊を屠るとは、活命を欲する爲めに屠養し買賣するなり。是くの如く、鷄猪等を養ふも、其の所應に隨ふ。象を縛るとは、恒に山林に處して野象を調執するなり。壇を立てて龍を呪するとは、龍蛇を呪することを習ひて、戯樂し自活するなり。讒搆とは、離間語を以て他の親しみを毀壞し、持用、活命するなり。或は彼の種姓中に生ずるに由り、或は彼の事業を受持するに由るとは、謂く卽ち彼の〔種姓の〕家に生れ、若しは餘の家に生れ〔て、彼の事業を受持す〕るなり。其の次第の如し。所期現行して彼の業決定すとは、謂く身語の方便を先と爲し、要期を決定して彼の業を現行するなり。是れを不律儀業を名づく。

非律儀非不律儀業とは、謂く、非律儀非不律儀に住する者の所有る善と不善との業なり。若しは布施愛語等の業、若しは毆擊等の業は、律儀と不律儀との攝せざる所なるが故に、非律儀非不律儀と名づく。

又業の差別に三種有り。謂く、順樂受業と順苦受業と順不苦不樂受業となり。

順樂受業とは、謂く、欲界從り、乃し第三靜慮に至る所有る善業なり。

順苦受業とは、謂く、不善業なり。

順不苦不樂受業とは、謂く、第四靜慮已上の所有る善業等なり。

復た次に、業の差別に三種有り。謂く、順現法受業と順生受業と順後受業となり。

答ふ、成就せりと說くべし。而して犯戒と名づく。

問ふ、扇搋半擇迦等は、彼れ鄔波索迦律儀を受くるを遮すと爲すや不や。

答ふ、彼れ鄔波索迦律儀を受くるを遮せず。然れども彼れの鄔波索迦性なることを遮す。比丘比丘尼等の二の出家の衆に親近し承事するに堪へざるが故なり。

扇搋半擇迦が比丘比丘尼等の二の出家の衆に、親近し承事するに堪へざるが故に、彼れに鄔波索迦性を遮する如く、二形も亦爾なり。〔二形は〕男女の煩惱恒に俱に現行し、〔比丘比丘尼等の〕二衆に親近し承事するに堪へざるが故に、別して〔二形を〕說かず。

又半擇迦に五種有り。謂く、生便半擇迦と嫉妬半擇迦と半月半擇迦と灌灑半擇迦と除去半擇迦となり。

靜慮律儀所攝の業とは、謂く、能く犯戒を發起する煩惱の種子を損伏し、欲界の欲を離るる者の所有の遠離と、初二三靜慮の欲を離るる者の所有の遠離とを、是れを靜慮律儀所攝の身語業の性と名づく。

犯戒を發起する煩惱とは、謂く、貪瞋等の〔如き〕欲界所繫の煩惱と隨煩惱となり。能く彼の種子を損伏するとは、謂く、伏と對治との力に由りて、彼の種子を損〔伏〕するなり。欲界の欲を離るるとは、謂く、伏と對治との力に由りて、或は少分欲を離れ、或は全分欲を離るるなり。所有の遠離とは、謂く、彼の犯戒より得る所の遠離の性なり。初と二と三との靜慮の欲を離るるとは、謂く遠分對治の力に由りて、彼の犯戒を發起する煩惱所有の種子として、轉更に衰損せしむるなり。第四靜慮の欲を離るるを說かざる所以は、無色界は麁色無きに由るが故に、略して色戒律儀を建立せざるなり。

無漏律儀所攝の業とは、謂く、已に諦を見たる者の、無漏の作意力に由りて得る所の無漏の遠離戒

卷の第八

決擇分中諦品、第一之三

復た次に、業の差別に三種有り。謂く、律儀業と不律儀業と非律儀非不律儀業となり。〔一〕
律儀業に復三種有り。謂く、別解脱律儀の所攝と、靜慮律儀の所攝と。無漏律儀の所攝となり。
別解脱律儀所攝の業とは、卽ち是れ七衆の受くる所の律儀なり。〔七衆の受くる所の律儀とは〕、謂く、比丘律儀と比丘尼律儀と式叉摩那律儀と、沙彌律儀と沙彌尼律儀と、鄔波索迦律儀と鄔波斯迦律儀と、及び近住律儀となり。
何等の補特伽羅に依止して出家の律儀を建立するや。能く修行して惡行を遠離し、欲行を遠離するに依〔止して出家の律儀を建立す〕るなり。
比丘等の出家の五衆、乃ち能く壽を盡す〔まで〕殺生等の惡行を遠離し、及び、能く非梵行を遠離するに由るが故なり。
何等の補特伽羅に依止して、鄔波索迦律儀と鄔波斯迦律儀とを建立するや。能く壽を盡す〔まで〕惡行を遠離し、欲行を遠離せざるに依る。
彼れの二衆に由りて建立す。壽を盡す〔まで〕欲邪行を離る。非梵行を離るるに非ざるが故なり。
何等の補特伽羅に依止して近住律儀を建立するや。惡行を遠離する能はず、及び、欲行を遠離せざるに依止す。
是の故に彼れ但〔一〕日〔一〕夜近住律儀を制し、爲めに漸漸に倶に修學せしむるが故なり。
問ふ、若し唯鄔波索迦の一分の學處のみを修學せば、說いて鄔波索迦律儀を成就せりと爲すや、〔或は〕說いて成就せずと爲すや。

【一】瑜伽論五十三並に義林章の表無表色章を併せ見るべし。

行業にして、樂受に順ずる者は還りて樂の異熟を受け、苦受に順ずる者は還りて苦の異熟を受け、不苦不樂受に順ずる者は還りて不苦不樂の異熟を受く。

樂と倶なる行業に二種有り。謂く、善と不善となり。其の所應に隨ひ、當來世の苦受と樂受と不苦不樂受とに順じて、還りて能く樂等の異熟を感得す。是くの如く、苦と倶なる行業と、不苦不樂と倶なる行業にも各二種有り。樂等に順ずるに隨ひて樂等の異熟を感ずることは、其の所應に隨ふなり。

是くの如きを名づけて、此の經の密意と爲す。

りて能く苦と倶行する異熟を感得し。不苦不樂と倶なる行業は、還りて能く不苦不樂と倶行する異熟を感得す。故に是の説を作す。

若しは有るが説いて言く、彼彼の丈夫の補特伽羅、是くの如き是くの如き業に隨ひ、若しは作し、若しは增長し、還りて是くの如き異熟を受く。若し此の事有れば、便ち清淨なる梵行を修するに應ぜず。亦正しく諸の苦を盡し、苦の邊際を作すを知る可からず。

何が故に便ち清淨なる梵行を修するに應ぜざるや。諸の煩惱の極めて猛利なる者は、要ず智慧に由り、自勵自策するを以て、憂苦を倶にして禁戒を護持す。若し當來に於て彼の異熟を受くる時、還りて憂苦と倶なれば、禁戒を護持することは義利なかるべし。又他の妻等に於て、喜樂と倶にして梵戒を毀犯し、若し當來に於て彼の異熟を受くる時、還りて喜樂と倶ならば、遠離を精勤するは、卽ち唐捐と爲る。是の故に説いて言く、若し此の事有れば、便ち清淨なる梵行を修するに應ぜずと。

何が故に亦正しく諸の苦を盡し、苦の邊際を作すを知る可からざるや。卽ち是くの如く梵行を修習して〔然も〕苦の異熟を招くに由るが故なり。是の故に世尊は、是くの如く外道が、樂と倶なる行業は還りて樂の異熟を受け、苦と倶なる行業は還りて苦の異熟を受け、不苦不樂と倶なる行業は還りて不苦不樂の異熟を受く、異熟因と異熟果とは、決定して相似せるが故にと邪説するを遮せんが爲めに、是の經を説きたまへり。

又爲めに是くの如き正説を開許したまへり。謂く、樂と倶なる行業にして、樂受に順ずる者は還りて樂の異熟を受け、苦受に順ずる者は還りて苦の異熟を受け、不苦不樂受に順ずる者は不苦不樂の異熟を受く。苦と倶なる行業にして。樂受に順ずる者は還りて樂の異熟を受け、苦受に順ずる者は還りて苦の異熟を受け、不苦不樂受に順ずる者は還りて不苦不樂の異熟を受く。不苦不樂受と倶なる

此の九因に由りて强力業を發す。

田とは、謂く大功德を具し、福田と爲すに堪ふるなり。

事とは、謂く施す所の物多くして而も精妙なるなり。

自體とは、謂く戒は施よりも勝れ、修は戒よりも勝る、是くの如き等なり。

所依とは、謂く已離欲の者が諸の福業を作す〔を言ふ〕。

作意とは、謂く猛利なる淨信と倶行する作意なり。

意樂とは、謂く涅槃を希求する所有る意樂なり。

助伴とは、謂く更に廣く餘の福業の事を修習する共相の攝受なり。

多修習とは、謂く數數修習し、或は數數尋思する〔を言ふ〕。

多の衆生と共に行ずる所とは、謂く自ら作し、他に敎へ、〔他の〕作すを見て隨喜す〔るを言ふ〕。

此れと相違する、是れ劣力業なり。

世尊の說き給へるが如し、若しは有るが說きて言く、彼彼の丈夫の補特伽羅が、是くの如き是くの如きの業に隨ひて、若しは作し、若しは增長し、還りて是くの如き是くの如きの異熟を受く。若し此の事有れば、便ち淸淨なる梵行を修するに應ぜず。亦正しく諸の苦を盡し、苦の邊際を作すを知る可からず。

若しは有るが說きて言ふ、彼彼の丈夫の補特伽羅、是くの如き是くの如き順所受の業に隨ひて、若しは作し、若しは增長し、還りて是くの如き是くの如き順所學の異熟を受く。若し是の事有れば、淸淨なる梵行を修習するに應ず。又亦正しく諸の苦を盡し。苦の邊際を作すを知るべし。

是くの如き經の言、何の密意が有るや。此の中、佛の意は、是くの如き邪說を遮止せんと欲するが爲めなり。謂く、樂と倶なる行業は、還りて能く樂を倶行する異熟を感得し、苦と倶なる行業は、還

る能はざるなり。
又對治力の劣なる補特伽羅の故思所造の諸の不善業を、諸の善業に望めて皆强力と名づく。
又故思造業の異熟決定の不斷不知なるを强力業と名づく。
此の意の中に說かく、一切の善不善の業は差別有ること無し。但だ異熟決定して、諸の聖道力の斷ずる〔能は〕ざる所のものを、皆强力業と名づく。
又欲界繫の諸の不善業の性は皆是れ强なり。
　衆多の煩惱隨煩惱等を助伴と爲すが故なり。
又先に串習せる所のものを强力業と名づく。
　數ゝ熏習を相續せるを以ての故なり。
又强位に依る〔が故に〕强力業と名づく。
　盛年に處して造る所の諸業の猛利なるは、執著の淨信に發さるゝに由るが故なり。
又〔對〕治すべからざる者の所造の諸業を强力業と名づく。無涅槃法に由る〔が故なり〕。
　無涅槃法に由るとは、〔所造の〕所有る諸業は、對治力の能く伏する所に非ざるが故なり。
又田に由るが故に强力業を發す。
　謂く、母等を害する業なり。
又心の加行に由るが故に强力業を發す。
　謂く、無上菩提に於て强き大願を發す等なり。此の所生の業の其の力の猛盛なるを强力業と名づく。
復た次に、九種の因に由りて强力業を發す。謂く、田の故に。事の故に。自體の故に。所依の故に。作意の故に。意樂の故に。助伴の故に。多修習の故に。多の衆生と共に行ずる所なるが故なり。

虛誑語業道は貪瞋癡を方便と爲す。〔貪瞋癡〕三種の中に於て〔所應に〕隨ひて一に由りて究竟す。妄語の如く、雜間語と綺語とも亦爾なり。
邪見業道は貪瞋癡を方便と爲し、癡に由りて究竟す。
復次に、經に言へるが如き、共業有り不共業有り、强力業有り劣力業有り。
云何んが共業なるや。若しは業、能く諸の器世間をして差別せしむる〔を言ふ〕なり。
云何んが不共業なるや。若しは業、能く有情世間をして種種差別せしむる〔を言ふ〕なり。
或は復た業有り、諸の有情をして展轉して增上せしめ、此の業力に由りて、諸の有情は更に互に相望めて增上緣と爲ると說く。彼れ互に增上力有るを以ての故に、亦共業と名づく。
　此の勢力に由り、諸の有情の類は、展轉して互に諸の心心法變異の生因と爲る。是の故に經に言く、是くの如き有情と餘の有情と互に相見ること等しく、而して受用せずしては易く得べからず。
云何んが强力業なるや。謂く、對治力の强き補特伽羅なるが故に、思所造の諸の不善業は、〔强き〕對治力に由りて攝伏せらる。故に當に那落迦〔の果〕を受くべき業をして、轉じて現法受を成ぜしむ。〔更に又〕應に現法受業をして轉じて受けざらしむべし。此の業を强力と名づくる所以は、能對治の業力の强きに由るが故なり。
　此の能治の業を所治の業に望むるに、其の力强勝にして、彼の〔所治の業力〕所感の諸の苦の異熟をして、轉變して滅せしむるが故に〔强力業と名づく〕。
又故思所造の一切の善業を不善業に望めて、對治力强きを皆强力と名づく。此の業に依るが故に、薄伽梵は說きたまはく、我が聖弟子、能く無量廣大の業を以て善く其の心を熏ず。〔故に〕諸の造作せらるる有量の業、此の業は〔其の果を〕牽引する能はず、留住する能はず、亦彼の數に墮在せしむ

眞實義愚に由りて福〔行〕と不動行とを發すとは、眞實義とは卽ち四聖諦なり。彼〔の四聖諦〕に於て愚癡なるを眞實義愚と名づく。未だ諦を見ざる者は、善心を起すと雖も、彼の隨眠に隨縛せらるゝに由るが故に、亦愚癡と名づく。彼の〔隨眠の〕勢力に由り、三界の苦に於て實の如く知らず、便ち能く後有の因性なる福〔行〕と不動行とを起す。已に諦を見たる者は、能く此の業を發すには非ず。眞實義愚無きが故に。是の故に彼の業は、此〔の眞實義愚〕に因りて生ずと說く。

復た次に殺生業道は、貪瞋癡を方便と爲し、瞋に由りて究竟す。殺生の如く、麁惡語と瞋恚との業道も亦爾なり。

殺生は貪を方便と爲すとは、皮肉等の爲めなるが故なり。瞋を方便と爲すとは、怨を除かんとする等の爲めなるが故なり。癡を方便と爲すとは、祠祀等の爲めなるが故なり。瞋に由りて究竟すとは、無慈悲を離るれば、必ず他の有情を殺害せざるが故なり。麁惡語等は、理の如く應に知るべし。

不與取の業道は、貪瞋癡を方便と爲し、貪に由りて究竟す。不與取の如く、欲邪行と貪欲とも亦爾なり。

問ふ、貪欲等は、云何んぞ貪等を用つて方便と爲すや。答ふ、前に說けり、貪欲業道は、他の資財に於て決定して執じて己が有と爲すを性と爲すと。若し卽ち此の資財に於て、先に餘の貪を起し、加行追求して己が有と爲さんと欲せば、卽ち此れを立てゝ貪の方便と爲す。若し先に瞋を起せば、餘は此れ有ること勿し。是れ瞋の方便なり。若し先に癡を起せば、他物に於て取りて己が有と爲し、過失有ること無しと謂ふ。是れ癡の方便なり。是くの如く所餘は理の如く應に知るべし。

或は業有り。多業力に由りて多身を牽得す。

　謂く多刹那の業が更に相資待し、展轉して多生の異熟の種子を長養するが故に。

問ふ、若し一有情にして多業を成就せば、云何んぞ次第に〔多生の〕異熟果を受くるや。

答ふ、彼の身中に於て重き者先づ熟す、〔次には〕或は將に死せんとする時現在前する者〔熟し〕、〔次には〕或は先に數、〔慣〕習せし所の者〔熟し〕、〔次には〕或は最初に行ぜし所の者の彼の異熟先づ熟す。

經に言へるが如き、三種の業有り。謂く、福業と非福業と不動業となり。

福業とは、謂く欲界繫の善業なり。

非福業とは、謂く不善業なり。

不動業とは、謂く色無色界繫の善業なり。

　問ふ、何が故に色無色〔界〕繫の善業を不動〔業〕と名づくるや。答ふ、欲界中の餘趣の圓滿せる善不善の業の如きは、緣に遇へば轉じて餘趣の異熟を得す。色無色〔界〕繫の業は、是くの如き〔動轉の〕事有るに非ず。所受の異熟の界地決定せるが故なり。是の故に、異熟の與(ため)に移轉すべからざるに約して、名づけて不動と爲す。又定地の攝なるが故に、說いて不動と爲す。

問ふ、經の中に無明は行に緣たりと說けるが如き、福と非福と及び不動との若(ごと)き、云何んぞ福と及び不動行とは無明を緣として生ずるや。

答ふ、二種の愚有〔るに由るが故〕なり。一には異熟愚なり。二には眞實義愚なり。異熟愚に由るが故に非福行を發し、眞實義愚に由るが故に福と及び不動行とを發す、

　異熟愚に由りて非福行を發すとは、彼れ〔異熟愚〕は一向に是れ染汚の性なるに由り、無明の合する時、必ず異熟の行相を信解して、正見することを容受せざるが故なり。

由るが故に癡轉じて猛盛なり。諸の邪見は、癡の增上なるが故なり。是れ彼の等流果なり。
極めて修習せる殺生業に由るが故に、一切の外事は光澤に乏少し。不與取なるが故に霜雹に遭ふこと多し。欲邪行なるが故に諸の塵坌多し。妄語なるが故に諸の臭穢多し。離間語なるが故に〔其の地〕高下險阻〔にして行き難し〕。麁惡語なるが故に。其の地は鹹鹵、磽确、穢惡なり。綺語なるが故に時候乖變す。貪欲なるが故に〔所有の果樹に結ぶ〕果實尠少なり。瞋恚なるが故に果味辛苦なり。邪見なるが故に果味辛苦なり。或は全く果無きなり。是れ彼の增上果なり。
又十善業道の異熟果とは、謂く人天趣の中に於て、人天の異熟を受くるなり。
等流果とは、謂く卽ち彼の處に於て、各其の相に隨ひて自身の衆具の興盛なるを感得するなり。
增上果とは、謂く卽ち彼の處に於て、各其の相に隨ひて外事の興盛なるを感得するなり。
　不善業道の如く、異熟果等の三種の差別を建立す。是くの如く有漏善の業道の、人天中に於ける三果の差別は、其の所應の如く、亦當に建立すべし。
又善と不善との業は、善趣と惡趣との中に於て、異熟を感生する時、二種の差別有り。謂く、招引業と圓滿業となり。招引業とは、謂く此の業に由りて能く〔總報の〕異熟果を牽くなり。圓滿業とは、謂く此の業に由り、生れ已りて、愛不愛の〔別報の〕果を領受するなり。
復た次に、或る業有り。一業力に由りて一身を牽得す。
　謂く、一業力が一生の異熟の種子を長養するに由るが故なり。
或る業有り。一業力に由りて受身を牽得す。
　謂く、一業力が多生の異熟の種子を長養するに由るが故に。
或は業有り。多業力に由りて一身を牽得す。
　謂く、多業が刹那に數數一生の異熟の種子を長養するに由るが故に。

〔此の期〕限を越えずして必ず此の業を造る。乃し諸佛世尊の大神通力に至るも、亦障を爲し其をして造らざらしむること能はず。因の決定力に隨ひ、果相續して轉變するが故なり。

受異熟決定とは、先に說ける所の故思造業の如し。

分位決定とは、謂く現法受等の分位決定の業なり。此の業に由り、現法の中に於て必定して異熟を受くるが如し。此の業に由り、必ず異熟を受生し、此の業に由り、必ず後の異熟を受く。

又十不善業道の異熟果は、三惡趣の中に於て、下中上の品〔類〕に隨ひて傍生と餓鬼と那落迦との異熟を受く。

等流果は、各其の相に隨ひ、人趣の中に於て自身の衆具の衰損するを感得するなり。

謂く、惡趣從り沒して後人中に生れ、殺盜等に由り、各其の相に隨ひ、自身の衆具の衰損するを得ず。所謂壽命短促にして常に貧窮なる等は、其の所應なるが如し。

增上果は、各其の相に隨ひ、所有る外事の衰損することを感得するなり。

謂く、殺生等は、各其の相に隨ひ、稼穡等の外事の衰損することを感ず。所謂外具の光澤に乏少しきは、是れ殺生の增上果なり。是くの如き等なり。

經に言へるが如き、

一切の十不善業道の修習に於て、多く修習するが故に、那落迦と傍生と餓鬼とに生ず。是れ何の異熟果なり。

若し此の人の同分中に來ることを得れば、殺生に由るが故に今短壽を得す。不與取なるが故に財物乏少しきなり。欲邪行なるが故に妻貞良ならず。虛誑語に由るが故に多く誹謗を被る。離間語なるが故に親友乖離す。麁惡語なるが故に恒に不如意の聲を聞く。綺語に由るが故に言威肅ならず。貪欲に由るが故に貪轉じて猛盛なり。瞋恚に由るが故に瞋轉じて猛盛なり。邪見に

故思を發起して不善業を行ずるなり。

他所勸請故思造業とは、猶し如し一有り、欲樂せずと雖も、他の勸請に因り、他の引導に因りて、執じて利益と爲し、故思を發起して不善業を行ずるなり。

無所了知故思造業とは、猶し如し一有り、得失を了せず執著する所無く、所作を欲するに隨ひ、故思を發起して不善業を行ずるなり。

根本執著故思造業とは、猶し如し一有り、貪瞋等の諸の不善根の爲め、其の心を纒蔽して猛利に執著し、故思を發起して不善業を行ずるなり。

顚倒分別故思造業とは、猶し如し一有り、不平等因の〔顚倒の〕見に依りて邪法を愛樂し、當來の可愛の異熟を求めんが爲め、故思を發起して不善業を行ずるなり。

此の五の中に於て、根本執著故思造業と顚倒分別故思造業との此の二種は、若しは作り、若しは增長するとき、異熟を受けざるには非ず。

所以は何ん。前の三の故思作業は、作ると雖も增長せず。輕きが故に必ず異熟を受けず。後の二の故思作業は、若しは作り、若しは增長するとき、重きが故に必ず定んで異熟を受く。作るとは、謂く諸の業を起造し、其をして現行せしむるなり。增長とは、謂く習氣をして增益せしむるなり。

〔習氣をして增益せしむるとは〕、阿賴耶識の中に於て、異熟の種子を長養するが故なり。

經に言へるが如き、決定受業とは云何ん。決定とは、謂く作業決定と受 異熟決定と分位決定となり。

作業決定とは、宿業力に由り、決定して異熟の相續することを感得するなり。此の生の中に於て必ず此の業を造る。何を以ての故に。應に此の業を造るべき、期限決定せるが故に、終に

於けると」別異なる想と、〔此の〕別異〔なる想〕を說んと欲するなり。究竟とは、謂く時衆と及び對言者との領解なり。

離間語の事とは、謂く諸の有情の、若しは和合すると、若しは和合せざるとなり。意樂とは、謂く卽ち彼れに於て、乖離と及び不和合とを起す〔ことを樂ふ〕意〔欲〕なり。究竟とは、謂く破する所の領解なり。

麁惡語の事とは、謂く諸の有情に能く損害を爲すなり。究竟とは、謂く麁惡の言を發するなり。

綺語の事とは、謂く能く不饒益の義を引攝するなり。究竟とは、謂く正しく此の言を發するなり。

貪欲の事とは、謂く他に攝〔屬〕する所の資財なり。意樂とは謂く此の想と、及び愛樂とを起すなり。方便とは、謂く思量し籌度して己が有と爲んと欲するなり。究竟とは、決定して執じ己が有と爲すなり。

瞋恚の事とは、謂く諸の有情に能く損害を爲すなり。究竟とは、謂く決定して害を加ふる等なり。

邪見の事とは、謂く實有の義なり。意樂とは、謂く實有に於て、非有の想と及び彼の欲樂とを起すなり。究竟とは、謂く決定して誹謗するなり。

經に故思業と言へるが如き、云何んぞ名づけて故思造業と爲すや。

略して五種有り。

謂く他所敎勅故思造業と他所勸請故思造業と無所了知故思造業と根本執著故思造業と顚倒分別故思造業となり。

他所敎勅故思造業とは、猶し如し一有り、欲樂せずと雖も、他の强力に敎勅せらるるに因りて、

又殺生等は應に五門を以て其の相を分別すべし。謂く、事なるが故に。意樂なるが故に。方便なるが故に。煩惱なるが故に。究竟なるが故なり。

殺生等の事とは、謂く有情數にもあれ非有情數にもあれ、其の所應の如く、此の處所に依りて殺生等を起すなり。意樂とは、謂く、此の事に於て此の〔事に就いての種種なる〕想の意樂を起し、及び當に此の業道を作さんとする意樂を起すなり。方便とは、謂く、〔意樂に隨ひて方便を起し〕此の〔方便の〕作用、或は自にもあれ或は他にもあれ、身と語と意とを發すなり。煩惱とは、謂く、貪と瞋と癡となり。其の所應の如く、或は總〔にして貪瞋癡一切總じて具はり〕、或は別〔にして或は貪或は瞋等各別〕なるなり。究竟とは、彼彼の方便に由り、是くの如き是くの如き業道圓滿す、或は爾の時に於て、或は後の時に於て〔圓滿〕するなり。

此の義の中に於て、殺生の事とは、謂く有情數なり。意樂とは、謂く此の〔有情數に就きての〕想と、及び必ず害せんとの意なり。方便とは、謂く害せんが爲めの故の刀杖等の如きなり。煩惱とは、謂く貪等なり。究竟とは、謂く彼の衆生、方便に由るが故に、或は無間に死し、或は後時に死するなり。不與取等の事と、及び究竟とは當に廣く分別すべし。餘は理の如く應に思ふべし。

不與取の事とは、謂く、他に攝〔屬〕する所の、若しは有情數〔若しは〕非有情數なり。〔乃至〕究竟とは、謂く取りて己が有と爲すなり。

欲邪行の事とは、謂く所行に非ざる女なり。或は所行なりと雖も、分に非ず、處に非ず、時に非ず、量に非ず、及び理に應ぜざる一切の男と、及び不男となり。究竟とは、謂く兩兩交會するなり。

虛誑語の事とは、謂く見聞覺知と、不見と不聞と不覺と不知となり。意樂とは、謂く〔見等に

俱ならざるが故なり。然るに諸の煩惱の麁重に從りて斷を得するを斷と爲す。是くの如き是くの如き品の麁重生ずれば、是くの如き是くの如き品對治す。若し此の品の對治生ずれば、卽ち此の品の麁を滅す。平等平等なることは、猶し世間の明生ずれば暗滅するが如し。此の品の離繫に由るが故に、未來の煩惱をして不生法の中に住せしむ、是を名づけて斷と爲す。）

[三]復た次に煩惱增上の所生の業とは云何ん。謂く、若しは思業、若しは思已業、總じて業相と名づく。又業に五種有り。謂く、取受業と作用業と加行業と轉變業と證得業となり。

取受業とは、謂く眼等の能く色を見る等なり。作用業とは、謂く地等の能く任持する等なり。或は復諸法の自相の所作なり。謂く、所有の色の質礙の變壞する、是の如き等なり。加行業とは、謂く意解を先と爲し、身業等を起すなり。轉變業とは、謂く金師等の莊嚴の具を造る等なり。證得業とは、謂く聖道等の涅槃を證する等なり。

今此の義の中、意多く加行業を分別す。

頗(かた)はら亦兼ねて證得と作用との二業有り。

思業とは云何ん。謂く、福業と非福業と不動業となり。思已業とは云何ん。謂く、身業と語業と意業となり。又此の身と語と意との三業は、或は善、或は不善なり。不善とは、卽ち十不善業道なり。謂く、殺生と不與取と欲邪行と、妄語と離間語と麁惡語と綺語と、貪欲と瞋恚と邪見となり。善とは、卽ち十善業道なり。謂く、殺生を離るるより、乃し雜穢の語を離るるに至ると、〔及び〕無貪と無瞋と正見となり。

今此の中に於て、唯業道のみを以て身等の業を顯はすことは、經に隨順せんが爲めに、勝れたるに就きて說く。彼の方便等〔の業〕も亦身等の業に攝めらるるが故なり。前の三と中の四と後の三との業道は、其の次第に隨ひて、是れ身と語と意との業相なり。

【三】以下は業雜染に關して說く。瑜伽論卷九、卷十、卷八十九、卷九十等並び見るべし。

對治を得すとは、謂く未生の者を生ぜしめざるが故に。已生の者を斷ぜしむるが故に、對治消を得す。

未生と已生との煩惱をして、〔未生は〕生ぜしめず、〔已生は〕永斷せしめんが爲め、〔對〕治道を修するが故なり。

問ふ、何等かの作意能く斷ずるや。答ふ、總緣の作意もて、一切の法は皆無我の性なりと觀じて能く煩惱を斷ずるなり。

總緣の作意とは、謂く、合して一切法の共相を緣じて作意を行ずるなり。問ふ、若し唯だ總じて諸法の無我を緣ずる智のみ能く煩惱を斷ずるならば、

何が故に無常等の行を顯示するや。

答ふ、煩惱を斷ぜんが爲めの故に彼の行を修習するに非ず。

但だ無我の行を修治するが爲めの故なり。

無常の行に依りて苦の行を引得し、苦の行に依止して無我の行を引くに由る。經に言へるが如し、無常なるが故に苦なり。苦なるが故に無我なり。是の故に此の無我の行を建立して、無上と爲す。無上に三種有り。謂く、智無上と行無上と解脫無上となり。智無上とは、謂く無我智なり。此の智を得し已れば、更に所求無きが故なり。行無上とは、謂く樂速通行なり。一切の行の中にて最第一なるが故なり。解脫無上とは、謂く無學の不動解脫なり。一切の解脫に於て最も勝れたりと爲すが故なり。此の三無上は、其の次第の如く見〔道〕と修〔道〕と無學道とに依止して說く。

問ふ、何に從りて斷を得するや。

答ふ、過去の從りせず已に滅するが故なり。未來從りせず未生なるが故なり。現在從りせず、道と

香物を以て熏ずれば、panの臭氣方に盡く。是くの如く、佛の聖弟子、見道を以て分別の身見の垢を永斷すと雖も、若し未だ修道を以て、熏習の相續するを斷ぜざれば、無始より串習せる虚妄の執著の習氣に引かるる不分別事の我見隨轉す。復た修道を以て、熏習相續して彼れ方に永滅す。

俱生の邊執見とは、謂く斷見の所攝なり。此の見に由るが故に、涅槃界に於て其の心退轉し、大怖畏を生ず。謂く、我よ我は今何れの所に在りやと。

貪等の煩惱は修道の所斷なりとは、謂く見品の所攝を除く。

色界の修道所斷に五有り、瞋を除く。色界の如く無色界も亦爾なり。是の如く修道所斷の煩惱に、總じて十六有り。

斷とは云何ん。謂く、此くの如き差別の斷は此れ作意斷に由る。此れに從ひて斷を得す。此くの如き差別の斷とは、謂く遍知なるが故に。遠離なるが故に。對治を得するが故なり。

遍知とは、謂く彼の因緣事遍智と自體遍智と過患遍智となり。

彼の因緣事遍智とは、謂く煩惱の隨眠未だ永斷せざるを知るが故なり。是くの如き等は前に說けるが如し。自體遍智とは、謂く此の煩惱生じ已り、極めて心性を惱亂するを知る。過患遍智とは、謂く此の煩惱は能く自害を引き、能く害他を引き、能く俱害を引き、能く現法の過の生じ、能く後法の過を生じ、能く現法と後法との過を生じ、能く有情をして此の所生の身心の憂苦を受けしむるを知る。

遠離とは、謂く、彼れ暫く生ずと雖も、而も堅執ならず。

彼の因緣事遍智等の三種の遍智に由り、彼の已生の一切の煩惱に於て心堅執ならず、方便して遠離す。

又貪と瞋と慢とは、欲界に於て一分の事を緣じて轉ず。欲界に於けるが如く、色〔界〕と無色界とに於けるも亦爾なり。

慢は一分の事を緣じて轉ずるとは、一分に隨ひて高擧生ずるが故なり。

所餘の煩惱は一切の處に於て、遍く一切の事を緣じて轉ず。

衆とは云何ん。謂く、二衆の煩惱なり。見道所斷の衆と、修道所斷の衆となり。

欲界の見苦所斷は、具に十煩惱あり。見苦所斷の如く、見集と〔見〕滅と〔見〕道との、所斷も亦爾なり。

若し此れに迷ひて邪行を起せば、即ち見に此れは斷ぜらる。問ふ、若し此れを緣じて境と爲さば、即ち此れに迷ひて邪行を起すや。答ふ、必ずしも爾らず。無漏を緣じて境と爲せば、煩惱は唯だ有漏の事に於てのみ隨增するが故なり。若し是の處ならば、是れ彼が因緣と及び所依處となり。何れ此れに迷ひて邪行を起す。是れ見苦所斷なり。見苦所斷の如く、見集と〔見〕滅と〔見〕道との所斷も、亦爾なり。其の所應に隨ふ。

色界には見〔所斷〕に四種の所斷あり。各〻九の煩惱有り、瞋をば除く。色界の如く無色界も亦爾なり。是くの如く見道所斷の煩惱の衆は、總じて一百一十二有り。

欲界の修所斷に六煩惱あり。謂く、倶生の薩迦耶見と邊執見と、及び貪と瞋と慢と無明となり。

何等かを名づけて修所斷の倶生の薩迦耶見と爲すや。謂く、聖弟子見道已に生ずと雖も、而も此れに依止するが故に我慢現行す。經に言へるが如し、長老駄索迦よ、當に知るべし、我れ五取蘊に於て我と我所とを見ず。然るに五取蘊に於て我慢と我欲と我隨眠と有りて、未だ永斷せず、未だ遍知せず、未だ滅せず、未だ吐かず。猶し乳母の垢膩の衣有るが如し。鹵土等の水を以て浣濯し、極めて垢を離れしむると雖も、若し未だ香熏せずんば、臭氣隨ひて轉じ。復た種種の

の果の無きを見て欣と慼とを生ずるが故なり。苦と樂とに相應せざる所以は、一切の見は皆意地に在るに由るが故なり。

疑は欲界に於て、憂と捨とに相應す。色〔界〕と無色界とに於ては、所有の受に隨ひて皆相應す。欲界にて喜と相應するに非ざる所以は、不決定の心、若し未だ息滅せざれば喜生ぜざるが故なり。色界中の疑が上の靜慮を疑ふは、喜と樂との定力に引持せらるるに由るが故に、亦隨ひて轉ずることを得。是の故に彼に於ても亦喜と樂とに相應す。

無明に二種有り。謂く、相應と不共となり。相應無明とは、一切の煩惱相應するが故に。若し是の處に於ては、所有の受に隨ひて皆相應することを得。不共無明は、欲界に於ては憂と捨とに相應し、上界に於ては所有の受に隨ひて皆相應することを得。

〔不共無明が欲界に於て〕喜と樂とに相應し相應せざる理は、應に疑に說けるが如し。

何が故に、諸の煩惱は皆捨と相應するや。一切の煩惱は、中庸の位に墮して方に息沒するを以ての故なり。

所以は何ん。煩惱生起し、展轉相續して漸漸に微薄なり。勢力將に盡きんとして處中の位に墮す。此の位の中に於て、必ず捨受と相應す。

又貪は欲界に於ては、六識身に在り。貪の如く、瞋と無明とも亦爾なり。貪は色界に於ては四識身に在り。

彼れ〔色界〕には鼻・舌・識無きが故なり。

無色界に於ては唯意識身にのみ在り。貪の如く無明も亦爾なり。慢と見と疑とは、一切の處に於て唯だ意識身にのみ在り。

彼れは稱量等の門に於て轉ずるに由るが故なり。

苦と相應するとは、五識身に在り。憂と相應するとは、第六識に在り。喜樂と相應せざる所以は、此れに由りて慼行轉ずるが故なり。瞋は能く自の相續を逼能するが故に慼行と名づく。捨と相應するとは、一切處に於てなり。前に說けるが如し。

慢は欲界に於て、喜〔受〕と捨〔受〕とに相應す。初と二との靜慮に於ては、樂〔受〕と喜〔受〕と捨〔受〕とに相應す。第三靜慮に於ては、樂〔受〕と捨〔受〕とに相應す。已上は唯だ捨〔受〕とのみ相應す。

慢が欲界に於て樂と相應せざるは、五識無なるを以ての故なり。若し爾らば、初と二との靜慮に於て、云何んが樂と相應するや。意地と樂と相應するが故に過無し。云何んが彼れに於て、意地と樂と〔相應すること〕有るや。彼の地に喜と樂と有りと說けるに由るが故なり。經に言へるが如き、云何んが喜と爲すや。謂く、已轉依の者は轉識に依り、心悅び、心踊り、心適ひ、心調ふ。安適の受にして受の所攝なり。轉識に依るとは、卽ち意識に依るなり。三摩呬多の位に於ては餘の識無きが故なり。云何んが樂と爲すや。謂く、已轉依の者は阿賴耶識に依りて受の所依を攝し、所依怡悅なり。安適受は受の所攝にして、此の經の意に說ける樂受は、初と二との靜慮の生ずるに依る時、是くの如き心心法の聚と相應す。欣踊の行に由り、還りて此の聚をして皆踊悅を得せしむ。又所依の阿賴耶識をして、自體を安樂怡適ならしむ。此の樂受に由りて二の事を作すが故に。體は是れ一なりと雖も二種を建立す。若しは喜、若しは樂なり。是の故に此の相應の慢に、樂と喜と相應すると說く。

慢の如く、薩迦耶見と邊執見と見取と戒禁取とも亦爾なり。

邪見は欲界に於て、憂と喜と捨とに相應す。色〔界〕と無色界とに於ては、所有の受に隨ひて皆相應す。

云何んが邪見は欲界に於て、憂と喜とに相應するや。謂く、先に妙行と惡行とを造れる者、此

諸見の過失に於て、取を第一及戒禁清淨と爲すに由るが故なり。

疑は對治に迷ひて邪行を起す。

諸諦の中に於て二僻を成ずるが故なり。

無明は一切に迷ひて邪行を起す。又十煩惱は皆苦と集とに迷ひて諸の邪行を起す。是れは彼れが因緣と所依處となるが故なり。

所以は何ん。苦集の二諦は、皆是れ十種の煩惱の因緣なり、又依處と爲る。是の故に一切此の因緣と依處とに迷ひて、諸の邪行を起す。

又十煩惱は、皆滅と道とに迷ひて、諸の邪行を起す。此れに由りて、能く彼の怖畏を生ずるが故なり。

所以は何ん。煩惱の力に由りて生死に樂著し、淸淨の法に於て縣崖の想を起して大怖畏を生ず。又諸の外道は滅〔諦〕と道諦とに於て、妄りに種種の顚倒分別を起す。此の故に十迷は、皆滅と道とに迷ひて諸の邪行を起す。

界とは云何ん。謂く、瞋を除く餘の一切は、三界繫に通ず。瞋は唯だ欲界繫のみなり。

違損の境を緣じて生ずるが故なり。

又貪は、欲界に於ては樂〔受〕と喜〔受〕と捨〔受〕と相應す。欲界に於ける如く、初と二との靜慮に於ても亦爾なり。第三靜慮に於ては樂〔受〕と捨〔受と〕に相應す。已上は唯だ捨〔受〕とのみ相應す。

貪は欲界に於て樂と相應するとは、謂く五識身に在り。喜と相應するとは、意識身に在り。捨と相應するとは、一切處に在り。相續の末位に於て、憂苦と相應せざる所以は、此れに由りて欣行轉ずるが故なり。

瞋は苦〔受〕と憂〔受〕と捨〔受〕とに相應す。

諸の有情をして、生死の本行の大樹の稠林に處して、出離すべきを難からしむ。
是の故に貪等を說いて稠林と名づく。
拘礙に三有り。謂く、貪と瞋と癡となり。貪と瞋と癡とに依止するに由るが故に、身と財とを顧戀して覺了する所無く處の憒鬧を樂しみ、少善法を得して便ち厭足を生ず。此れに由り、諸の善法を修すること能はざるが故に、拘礙と名づく。

貪と瞋と癡とに依りて身財等を顧み、有情を拘礙して自在に諸の善を修することを得ざらしむるが故なり。又此こに身等を顧戀するは、即ち五種の心拘礙に依りて說く。何等をか五と爲す。謂く、身を顧戀すると、諸の欲を顧戀すると、相雜住するを樂ふと、敎誡と敎授とに隨順するを闕けると、諸の善品に於て少を得て足れりと爲すとなり。心を拘礙するが故に心拘礙と名づく。

諸の是くの如き等の煩惱の義門、差別無量なり。境界と及び見とに迷ひて邪行を起す。
邪行とは、謂く、貪と瞋との二の煩惱なり。

修道の所斷と見道の所斷とにして、其の次第に隨ふ。貪瞋の二種は、少淨相と及び相違相とを緣じて境界と爲すが故に、境界に迷ふと名づく。亦有情を緣じて貪瞋を起すと雖も、然も境界門に依りて起すが故に、亦境界に迷ふと名づく。

慢は有情と及び見とに迷ひて邪行を起す。

下劣等に於て、己の勝を計する等き行を起すを以て、有情門に於て邪僻轉ずるが故なり。

薩迦耶見と邊執見と邪見とは、所知の境に迷ひて邪行を起す。

增益と損減との門に依ることは、其の所應の如し。

見取と戒禁取とは、諸の見に迷ひて邪行を起す。

ず、諸の相に執著し、隨好に執著す。相と及び隨好とに執著するに由りて身心を燒惱す。故に名づけて熱と爲す。

不如正理に妄に相好に執じ身心を燒くが故なり。

惱に三種有り。謂く、貪と瞋と癡となり、貪と瞋と癡とに依止するに由るが故に、彼彼の處に隨ひて愛樂し耽著す。彼れ若し變壞すれば、便ち愁歎を增す。種種の憂苦熱惱に觸れらるるが故に、名づけて惱と爲す。

色等の諸の可樂の事に於て深く愛著し已るに由り、彼れ若し變壞すれば、是れにより諸の有情、便ち種種の愁歎等の苦の爲めに惱亂せらるるが故なり。

諍に三種有り。謂く、貪と瞋と癡となり。貪と瞋と癡とに依止するに由るが故に、刀杖を執持し、諸の戰諍を興し、種種に鬪訟す。是の故に貪等を說いて名づけて諍と爲す。

熾然に三有り。謂く、貪と瞋と癡となり。貪と瞋と癡とに依止するに由るが故に、非法貪の大火の爲めに燒かる。

非法貪とは、謂く貪に隨ひて不善の業道に著するなり。

又不平等貪の大火の爲めに燒かる。

不平等貪とは、謂く非法非現に境界を貪求するなり。又邪法の大火の爲めに燒かる。邪法とは、謂く諸の外道の惡說の法律なり。非法貪等を以て能く身心熾然の大火を發す。火の熾然するが如し。

故に熾然と名づく。

稠林に三有り。謂く、貪と瞋と癡となり。貪と瞋と癡とに依止するに由るが故に、諸の生死の根本行の中に於て染著を興し、諸の有情をして種種の身を感じ、五趣に流轉せしむ。

惡行に三有り。謂く、貪と瞋と癡となり。貪と瞋と癡とに依止するに由るが故に、恒に身と語と意との惡行を行ずるが故に、惡行と名づく。

貪と瞋と癡とは、能く殺生等の諸の不善の行を引くに由るが故なり。

又卽ち此の貪瞋癡門に依り、廣く無量の惡と不善の行とを生ずるが故に、三不善根を建立す。所以は何んとならば、諸の有情は、世間の所有を愛味するを因と爲すを以て、諸の惡行を行ず。

財利を貪求して惡行を行ずるが故なり。

世間の怨相を分別するを因と爲して、諸の惡行を行ず。

瞋恚を懷くに由り、他の過を忍ばずして多く惡を行ずるが故なり。

世間の邪法に執著するを因と爲して、諸の惡行を行ず。

愚癡を懷くに由りて顚倒の見を起し、祠と祀等に因りて諸の惡を行ずるが故なり。

是の故に此の貪と瞋と癡とを亦惡行と名づけ、亦不善根と名づく。

漏に三種有り。謂く、欲漏と有漏と無明漏となり。心をして連注し、流散して絕えざらしむるが故に、名づけて漏と爲す。此れ復た云何ん。外門に依りて流注するが故に欲漏を立て、內門に依りて流注するが故に有漏を立て、彼の二の所依門に依りて流注するが故に無明漏を立つ。

心をして連注し、流散して絕えざらしむ、是れ漏の義なり。

匱に三種有り。謂く、貪と瞋と癡となり。貪と瞋と癡とに依止するに由るが故に、有と及び資生の具とに於て、恒に追求を起して厭足有ること無く、常に貧乏衆苦の爲めに惱まさるるが故に、故に匱と名づく。

貪と瞋と癡とを以て、能く身心をして恒に乏短ならしむるが故なり。

熱に三種有り。謂く、貪と瞋と癡となり。貪と瞋と癡とに依止するに由るが故に、正理の如くなら

由るが故に、貪等の行を成ず。心調順ならず、堪能する所無く、解脱す可きこと難く、諸の衆生をして此の行を斷じ難からしむるが故に、株杌と名づく。

所以は何ん。對治道の犂も、破壞す可きこと難し。此の義に約するが故に、立てて株杌と爲す。無量の生に於て貪等を串習し、以て其の行を成ず。堅固にして拔き難きこと猶し株杌のごとくなるが故なり。

垢に三種有り。謂く、貪と瞋と癡となり。貪と瞋と癡とに依止するに由るが故に、是くの如き尸羅學處を毀犯す。此れに由り有智の同梵行者、或は聚落或は閑靜處に於て見已りて是くの如き言を作す。此の長老是くの如き事を作し是くの如き行を行ず。聚落の爲めに刺られ、默染不淨なるを說いて名づけて垢と爲す。

貪と瞋と癡とは、能く現に戒を犯し、不淨の相なるを以ての故なり。

燒害に三有り。謂く貪と瞋と癡となり。貪と瞋と癡とに依止するに由るが故に、長時に數ゝ生死の燒惱を取くるが故に、燒害と名づく。

無始の生死流轉に於て、貪と瞋と癡とに因りて、生死の苦しき燒害を被るに由るが故なり。

箭に三種有り。謂く貪と瞋と癡となり。貪と瞋と癡とに依止するに由るが故に、有と有具とに於て深く追求を起し、相續して絕えず。佛法僧と苦集滅道とに於て、常に疑惑を生ずるが故に、名づけて箭と爲す。

諸の有財と三寶と四諦とに於て、愛疑門に隨ひて能く射傷するが故なり。

所有に三有り。謂く、貪と瞋と癡となり。貪と瞋と癡とに依止するに由るが故に、財物を積畜して怖有り、怨有り多く散亂に住するが故に所有と名づく。

多く積集せる所有る資具の恒に怖等と共に相應するに由るが故なり。

障礙するを以ての故に、名づけて繫と爲す。所以は何ん。

此れ能く定心の自性の身を障ふるに由るが故に繫と名づく。色身を障ふるには非ず。何を以ての故に。

能く四種の心の亂るる因と爲るが故なり。謂く、財物等を貪愛する因に由りて心をして散亂せしむ。鬪諍の事に於て、不正を行ずるを因と爲して、心をして散亂せしむ。難行の戒禁に於て、苦惱を因と爲して、心をして散亂せしむ。正理の如く境界を推求せざるを因と爲して、心をして散亂せしむ。

彼各別の見に依止するに由るが故に、所知の境に於て正理の如くならず、種種に推度して妄に執著を生じ、唯だ此れのみ眞にして餘は並に愚妄なりと謂ふ。此れを因と爲すに由り、心をして散動せしむ。何に於て散動せしむるや。謂く定心の如實智見に於てなり。

蓋に五種有り。謂く、貪欲蓋と瞋恚蓋と惛沈睡眠蓋と掉擧惡作蓋と疑蓋となり。能く善品をして顯了することを得ざらしむる、是れ蓋の義なり。

其の心を覆蔽し、諸の善品を障へて轉ぜざらしむるが故なり。問ふ、何等の位に於て諸の善法を障ふるや。

答ふ、樂出家位と覺正行位と止擧捨位とに於てなり。

出家を樂しむ時に於て、貪欲蓋を障と爲す。外の境界門を受用せんと希求し、彼に於て欣樂せざるが故なり。正行を覺する時に於て、瞋恚蓋を障と爲す。所犯の學處に於て、同梵行者正しく覺を發する時、心瞋恚せるに由りて正學せざるが故なり。止擧の兩位に於て、惛沈睡眠〔蓋〕と掉擧惡作蓋とを障と爲すは、前の所說の如し。能く沈沒と及び散亂とを引くが故なり。捨位に於ては、疑蓋を障と爲す。決定を遠離し捨する能はざるが故なり。

株杌に三有り。謂く、貪と瞋と癡となり。貪と瞋と癡とに依止し、先に串習せし所を方便と爲すに

の義なり。雜染に隨順するが故なり。初は是れ欲求を習ふ者なり。第二は是れ有求を習ふ者なり。後の二は是れ邪梵行求を習ふ者なり。能依と所依と相應する道理なるが故なり。

見暴流は是れ能依なり。無明暴流を所依と爲す。愚癡有るに由りて顚倒し、解脫と及び方便とを推求するが故なり。

軛に四種有り。謂く、欲軛と有軛と見軛と無明軛となり。離繫を障礙する是れ軛の義なり。淸淨に違背するが故なり。此れも亦其の次第に隨ひ、三求を習ふ者に相應し現行す。

取に四種有り。謂く、欲取と見取と戒禁取と我語取となり。諍根を執取し後有を執取する、是れ取の義なり。所以は何んとならば、欲に貪著する繫縛耽染を因と爲すに由り、諸の在家の者更に相鬪諍す。此れ諍の根本なり。是れ第一の取なり。見に貪著する繫縛耽染を因と爲すに由り、諸の出家の者更に相鬪諍す。此れ諍の根本なり。是れ後の三取なり。六十二の見趣は是れ見取なり。各別の禁戒は多分苦行なり、是れ戒禁取なり。彼の所依止なる薩迦耶見は、是れ我語取なり。見取と戒禁取とに由りて、諸の外道の輩更に相諍論す。

是の處に於て、見は一ならざるを以ての故なり。

我語取に由り、諸の外道の輩互に諍論無し。

我有の性なることに於て、皆見を同じくせるが故なり。然れども此の取に由り、諸の外道等と正法者と互に諍論有り。

彼れ無我有りと信ぜざるに由るが故なり。

是くの如き執著は諍論の根本なり。復た能く後有の苦の異熟を、引取するが故に、名づけて取と爲す。

繫に四種有り。謂く、貪欲身繫と瞋恚身繫と戒禁取身繫と此實執取身繫となり。能く定の意性身を

巻の第七

決擇分中諦品、第一之二

隨煩惱とは、謂く所有(あらゆ)る諸の煩惱は、皆是れ隨煩惱なり。[一] 隨煩惱にして煩惱に非ざる有り。謂く煩惱を除く所餘の染汚の行蘊に攝めらるる一切の心法なり。此れ復た云何ん。謂く、貪等の六の煩惱を除く所餘の染汚の行蘊に攝めらるる忿等の諸の心法なり。又貪と瞋と癡とを隨煩惱の心法と名づく。此の隨煩惱に由りて心を隨惱し、染を離れざらしめ、解脫せざらしめ障を斷ぜざらしむるが故に、隨煩惱と名づく。世尊の汝等長夜に貪と瞋と癡との爲めに、隨ひて心を惱亂せられ、恒に染汚なりと說きたまへるが如し。

纏に八種有り。謂く惛沈と睡眠と掉擧と惡作と嫉と慳と無慚と無愧となり。數數增盛して心を纏繞するが故に纏と名づく。

此の諸の纏數數增盛し一切觀行者の心を纏繞するに由り、善品を修するに於て障礙と爲るが故なり。善品を修するとは、

謂く隨ひて[二] 止・擧・捨相及び彼の所依の梵行等に攝めらるる淨尸羅を修習する時なり。

此れ復た云何ん。謂く、止を修する時は惛沈と睡眠とを障と爲す。內に於て沈沒を引くが故なり。擧を修する時は、掉擧と惡作とを障と爲す。外に於て散亂を引くが故なり。捨を修する時は、嫉と慳とを障と爲す。此れを成就するに由り、自他の利の悋妬門中に於て數數心を搖動するが故なり。淨尸羅を修する時は、無慚と無愧とを障と爲す。此の二を具するに由り、諸の學處を犯して羞恥無きが故なり。

暴流に四有り。謂く、欲暴流と有暴流と見暴流と無明暴流となり。流に隨ひて漂鼓する、是れ暴流

【一】此處に隨煩惱とは、根本煩惱に對する隨煩惱の謂に非ずして雜集論に於ては本・隨の煩惱を何れも隨眠なる故或は心身を隨惱する故に隨煩惱と稱す。唯識述記六末(p.1c)往見すべし。

【二】止・擧・捨の相を具釋することは瑜伽論八十九往見すべし。

隨眠に七種有り。謂く、欲愛隨眠と瞋恚隨眠と有愛隨眠と慢隨眠と無明隨眠と見隨眠と疑隨眠となり。

欲愛隨眠とは、謂く欲貪品の麁重なり。

瞋恚隨眠とは、謂く瞋恚品の麁重なり。

有愛隨眠とは、謂く色と無色との貪品の麁重なり。

慢隨眠とは、謂く慢品の麁重なり。

無明隨眠とは、謂く無明品の麁重なり。

見隨眠とは、謂く見品の麁重なり。

疑隨眠とは、謂く疑品の麁重なり。

若し未だ欲求を離れざる者は、欲愛と瞋恚との隨眠に隨眠せらるるに由る。

彼の門に依りて此の二增長するに由るが故なり。

未だ有求を離れざる者は、有愛隨眠に隨眠せらるるに由る。

未だ邪梵行求を離れざる者は、慢と無明と見と疑との隨眠に隨眠せらるるに由る。彼の衆生は少しく對治するを得るに由り、便ち憍慢を生ず。

聖諦に愚なりとは、外の邪解脫と解脫方便とを虛妄に計度するなり。

其の次第に隨ひ、三の見と二の取とは結の中に說けるが如し。

佛の聖教と正法と毘奈耶との中に於て猶豫し疑惑するなり。

妄に邪出離方便を執著するを以ての故に、廣く不善を行じ、諸の善を行ぜず。此れに由り未來世の苦を招き、苦と相應す。

疑結とは、謂く、諦に於て猶豫す。疑結に繫せらるるが故に、佛寳と法〔寳〕と僧〔寳〕とに於て妄に疑惑を生ず。疑惑を以ての故に、三寳の所に於て正行を修せず。三寳の所に於て正行を修せざるを以ての故に、廣く不善を行じ、諸の善を行ぜず。此れに由り能く未來世の苦を招き、苦と相應す。

嫉結とは、謂く利養に耽著し、他の榮に耐へずして心妬を發起す。嫉法に繫せらるるが故に、利養を愛重し法を尊敬せず。利養を重んずるが故に、廣く不善を行じ、諸の善を行ぜず。此れに由り能く未來世の苦を招き、苦と相應す。

慳結とは、利養に耽著し、資生の具に於て其の心悋惜す。慳結に繫せらるるが故に、畜積を愛重し遠離を尊ばず。畜積を重んずるが故に、廣く不善を行じ、諸の善を行ぜず。此れに由り能く未來世の苦を招き、苦と相應す。

縛に三種有り。謂く、貪縛と瞋縛と癡縛となり。貪縛に由るが故に、諸の衆生を縛して壞苦に處せしむ。瞋縛に由るが故に、諸の衆生を縛して苦苦に處せしむ。癡縛に由るが故に、諸の衆生を縛して行苦に處せしむ。

貪等の縛に由り〔諸の衆生を〕縛して壞苦等に處せしむとは、貪と瞋と癡とを以て、樂等の受に於て常に隨眠するが故なり。

又貪と瞋と癡とに依るが故に、善方便に於て自在を得せざるが故に名づけて縛と爲す。

猶し外の縛の諸の衆生を縛し、二の事に於て自在を得せざらしむるが如し、一には隨意に遊行することを得ず。二には所住の處に於て隨意に所作することを得ず。當に知るべし、內法の貪と瞋と癡との縛も、亦復た是くの如し。

已に上勝證法を得せりとし、心の擧ぶれるを性と爲す。下劣慢とは、謂く、多分勝れたるに於て、己を計して少分劣れりとし、心の擧ぶれるを性と爲す。邪慢とは、謂く、實には無德なるに、己を計して有德とし、心の擧ぶれるを性と爲す。慢結に繫せらるるが故に、我と我所とに於て了知する能はず。了知せざるが故に我と我所とを執じ、廣く不善を行ひ、諸の善を行ぜず。此れに由り能く未來世の苦を招き、苦と相應す。

無明結とは、謂く三界の無智なり。無明結に繫せらるるが故に、苦法れ集法とに於て解了する能はず。解了せざるが故に廣く不善を行じ、諸の善を行ぜず。此れに由り能く未來世の苦を招き、苦と相應す。

苦と集との法に於て解了せずとは、謂く、果性と因性とに於ける有漏の諸行は、所有の過患を了知せざるが故なり。

見結とは、卽ち三見なり。謂く、薩迦耶見と邊執見と邪見となり。見結に繫せらるるが故に、邪なる出離に於て妄計し追求す。

謂く、我當に解脫すべし、我所も解脫すべし。旣に解脫し已りて、我は當に常住なるべし。或は當に斷滅すべし。又謂く、佛法中定んで解脫無し。

是くの如く邪出離を執著し已り、廣く不善を行じ、諸の善を行ぜず。此れに由り能く未來世の苦を招き、苦と相應す。

取結とは、謂く、見取と戒禁取となり。取結に繫せらるるが故に、邪出離方便に於て妄計し執著す。

八聖支道を棄捨し、妄に薩迦耶見等を執じ、及び何を先と爲し、若しは戒若しは禁を清淨道と爲す。

惱と纒と瀑流と軛と取と繫と蓋と株杌と垢と燒害と箭と所有と惡行と漏と匱と熱と惱と諍と熾然と稠林と拘礙等となり。

問ふ。結に幾種有るや、云何んが結なるや。何んの處か結なるや。答ふ。結に九種有り。謂く、愛結と恚結と慢結と無明結と見結と取結と疑結と嫉結と慳結となり。

愛結とは、謂く、三界の貪愛なり。結に繫せらるるが故に三界を厭はず。厭はざるに由るが故に廣く不善を行ひ、諸の善を行ぜず。此れに由りて、能く未來世の苦を招き、苦と相應す。

當に知るべし、此の中、諸の結の若しは相、若しは用、若しは位を宣說し、結の差別を辯ず。且く愛結の如きは、何等か是れ結なるや。謂く、三界の貪是れ結の自性なり。云何んが結と爲す。謂く、此れ有る者は三界を厭はず、此れに由り展轉して不善は現行し、善は現行せず。何んの位に於ける結なりや。謂く、後世の苦果の生ずる位に於てなり。是くの如く恚結等、並に理の如く應に知るべし。

恚結とは、謂く、有情苦と及び順苦法に於て心に損害有り。恚結に繫せらるるが故に、恚の境相に於て心棄捨せず。棄捨せざるが故に廣く不善を行じ、諸の善を行ぜず。此れに由りて、能く未來世の苦を招き、苦と相應す。

慢結とは、卽ち七慢なり。謂く、慢と過慢と慢過慢と我慢と增上慢と上劣慢と邪慢となり。慢とは、謂く、下劣に於て己を計して勝れたりと爲す。或は相似に於て己を計して相似とす。心の擧ぶれるを性と爲す。過慢とは、謂く、相似に於て己を計して勝れたりと爲す。或は復た、勝れたるに於て己を計して相似せりとす。心の擧ぶれるを性と爲す。慢過慢とは、謂く、己より勝れたるに於て、己を計して勝れたりと爲し、心の擧ぶれるを性と爲す。我慢とは、五取蘊に於て我と我所とを觀じ、心の擧ぶれるを性と爲す。增上慢とは、謂く、未だ上勝證法を得せざるに於て、己を計して

と及び見と相應する法となり。

見とは、謂く、薩迦耶見と及び邊執見となり。

所餘の煩惱を有事を緣ずると名づく。

相應とは、謂く、貪と瞋とは相應せず、瞋の如く疑も亦爾なり。餘は皆相應することを得。

何んが故に貪と瞋とは相應せざるや。一向相違の法にして必ず倶に轉ぜざるが故なり。又貪と疑とは相應せずとは、慧が境に於て決定せずんば必ず染著すること無きに由るが故なり。餘は相應することを得とは、餘の慢等とは相違せざるが故なり。

貪の如く瞋も亦爾なり。謂く、瞋は貪と慢と見と相應せず。

若し此の事に於て憎恚を起さば、卽ち此れに於て高擧を生じ、及び能く推求して餘と相應せず。理の如く應に知るべし。

慢は瞋と疑と相應せず。無明に二有り。一には一切の煩惱と相應する無明なり。二には不共無明なり。不共無明とは、謂く、諦に於て無智なり。見は瞋と疑と相應せず。疑は貪と慢と見と相應せず。

忿等の隨煩惱は更に互に相應せず。

展轉して相違する法は、必ず相應せざるが故に、貪の分と瞋の分との如し。若し相違せざれば、猶し煩惱の如く展轉相應す。

無慚と無愧とは、一切の不善品の中に於て恒に共に相應す。

若し自他を顧みざることを離るれば、不善の現行是の處に無きが故なり。

惛沈と掉擧と不信と懈怠と放逸とは、一切の染汚品の中に於て恒に共に相應す。[一五]

若し無堪任の性等を離るれば、染汚の性の成ずること、是の處(ことわり)無きが故なり。

差別とは、謂く、諸の煩惱は、種種の義に依り種種門の差別を立つ。所謂る結と縛と隨眠と隨煩

【一五】此處には五遍染を說けり。然るに瑜伽論五十六には六遍染を說き、五十八には十遍染を說けり、往見すべし。

ずる、是れ煩惱の相なり。

不寂靜の性は是れ諸の煩惱の共相なり。此れに復た六有り。謂く、散亂不寂靜性と顚倒不寂靜性と掉擧不寂靜性と惛沈不寂靜性と放逸不寂靜性と無恥不寂靜性となり。

緣起とは、謂く、煩惱隨眠未だ永に斷ぜざるが故に、煩惱に順ずる法現在前するが故に。不正の思惟現前起するが故に。是くの如く煩惱方に乃ち生ずることを得るなり。

煩惱隨眠未だ永に斷ぜずとは、彼の品の麁重未だ永に拔けざるが故なり。煩惱に順ずる法現在前するとは、現前に可愛等の境に會遇するが故なり。不正の思惟現前起すとは、彼の境界に於て淨等の相を取り、能く隨順して貪瞋等を生ずるが故なり。

境界とは、謂く、一切の煩惱還つて一切の煩惱を用つて所緣の境と爲し、及び諸の煩惱の事を緣ずるなり。又欲界の煩惱は、無明と見と疑とを除き、餘は上地を緣じて境と爲すこと能はず。

此の無明等は亦能く上地を緣ずる者有りと雖も、然も彼は親しく上地を緣ずること、自地を緣ずる如くなる能はず。彼の門に依りて分別を起すに由るが故に、彼を立てて所緣と爲す。所言る無明が上地を緣ずとは、謂く、見等と相應するなり。見とは薩迦耶見を除く。世間に他地の諸行を緣じて、執じて我と爲すを見ざるが故なり。

上地の諸の煩惱は、下地を緣じて境とは爲さず、已に彼の地の欲を離るるが故なり。又滅道諦を緣ずる諸の煩惱は、親しく滅道を緣じて境と爲すこと能はず。

滅道諦は出世間智と及び後得智との內に證する所なるに由るが故なり。

唯だ彼に依りて妄に分別を起すに由り、說いて所緣と爲す。

分別に計〔度〕せらるる境は、分別を離れざるが故なり。

[一四] 又煩惱に二種有り。謂く無事を緣ずると、及び有事を緣ずるとなり。無事を緣ずるとは、謂く、見

【一四】同學鈔六之八に「有事無事」「見及相應法の二論題ありて共に本論の今文に關說せり、前者は、煩惱の有事無事緣を釋して或は本質と影像とに通ずると爲さんや或は唯だ本質に限るやを論ずるものにして、後者は、見を身邊二見と爲すや、はた五見に通ずるやを論ずるものなり往見すべし。

及び和合愛とを起す、已得と未得との差別なるが故なり。行苦性の位に於ては愚癡愛を起す、煩惱麁重の所顯に由るが故、及び不苦不樂受の所顯なるが故なり。唯だ阿賴耶識のみは、是れ最勝なる行苦の位なり。此の位に依止し我癡の門に因りて貪愛轉ずるが故なり。

三には世遍行なり。

謂く、三世の中に於て、遍く隨ひて行ずるが故なり。過去世に於ては追憶行遍隨行愛を起し、未來世に於ては希樂行遍隨行愛を起し、現在世に於ては耽著行遍隨行愛を起す。

四には界遍行なり。

謂く、欲と色と無色との三愛、次第して三界に遍ずるが故なり。

五には求遍行なり。

謂く、貪愛が遍く有耶梵行を求欲するに由るが故なり、欲求力に由り、欲界を脫せずして欲界の苦を招く。求力有るに由り、二界を脫せずして色無色界の苦を招く。邪梵行の求力に由り、生死を脫せずして彼彼に流轉するが故なり。

六には種遍行なり。

謂く、有と無有との愛が斷常一切の種に遍行するが故なり。

煩惱とは、謂く、數に由るが故に。相なるが故に。緣起なるが故に。境界なるが故に。相應なるが故に。差別なるが故に。邪行なるが故に。界なるが故に。衆なるが故に。斷なるが故に。諸の煩惱を觀ず。

數とは、謂く、或は六、或は十なり。六とは、謂く、貪と瞋と慢と無明と疑と見となり。十とは、謂く、前の五と、見を又五に分つ。謂く、薩迦耶見と邊執見と邪見と見取と戒禁取となり。

相とは、若しは法生ずる時、相寂靜ならず。此れ生ずるに由るが故に身心相續す。不寂靜にして轉

閉戸より鍵南を生ず

次は鉢羅奢佉なり。

後に髮毛爪等、

及び色根と形相と、

漸漸にして生長す。

〔三〕云何んが集諦なるや。謂く、諸の煩惱と、及び煩惱の增上に生ぜらるる諸業とを、倶に説いて集諦と名づく。

此の集に由りて、生死の苦を起すが故なり。煩惱の增上に生ぜらるる業とは、謂く、有漏業なり。若し爾らば、何が故に世尊は唯だ愛のみを説いて集諦と爲したまふや。最勝に由るが故なり。

謂く、薄伽梵は勝れたるに隨ひて説きたまへり。若しは愛、若しは後有の愛、若しは貪喜と倶行する愛、若しは彼彼希樂の愛、是れを集諦と名づく。最勝と言ふは、是れ遍行の義なり。愛は具さに六遍行の義を有するに由り。是の故に最勝なり。何等かを六と爲すや。

一には事遍行なり。

謂く、一切の已得未得の自身の境界の事に於て、遍行するが故なり。已得の自身に於ては愛を起し、未得の自身に於ては後有愛を起し、已得の境界に於ては貪喜と倶行する愛を起し、未得の境界に於ては彼彼希樂の愛を起す。

二には位遍行なり。

謂く、苦苦性等の三位の諸行中に於て、遍く隨ひて行ずるが故なり。已得の苦苦性の位に於ては別離愛を起し、未得の苦苦性の位に於ては不和合愛を起す。壞苦性の位に於ては不別離愛と

【三】次に集諦を辯ず。

生緣を得せざれば、必定して命終り還りて中有に生ず。是くの如く展轉し乃し七返に至り、更に過ることを得ず。或時には移轉すとは、謂く、此の位に於て餘の生處に往くべき强緣現前する、第四靜慮を得て阿羅漢を起す增上慢の比丘、彼の地の中に生ずる有る時、解脫を謗る邪見に由るが故に、轉じて地獄の中有に生ずるなり。

又中有の中に住し亦能く諸の業を集む。先の串習力所引の善等の思の現行するが故に。又能く同類の有情を覩見す。

謂く、先に善不善を共に行ぜし所の者、夢の中に於て見已り、彼とともに現に同じく遊戲するが如し。

又中有の形は、當〔來〕の生處に似、當〔來〕の生處の如し。

前の時有形にして起れるが故なり。

又此の中有は所趣無礙なり。神通を具するが如く往來すること迅速なり。仍つて生處に於て拘礙せらるる有り。又此の中有は所生の處に於て、稱の兩頭の低昂の道理の如く、「死生同時なり」。終に沒して結生する時分も、亦爾なり。又中有に住する中、所生の處に於て貪愛を發起し、亦餘の煩惱を用つて緣助と爲す、此の中有の身は、食と倶に滅し、羯邏藍の身識と倶に生ず。此れは唯是れ異熟なり。此より已後、根漸く生長す。緣起の中に說けるが如し。四生の類に於て、或は卵生を受け、或は胎生を受け、或は濕生を受け、或は化生を受く。

緣起の中に說けるが如しとは、謂く、名色等の前後次第なり。說くが如し。

最初は羯邏藍なり。

次に頞部曇を生ず。

此れ從り閉尸を生ず。

復次に前に死苦を說けり。死に三種有り。謂く、或は善心死、或は不善心死、或は無記心死なり。

善心死とは、謂く、明利なる心の現行する位に於て、或は自の善根力の所持に由るが故に、或は他に引攝せらるるに由るが故に、善心を發起して命終の位に趣くなり。

不善死とは、謂く、明利なる心の現行する位に於て、或は自の不善根力の所持に由るが故に、或は他に引攝せらるるに由るが故に、不善心を起して命終の位に趣くなり。

無記心死とは、謂く、苦は明利なる心の現行する位に於て、苦は明利ならざる心の現行する位に於て、或は二の緣を闕くに由るが故に、或は加行の功能無きに由るが故に、無記の心を起して命終の位に趣くなり。

此の中に言ふ所の善等の心の死とは、當に知るべし、我愛と相應して將に命終らんとする心の位の前に依りて說くを。

淨行を修せる者は、命終の位に臨み、身の下分に於て先づ冷觸を起す。不淨行者は、命終の位に臨み、身の上分に於て先づ冷觸を起す。又不淨行者の中有に生ずる時、其の「中有の」相顯現して黑羔光の如く、或は陰闇の夜分の如し。淨行を修せる者の中有に生ずる時、其の「中有の」相顯現して白練光の如く、或は晴朗なる夜分の如し。又此の中有は、欲色界の正受生位に在り。亦無色界從り「下に生ぜんとする」命終の後位「に在り」。亦意生、健達縛等と名づく。極めて「長くして」住することと七日なり。或は中夭すること有り。或時には移轉す。

意生と言ふは、謂く、化生身を受く、唯だ心のみを因と爲すが故なり。香に引かるるが故に健達縛と名づく。是れ香に隨逐して受生の處に往く義なり。極めて「長くして」住すること七日なり。或は中夭すること有りとは、此れは速に生緣を得せる者に約して說く。若し七日を過ぎて

復次に苦法に略して八種の差別有り。謂く、廣大不寂靜苦有り。寂靜苦有り。寂靜不寂靜苦有り。中不寂靜苦有り。微薄不寂靜苦有り。微薄寂靜苦有り。極微薄寂靜苦有り。非苦似苦にして大寂靜に住する有り。

云何んが廣大不寂靜苦なるや。謂く、欲界に生じ未だ曾て諸の善根を積集せざる者なり。

欲界〔に於て〕一切の趣に生ずる〔者〕は、苦の具足に纒はさるるに由るが故に。未だ善根を集めざれば、諸の趣に往くを遮止すること能はざるが故に。其の次第の如く、廣大不寂靜苦と名づくるなり。

云何んが寂靜苦なるや。謂く、卽ち此れは已に順解脫分の善根を生ぜる者なり。

決定して般涅槃に趣向するが故に。

云何んが寂靜不寂靜苦なるや。謂く、卽ち此れは世間道の離欲の爲め、已に善根を種えたる者なり。

卽ち此の欲界の苦に由り、世間道の爲めに離欲し已りて善根を種うる者は、決定して苦苦等を超越するが故に。然も畢竟に非ざるが故に。其の次第の如く、是くの如く中不寂靜苦等も、所應に隨ひて當に釋すべし。

云何んが中不寂靜苦なるや。謂く、色界に生じ順解脫分を遠離せる者なり。

云何んが微薄不寂靜苦なるや。謂く、無色界に生じ順解脫分を遠離せる者なり。

云何んが微薄寂靜苦なるや。謂く、諸の有學なり。

云何んが極微薄寂靜苦なるや。謂く、諸の無學の命根の住して六處に緣るなり。

云何んが非苦似苦にして大寂靜に住するや。謂く、已に究竟を得せる菩薩摩訶薩等、大悲の願力に乘ぜるが故に諸有の中に生ずるなり。

能く無量の衆生の相續の大苦を除滅するに由るが故に、大寂靜に住すと名づく。

は、謂く、此の中の輕性なり。
或は四の所造の色なる有り。
　沙糖團等の如し。
或は五の所造の色なる有り。
　謂く、即ち此れ有聲の時なり。
　又若しは此の聚に於て大種の造色は、分に隨ひて得す可し。當に知るべし、此の中には此れ有りて餘には非ず、此れは麁物に依りて說けり、種子には非ず。一一の聚の中に一切の種子有るが故なり。
又麁聚の色の極微は集所成なりと說けるは、當に知るべし。此の中極微は無體なり。
　無實無性にして、唯だ假によつて建立す。展轉分析するに限量無きが故に。
但覺慧に由りて漸漸に分析し、細分し損滅すること、乃し可析の邊際に至る。即ち此の際に約して極微を建立す。
　問ふ、若し諸の極微實の體性無くんば何んが故に建立する。
答ふ、一合の想を遣らんが爲めの故なり。
　若し覺慧を以て分分に所有ゆる諸の色を分析せば、爾の時妄に一切の諸色を執じて一合と爲す想即便ち捨離す。此れに由りて數趣を取るも、我の性無しと順入するが故なり。
又諸の所有ゆる色は眞實に非ずと悟入せんが爲めの故なり。
　若し覺慧を以て、是くの如く所有ゆる諸の色を分析して所有無きに至れば、爾の時、便ち能く諸の色は皆眞實に非ずと悟入す。此れに因りて唯識の道理に悟入し、此れに由りて諸法の無我なる性に順入するが故なり。

答ふ、容有の意に依りて說きたまへるなり。同じく一處に在り。此れに依りて而も是れ造の義有り。

所造の色は、大種の處を離れて別に自ら建立する功能無きに由るが故に。

若しは此の聚に於て此の聚に於て此の大種は得す可し。當に知るべし、此の聚は唯だ此の大種のみ有りて餘には非ず。

或は聚有り、唯一の大種のみなるなり。

乾ける泥團等の如し。

或は二の大種なる有り。

謂く、卽ち此れ濕なり。

或は三の大種なる有り。謂く、卽ち此れ煖なり。

或は一切の大種なる有り。

謂く、卽ち此れ濕煖の泥團等なり。移轉位に於ける。

所造の色も亦爾なり。若しは此の聚に於て此の所造の色は得すべし。當に知るべし、此の聚は唯だ此れのみなり、餘には非ず。

或は聚有り唯だ一の所造の色のみなり。

光等の如し。

或は二の所造の色有り。

聲に香と風と等の有るが如し。

或は三の所造の色なる有り。

香煙等の如し。此の香煙に色と香と觸との差別に顯はさるる有るに由るが故なり。觸の差別と

りて生ずれば、此れ自ら壞すること無きに非ずして能依の見るべきあり。火と芽との等きの薪と種との等きに依るが如し。是の故に此の身は是れ刹那心の所依止なり。故に亦刹那に滅す。

心を增上として生ずとは、謂く、一切内外の色は皆心を增上として生ぜらる。能生の因刹那滅なるが故に、所生の果も亦刹那滅なり。世尊の諸の因諸の緣能く色を生ず、彼も亦無常なり、無常の因緣力に生ぜるが故に色云何んぞ常ならんやと說きたまへるが如し。此の經の句義に隨へば、身は定んで刹那滅なり。

心自在にして轉ずとは、謂く、若し勝れたる威德を證得すれば、心は一切の色に於て其の所欲の如く自在に轉變す、刹那の能變の勝解に隨ひて轉變して生ずるに由るが故に。色等は刹那「に滅する」の道理成就す。

最後の位に於て變壞を得す可しとは、謂く、諸の色等は、初め自性を離れて念念に變壞す。最後の位に於て欻爾として變壞するは、道理に應ぜず。然れば此れ得す可し、故に知る色等は初め從り已來念念に變壞す、自類相續し、漸增を因と爲して能く最後の麁相の變壞を引くを、是の故に色等は念念に生滅す。

生じ已りて緣を待たずして自然に壞滅すとは、謂く、一切法は緣從り生じ已り、壞緣を待たずして自然に壞滅す。餘の緣を待たずして自然に壞滅するを以ての故に、最初に生じ已れば決定して壞滅す。若し生じ已りて初めには滅壞無く、後に方に有りと言はば然らず、差別無きが故なり。故に知る一切の滅壞す可き法は、初め纔に生じ已りて、即便ち壞滅す。是の故に諸法刹那滅の義す。

問ふ、世尊の、諸の所有ゆる色、彼の一切は、若しは四大種、若しは四大種所造なりと說きたまへるが如き、此れは何んの意に依りて說きたまへるや。

我論外道は諸行を計度して我と爲す。彼の諸行は、此の相に非ざるが故に無我と名づく。故に薄伽梵、密意〔を以て〕說いて一切法は皆無我なりと言へり。世尊の說き給へるが如く、此の一切は我所に非ず。此れ我處に非ず、此れ我我〔所〕に非ず。是の如き義に於て應に正慧を以て實の如く觀察すべし。此れ何んの義を言へるや。謂く、外事に於ては密意〔を以て〕此れ一切我所に非ずと說き、內事に於ては密意〔を以て〕此れ我處に非ず此れ我我所に非ずと說く。所以は何ん。外事に於ては唯我所の相を計するを以て、是の故に但我所のみを遣り、內事に於ては通じて我我所の相を計する、是の故に雙じて我我所を遣る。

問ふ、前に無常は皆刹那の相なりと說けり。此れ云何んぞ知るや。

答ふ、心心法は是れ刹那の相なる如く、當に知るべし色等も亦刹那の相なり。心の執受に由るが故に。心の安危を等しくするが故に。心に隨ひて轉變するが故に。是れ心の所依なるが故に。心を增上として生ずるが故に。心自在に轉ずるが故に。又最後の位に於て變壞得す可きが故に。生じ已り緣を待ずして自然に壞滅するが故に。當に觀ずべし色等も亦念念に滅す。

諸の無常なる行の壞滅等の相と心心法の刹那の相とは、世間の共に了するところなれば更に重ねて辯ぜず。諸の色等の法の刹那滅の相は、世の共に了せざるところなるが故に今成立す。

心の執受に由るとは、謂く色等の身は刹那の心に由り念念執受せらるるが故に刹那滅なり。

心と安危を等しくすとは、謂く色等の身は恒に識と倶なり。識若し捨離すれば卽便ち爛壞す。身は心と安危等しきに由るが故に、決定して心の如く念念生滅す。

心に隨ひて轉變すとは、謂く、世間に現見せる心、苦樂貪瞋等の位にあれば身は隨ひて轉變す。刹那の心に隨ひて轉變するが故に、身は念念に滅す。

是れ心の所依なりとは、謂く、世間は共に心の有根身に依止することを知る。若し法此れに依

空相とは、謂く若し是の處に於て此れ有に非ざれば、此の理に由り正しく觀じて空と爲す。若し是の處に於て餘は是れ有ならば、此の理に由りて實の如く有なることを知る。是れを善く空性に入ると名づく。實の如く知るとは、顚倒せざる義なり。

問ふ、何んの處に於て、誰か有に非ざるや。

答ふ、蘊と界と處とに於て、常恒に凝生し變壞せざる〔實の〕法と〔實の〕我と我所との等きは有に非ず。此の理に由りて、彼は皆是れ空なり。

問ふ、是の處に於て誰か餘の有なるや。

答ふ、卽ち此の處に我に性無し。此の我は性無く無我は性有り、是を空性と謂ふ。

彼の諸行の常等の相の我は此の中に無なるに由るが故に、諸行は恒時に我性の相を離る。無我の眞性は此の中に有なるが故に一向に無には非ず。此れを倶に空性と名づく。

故に薄伽梵、密意〔を以て〕說いて有は實の如く有なることを知り、無は實の如く無なることを知ると言へり。又三種の空性有り。謂く、自性空性と如性空性と眞性空性となり。

初には遍計所執の自性に依りて觀ず。

此の自相は定んで有に非ざるに由るが故なり。

第二には依他起の自性に依りて觀ず。

此れは計度せらるる如き〔もの〕は、皆有に非ざるに由るが故なり。

第三には圓成實の自性に依りて觀ず。

此れ卽ち空の眞性に由るが故なり。

無我相とは、謂く諸論者の立つる所の我相の如く、蘊と界と處とは此の相に非ず。蘊と界と處とに我相無きに由るが故に、無我相と名づく。

苦相とは、或は三或八は或は六なり。廣く說くことは前の如し。何が故に經に若し無常なる者は卽ち是れ苦なりと說けるや。三分の無常を緣と爲し苦の相を了知すべきに由るが故なり。

謂く、生分無常と滅分無常と倶分無常となり。

生分無常を緣と爲すが故に苦苦の性を了知すべし。

生分無常とは、謂く本は無にして今は有なり。苦品の諸行は體是れ逼迫なり。此の無常を緣と爲すに由りて苦苦の性を了知すべし。

滅分無常を緣と爲して壞苦の性を了知すべし。

滅分無常とは、謂く已に有りしが還りて無くなんぬ、樂品の諸行は愛樂すべからず。此の無常を緣と爲すに由りて壞苦の性を了知すべし。

倶分無常を緣と爲して行苦の性を了知すべし。

倶分無常とは、謂く麁重の諸行は相續流轉し、若しは生じ若しは滅して倶に樂しむべからず。此の倶分無常を緣と爲すに由りて、行苦の性を了知すべし。

卽ち此の義に依り、薄伽梵は諸行は無常なり諸行は變壞すと說けり。又此の義に依り、諸の受を有する所の我は說いて皆苦なりと言へり。

當に知るべし、此の中不苦不樂受と及び樂受とに於て、密意「を以て」の故に苦苦を說けり。受の苦なる性は、世間の共に了する「所なる」が故に復た密意「を以て」說かず。

又生と滅との二法に隨ふ所の諸行の中に於て、生等の八苦有り。性了知すべきが故に、佛說いて若し無常ならば卽ち是れ苦なりと言へり。又無常なる諸行の中に於て、生等の了すべき者有り。如來は此れに依り、密意「を以て」說いて無常に由が故に苦なりと言へり。一切の行には非ざるなり。

若し爾らずんば、聖道も無常なるが故に亦是れ苦なるべし。

彼の有情初め生ずる時、宮殿等と倶に生ずるに由り、終に沒する時彼と倶に滅す。卽ち此れを說いて成壞と爲すが故なり。

又三種の中劫有り。所謂飢饉と疾病と刀兵となり。此の小三災劫究竟して滿ち、方に乃ち出現す。謂く、世界成じ已りて一中劫の初は唯減なり。一中劫の後は唯增なり。十八中劫は亦た增亦は減なり。

一中劫の初は唯減なりとは、謂く劫の成ずる時は第二十一劫なり。一中劫の後は唯增なりとは謂く最後の劫なり。十八中劫は亦は增亦は減なりとは、謂く中間に於ける十八なり。

二十中劫にして世界は正しく壞し。二十中劫にして世界は壞し已りて住し。二十中劫にして世界は正しく成じ。二十中劫にして世界は成じ已りて住す。此の八十中劫を合して一大劫と爲す。此の劫數に由りて色〔界〕と無色界との諸天の壽量を顯す。壽盡るが故に、福盡るが故に、業盡るを以ての故に、彼彼の有情、彼彼の處從り沒すと說くが如し。

云何なるか壽盡なるや、謂く、時死なり。

此は時沒に約して說く。所引の壽は時分究竟すれば應に時死すべきに由るが故なり。

云何なるか福盡なるや。謂く、時死に非ず。卽ち非福の死なり。

此れは非時沒に約して說く。

彼の有情、定味に貪著するを以て福力減盡す。此れに因りて命終るなり。

定味を愛し、所修の引壽の業力を損害するに由る。時死には非ざるが故なり。

云何なるか業盡なるや。謂く、順生受業と順後受業と倶に盡るが故に死す。

此れは相續沒に約す。此の處に於て順生と〔順〕後との受業の受用斯に盡るに由り、業無きを以ての故に復た此に生ぜず。

諸行は念念に劣に自體を得し、無間に必ず壞するが故なり。

相續相とは、謂く無始時來諸行は生滅し相續して斷ぜざるなり。

無始より生死展轉相乘し輪廻絶えざるに由るが故に。

病等の相とは、謂く四大と時分と壽命との變異なり。

四大の乖違と齒髮の疎落等とに由り、住時の勢盡くるが故に。

種種の心行の轉ずる相とは、謂く一時に於て有貪の心起り、或は一時に於て離貪の心起る。是くの如く有瞋と離瞋と、有癡と離癡と、若しは合、若しは散、若しは下、若しは擧、若しは掉と離掉と、若しは不寂靜若しは寂靜、若しは定と不定と、是くの如き等の心行流轉するなり。

能治と所治との位の差別に住するに由るが故に。

資產の興衰する相とは、謂く諸の興盛の終に衰變に歸するなり。

諸の世間の富貴榮盛は愛樂すべからず。究竟に非ざるに由るが故に。

器世〔間〕の成壞する相とは、謂く火と水と風との三種の成壞なり。

火〔災〕と水〔災〕と風災とに由り、大地等をして數成壞せしむるが故に。能く燒き、浸し、燥すこと其の次第の如し。

又三災の頂有り。謂く、第二と第三と第四との靜慮なり。

火と水と風とに由りて、能く世界安立の處所を壞し、乃し第一と第二と第三との靜慮の邊際に至る。次上の所餘を三災の頂と名づく。其の次第の如く、第二と第三と第四との靜慮の處所の差別なり、

第四靜慮の外宮殿等は、外災の成壞すること無しと雖も、然も彼の諸天は宮殿等と倶に生じ倶に滅するを成壞有りと說く。

答ふ、生苦より乃し求不得苦に至る、是れ世俗諦の苦なり。

世間智の境界なるが故に。

略して一切五取蘊を攝する苦は、是れ勝義諦の苦なり。

安立眞如門は出世智の境界なるに由るが故に。

復た次に諸の觀行者は、苦聖諦に於て四種の行を以て共相を觀察す。謂く、無常の相と苦の相と空の相と無我の相となり。

無常の相とは、略して十二有り。謂く、非有相と壞滅相と變異相と別離相と現前相と法爾相と刹那相と相續相と病等の相と、種種の心行の轉ずる相と、資產の興衰する相と、器世〔間〕の成壞する相となり。

非有相とは、謂く蘊と界と處とは、一切時に於て、我我所の性、常に有に非ざるが故なり。

無常と言ふは是れ非有の義なり。苦聖諦には恒に我我所の自性有ること無きに由る。無とは是れ除遣の義なり。常とは是れ一切時の義なり。常無きを以ての故に名づけて無常と曰ふ。

壞滅相とは、謂く諸行生じ已りて卽ち滅し、暫く有り還りて無きが故なり。

變異相とは、謂く諸行は異異にして生ず、不相似にして相續し轉ずるに由るが故なり。

別離相とは、謂く諸行に於て增上の力を失ひ、或は他の所攝を執じて己が有と爲すなり。

資具等の事に於て、或時は自在に失壞し、或は他を陵奪して己が有と爲すを以ての故なり。

現前相とは、謂く正しく無常に處するなり。因の隨逐に由りて今無常を受るが故に。

法爾相とは、謂く當來は無常なり。因の隨逐に由りて定んで當に受くべきが故なり。

死の無常性は決定して當に受くべし。

刹那相とは、謂く諸行は刹那の後必ず住せざるが故なり。

老は何に因りてか苦なるや。時分變壞の苦なるが故なり。
病は何に因りてか苦なるや。大種の變異する苦なるが故なり。
死は何に因りてか苦なるや。壽命の變壞する苦なるが故なり。
怨憎會は何に因りてか苦なるや。合會苦を生ずるが故なり。
愛別離は何に因りてか苦なるや。別離苦を生ずるが故なり。
求不得は何に因りてか苦なるや。希ふ所を果さざるは苦を生ずるが故なり。
略して一切五取蘊を攝するは何に因りてか苦なるや。麁重苦なるが故なり。
是くの如き八種を、略攝して六と爲す。謂く、逼迫の苦と轉變の苦と合會の苦と別離の苦と希ふ所を果さざる苦と麁重の苦となり。是くの如き六種を廣く開きて八と爲す。
　轉變苦の中を三種に分つが故に。
若しは六、若しは八、平等平等なり。
問ふ、三苦を說くが如きは、此の中の八苦、三に八を攝するとせんや。八に三を攝するとせんや。
答ふ、展轉相攝す。所謂る生苦より乃し怨憎會苦に至るは、能く苦苦を顯はすなり。
　苦受に順ずる法の苦の自相の義なるが故なり。
愛別離苦と求不得苦とは能く壞苦を顯はす。
　已得と未得との樂受に順ずる法の壞の自相の義なるが故なり。
略して一切五取蘊を攝する苦は能く行苦を顯はす。
　二の無常に隨ふ所の不安隱の義を解脫せざるが故なり。
問ふ、二苦を說くが如し。謂く、世俗諦の苦と勝義諦の苦となり。何者か世俗諦の苦なるや。何者か勝義諦の苦なるや。

夜摩天と千の覩史多天と千の樂變化天と千の他化自在天と千の梵世天と有り。是くの如きを總じて小千世界と名づく。千の小千世を總じて第二中千世界と名づく。千の中千世界を總じて第三大千世界と名づく、此くの如き三千大千世界に總じて大輪圍山有りて周匝圍遶す。又此の三千大千世界は同じく壞し同じく成ず。譬へば天の雨滴の車軸の如く、間無く斷無く、空從り下に注ぐが如し、是くの如く東方の間無く斷無く無量の世界の、或は將に壞せんとする有り。或は將に成ぜんとする有り。或は正しく壞せる有り。或は壞し已りて住し。或は正しく成ぜる有り。或は成じ已りて住す。東方に於けるが如く、乃至一切十方も亦爾なり。是くの如く若しは有情世間若しは器世間は、業煩惱力の所生なるが故に、業煩惱增上の所起なるが故に、總じて苦諦と名づく。

　業煩惱力の所生と業煩惱增上の所起と、此の二句は其の次第の如く、有情世間と器世間との俱に是れ苦の性なることを顯はす。

復た清淨世界有り。苦諦の攝に非ず。業煩惱力の所生に非ざるが故に業煩惱增上の所起に非ざるが故なり。然れば大願清淨善根の增上所引に由る、此の所生の處は不可思議なり。唯佛のみの覺する所にして、靜慮を得せる者の靜慮の境界に非ず。況んや尋思の者をや。[一]

復た次に、已に略して、苦諦の相を辯じたれば、今當に廣く諸經に說く所の苦相の差別を顯すべし。[二]所謂る生苦と老苦と病苦と死苦と怨憎會苦と愛別離苦と求不得苦と略して一切五取蘊を攝する苦となり。

生は何に因りてか苦なるや。衆苦に逼らるるが故に。餘の苦の所依なるが故なり。

　衆苦に逼らるるとは、謂く曾て母胎に於て藏間に生熟し、具に種種の極めて不淨なる物に逼迫せらるる苦を受く。正しく胎を出づる時、復た支體逼切の大苦を受く。餘の苦の所依とは、謂く生有るが故に老病死等の衆苦隨逐す。

【一】同學鈔七之四に「復有清淨界」なる論題あり。即ち雜集論の今の文を問題とせるものにして、慈恩は處處に此の清淨界を自受用土とせるに慧沼が他學用土にも通ずとせるより論を發したるものにして、同學鈔は瑜伽論を通じて雜集論を見るとき他受用土にも通ずると爲すべしとして義燈を通じたり。往見すべし。

【二】次に苦諦を廣說す。

卷の第六

決擇分中、諦品、第一の一

復た次に略して決擇を說くに四種有り。謂く、諦決擇と[一]法決擇と[二]得決擇と[三]論議決擇となり。諦決擇に復四種有り。謂く、苦集滅道の四聖諦に依りて說く。

[四]苦諦とは、云何ん。謂く、有情の生と及び生の所依處となり。其の次第の如く若しは生、若しは生處、倶に說いて苦諦と名づ

卽ち有情世間と器世間となり。

く。有情生とは、

謂く、諸の有情生じて地獄と畜生と餓鬼と人と天との趣の中に在り。人とは、謂く東毘提訶と西瞿陀尼と南贍部洲と北倶盧洲となり。天とは謂く[五]四大王衆天と三十三天と夜摩天と覩史多天と樂變化天と他化自在天と[六]梵衆天と、梵輔天と大梵天と[七]少光天と無量光天と極光淨天と[八]少淨天と無量淨天と遍淨天と[九]無雲天と福生天と廣果天と無想有情天と無煩天と無熱天と善現天と善見天と色究竟天と、[一〇]無邊空處天と無邊識處天と無所有處天と非想非非想處天となり。生の所依處とは、卽ち器世界なり。謂く、水輪は風輪に依り、地輪は水輪に依る。此の地輪に依りて蘇迷盧山と七金山と四大洲と八小洲と內海と外海と有り。蘇迷盧山の四の外に層級あり、四大王衆天と三十三天との所居の處は別なり。外輪圍山の虛空宮殿の、若しは夜摩天と覩史多天と樂變化天と他化自在天と、及び色界天との所居の處は別なり。諸の阿素洛の所居の處は別なり。及び諸の那落迦の所居の處は別なり。謂く、熱那落迦と寒那落迦と孤獨那落迦と、及び一分の傍生と餓鬼との所居の處は別なり。乃至、一の日と一の月との周遍流光して照す所の方處を、一世界と名づく。是くの如くにして千世界の中には千の日と千の月と千の蘇迷盧山王と千の四大洲と千の四大王衆天と千の三十三天と千の

【一】本論卷十一初頁以下。
【二】本論卷十三初頁以下。
【三】本論卷十五初頁以下。
【四】諦決擇の中、初めに苦諦を略辯す。
【五】四大王衆天以下の六は六欲天なり。
【六】梵衆天以下の三は色界の初禪。
【七】少光天以下の三は第二禪。
【八】少淨天以下の三は第三禪。
【九】無雲天以下の九は第四禪。
【一〇】無邊空處天以下は無色界の四天なり。

對治已生に隨ふとは、謂く修道所斷の上品等の煩惱の對治已生なり。此くの如き種類の種子成就し、不成就を得すとは、謂く已に永に隨眠を害するが故なり。

[二九]自在成就とは、謂く諸の方便の善法の若しは世と出世との靜慮と解脫と三摩地と三摩鉢底等との功德と、及び一分の無記法とは、自在成就に由るが故に成就す。

方便の善法とは、謂く聞所生の慧等なり。先に種子有りと雖も、若し今生に數〻習ふ增長を離るれば、終に能起現前せざるが故なり。一分の無記法とは、謂く工巧處と變化心との等なり。

[三〇]現行成就とは、謂く諸の蘊と界と處との法なり。現前する所に隨ひ、若しは善、若しは不善、若しは無記、彼れ現行成就に由るが故に成就す。

若し已に善根を斷ぜる者の所有の善法は、種子成就に由るが故に成就し、亦不成就と名づく。若し非涅槃法の一闡底迦なれば、究竟して雜染の諸法を成就す。解脫因を闕くに由りて亦阿顚底迦と名づく。彼れは解脫の得因をば畢竟じて成就せざるを以ての故なり。

問ふ、何等かを名づけて解脫の得因となすや。答ふ、若し眞如に於て、先に集起せし煩惱の麁重、若しは隨順して對治を得する緣に遇へば、便ち能く永に害するを以て此の堪任の性を解脫得因と名づく。若し此れと相違すれば、無解脫因と名づく。

[三一]問ふ、成就善巧に於て何んの勝利をか得るや。

答ふ、能善く諸法の增と減とを了知す。增と減とを知るが故に、世の興衰に於て決定の想を離る。乃至能く若しは愛、若しは恚を斷ず。

〔二九〕三成就の中、次に自在成就を明す。

〔三〇〕三成就の中、次に現行成就を明す。

〔三一〕次に成就の利を明す。

善巧にて速に無我に入る。

〔二五〕復た次に成就の相は〔二六〕前に已に說けるが如し。

本事分中、成就品、第四

謂く善と不善と無記との法に於て、若しは增し若しは減ずるに、獲得成就を假立す。
此の差別に三種有り。謂く種子成就と自在成就と現行成就となり。〔二七〕
種子成就とは、謂く若し欲界に生ずれば、欲〔界繫〕と色〔界繫〕と無色界繫との煩惱と隨煩惱とを、種子成就に由るが故に成就す。及び生得善となり。〔二八〕
欲界に生じて三界の煩惱と隨煩惱とを成就するとは、未離欲の異生に依りて說く。若し已離欲ならば、或は上地に生じ離るる所の欲地に隨ひて、即ち此の地の煩惱と隨煩惱と亦は成就し亦は成就せず。未だ永に隨眠を害せざるが故に。對治道の所損なるが故に。其の次第の如し。及び生得善とは、所生の地に隨ひて即ち此の地のをば、〔亦は〕成就す。
若し色界に生ずれば、欲界繫の煩惱と隨煩惱とは、種子成就に由るが故に成就し、亦不成就と名づく。色〔界繫〕と無色界繫との煩惱と隨煩惱とは、種子成就に由るが故に成就す。及び生得善となり。若し無色界に生ずれば、欲〔界繫〕と色界繫との煩惱と隨煩惱とは、種子成就に由るが故に成就し、亦不成就と名づく。無色界繫の煩惱と隨煩惱とは、種子成就に由るが故に成就す。及び生得善となり。若し已に三界の對治道を得すれば、是くの如き是くの如き品類の對治已生に隨ひて、此くの如き此くの如き品類の種子成就し、不成就を得す。是くの如き是くの如き品類の對治未生に隨ひて、此くの如き此くの如き品類の種子成就に由るが故に成就す。
已に三界の對治道を得すとは、謂く已に出世の聖道を得するなり。是くの如き是くの如き品類の

〔二五〕初に成就を明し、次に成就の利を明す。成就の中、三成就あり。
〔二六〕論二、初丁往見。
〔二七〕三成就に關しては、瑜伽論五十二、成唯識論一等にもあり、往見すべし。
〔二八〕三成就の中初に種子成就を明す。種子成就に關して、瑜伽論と雜集論との間に異論を成せり、即ち唯識述記二本(p. 59, b)、唯識演祕二本(p. 38, b)等には之に就きて關說し、而して同學鈔一之十一には「以在他界」なる論題のもとに之を議せり、往ひて見るべし。

り。

又染汚・遍行・同行・相應有り。謂く、染汚の意に於ける四種の煩惱なり。

此の四法は一切時に於て恒に相應するに由るが故なり。

又非一切時同行相應有り。謂く、依止の心或時には信等の善法を起し、或時には貪等の煩惱隨煩惱の法を起す。

又分位同行相應有り。謂く、樂受と諸の相應法、苦受不苦不樂受と諸の相應法となり。

又無間同行相應有り。謂く、有心に在る位なり。

又有間同行相應有り。謂く、無心定に間てらるるなり。

又外門同行相應有り。謂く、多分の欲界繫の心心法なり。

又內門同行相應有り。謂く、諸の定地所有の心心法なり。

又曾習同行相應有り。謂く、諸の異生所有の心心法と、及び有學と[二三]無學の者の一分の心心法となり。

一分の言は、謂く一向世間の善と不善と無記との法を攝す。其の所應の如し。

又未曾習同行相應有り。謂く出世間の諸の心心法と、及び初〔時〕と後時との出世後所得の諸の心心法となり。

初後時の言は先の種類に非ざる初念已去、及び第二念等已去の出世の心心法は、是れ未曾習の性なることを顯はさんが爲めなり。

[二四]問ふ、相應善巧に於て何の勝利をか得るや。

答ふ、能善く唯だ依止の心に受想等の染淨の諸法の相應と不相應との義有ることを了悟す。此の了悟に由り、卽ち能く我は能受なり能想なり能思なり能念なりと計する染淨の執著を捨離す。又能く

【二三】無學の二字は集論にはなし。

【二四】次に相應の利を明す。

不相離相應とは、謂く一切の有方分の色と極微處とは互に相離せず。

諸の色等と極微とは同一處所に攝められ相離せざるに由るが故なり。

和合相應とは、謂く極微已上の一切の有方分の色は更に互に和合す。

濁水中に地水の極微更に互に和合するが如し。

聚集相應とは、謂く方分の聚色展轉集會す。

二の泥團の相撃ちて聚を成ずるが如し。

俱有相應とは、謂く一身中の諸の蘊と界と處とは、俱時に流轉し同じく生じ住し滅す。

作事相應とは、謂く一所作の事に於て展轉して相攝す。二の苾芻の隨一の所作更に互に相應するが如し。

同行相應とは、謂く心心法は一の所緣に於て展轉して同行するなり。此の同行相應に復た多の義有[三]り。謂く他性と相應し已性とには非ず。

心は餘の心と相應せず、受は餘の受と相應せざるが如し。是くの如き等なり。

又不相違と相應し、相違とには非ず。

貪は瞋と相應せず、善は不善と相應せざるが如し。是くの如き等なり。

又同時と相應し、異時とには非ず。

現在は去來と相應せざるが如し。

又同分の界地と相應し、異分の界地とには非ず。

欲界は色〔界〕無色界と相應せず、初靜慮は第二靜慮と相應せざるが如し。是くの如き等なり。

又一切遍行同行相應有り。謂く受と想と思と觸と作意と及び識となり。

此の六法は一切の位に於て決定して相應す、一法の無なるに隨ひて餘も亦無なるに由るが故な

【三】同行相應の中、次に十三の相應を開く。

勝義攝とは、謂く蘊と界と處との眞如に攝めらるるものなり。

是くの如き攝の相は、諸の世間の共に成立する所に隨ふ。相攝の道理に復た六種有り。[一九] 一には依處攝なり。世間に說くが如し。贍部洲は人を攝し、阿練若は鹿を攝す。當に知るべし、此の中眼等の諸根に眼等の識を攝することも亦爾なり。二には任持攝なり。世間に說くが如し。繩等の薪束等を攝するを。當に知るべし、此の中身根に眼等の根を攝するも亦爾なり。三には同事攝なり。世間に說くが如し。衆人が同事に共に相ひ保信して更に互に相攝するを。當に知るべし、此の中、同じく一の緣に轉ずる諸の相應の法の、更に互に相攝することも亦爾なり。四には攝受攝なり。世間に說くが如し。主能く自の僕使等を攝錄するを。當に知るべし、此の中、阿賴耶識の自身を攝受するも亦爾なり。五には不流散攝なり。世間に說くが如し。瓶の水を攝持するを。當に知るべし、此の中、諸の三摩地の餘の心心法を攝するも亦爾なり。六には略集攝なり。世間に說くが如し。海の衆流を攝するを。當に知るべし、此の中、色〔蘊〕と受蘊等の眼耳等を攝するも亦爾なり。前に說ける所の十一種の攝の如きは、皆此の中の略集攝に依りて說く。

[二〇] 問ふ、攝善巧に於て何んの勝れたる利を得するや。

答ふ、所緣に於て略して勝れたる利を集むることを得。彼彼の境に隨ひて略して其の心を聚む。是くの如く是くの如くして善根增勝するなり。

本事分中、相應品、第三

[二一] 復た次に、略して相應を說くに六種有り。謂く不相離相應と和合相應と聚集相應と俱有相應と作事相應と同行相應となり。

【一九】師子覺因論生論して六種攝を明し、上の十一種は六種攝中の第六略集攝中に攝せらるべきことを述ぶ。

【二〇】次に攝利を明す。

【二一】相應を明す中、初に相應を明し、次に相應利を明す、今は初にして六種相應を明す。

し。此の道理に由り、餘經の中に於て、諸の蘊と界と處との所攝の一切の法が能く全分を攝す〔と說けり〕。

更互攝とは、色蘊は幾界と幾處とを攝するや。十の全と一の少分となり。

受蘊は幾界と幾處とを攝するや。一の少分なり。受蘊の如く想と行との蘊も亦爾なり。

識蘊は幾界と幾處とを攝するや。七界と一處となり。

眼界は幾蘊と幾處とを攝するや。色蘊の少分と一處の全となり。眼界の如く耳〔界〕と鼻〔界〕と舌〔界〕と身〔界〕と、色〔界〕と聲〔界〕と香〔界〕と味〔界〕と觸界とも亦爾なり。

意界は幾蘊と幾處とを攝するや。一蘊と一處となり。

法界は幾蘊と幾處とを攝するや。三蘊の全と色蘊の少分と一處の全となり。

眼識界は幾蘊と幾處とを攝するや。識蘊と意處との少分なり。眼識〔界〕の如く耳〔識界〕と鼻〔識界〕と舌〔識界〕と身〔識界〕と意識界とも亦爾なり。

眼處は幾蘊と幾界とを攝するや。色蘊の少分と一界の全となり。眼處の如く耳〔處〕と鼻〔處〕と舌〔處〕と身〔處〕と、色〔處〕と聲〔處〕と香〔處〕と味〔處〕と觸〔處〕とも亦爾なり。

意處は幾蘊と幾界とを攝するや。一蘊と七界となり。

法處は幾蘊と幾界とを攝するや。三蘊の全と一の少分と一界の全となり。是くの如く諸の餘の法は蘊・界・處の名を以て說き、及び餘は蘊・界・處の名を〔以て〕說くには非ず。實有と假有と世俗有と勝義有と所知と所識と所達と有色と無色と有見と無見となり。是くの如き等は前に顯はせる所の如し。其の所應に隨ひて蘊と界と處と更に互に相攝すること、盡く當に知るべし。

其の所應に隨ふとは、蘊の一一が諸の界と處とを攝し、界の一一が、諸の蘊と處とを攝し、處の一一が、諸の蘊と界とを攝するが如し。是くの如く廣說す、當に思うて了知すべし。

分位攝とは、謂く樂位の蘊と界と處とは卽ち自ら相攝す。苦位と不苦不樂位とも亦爾なり。分位等しきが故なり。

色受等の如き同蘊の類なりと雖も、然も苦樂等の分位の差別あり。樂位は還つて樂位を攝して苦等の位には非ず。是の如く苦位と不苦不樂位とも還つて自ら相攝す。蘊の如く界と處とも亦爾なり。

伴攝とは、謂く色蘊と餘の蘊と互に伴と爲るが故に卽ち助伴を攝するなり。餘蘊と界と處とも亦爾なり。

色蘊と餘の受等と互に助伴と爲り、能く五蘊を攝するが如く、是の如く受等と一一の助伴と各五蘊を攝す。蘊の如く界と處とも亦爾なり。互に伴と爲るが故に、一一皆一切の界と處とを攝するなり。

方攝とは、謂く、東方の諸の蘊と界と處とに依り還つて自ら相攝す。餘方の蘊と界と處とも亦爾なり。

時攝とは、謂く過去世の諸の蘊と界と處とは、還つて自ら相攝す。未來と現在との諸の蘊と界と處とも亦爾なり。

一分攝とは、謂く所有の法は蘊と界と處との所攝の但だ一分のみを攝して餘には非ざるなり。

戒蘊の但だ色蘊等の一分のみを攝し、定と慧との蘊等が但だ行蘊の一分のみを攝し、欲恚害界が但だ法界の一分のみを攝し、空無邊處等が但だ意〔處〕と法處との一分のみを攝するが如し。是くの如き等なり。

具分攝とは、謂く所有の法は蘊と界と處との所攝を能く全分攝するなり。

苦蘊の五取蘊を攝し、欲界の十八界を攝し、無想有情處の十處を攝して、香と味とを除くが如

多分の言は等流の法を簡ばんが爲なり。聞思に因りて生ずる所の慧と爲す。
內門差別とは、謂く一切の定地なり。
長時差別とは、謂く諸の異生なり。
分限差別とは、謂く諸の有學と及び最後刹那の蘊と界と處とを除ける所餘の無學となり。
暫時差別とは、謂く諸の無學の最後刹那の蘊と界と處となり。
顯示差別とは、謂く諸佛と及び已に究竟を得せる菩薩摩訶薩との示現する所の諸の蘊と界と處となり。

本事分中、攝品、第二

復た次に略說せば、[一八]攝に十一種有り。謂く、相攝と界攝と種類攝と分位攝と伴攝と方攝と時攝と一分攝と具分攝と更互攝と勝義攝となり。
相攝とは、謂く蘊と界と處との一一の自相は、卽ち體自ら攝するなり。
　色蘊の色蘊を攝し、廣說す、乃至、法處の法處を攝するが如し。
界攝とは、謂く蘊と界と處との所有の種子なり。阿賴耶識は能く彼の界を攝す。
　彼の種子此の中に有るに由るが故に。
種類攝とは、謂く蘊と界と處と其の相異れりと雖も、蘊の義と界の義と處の義とは等しきが故に展轉して相攝す。
　蘊の義等とは、謂く色受等に皆聚の義有り、相各〻異なれりと雖も一切相攝し、更に互に相望するに同一の類なるが故なり。界の義等とは、謂く眼耳等は皆能持受用の義有るが故に一切相攝するなり。處の義等とは、謂く眼耳等皆生長門の義と相應するが故に、一切相攝するなり。

【一八】攝を說くに二あり、初に攝を明し次に攝利を明す。今は初に十一種攝を明す。

復た四種の差別有り。謂く、相差別と分別差別と依止差別と相續差別となり。

相差別とは、謂く蘊と界と處との一一の自相の差別なり。

色受等の如し。

分別差別とは、謂く卽ち蘊と界と處との中に於て、實有と假有と、世俗有と勝義有と、有色と無色と、有見と無見と、是くの如き等の無量の差別なり。分別とは前に說けるが如し。

依止差別とは、謂く乃至有情の依止の差別爾の所有り。當に知るべし蘊と界と處とも亦爾なり。

各別の內身に依り蘊等の諸法種種異なれるに由るが故なり。

相續差別とは、謂く一一の刹那に蘊と界と處と轉ず。

一身の中に於て、蘊等の諸法、一一の刹那に性變異するが故なり。

問ふ、相差別の善巧に於て何をか了知する所と爲すや。

答ふ、我執の過患を了知するなり。

問ふ、分別差別の善巧に於て何をか了知する所と爲すや。

答ふ、聚想の過患を了知するなり。

問ふ、依止差別の善巧に於て何をか了知する所と爲すや。

答ふ、不作にして而も得し、作すと雖も而も失する想の過患を了知するなり。

問ふ、相續差別の善巧に於て何をか了知する所と爲すや。

答ふ、安住想の過患を了知するなり。

〔一七〕又蘊と界と處とに六種の差別有り。謂く外門差別と內門差別と長時差別と分限差別と暫時差別と顯示差別となり。

外門差別とは、謂く多分欲界の差別なり。

【一六】次に四種を以て三科の差別を明す。

【一七】次に六種を以て三科の差別を明す。

謂く、諸佛及び已證の大威德菩薩、唯示現の食力のみに由りて住するが故に。
〔一二〕云何んが有上なるや。幾ばくか是れ有上なるや。何んの義の爲めの故に有上を觀ずるや。謂く一切有爲なるが故に。無爲一分なるが故に。是れ有上の義なり。法界と法處との一分を除きて一切是れ有上なり。

一切法の中、涅槃と及び清淨眞如とは是れ最勝相なるを以ての故に。

下劣の事を執著する我を捨せんが爲めの故に有上を觀察す。
〔一三〕云何んが無上なるや。幾ばくか是れ無上なるや。何んの義の爲めの故に無上を觀ずるや。謂く無爲一分なるが故に。是れ無上の義なり。法界と法處との一分の前に說ける所の如きは是れ無上なり。最勝の事に執著する我を捨せんが爲めの故に無上を觀察す。此に說かるる差別の道理に由り、〔一四〕餘の無量の門は類して觀察すべきなり。
〔一五〕復た次に蘊と界と處との差別に略して三種有り。謂く遍計所執相の差別と、所分別相の差別と、法性相の差別となり。遍計所執相の差別とは、謂く蘊と界と處との中に於ける遍計所執なり。我と有情と命者と生者と養者と數取趣者と意生者と摩納婆との等しきなり。

蘊等の中に於ては實に我等の自性無し。但是れ遍計所執の相なるが故に。

所分別相の差別とは、謂く卽ち蘊と界と處との法なり。

此の處に於て我有情等の虛妄分別轉ずるに由るが故なり。

法性相の差別とは、謂く卽ち蘊と界と處との中に於て我等は性無く無我は性有るなり。

有無の相を離れたる眞如の用に由り、蘊等の中の我等は性無く、無我は性有るを相と爲すが故に。當に知るべし、此の中三の自性と及び多分とに依り、數〻趣を取るも我無き理に依りて三種の相を說く。

【一二】次に有上を辯ず。

【一三】次に無上を辯ず。

【一四】以上の他無量の門ありて「云何、幾種、爲何義」と云はるべきことを上に例して略說す。

【一五】蘊・界・處の差別を明す中、今は初に三種を以て明す。

識と、及び相應の法とのみなり。餘は但だ異熟生にして異熟には非ざるなり。

餘とは、謂く眼耳等と及び苦樂等となり。是れ阿賴耶識の餘にして、此は唯だ異熟生とのみ名づくることを得、異熟從り生ずるが故なり。

〔一〇〕云何んが食なるや。幾ばくか是れ食なるや。何んの義の爲めの故に食を觀ずるや。謂く變壞するが故に有變壞者なり。境界なるが故に有境界者なり。悕望するが故に有悕望者なり。取するが故に有取者なり、是れ食の義なり。

初は是れ段食なり。變壞する時〔諸〕根大〔種〕を長養するに由るが故に。二は是れ觸食なり。可愛の境の觸るるに依りて所依を攝益するに由るが故に。三は是れ意思食なり。意を繫け可愛の事を悕望する力に由り所依を攝益するが故に。四は是れ識食なり。阿賴耶識の執持力が身に住することを得るに由るが故に。所以は何んとならば、若し此の識を離るれば、所依止の身便ち爛壞するが故なり。

三蘊と十一界と五處との一分、是れ食なり。食に由りて住することを執著する我を捨せんが爲めの故に食を觀察す。

又此の四食の〔一一〕差別の建立は略して四種有り。

一には不淨依止住食なり。

謂く、欲界の異生具縛に由るが故に。

二には淨不淨依止住食なり。

謂く、有學と及び色〔界〕と無色界との異生餘の縛有るが故に。

三には淸淨依止住食なり。

謂く、阿羅漢等一切の縛を解脫せるが故に。

四には示現住食なり。

〔一〇〕次に食を辯ず。

〔一一〕四食の差別に關しては義林章四食章、並に同學鈔四之一四食證段等を往見すべし。攝大乘論等に對する雜集論の所說の同異を辯じてあり。

云[八]何んが行苦性なるや。幾ばくか是れ行苦性なるや。何んの義の爲めの故に行苦性を觀ずるや。謂く、不苦不樂受の自相なるが故に。不苦不樂受の法の自相に隨順するが故に。彼の二の麁重の攝受する所なるが故に。二の無常に隨ふ所の不安隱を離れざるが故に。是れ行苦性の義なり。

不苦不樂受とは、謂く阿賴耶識相應の受なり。不苦不樂受の法に隨順するとは、謂く此の受に順ずる諸の行なり。彼の二の麁重の攝受する所とは、謂く苦と壞との二苦の麁重の所隨なるが故に、二の無常に隨ふ所の不安隱を離れずとは、謂く、二苦を解脫せざるが故に。或は一時に於て苦位に墮在し、或は一時に於て樂位に墮在す。一切の時に唯不苦不樂位のみには非ざるなり。是の故に無常に隨ふ所の不安隱の義なり。是れ行苦性なり。

三界と二處と諸蘊の一分とを除く一切は是れ行苦性なり。

三界とは、謂く意界と法界と意識界となり。二處とは、謂く意處と法處となり。一分とは、謂く無漏相を除く。

不苦不樂有ることを執著する我を捨せんが爲めの故に行苦性を觀察す。

云[九]何んが有異熟なるや。幾ばくか是れ有異熟なるや。何んの義の爲めの故に有異熟を觀ずるや。謂く不善と及び善の有漏と、是れ有異熟なり。

不善と及び有漏の善法とに由り、能く當來の阿賴耶識と及び相應の異熟と有り。彼の異熟に由るが故に此の二種を有異熟と名づく。

十界と四處と諸蘊の一分と、是れ有異熟なり。

十界とは、謂く七識〔界〕と色〔界〕と聲〔界〕と法界となり。四處とは、謂く色〔處〕と聲〔處〕と意〔處〕と法處となり。一分とは、謂く無記と無漏とを除く。

能捨と能續との諸蘊を執著する我を捨せんが爲めの故に有異熟を觀察す。又異熟とは唯だ阿賴耶

【八】次に行苦性を辯ず。

【九】次に有異熟を辯ず。

受と識との蘊の全と、色と行との蘊の一分と、十二界と六處との全と、法界と法處との一分と、是れ根なり。

色蘊の一分とは、謂く眼と耳と鼻と舌と身と〔の根と〕男女根となり。行蘊の一分とは、謂く命と信と勤と念と定と慧との根なり。十二界の全とは、謂く六根と六識との界なり。六處の全とは、謂く內の六處なり。法界と法處との一分とは、謂く、命〔根〕と及び樂等と信等との五根なり。

增上を執著する我を捨せんが爲めの故に根を觀察す。

云[六]何んが苦苦性なるや。幾ばくか是れ苦苦性なるや。何んの義の爲めの故に苦苦性を觀ずるや。謂く苦受の自相なるが故に。苦受法の自相に隨順するが故に。是れ苦苦性の義なり。

苦受の自相とは、謂く苦受は卽ち苦體を用つて自相と爲すが故に苦苦性と名づく。苦受法の自相に隨順するとは、謂く能く此の受を生ずる根と境と、及び相應の法とは、苦受に隨順するが故に苦苦性と名づく。

一切の一分は是れ苦苦性なり。苦有ることを執著する我を捨せんが爲めの故に苦苦性を觀察す。

云[七]何んが壞苦性なるや。幾ばくか是れ壞苦性なるや。何んの義の爲めの故に壞苦性を觀ずるや。謂く、樂受の變壞する自相なるが故に。樂受法の變壞する自相に隨順するが故に。何の愛心に於て變壞するが故に。是れ壞苦性の義なり。

此の中樂受及び樂受法に隨順するは、變壞する位に於て能く憂惱を生ずるが故に、此の變壞は是れ壞苦の性なり。又愛に由るが故に心をして變壞せしむ、亦是れ壞苦なり。經の中に變壞心に入れ說けるが如し。

一切の一分是れ壞苦性なり。樂有ることを執著する我を捨せんが爲めの故に壞苦性を觀察す。

【六】次に苦々性を辯ず。

【七】次に壞苦性を辯ず。

似し、相續して生ずるが故に。是れ同分彼同分の義なり。

初は是れ同分なり。諸の根の識と倶にして識に相似し、諸の境界に於て相續して生ずるが故に、根の識と相似して轉ずる義に由り說いて同分と名づくるなり。第二は是れ彼同分なり。諸の根の識に離れ自類のみ相似し、相續して生ずるが故に。根識と合せざるに由り、唯だ自體のみ相似し。相續して生ず。根の相相似する義を說いて彼同分と名づく。

色蘊の一分と眼等の五と有色界處の一分と、是れ同分彼同分なり。識と相應し相應せざるを執著する我を捨せんが爲めの故に、同分彼同分を觀察す。

云[四]何んが執受なるや。幾ばくか是れ執受なるや。何んの義の爲めの故に執受を觀ずるや。謂く、受の生ずる所依の色なるが故に是れ執受の義なり。

若しは此の色に依りて受生ずることを得る、是れを執受と名づく。

色蘊の一分と五有色界處の全と、及び四の一分と、是れ執受なり。

色蘊の一分とは、謂く根と根の居處との所攝なり。五有色界の全とは、謂く眼等なり。四の一分とは、謂く根を離れざる色と香と味と觸となり。

身自在轉を執著する我を捨せんが爲めの故に執受を觀察す。

云[五]何んが根なるや。幾ばくか是れ根なるや。何んの義の爲めの故に根を觀ずるや。謂く、取境增上なるが故に。種族不斷增上なるが故に。衆同分の住すること增上なるが故に。受用淨不淨の業果增上なるが故に。世間の離欲增上なるが故に。出世の離欲增上なるが故に。是れ根の義なり。

取境增上とは、謂く眼等の六も此の增上力に由り、色等の境に於て心心法轉ずるが故に。種族不斷增上とは、謂く男女根此の增上力に由り、子孫等の胤流轉して絕えざるが故に。餘は增上緣中に說けるが如し。

【四】次に執受を辯ず。

【五】次に根を辯ず。

が故に。産生增上なるが故に。住持增上なるが故に。受用果增上なるが故に。世間清淨離欲增上なるが故に。出世清淨離欲增上なるが故に。是れ增上緣の義なり。

任持增上とは、謂く風輪等の水輪等に於ける、器世間の有情世間に於ける、大種の所造に於ける、諸根の諸識に於ける、是くの如き等なり。

引發增上とは、謂く一切有情の共業の器世間に於ける(が故に)、有漏業の異熟果に於ける、是くの如き等なり。

俱有增上とは、謂く心の心法に於ける、作意の心に於ける、觸の受に於ける、是くの如き等なり。此の後の增上は二十二根に依りて建立す。

境界增上とは、謂く眼と耳と鼻と舌と身と意との根なり。此の增上力に由りて色等生ずるが故なり。

産生增上とは、謂く男女根なり。此の增上力に由りて入胎を得するが故なり。

住持增上とは、謂く命根なり。此の增上力に由りて衆同分住することを得るが故なり。

受用果增上とは、謂く苦と樂と憂と喜と捨との根なり。此れに由りて能く愛と非愛との異熟を受くるが故なり。

世間清淨離欲增上とは、謂く信と勤と念と定と慧との根なり、此れに由りて諸の煩惱を制伏するが故なり。

出世清淨離欲增上とは、謂く建立せらるる未知欲知根と已知根と具知根となり。此れに由りて永に諸の隨眠を害するが故なり。

[三] 云何んが同分彼同分なるや。幾ばくか是れ同分彼同分なるや。何んの義の爲めの故に同分彼同分を觀ずるや。謂く、識を離れざる彼の根、境に於て相續して生ずるが故に。識を離れて自ら相

【三】次に同分彼同分を辯ず。

無分別智無くなんぬ、
此れ若し無ければ、
佛果の證得理に應ぜず。
〔心〕自在を得せる菩薩、
願辨力に由る故に、
欲地等をば成ずる如く、
定を得る者亦爾り。
簡擇を成就せる者、
有智にして定を得せる者、
一切法を思惟せば、
義の如く皆顯現す。
無分別智行ずれば、
諸の義は皆現はれず、
當に知るべし義は有ること無く、
此れに由り亦識も無し。

遍知とは、謂く如實に相と差別と安立との所緣の境界を知るなり。

斷とは、謂く聲聞等と、及び大乘所得の轉依と、聲聞乘等所得の轉依となり。蘊・界・處の所緣に於て解脫を得すと雖も、然も彼に於て自在を得せず。大乘所得の轉依は具に二種を得す。已に所緣緣を說けり。文に隨ひて義を決擇すべし。

增上緣とは、謂く任持增上なるが故に。引發增上なるが故に。俱有增上なるが故に。境界增上なる

此れは法の義に依る。二十一には狭小の所緣、謂く聲聞乘等なり。二十二には廣大の所緣、謂く、大乘なり。二十三には相の所緣、謂く止擧捨の相なり。二十四には無相の所緣、謂く、涅槃と及び第一有となり。二十五には眞實の所緣、謂く、眞如と及び十六行の所緣の諸諦となり。二十六には安住の所緣、謂く、滅盡定と及び定の方便との心心法の所緣なり。二十七には自在の所緣、謂く、解脱等乃至一切種智の諸の功德の所緣なり。二十八には須臾の所緣、謂く、無學の所緣なり。唯だ此の生のみなるが故に。二十九には隨轉の所緣、謂く佛と菩薩との所緣の境界なり。安立とは、謂く所緣の境體眞實に非ず、唯だ安立なるが故に。四種の因に由りて所緣の境體眞實に非ざることを知る。謂く、〔一には〕相違の識の相なるが故に。〔二には〕所緣の境は無にして識は得すべきが故に。〔三には〕功用に由らずして無倒なるべきが故に。〔四には〕三智に隨ひて轉ずるが故に。此の道理に由りて能取の體性も亦眞實に非ず。三智とは、謂く、自在智と觀察智と無分別智となり。四因を顯はさんが爲め、乃ち頌を說いて曰く。

[二] 鬼と傍生と人と天と、
各ょ其の所應に隨ふは、
事等しきも心異なれるが故なり、
〔故に〕義眞實に非ずと許すなり。
過去の事等と、
夢と像との二影の中に於て、
所緣は實に非ずと雖も、
而も境相成就するなり。
若し義義性を成ずれば、

【二】此の頌はもと大乘阿毘達磨經の頌にして所謂唯識の四智說と稱せらるる敎理を說きて唯識無境の理を說きたるものなり、攝大乘論等にも亦引用せらる。

復た次に、若し所緣緣の義を決擇せんと欲せば、相を以ての故に。差別なるが故に。安立なるが故に。遍知なるが故に。斷なるが故に。所緣を建立すべし。

相とは、謂く若しは義なり。是れは此れに似て顯現する心心法の生因なり。彼れ既に生じ已り、還つて能く執著し、顯了に內に此の義を證す。是れ所緣の相なり。

差別とは、二十九種有り。一には所緣を有するに非ず。謂く、顚倒の心心法と及び緣となり。過去と未來と夢と影と幻等の所緣の境界なり。二には所緣を有するなり。謂く、餘の所緣の境界なり。三には所緣の所緣無し。謂く、色心の〔分位に假立せる〕不相應行と無爲となり。四には所緣の所緣有り。謂く、心心法なり。五には正性の所緣、謂く、善法なり。六には邪性の所緣、謂く、汚法なり。七には非正性非邪性の所緣、謂く、無覆無記法なり。八には如理の所緣、謂く、善の心心法なり。九には不如理の所緣、謂く、染汚の心心法なり。十には非如理非不如理の所緣、謂く、此れに異なれる心心法なり。十一には同類の所緣、謂く、善等の善等を緣じ、自地の自地を緣じ、有漏の有漏を緣じ、無漏の無漏を緣ずる、是くの如き等なり。十二には異類の所緣、謂く善等の不善等を緣じ、餘地の餘地を緣じ、有漏と無漏との無漏と有漏とを緣ずる、是くの如き等なり。十三には異性の所緣、謂く有尋有伺の心心法の所緣なり。十四には一性の所緣、謂く無尋無伺の心心法の所緣なり。十五には威勢の所緣、謂く無想と及び彼の方便の心心法の所緣の境界と、及び空〔無邊處〕と識無邊處との所緣の境界なり。此の中、前の二句は能く想を除くが故に威勢と名づけ、所餘は性大なるが故に威勢と名づく。十六には略細の所緣、謂く、無所有處の所緣の境界なり。十七には極細の所緣、謂く、非想非非想の所緣なり。此れを過ぎて更に極細なる性無きが故に。十八には煩惱の所緣、謂く卽ち此れ能く所緣を有するが故に。經の中に斷滅所緣と說けるが如し。十九には法の所緣、謂く、聖敎の名句文身なり。二十には義の所緣、謂く、

が故に。事の所縁なるが故に。分別の所縁なるが故に。有顚倒の所縁なるが故に。無顚倒の所縁なるが故に。有礙の所縁なるが故に。無礙の所縁なるが故に。是れ所縁縁の義なり。

有分齊の境の所縁とは、謂く五識身の所縁の境界なり。五識身が各別の境界〔を縁ずる〕に由るが故に。

無分齊の境の所縁とは、謂く意識の所縁の境界なり。意識身は一切法を縁じて境界と爲すを以ての故なり。

無異行相の境の所縁とは、謂く名想の衆生を了別すること能はず、意識所縁の境界に、彼れ境に於て名字を作すこと能はざるに由るが故なり。

有異行相の境の所縁とは、謂く此れと相違す。

有事の境の所縁とは、謂く見と慢と及び此れと相應する法を除く餘の所縁の境界なり。

無事の境の所縁とは、謂く前に除ける所の所縁の境界なり。彼れは我處に於て起るに由るが故なり。

事の所縁とは、謂く無漏緣の同じく界地を分たざると、遍行の事に於て決了せざると及び未來の所縁とを除きたる餘の所縁の境界なり。

分別の所縁とは。謂く前に除ける所の所縁の境界なり、彼は唯自の所分別のみを縁じて境界と爲すに由るが故なり。

有顚倒の所縁とは、謂く常等の行の所縁の境界なり。

無顚倒の所縁とは、謂く無常等の行の所縁の境界なり。

有礙の所縁とは、謂く未だ所知障を斷ぜざる者の所縁の境界なり。

無礙の所縁とは、謂已に所知障を斷じたる者の所縁の境界なり。

るなり。

憶念力とは、謂く過去の境界を憶念分別して戲論を生ずるなり。

作意力とは、謂く觀察作意に由りて種種の淨妙なる相貌を思惟するなり。

相續力は九種有り。命終の心自體の愛と相應し、三界の中に於て、各々欲〔界〕と色〔界〕と無色界との生をして相續せしむ。謂く、欲界に從ひ沒して還つて欲界に生ずる者は、即ち欲界の自體愛相應の命終心を以て結生相續す。若し色〔界〕と無色界とに生ずる者は、即ち色〔界〕と無色界との自體愛相應の命終心を以て結生相續するなり。是くの如く色〔界〕と無色界と從り沒し、若しは即ち彼に生じ、若しは餘處に生ずるに六種の心有り。其の所應の如く盡く當に知るべし。又此の自體愛は唯だ是れ俱生にして所緣の境を了せず。有覆無記性の攝なり。而も能く我の自體を分別して差別の境界を生ず。此の勢力に由り諸の異生輩をして、無間に中有に相續せしむ。未離欲の聖者も亦爾なり。命終の時に臨み、乃至未だ明了想の位に至らず、其の中に能く此の愛の現行を起し、然も能く了別す。對治力に攝伏せらるるを以てなり。已離欲の聖者は、對治力強きが故に、未だ永に斷ぜずと雖も、然も此の愛復た現行せず。彼れ隨眠の勢力に由りて、生をして中有に相續せしむ。初の相續の刹那は唯だ無覆無記なり。是れ異熟の攝なるを以ての故に。此れ從り已後は、或は善、或は不善、或は無記なり。其の所應に隨ひて彼の沒心を除く。中有の沒心は常に是れ染汚なるを以て、猶し死有の如し。生有の相續の心の刹那も亦唯だ無覆無記なり。若し諸の菩薩の願力にて生を受くる者の命終等の心は、當に知るべし、一切一向に是れ善なり。已に因論生論の等無間緣の義を說けり。

[一]所緣緣とは、謂く有分齊の境の所緣なるが故に。無分齊の境の所緣なるが故に。無異行相の境の所緣なるが故に。有異行相の境の所緣なるが故に。有事の境の所緣なるが故に。無事の境の所緣なる

【一】成唯識論七 (p.3 a)以下往見。

には憶念力に由る。九には作意力に由る。十には相續力に由る。
串習力とは、復た三種有り。謂く、下と中と上との品なり。若し諸定の入住と出相とに於て、未だ了達せさるが故に是れ下品なり。已に了達すと雖も、未だ善く串習せざるが故に是れ中品なり、既に了達し已りて、復た善く〔串〕習するが故に是れ上品なり。若しは下品の串習の力の者有り。諸の靜慮と諸の無色定とに於て、唯だ能く次第にのみ入る。若しは中品の串習力の者有り。亦能く超越して入る。唯能く方便にて一間のみを超越す。若しは上品の串習力の者有り。其の所欲に隨ひ、或は一切を超え、若しは順に、若しは逆に諸の等至に入る。

染欲力とは、謂く已に第二靜慮を得せる者が初靜慮に入り已り、若しは第二靜慮地の心を以て出でんと欲し、或は欲界の善及び無覆無記の心を以て出でんと欲し、卽ち能く現前して定を出づるなり。是くの如く廣說す。餘の一切の地は、理の如く當に知るべし。

方便とは、謂く初修の行者の、唯欲界の善心の無間に色界の心生じ、未至定の善心の無間に初根本靜慮の心生じ、初根本靜慮の善心の無間に第二靜慮地の心生ずるなり。是くの如く廣說して乃し有頂に至る。皆理の如く知るべし。

等至力とは、謂く已に清淨三摩鉢底に入り、或時は還りて清淨の等至を生じ、或時は染を生ずるなり、

引發力とは、謂く三摩地從り起ち、乃至現行の定地心と不定の刹那心と間雜して隨轉す。乃至彼と相違せる煩惱の現行に由るが故に卽便ち退失す。此と相違する煩惱と相應する心は、復た因等の因力に由りて方に現行することを得るなり。

因力とは、謂く先に積習せるを以て能く障を退くるが故に決定して應に退くべきなり。

境界力とは、謂く淨相の勢力增上にして境界現前するが故に、能く隨順して貪等の煩惱を生ず

卷の第五

本事分中、三法品、第一の五

等無間縁とは、謂く中に間隔無きこと無間に等しきが故に。同分異分の心心法の生ずること無間に等しきが故に。是れ等無間縁の義なり。

中に間隔無きこと無間に等しとは、必ずしも刹那中間に隔り無きにはあらず。刹那を隔つると雖も、但だ中間に於て異心の隔つること無きをも、亦中に間隔無しと名づく。若し爾らずんば、無心定に入れる心を出定の心に望むるに、等無間縁には非ざるべし。然るに是れは彼れが〔等無間〕縁たり。是の故に一相續の中に於て、前心を後心に望め、中間に餘の心の隔つること無きが故に是れ等無間縁なり。心を心に望むるが如く、當に知るべし心法も亦爾なり。同分異分の心心法の生ずること無間に等しとは、謂く善の心心法を同分の善と異分の不善無記とに望め、無間に生ずる心心法を等無間縁と爲す。是くの如く、不善と無記との心心法を同分と異分とに望む、無間に生ずる心心法も亦爾なり。又欲界の心心法を欲〔界〕と色〔界〕と無色界と及び無漏とに望め、無間に生ずる心心法を等無間縁と爲す、是くの如く、色界等の心心法を、各各別して色界等及び欲界等に望む、無間に生ずる心心法も、其の所應の如く盡く當に知るべし。問ふ、一切の心の無間に一切の心生ずと爲すや。各別に決定すること有りと爲すや。答ふ、有り。今此の中に於て、若し廣く別說せば、是くの如き心の無間に是くの如き心生ずとは、便ち無量の言論を生ず。是の故に唯だ略して總じて心生起の相のみを建立すべし。謂く、諸の心の生起するは、十種の力に由る。一には串習力に由る。二には樂欲力に由る。三には方便力に由る。四には等至力に由る。五には引發力に由る。六には因力に由る。七には境界力に由る。八

即ち是れ異熟因なり。此れ能く當來一向不相似の無覆無記自體所攝の異熟果を引攝するに由るが故に、即ち攝受の義を以て異熟因を建立す。善有漏の言は無漏を簡ばんが爲めなり。生死に違するに由るが故に、異熟果を感ずること能はず。

は其の所應に隨ふ。

一切の聚は定んで四大と及び色等の所造と有るに非ず。若し、是の處に於て爾所の量有らば此れ必ず俱生して互に相離せず。

等行とは、謂く諸法の共有にして等しく所緣に行じて必ず缺減すること無し。心心法の如し。前は助伴の決定に約して俱有因を建立す。中に唯だ大種と及び所造の色とのみを說くは、此れは但だ略して綱目を標するのみなり。心心法は互に相離せず、性決定を以ての故に亦助伴に攝む。若し爾らば別に相應因を立てざるべし。諸の心心法も亦共有因の所攝なるが故なり。爾りと雖も、然も義に異なる有り。謂く、諸法の共有にして等しく所緣に行じて互に相離せず。此れ等しく行ずるが故に相應因を立つ。唯だ共有の義には非ず、心心法の如くなるのみなり。

增益とは、謂く前際に善と不善と無記との法を修習するが故に、能く後際の善等の諸法をして、展轉增勝して後後に生起せしむるなり。

前際に修習するとは、謂く先に數〻習ふ所の現行の義なり。後際に展轉增勝して後後に生起するとは、謂く彼れ諸の種子を長養するに由るが故に、未來世に於て卽ち彼の種類增勝にして生ずるなり。是の如く諸法の能く相似增長の因と爲るが故に同類因を立つ。

障礙とは、謂く數〻習ふ所の諸の煩惱に隨ふが故に、所有の惑に隨ひて皆相續し、增長し、堅固なることを得す。乃ち相續して遠く涅槃を避けしむるなり。

此れ遍行因なり。唯だ煩惱の增長に相似せしむるのみには非ず。所以は何んとならば、若し貪等の煩惱を隨習すること有れば、皆瞋等の一切の煩惱をして相續し、增長し、堅固ならしむ。此の深重の縛に由るが故に解脫の得を障ふ。是の故に遍行因を建立す。

攝受とは、謂く不善と及び善の有漏法とは、能く自體を攝受するが故なり。

此れは是れ、彼の欲の生ずる因なるに由るが故に。
十三には招引能作なり。謂く、懸遠の緣なり。無明を老死に望むるが如し。
此れに由りて異位に展轉し、當有を招くが故に。
十四には生起能作なり。謂く、隣近の緣なり。無明を行に望むるが如し。
此れに由り無間に當有を生ずるが故に。
十五には攝受能作なり。謂く、所餘の緣なり。田水糞等を穀の生ずる等に望むるが如し。
自種の所生なりと雖も、然も彼の力を增すが故に。
十六には引發能作なり。謂く、隨順の緣なり。臣の王に事へ王をして悅豫せしむるが如し。
隨順に由りて引發するが故に。
十七には定別能作なり。謂く、差別の緣なり。五趣の緣を五趣の果に望むるが如し。
差別の自性に由りて別別の果を招くが故に。
十八には同事能作なり。謂く、和合い緣なり。根壞せずんば境界現前するが如く、作意の正しく起るを所生の識に望むるなり。
自の所作を成ずるに、必ず餘の能作を待つを以つての故に。
十九には相違能作なり。謂く、障礙の緣なり。雹を穀に望むるが如し。
能く彼を損するが故に。
二十には不相違能作なり、謂く、無障礙なり。穀に障無きが如し。
上と相違す。此の能作因の差別の中に於て。唯識の和合等のみを說けるは、且く綱要を擧ぐるなり。諸の智者此の一に依り、方に類して餘を思ふが爲めの故なり。
助伴とは、謂く、諸法は共有にして生じ、必ず缺減すること無し。四大種と及び所造の色との如き

三には持能作なり。謂く、大地を有情に望むるなり。
載せて墮せしめざるが故に。
四には照能作なり。謂く、燈を諸色に望むるなり。
闇障を了するが故に。
五には變壞能作なり。謂く、火を薪に望ましむるなり。
彼をして相續し變異せしむるが故に。
六には離能作なり。謂く、鎌を所斷に望むるなり。
連屬の物をして二分を成ぜしむるが故に。
七には轉變能作なり。謂く、工巧智等を金銀等の物に望むるなり。
彼の方分を轉じて異相を成ずるが故に。
八には信解能作なり。謂く、煙を火に望むるなり。
此れに由りて不現見を比知するが故に。
九には顯了能作なり。謂く、宗・因・喩を所成の義に望むるなり。
此れに由りて正決定を得するが故に。
十には等至能作なり。謂く、聖道を涅槃に望むるなり。
此れに由り彼を證するが故に。
十一には隨說能作なり。謂く、名と想と見となり。
名字の如く相を取りて執著するに由り、隨ひて說を起すが故に。
十二に觀待能作なり。謂く、此れに觀待するが故に彼れに於て求欲生ず。飢渇に待し飲食を追求するが如し。

り。

有漏無漏の諸法と、其の次第の如く因縁と爲るが故なり。阿賴耶識に復た二種有り。謂く、成熟と及び加行となり。成熟とは、是れ諸の生得法の因縁なり。加行とは、是れ諸の方便法と及び當來世の餘の阿賴耶識の因縁なり。又加行阿賴耶識とは、謂く此の生の中に於ける現行の轉識等の熏集する所なり。善の習氣とは、謂く順解脫分の習氣なり。此の習氣に由り、出世間の證等流の法を用つて緣と爲して生ずるが故に、能く出世の法の與に因縁と作る。

又自性なるが故に。差別なるが故に。助伴なるが故に。等行なるが故に。增益なるが故に。障礙なるが故に。攝受なるが故に。是れ因緣の相なり。

當に知るべし、此の中自性等の六種の因相を以て因緣の義を顯はす。謂く、自性と差別との兩句は能作因を建立す。餘の句は其の次第の如く、俱有と相應と同類と遍行と異熟との因を建立す。

自性とは、謂く能作因なり。

自性は因の自性に依りて能作因を建立するが故に。當に知るべし、一切の因は皆能作因の所攝なり。差別の義を顯はさんが爲めの故に、復た別して助伴等の因を建立す。

差別とは、謂く能作因の差別なり。略して二十種有り。

一には生能作なり。謂く、識の和合を識に望むるなり。

此の和合の所作に由りて、本無きに今有るが故なり。

二には住能作なり。謂く、食を已生及び未生の有情に望むるなり。

此の勢力に由り。生じ已りて相續斷えざるが故に。

り。外の穀生の差別とは、謂く種は芽に緣たり、芽は莖に緣たり。是くの如く展轉し、枝と葉と花と果と次第に生ずることを得るなり。成壞の差別とは、謂く一切の有情の共業の增上力を緣と爲し、大地等生ずるが故なり。食持の差別とは、謂く四食を緣と爲し、三界の有情相續して住するが故なり。愛と非愛との趣の分別の差別とは、謂く妙行と惡行とを緣と爲し、善と惡との趣に往くが故なり。淸淨の差別とは、謂く順解脫分の善を緣と爲し、順決擇分の善を生ずるなり。是くの如く見道等より、漸次乃し阿羅漢果を得るに至る等なり。或は外に他從り〔言〕音を聞き、內に如理の作意を緣と爲して正見を發生し、次第に乃し諸の漏永く盡るに至るなり。威德の差別とは、謂く內證を緣と爲し、神通等の最勝の功德を發すなり。此の差別に由り、應に隨ひて諸行の緣起を廣說すべし。

順逆とは、謂く、雜染順逆なるが故に。淸淨順逆なるが故に。是れ緣起の順逆を說く。雜染順逆とは、或は流轉の次第に依りて說く。謂く、無明は行に緣たり。是くの如き等は順の次第に說くなり。或は安立諦に依りて說く。謂く、老死苦、老死集、老死滅、老死趣滅行なり。是くの如き等は逆の次第に說く。淸淨順逆とは、謂く無明滅するが故に行滅す。是の如き等は順の次第に說く。誰の無に由るが故に老死無きや。誰の滅に由るが故に老死滅するや。是くの如き等は逆の次第に說く。應に是の如く緣生起の義を觀ずべし。

一切は皆是れ緣生なり。唯法界と法處との一分と、諸の無爲法とのみを除く。無因と不平等因とに執著する我を捨せんが爲めの故に緣生を觀察す。

[一八]云何んが緣なるや。幾ばくか是れ緣なるや。何んの義の爲めの故に緣を觀ずるや。謂く、因の故に。等無間の故に。所緣の故に。增上の故に、是れ緣の義なり。[一九]一切は是れ緣なり。我を執著して因の法と爲すことを捨せんが爲めの故に緣を觀察す。因緣とは、謂く阿賴耶識と及び善の習氣とな

【一八】次に緣を辯ず。
【一九】四緣の義は成唯識論七(p. 207, c)以下に廣分別せり往見すべし。

又諸の緣起の法は、刹那に滅すと雖も而も住することを得す可く。作用緣無しと雖も而も功能緣有りて得す可く。有情を離るると雖も、而も有情を得す可く。作者無しと雖も而も諸の業果は不壞にして得す可し。是の故に甚深なり。

業果不壞とは、內に作者無しと雖も而も作業して彼の果報を受くる有る〔を言ふ〕。

又諸法は自從り生ぜず。他從り生ぜず。共より生ぜず。自作と他作との因より生ぜざるには非ず。是の故に甚深なり。

自從り生ぜずとは、謂く一切の法は自の所作に非ず。彼れ未だ生ぜざる時自性無きが故なり。他從り生ぜずとは、謂く彼の諸緣は作者に非ざるが故なり。共より生ぜずとは、謂く卽ち此の二種の因に由るが故なり。自作と他作との因より生ぜざるには非ずとは、緣を果の生ずるに望むるに功能有るが故なり。又差別有り。謂く、衆緣を待ちて生ずるが故に自作に非ず。衆緣有りと雖も、種子無ければ生ぜざるが故に他作に非ず。彼れ倶に作用無きが故に共作に非ず。種子及び衆緣、皆功能有るが故に無因生に非ず。是の故に是くの如く說く。自種有るが故に他に從はず。衆緣を待つが故に自作に非ず。作用無きが故に共生に非ず。功能有るが故に無因に非ず。若し緣起の理自に非ず他に非ず、雙句を遣れば猶ほし甚深と爲すが如し。況んや總じて四句を忘るるをや。是の故に緣起は最極甚深なり。

差別とは、謂く識生の差別の故に。內の死生の差別の故に。外の穀生の差別の故に。成壞の差別の故に。食持の差別の故に。愛と非愛との趣の分別の差別の故に、清淨の差別の故に。威德の差別の故に。是れ差別の義なり。

識生の差別とは、謂く、眼〔根〕が色を緣と爲して眼識生ずることを得る、是くの如き等なり。

內の死生の差別とは、有情世間に依りて說く。謂く、無明等を緣と爲して能く行を生ずる等な

支雜染攝とは、若しは無明、若しは愛、若しは取、是れ煩惱雜染の所攝なり。若しは行、若しは識、若しは有、是れ業雜染の所攝なり。餘は是れ生雜染の所攝なり。

問ふ、何が故に識支は業雜染の攝なるや。答ふ、諸行の習氣の所顯なるが故なり。

義とは、謂く無作者の義、有因の義、離有情の義、依他起の義、無作用の義、無常の義、有刹那の義、因果相續不斷の義、因果相似攝受の義、因果差別の義、因果決定の義、是れ緣起の義なり。

謂く、自在天等の作者を離るるが故に、是れ無作者の義なり。無明等を以て因と爲すが故に、是れ有因の義なり。自然我無きが故に、是れ離有情の義なり。衆緣に託して生ずるが故に、是れ依他起の義なり。衆緣の作用空しきが故に、是れ無作用の義なり。恒に非ざるを以ての故に、是れ無常の義なり。生時過ぎ已りて暫住無きが故に、是れ有刹那の義なり。因刹那に滅し果刹那に生ずる時分等しきが故に、是れ因果相續不斷の義なり。一切從り一切生ぜざるが故に、是れ因果相似攝受の義なり。一一の類に非ざる因より一非一の類の果生ずるが故に是れ因果差別の義なり。餘の相續に於て果を受けざるが故に、是れ因果決定の義なり。

甚深とは、因甚深なるが故に、相甚深なるが故に。生甚深なるが故に、住甚深なるが故に、轉甚深なるが故に、是れ甚深の義なり。

謂く、卽ち此の無作者等の義に由りて緣起の法の五種の甚深を顯はす。二種の義に由りて因甚深を顯はす。不平等因と無因との論を對治するが故なり。一種の義に由り、相甚深を顯はす。是れ無我の相なるが故なり。二種の義に由りて生甚深を顯はす。衆緣に從ひて果法生ずるを得と雖も、然も彼れが所作に非ざるが故なり。二種の義に由りて住甚深を顯はす。實に安立無く、顯現すること住するに似るが故なり。四種の義に由りて轉甚深を顯はす。因果流轉して了知し難きが故なり。

諸の愛生ずるが故なり。

愛に二種の業有り。一には諸の有情の生死に流轉することを引く。二には取の與に緣と作る。

諸の有情の生死に流轉することを引くとは、何の勢力に由り、生死流轉斷絕無きが故なり。取の與に緣と作るとは、愛味求欲を門と爲し、欲等の中に於て貪欲轉ずるが故なり。

取に二種の業有り。一には後有を取らんが爲めに、諸の有情をして有取識を發さしむ。二には有の與に緣と作る。

後有を取らんが爲めに有取識を發すとは、那落迦趣等の差別の後有相續して斷えざるが爲め、業習氣をして決定を得せしむるが故なり。有の與に緣と作るとは、此の勢力に由り、諸行の習氣轉變することを得るが故なり。

有に二種の業有り。一には諸の有情の後有をして現前せしむ。二には生の與に緣と作る。

後有をして現前せしむるとは、能く無間にして餘趣を引くが故なり。生の與に緣と作るとは、此の勢力に由り、餘の衆同分轉ずるが故なり。

生に二種の業有り。一には諸の有情の名色と六處と觸と受とをして次第に生起せしむ。二には老死の與に緣と作る。

名色等をして次第に起さしむるとは、能く後後の位の差別を引くが故なり。老死の與に緣を作るとは、此の生有るに由り、彼れ相續變壞して皆有ることを得るが故なり。

老死に二種の業有り。一には數數有情をして時分に變異せしむ。

少盛を壞するが故なり。

二には數數有情をして壽命を變異せしむ。

壽命を壞するが故なり。

諸の有情をして趣に於て差別せしむるとは、業の勢力に由り、諸の有情をして種種の異れる趣に趣かしむるが故なり。識の與に緣と作るとは、習氣の力に由り、能く當來の名色等をして生起せしめ、種子をして增長を得せしむるが故なり。

識に二種の業有り。一には諸の有情所有の業縛を持す。二には名色の與に緣と作る。

諸の有情業縛を持するとは、行所引の習氣と倶に生滅するが故なり。名色の與に緣と作るとは、識母胎に入るに由り、名色增長を得するが故なり。

名色に二種の業有り。一には諸の有情の自體を攝す。二には六處の與に緣と作る。

有情の自體を攝するとは、彼れ生じ已るに由りて有情の衆同分の差別の數預はるるを得るが故なり。六處の與に緣と爲るとは、名色等の前支を依止と爲すに由りて、六處等の後支生起するを得るが故なり。

六處に二種の業有り。一には諸の有情の自體圓滿を攝す。二には觸の與に緣と作る。

諸の有情の體圓滿を攝するとは、彼れ生じ已るに由り、餘の根の缺くること無きが故なり。

觸に二種の業有り。一には諸の有情をして、受用する所の境界に於て流轉せしむ。二には受の與に緣と作る。

諸の有情をして境に於て轉ぜしむるとは、此を門と爲すに依り、順樂受等の三種の境界を受用するが故なり。

受に二種の業有り。一には諸の有情をして、受用する所の生果に於て流轉せしむ。二には愛の與に緣と作る。

有情をして受用の生果に於て流轉せしむるとは、此れを依と爲すに由り、種種の可愛等の業異熟を受用するが故なり。愛の與に緣と爲るとは、此れと和合することを悕求する等を門と爲し、

を顯はさんが爲めの故に。老と死とを合して一支と立つる所以は、老を離れて死の有り得ることを顯はさんが爲めの故なり。胎生の身中に於て、名色等を離れては六處等の法有り得るに非ず。是の故に彼に於ては各別に支を立つるなり。

支緣を建立するとは、謂く、習氣の故に、引發の故に、思惟の故に、俱有の故に、支緣を建立することは其の所應に隨ふ。

四緣の相に依りて支緣を建立す。且く無明を行に望むるが如く、前生の習氣なるが故に因緣となることを得。彼の熏習相續し、生ずる所の諸の業、能く後有を造るに由るが故に、當に爾の時に於て、現行の無明能く引發するが故に等無間緣となる。彼の引發に由り、差別の諸行流轉相續して生ずるが故に、彼を思惟するが故に所緣緣となる。最勝等と計する不如理の思惟を以て、愚癡の位を緣じて境界と爲すが故に。彼と俱有なるが故に增上緣となる。彼の增上力に由り相應の思をして顚倒して境を緣ぜしめ、造作せしむるが故なり。是くの如く一切其の所應に隨ひて盡すこと、當に知るべし。

支業を建立するとは、謂く無明支に二種の業有り。一には諸の有情をして有に於て愚癡ならしむ。二には行の與に緣と作る。

諸の有情をして有に於て愚癡ならしむるとは、謂く彼に覆はるるに由り、前と中と後際とに於て、實の如く知らざるが故に、此の因緣に由りて是くの如き疑を起す。我れ過去世に於て、有なりしと爲すや、無なりしと爲すや、是くの如き等なり。行の與に緣と作るとは、彼の勢力に由り、後有の業をして增長を得せしむるが故なり。

行に二種の業有り。一には諸の有情をして、諸趣の中に於て種種差別せしむる。二には識の與に緣と作る。

何等か十二なるや。謂く、無明と行と識と名色と六處と觸と受と愛と取と有と生と、及び老死となり。

略攝支とは、

　謂く、前に分別せる所の無明等の十二支を、今復た略攝して四と爲す。

謂く、能引支と所引支と能生支と所生支となり。

　唯だ是くの如き四種の支のみに由るが故に、略して一切の因果生起の法を攝し盡すなり。謂く、因の時に於て能引と所引と有り。果の時に於て能生と所生と有り。

能引支とは、謂く、無明と行と識となり。

　未來の生を起さんが爲めの故に、諸諦の境に於て無智を先と爲し、諸の行業を造り、熏習して心に在るが故なり。

所引支とは、謂く名色と六處と觸と受となり。

　心は習氣の力に由り、能く當來の名色等をして前後相依り、次第生起せしめ、種子をして增長なることを得しむるが故なり。

能生支とは、謂く、愛と取と有となり。

　未だ永に欲等の愛力を斷ぜざるに由り、欲等の中の愛樂に於て、妙行と惡行との差別を先と爲して貪欲を發起す。有取識あるを以ての故に、命終の位に於て、將た異熟が與めに貪欲に隨順し、一業の習氣の現前するに隨ひて有なるが故なり。

所生支とは、謂く生と老死となり。

　是くの如き業差別の習氣の現前に由りて有なるが故に、一趣一生等の差別の衆同分の中に隨ひて、先に引く所の如き名色等の異熟生起するが故に。生老死の言は三有に依りて相と爲すこと

十界と四處と諸蘊との一分是れ非所斷なり。

問ふ、何等の色聲か是れ非所斷なるや。答ふ、無學身中の善の身語業の自性は是れ非所斷なり。

成の圓滿を執著する我を捨せんが爲めの故に非所斷を觀察す。

【一七】云何んが緣生なるや。幾ばくか是れ緣生なるや。何んの義の爲めの故に緣生を觀ずるや。謂く、相なるが故に。分別支なるが故に。略攝支なるが故に。建立支緣なるが故に。建立支業なるが故に。支雜染攝なるが故に。義なるが故に。甚深なるが故に。差別なるが故に。順逆なるが故に。是れ緣生の義なり。

相とは、謂く、無作緣生なるが故に。無常緣生なるが故に。勢用緣生なるが故に。是れ緣生の相なり。

此の相に由るが故に、薄伽梵は說きたまふ。此れ有るが故に彼れ有り。此れ生ずるが故に彼れ生ず。謂く、無明は行に緣たり、乃至廣說す。此れ有るが故に彼れ有りとは、無作緣生の義を顯はす。唯だ緣のみ有るに由るが故に果法有ることを得。緣に實の作用有りて能く果法を生ずるにはあらず。此れ生ずるが故に彼れ生ずとは、無常緣生の義を顯はす。無生の法を因と爲すに非ざるが故に、少所生の法も而も成立することを得。無明は行に緣たりとは、勢用緣生の義を顯はす。復た諸法は無作無常なりと雖も、然も一法に隨ひて緣と爲らざるが故に一切の果生ず。所以は何んとならば諸法の功能差別を以ての故に。無明の力に從ふが故に諸行生ずることを得、乃至、生の力の故に老死有るが如し。

分別支とは、謂く分別緣生を十二分と爲す。

十二支に由りて緣起の差別あるが故なり。」

【一七】次に緣生を辯ず、此處に於て十二因緣を詳說す。

び見等の發す所の身語意業と、并に一切の惡趣等の蘊と界と處と、是れ見所斷の義なり。

此の中、分別所起の染汚の見疑とは、謂く不正の法等を聞くを先と爲して起す所の五見等なり、分別所起の言は、俱生の薩迦耶見及び邊執見を簡ばんが爲めなり。問ふ、何んの相の邊執見か是れ俱生なるや。答ふ、謂く斷見なり。已に現觀を學する者、是くの如き怖を起す、今は我が我は何れの所にか在ると爲す。見處とは、謂く諸の見と相應する共有の法と、及び彼の種子となり。疑處も亦爾なり。見等に於て起す所の邪行と煩惱と隨煩惱とは、謂く見等の門に依り、及び見等を緣として起す所の貪等なり。

一切の一分は是れ見所斷なり。

一分とは、修所斷と及び無漏とを除くが故なり。

見の圓滿を執著する我を捨せんが爲めの故に見所斷を觀察す。

[15]云何んが修所斷なるや。幾ばくか是れ修所斷なるや。何んの義の爲めの故に修所斷を觀ずるや。謂く、見道を得して後、見所斷に相違する諸の有漏法、是れ修所斷の義なり。

見所斷に相違するとは、謂く分別所起の染汚の見等を除く餘の有漏法なり。有漏法の言は、隨順を決擇分との善を攝む。麁重の所隨なるが故なり。

一切の一分是れ修所斷なり。

一分とは、見所斷と及び無漏法とを除く。修の圓滿を執著する我を捨せんが爲めの故に修所斷を觀察す。

[16]云何んが非所斷なるや。幾ばくか是れ非所斷なるや。何んの義の爲めの故に非所斷を觀ずるや。謂く、諸の無漏法にして決擇分の善を除く是れ非所斷なり。

無漏法とは、謂く出世の聖道と及び後所得と、并びに無爲法となり。

【一五】次に修所斷を辯ず。

【一六】次に非所斷を辯ず。

名づく。

十界と四處と諸蘊との一分是れ有學なり。

十界とは、謂く七識〔界〕と色〔界〕と聲〔界〕と法界となり。四處とは、謂く色〔處〕と聲〔處〕と意〔處〕と法處となり。

求解脫を執著する我を捨せんが爲めの故に有學を觀察す。

[二]云何んが無學なるや。幾ばくか是れ無學なるや。何んの義の爲めの故に無學を觀ずるや。謂く、諸の學處に於て已に究竟を得する者の所有の善法、是れ無學の義なり。

阿羅漢等は增上の戒と心と慧との學處に於て、已に究竟を得するを以ての故に無學と名づく。十界と四處と諸蘊との一分是れ無學なり。

已脫を執著する我を捨せんが爲めの故に無學を觀察す。

[三]云何んが非學非無學なるや。幾ばくか是れ非學非無學なるや。何んの義の爲めの故に非學非無學を觀ずるや。謂く、諸の異生の所有の善と不善と無記との法と、及び諸の學者の染汚の無記法と、諸の無學者の無記法と、并に無爲法と、是れ非學非無學の義なり。

諸の異生とは、謂く求解脫者を除く。彼は諸の學處に於て修學を求むるを以ての故に、即ち有學と名づく。有學の染汚無記とは、其の所應の如く、不善及び有覆無記は是れ染汚なり。無覆無記は是れ無記なり。

八界と八處との全と及び餘の蘊と界と處との一分是れ非學非無學なり。不解脫に執著する我を捨せんが爲めの故に非學非無學を觀察す。

[四]云何んが見所斷なるや。幾ばくか是れ見所斷なるや。何んの義の爲めの故に見所斷を觀ずるや。謂く、分別所起の染汚の見と疑と、見處と疑處と、及び見等に於て起す所の邪行と煩惱と隨煩惱と及

【二】次に無學を辯ず。

【三】次に非學非無學を辯ず。

【四】次に見所斷を辯ず。三斷門の義は瑜伽論六十六に詳し。又同學鈔八之五、三斷分別門往見すべし。

是の如き十種の離欲は、當に知るべし是れ違背の義なり。必ずしも斷の義ならず。自性に由るが故に欲を離るるを自性離欲と名づく。乃至、永斷に由るが故に欲を離るるを永斷離欲と名づく。是くの如き諸句の義、分別の種類、應に知るべし。

自性離欲とは、謂く苦受及び順苦受處の法に於て厭背の性を生ずるなり。損害離欲とは、謂く習欲の者熱惱を暢べ已りて厭背の性を生ずるなり。任持離欲とは、謂く飽食し已りて諸の美膳に於て厭背の性を生ずるなり。増上離欲とは、謂く勝處を得已りて、下劣の處に於て厭背の性を生ずるなり。

猶ほし世間の已に城主等の勝位を得已りて、村主等の下劣の位に於て厭背の心を生ずるがごとし。

愚癡離欲とは、謂く諸の愚夫涅槃界に於て厭背の性を生ずるなり。

寂靜の性に了達せざるを以ての故に、及び堅實に薩迦耶を著するが故なり。

對治離欲とは、謂く世と出世との道に由りて諸の煩惱を斷ずるなり。遍知離欲とは、謂く已に見道を得せる者、三界の法に於て厭背の性を生ずるなり。

遍く行苦の性を了知し已り。一切の有漏の事を厭背するに由るが故なり。

永斷離欲とは、謂く永に地地の諸の煩惱を斷じ已りて厭背の性を生ずるなり。有上離欲とは、謂く諸の世間と聲聞と獨覺との所有の離欲なり。無上離欲とは、謂く佛と菩薩との所有の離欲なり。諸の有情を利樂せんと欲する爲めの故なり。

[一〇]云何んが有學なるや。幾ばくか是れ有學なるや。何んの義の爲めの故に有學を觀ずるや。謂く、解脫を求むる者の所有の善法、是れ有學の義なり。[一一]

積集資糧位より已去を求解脫者と名づく。當に知るべし、證解脫分を求むる位を積集資糧位と

【一〇】次に有學を辯ず。

【一一】同學鈔五之六に「學法有支」の論題あり、而して學法に二種あり、一は勝學、二は劣學なり。勝學より云へば見道以上を以て學法に攝するものにして、瑜伽論六十六の所明は之に當り、劣學より云へば求解脫以去の凡聖の位に通ずとなせり。而して雜集論の今文は、まさしく劣學によりて明せるものなりとせり。

[六]云何んが色界繫なるや。幾ばくか是れ色界繫なるや。何んの義の爲めの故に色界繫を觀ずるや。謂く、已に欲界の欲を離れ、未だ色界の欲を離れざる者の所有の善と無記との法、是れを色界の繫の義なり。前所說の四界と二處とを除ける餘の蘊と界と處との一分、是れ色界繫なり。

一分とは、謂く、欲〔界繫〕無色界繫と及び無漏法とを除くなり。

欲界を離れんことを執著する我を捨せんが爲めの故に色界繫を觀察す。

[七]云何んが無色界繫なるや。幾ばくか是れ無色界繫なるや。何んの義の爲めの故に無色界繫を觀ずるや。謂く、已に色界の欲を離れ、未だ無色界の欲を離れざる者の所有の善と無記との法、是れ無色界繫の義なり。三界と二處と四蘊との一分、是れ無色界繫なり。

三界とは、謂く意界と法界と意識界となり。二處とは、謂く意處と法處となり。四蘊とは、謂く受等なり。亦三摩地所生の色あるも少なきが故に說かざるなり。一分とは、謂く欲〔界繫と〕色界繫と、及び無漏法とを除く。

色界の欲を離れんと執著する我を捨せんが爲めの故に無色界繫を觀察す。

復た次に一分の離欲、具分の離欲、通達の離欲、損伏の離欲、永害の離あり。[八]

一分と見分との離欲とは、謂く或は地の離欲に依りて說く。若し此の地に於て、乃至能く八品の煩惱を斷ぜば、是れ一分の離欲なり。若し已に第九品を斷ぜば、是れ具分の離欲なり。或は薩迦耶の離欲に依りて說く。若し有學位ならば、是れ一分の離欲なり。若し無學位ならば、是れ具分の離欲なり。通達離欲とは、謂く見道の離欲に由るなり。損伏離欲とは、謂く世間道の離欲に由るなり。永害離欲とは、謂く出世間道の離欲に由るなり。

復十種の離欲あり。謂く、自性離欲と損害離欲と任持離欲と增上離欲と愚癡離欲と對治離欲と遍知離欲と永斷離欲と有上離欲と無上離欲となり。[九]

【六】次に色界繫を辯ず。

【七】次に無色界繫を辯ず。

【八】因みに五離欲を說けり。

【九】又、十種離欲を明す。

の心心法を嬉戲と謂ふが故に變化を發起す。是れ無記の性なり。若し有情を利益し安樂にする爲ならば、當に知るべし是れ善なり。

復示現の善不善無記法あり。此れ復た云何ん。謂く佛及び第一究竟を得せる菩薩摩訶薩、諸の有情を饒益せんと欲する爲めの故に示現する所あり。當に知るべし、此の中、一法として眞實の得す可きものあることなし。

示現する所ありとは、謂く佛菩薩所化の有情の力に由るが故に、種種の善不善等を示現するなり。不善を示現するとは、謂く賊等を化作して、其の首足を斷ずる等の事を示現するなり。餘の有情をして怖れしめ、調伏せしむるが故なり。

[五]云何んが欲界繫なるや。幾ばくか是れ欲界繫なるや。何んの義の爲めの故に欲界繫を觀ずるや。謂く、未だ欲を離れざる者の所有の善と不善と無記との法、是れ欲界繫の義なり。

未離欲の言は、猶ほ未だ少分欲界の欲を離れざることを顯はす。是れ未だ三摩地を證得せざるの義なり。若し此れに異ならば非至定の法も亦應に是れ欲界繫なるべし。所以は何んとならば、彼れ已に三摩地を得するに由るが故に愛樂斷滅す。所治の麁重を少分斷ずるを以ての故に、亦一分離欲なりと說くことを得。外の諸の色等は是れ未だ欲を離れず、業增上力の所生なるが故に、亦欲界繫と名づく。經に一切有情の共有の業增上力の所生と言へるは、色・無色界に生ぜる者も亦未だ欲を離れざることあるを顯はさんが爲めなり。業種の隨逐するが故なり。

四界と二處との全と及び餘の蘊と界と處との一分と、是れ欲界繫なり。

四界とは、謂く、香〔界〕と味〔界〕と鼻〔識界〕と舌識界となり、二處とは、謂く香〔處〕と味處となり。餘の一分とは、謂く色無色界繫と及び無漏法とを除くなり。

欲の增上を執著する我を捨せんが爲めの故に欲界繫を觀察す。

【五】次に欲界繫を辯ず。

名身等を以て心を熏習するが故に、此の習氣に由りて後に戲論生ず。
發起無記とは、謂く彼が所攝の諸の心心所の發す所の身業と語業となり。

彼が所攝とは、謂く非穢非淨の心を懷く者の所有の名身等の戲論の行相に攝めらるる心心法なり。

第一義無記とは、謂く虛空と非擇滅となり。生得無記とは、謂く諸の不善と有漏の善法との報なり。方便無記とは、謂く非染非善心の者の所有の威儀路工巧處の法なり。

非染非善心とは、此れ若し非染非善心の發す所の威儀路等ならば是れ無記性なり、所餘ならば其の所應に隨ひて、或は善或は不善なることを顯はす。

現前供養無記とは、謂く如し一ありて、想對し歸依して、一天衆に隨ひ、殺害の意と邪惡の見とを遠離して、祠廟を建立し供養の業を興し、無量の衆をして是の如き處に於て福非福を生長せしめざらしむるなり。饒益無記とは、謂く如し一ありて、自の僕使妻子等の所に於て、非穢非淨の心を以て而も惠施を行ずるなり。受用無記とは、謂く如し一ありて、無簡擇無染汚の心を以て資具を受用するなり。

無簡擇の心とは、善性に別せんが爲めなり。無染汚の心とは、不善性に別せんが爲めなり。

引攝無記とは、謂く如し一ありて、工巧處に於て串習するが故に、當來の世に於て復た是くの如き相の身を引攝し、此の身に由るが故に、工巧處を習ふこと速疾に究竟するなり。對治無記とは、謂く如し一ありて、疾病を治し、安樂を得んが爲めの故に、簡擇の心を以て好んで醫藥を服するなり。寂靜無記とは、謂く色・無色界の諸の煩惱等は、奢摩他に藏伏せらるるに由るが故なり。等流無記とは、謂く變化心と俱生の品なり。

是れ證の等流なるが故に等流無記と名づく。變化心相應の共有等の法を俱生の品と名づく。此

邪惡の見を先と爲し祠廟を建立すとは、謂く是の處に於て自餓等の苦を受け、福を求め、願を求むなり。

損害不善とは、謂く一切處に於て身語意の種種の邪行を起すなり。引攝不善とは、謂く身語意の諸の惡行を行じ已り、惡趣善趣に於て不愛の果異熟を、或は引き或は滿するなり。

惡趣の中に於ては具に引と滿との果異熟を受け、諸の善趣に於ては唯滿の果のみを受く。謂く、彼に生じ已り惡行の力に由りて貧窮の苦を受くるなり。

所治不善とは、謂く諸の對治と所對治との法なり。障礙不善とは、謂く能く諸の善品の法を障礙するなり。數ゝ衆と集まる等の如し。

[四]云何んが無記なるや。幾ばくか無記なるや。何くの義の爲めの故に無記を觀ずるや、謂く、自性なるが故に。相屬なるが故に。隨逐なるが故に。發起なるが故に。第一義なるが故に。生得なるが故に。方便なるが故に。現前供養なるが故に。饒益なるが故に。受用なるが故に。引攝なるが故に。對治なるが故に。寂靜なるが故に。等流なるが故に。是れ無記の義なり。八界と八處との全と及び餘の蘊と界と處との一分と是れ無記なり。

八界とは、謂く五色根と香「界」と味〔界〕と觸界となり。八處も亦爾なり。

法非法を離れんと執著する我を捨せんが爲めの故に無記を觀察す。

自性無記とは、謂く八色界處と意相應品と命根と衆同分と名句文身となり。相屬無記とは、謂く非穢非淨の心を懷く者の所有なり。名句文身に攝受せらるる心と及び心所とに由る。

非穢非淨の心とは、善不善に相違する。心を顯はす。名句文身に攝受せらるるに由るとは、彼の行相を顯はすの義なり。彼の意は言門に轉ずるを以ての故なり。

隨逐無記とは、謂く卽ち彼の戲論の習氣なり。

【四】次に無記を辨ず。此の中、十四無記あり。

卷の第四

本事分中、三法品、第一之四

[一]云何んが不善なるや。幾ばくか是れ不善なるや。何んの義の爲めの故に不善を觀ずるや。謂く、自性なるが故に。相屬なるが故に。隨逐なるが故に。發起なるが故に。第一義なるが故に。生得なるが故に。方便なるが故に。現前供養なるが故に。損害なるが故に。引攝なるが故に。所治なるが故に。障礙なるが故に。是れ不善の義なり。五蘊と十界と四處との一分是れ不善なり。執着非法合の我を捨せんが爲めの故に不善を觀察す。

自性不善とは、謂く染汚の意相應と及び色・無色界の煩惱等を除ける所餘の能く惡行を發す煩惱と隨煩惱となり。

此れ復た云何ん。謂く、[二]欲界繫の任運に起らざる者は是れ不善なり。若しは任運に起りて能く惡行を發す者も亦是れ不善なり。所餘は是れ有覆[三]無記なり。

相屬不善とは、謂く卽ち此の煩惱・隨煩惱と相應する法なり。隨逐不善とは、謂く卽ち彼の習氣なり。發起不善とは、謂く彼の起す所の身業と語業となり。第一義不善とは、謂く不善を串習するに由るが故に、是くの如き異熟を感得し、此の自性に由りて卽ち不善に於て任運に樂住するなり。方便不善とは、謂く不善なる丈夫に依止し親近するが故に、不正の法を聽聞し、不如理に作意し、身語意の惡行を行ずるなり。現前供養不善とは、謂く相對し歸依して一天衆に隨ひ已りて、或は殺害の意を先と爲し、或は邪惡の見を先と爲し、祠廟を建立し供養の業を興し、無量の衆をして廣く非福を樹えしむるなり。

殺害の意を先と爲し祠廟を建立すとは、謂く是の處に於て牛羊等を害し、以て天神を祭るなり。

【一】次に不善を辯ず、此の中、十三不善あり。

【二】同學鈔六之七の論題「唯不善攝」往見。

【三】同學鈔六之七の論題「又方私記之」の論題往見。

し、富貴の家に生ずることを引攝し、清淨の法に隨順することを引攝するなり。

天の樂の異熟と及び富貴の家とに生ずることを引攝するとは、尊貴の因を得することを顯はす。

清淨の法に隨順することを引攝するとは、涅槃の因を得することを顯はす。

對治善とは、謂く厭壞對治と斷對治と持對治と遠分對治と伏對治と離繋對治と煩惱障對治と所知障對治となり。

此の諸の對治は後に當に廣く釋すべし。【四一】

寂靜善とは、謂く永く貪欲を斷じ、永く瞋恚を斷じ、永く愚癡を斷じ、永く一切の煩惱を斷ずる、若しは受想滅。若しは有餘依涅槃界。若しは無餘依涅槃界。若しは無所住涅槃界。

是の如き皆寂靜善法と名づく。

等流善とは、謂く已に寂靜を得する者、此の增上力に由るが故に、勝品の神通等の世出世、共不共の功德を發起するなり。

【四一】第九卷往見すべし。

四〇 云何んが善なるや。幾ばくか是れ善なるや。何んの義の爲めの故に善を觀ずるや。謂く、自性なるが故に。相屬なるが故に。隨逐なるが故に。發起なるが故に。第一義なるが故に。生得なるが故に。方便なるが故に。現前供養なるが故に。饒益なるが故に。引攝なるが故に。對治なるが故に。寂靜なるが故に。等流なるが故に。是れ善の義なり。五蘊と十界と四處との一分是れ善なり。

十界とは、謂く七識〔界〕と色〔界〕と聲〔界〕と法界となり。四處とは、謂く色〔處〕と聲〔處〕と意〔處〕と法處となり。

法と合することを執著する我を捨せんが爲めの故に善を觀察す。

自性善とは、謂く信等の十一の心所有法なり。相屬善とは、謂く、彼と相應する法なり。隨逐善とは、謂く卽ち彼の諸法の習氣なり。發起善とは、謂く彼の發する所の身業と語業となり。第一義善とは、謂く眞如なり。生得善とは、謂く卽ち彼の諸の善法なり。先に串習するに由るが故に、是の如き報を感得す。此の自性に由りて、卽ち是の處に於て思惟に由らずして任運に樂住す。

卽ち是の處に於てとは、謂く信等の處に於てなり。此の自性に由り思惟に由らずとは、謂く無功用にして善友の力等を假らざるなり。任運に樂住すとは、唯だ欲樂にあらず、是れ生得なり。亦信等と倶にして任運に起るが故なり。

方便善とは、謂く善丈夫に依止し親近するが故に、正法を聽聞し理の如く作意し、淨善の法を修習し法に隨ひて行ずるなり。

淨善を修習すとは、謂く正法の中に於て一切の聞等の所生の善法なり。

現前供養善とは、謂く如來を想對し、靈廟を建立し、尊容を圖寫し、或は正法を想對し、法藏を書治し、供養の業を興すなり。饒益善とは、謂く四攝事を以て一切の有情を饒益するなり。引攝善とは、謂く施性の福業の事及び戒性の福業の事を以ての故に、天の樂の異熟を生ずることを引攝

【四〇】 次に善を辯ず。

と清淨との性未だ現前せざるが故に。因果自相有にして有にあらざるが故に。雜染の相を爲さんことを希ふが故に。淸淨の相を爲さんことを希はざるが故に。是れ未來の義なり。

因ありて已に生ずるに非ずとは、無爲を簡ばんが爲めなり。彼れ已生にあらずと雖も、而も無因なるが故なり。未だ自相を得せずとは、自體未だ生ぜざるが故なり。因果未だ受用せずとは、謂く彼の種子は未だ所作を作さざるが故に。彼の性未生なるが故なり。

一切の一分是れ未來なり。流轉を執著する我を捨せんが爲めの故に未來を觀察す。

三九云何んが現在なるや。幾ばくか是れ現在なるや。何んの義の爲めの故に現在を觀ずるや。謂く、自相已に生じ未だ滅せざるが故に。因果受用し未だ受用せざるが故に。染淨現前するが故に。能く過去と未來との相を顯はすが故に。作用現前するが故に。是れ現在の義なり。

因果受用し未だ受用せずとは、謂く因已に滅するが故に、果猶ほ有なるが故なり。能く過去と未來との相を顯はすとは、謂く現在世は是れ能く去來世の相を施設す。所以は何んとならば、現在に依止して去來を假立するが故に。當に得すべき位に約して未來を假立し、曾て得したる位に約して過去を假立す。作用現前とは、謂く眼等の法を正しく識等の所依等の事と爲すが故なり。

一切の一分是れ現在なり。流轉に執著する我を捨せんが爲めの故に現在を觀察す。問ふ、何が故に過去と未來と現在とを言事と名づけ、涅槃等に非ずと說くや。答ふ、內に自ら證する所は不可說なるが故に。唯だ曾と當と現とのみ是れ言說の所依處なるが故なり。

所以は何んとならば、過去等の事を說くに因りて遂に經中に三種の言事を顯はす。謂く、三世に依りて非涅槃等を建立す。彼の內に自ら證する所は名言を離るるに由るが故に宣說すべからず。又唯だ去と來と今とのみ是れ見聞覺知にして、言說の所依處なるが故なり。

【三九】次に現在を辯ず。

〔處〕と法處となり。

煩惱と合することを執著する我を捨せんが爲めの故に染汚を觀察す。

【三六】次に不染汚を辯ず。

三六 云何んが不染汚なるや。幾ばくか是れ不染汚なるや。何んの義の爲めの故に不染汚を觀ずるや。謂く、善と及び無覆無記法と、是れ不染汚の義なり。八界と八處との全と諸蘊と及び餘の界と「餘の」處との一分と、是れ不染汚なり。煩惱と離れんことを執著する我を捨せんが爲めの故に不染汚を觀察す。

【三七】次に過去を辯ず。

三七 云何んが過去なるや。幾ばくか是れ過去なるや。何んの義の爲めの故に過去を觀ずるや。謂く、自相已に生ぜるが故に、滅せるが故に。因果已に受用せるが故に。染淨の功用已に謝せるが故に。因を攝して已に壞せるが故に。果及び自相有にして有にあらざるが故に。憶念分別相なるが故に。戀うて雜染相を爲すが故に。捨して清淨相を爲すが故に。是れ過去の義なり。

因果已に受用せりとは、謂く已生の故に、已滅の故に、其の次第の如し。染淨の功用已に謝せりとは、謂く現在の貪等信等の如く、心をして染淨ならしむる功能無きが故なり。因を攝して已に壞せりとは、習氣を置〔在〕して已に方に滅せるが故なり。果及び自相有にして有にあらずとは、謂く今時に於て、所引の習氣は有なるが故に、能引の實事は無なるが故なり。憶念分別の相とは、謂く唯だ彼の所緣の境相のみあるが故なり。

一切の一分是れ過去なり。

未來と現在と及び無爲とを除くが故なり。

流轉を執著する我を捨せんが爲めの故に過去を觀察す。

【三八】次に未來を辯ず。

三八 云何んが未來なるや。幾ばくか是れ未來なるや。何んの義の爲めの故に未來を觀ずるや。謂く、因ありて已に生ずるに非ざるが故に。未だ自相を得せざるが故に。因果未だ受用せざるが故に。雜染

の能取も亦是れ所取なり。

　眼根等は意識の所取なるを以ての故に。

或は所取ありて能取にはあらず。謂く唯だ是れ取所行の義なり。

　唯だとは、決定の義なり。此の言は心所有法を簡ばんが爲なり。

一切皆是れ所取なり。境界に執著する我を捨せんが爲めの故に所取を觀察す。

[三三]云何んが外門なるや。幾ばくか是れ外門なるや。何んの義の爲めの故に外門を觀ずるや。謂く、欲界所繫の法是れ外門の義なり。佛敎に依りて生ぜらるる聞思慧と及び彼の隨法行に攝めらるる心心法等とを除く。

　問ふ、何が故に聞と思とに生ぜらるる慧と及び彼の隨法行に攝せらるる心心法等とは、外門は非ざるや。答ふ、等流の法を因と爲すが故に。此の勢力に由りて涅槃等を緣ず。等流法とは、謂く諸佛の眞證せる種種の敎法なり。

鼻識と舌識と香と味との四界と、香と味との兩處の全と及び餘の一分とは、欲界の所攝なり。是れ外門なり。欲を離れざらんと執著する我を捨せんが爲めの故に外門を觀察す。

[三四]云何んが內門なるや。幾ばくか是れ內門なるや。何んの義の爲めの故に內門を觀ずるや。謂く、外門と相違する是れ內門の義なり。四界と二處との全と及び所餘の一分とを除く是れ內門なり。欲を離れんと執著する我を捨せんが爲めの故に內門を觀察す。

[三五]云何んが染汚なるや。幾ばくか是れ染汚なるや。何んの義の爲めの故に染汚を觀ずるや。謂く、不善と及び有覆無記法とは、是れ染汚の義なり。有覆無記とは、謂く遍行の意と相應する煩惱等と及び色無色界繫の諸の煩惱等となり。諸蘊と十界と四處との一分、是れ染汚なり。

　十界とは、謂く七識〔界〕と色〔界〕と聲〔界〕と法界となり。四處とは、謂く色〔處〕と聲〔處〕と意

【三三】次に外門を辯ず。

【三四】次に內門を辯ず。

【三五】次に染汚を辯ず。

謂く生有なり。

〔三〇〕云何んが非已生なるや。幾ばくか是れ非已生なるや。何んの義の爲めの故に非已生を觀ずるや。謂く、未來と及び無爲法と、是れ非已生の義なり。一切の一分是れ非已生なり。常住を執著する我を捨せんが爲めの故に非已生を觀察す。又已生と相違する是れ非已生の義なり。

〔三一〕云何んが能取なるや。幾ばくか是れ能取なるや。何んの義の爲めの故に能取を觀ずるや。謂く、諸の色根と及び心心法と是れ能取の義なり。三蘊の全と色と行との蘊の一分となり。

根の相と及び相應の相と其の次第の如し。

十二界と六處との全と、及び法界と法處との一分となり。

相應の自體。

是れ能取なり。能受用を執著する我を捨せんが爲めの故に能取を觀察す。

我を受用するとは、我は能く愛と不愛との境を得すると計するなり。

又能取に四種あり。謂く、不至能取と至能取と自相現在各別境界能取と自相共相一切時一切境界能取となり。

不至能取とは、謂く眼〔根〕と耳〔根〕と意根となり。至能取とは、謂く餘の根なり。自相現在各別境界能取とは、謂く五根の所生なり。自相共相一切時一切境界能取とは、謂く第六根の所生なり。

又和各に由りて識等生ずるが故に能取の性を假立す。

所以は何んとならば、衆緣の和合するに依りて生ぜらるる識等を以て、假りに能取を說く。直實義に由る、諸法の無作用ならざるが故なり。

〔三二〕云何んが所取なるや。幾ばくか是れ所取なるや。何んの義の爲めの故に所取を觀ずるや。謂く、諸

【三〇】次に非已生を辯ず。
【三一】次に能取を辯ず。
【三二】次に所取を辯ず。

〔二九〕云何んが已生なるや。幾ばくか是れ已生なるや。何んの義の爲めの故に已生を觀ずるや。謂く、過去と現在とは是れ已生の義なり。一切の一分是れ已生なり。非常を執著する我を捨せんが爲めの故に已生を觀察す。又二十四種の已生あり。謂く、最初已生と相續已生と長養已生と依止已生と轉變已生と成熟已生と退墮已生と勝進已生と清淨已生と不清淨已生と運轉已生と有種已生と無種已生と影像自在示現已生と展轉已生と刹那壞已生と離會已生と異位已生と生死已生と成壞已生と先時已生と死時已生と中時已生と續時已生となり。

最初已生とは、謂く初めて生を續する時なり。相續已生とは、謂く生を續しての已後なり。長養已生とは、謂く眠夢と飲食と梵行と定とを因と爲すに由る四種の長養なり。依止已生とは、謂く內の諸根なり。轉變已生とは、謂く能く隨順して樂受等の諸根の變異を生ずるなり。成熟已生とは、謂く衰老位に於けるなり。退墮已生とは、謂く善趣を捨し惡趣中に生ずるなり。勝進已生とは、謂く彼と相違す。清淨已生とは、謂く遊戲忘念、意相憤怨にして、變化天と他化自在天と無色界の諸天とを樂しみ多放逸なるが故に。其の所應に隨ひて受用する所の境と、及び所住の定とに於て自在にして轉ずるなり。不清淨已生とは、謂く彼の所餘なり。運轉已生とは、謂く往來の位なり。有種已生とは、謂く阿羅漢の最後蘊を除くなり。無種已生とは、謂く最後蘊なり。影像自在示現已生とは、謂く所知の事なり。同分の色と解脫所生の色と、及び如來等の色となり。其の次第の如し。展轉已生とは、謂く前と後との生の相續なり。刹那壞已生とは、謂く一一の刹那の諸の行相なり。離會已生とは、謂く愛と不愛との會と離との位に於けると、及び心有貪と離貪との等き位に於けるなり。異位已生とは、謂く羯邏藍等の位に於けるなり。生死已生とは、謂く有情世間なり。成壞已生とは、謂く器世間なり。先時已生とは、謂く先時有なり。死時已生とは、謂く死有なり。中時已生とは、謂く中有なり。續時已生とは、

〔二九〕次に已生を辯ず。

由りて說いて無爲と名づけ、此の義を以て說いて有爲と名づけず。此の道理に依りて唯だ二種のみを說けり。

何を以ての故に。欲に隨ひて現前し現前せざる義なるが故に、說いて有爲と名づく。諸の業煩惱の爲めにせられざる義なるが故に、說いて無爲と名づく。是の故に此れ亦二種を離れず。

二七 云何んが世間なるや。幾ばくか是れ世間なるや。何んの義の爲めの故に世間を觀ずるや。謂く三界の所攝と、及び出世智の後所得と、彼に似て顯現する。是れ世間の義なり。

彼に似て顯現するとは、謂く三界の所攝の相に似て顯現するなり。眞如等に似て現ずる所の相貌は、是れ出世間なり。未だ曾て得せざるが故なり。

是くの如く諸蘊の一分と十五界と十處との全と、及び三界と二處との一分とは是れ世間なり。

一分とは、謂く正智の所攝と、及び後所得と出世間の相に似て顯現すると、幷びに無爲法とを除く。

世の依を執著する我を捨せんが爲めの故に世間を觀察す。

二八 云何んが出世なるや。幾ばくか是れ出世なるや。何んの義の爲めの故に出世を觀ずるや。謂く能く三界を對治する無顚倒と無戲論と無分別との故に是れ無分別出世間の義なり。

能く三界を對治するとは、謂く諸の聖道なり。此れに復た二種あり。一には聲聞と獨覺との所得なり。常等の顚倒を對治し、顚倒分別無きが故に無分別と名づく。二には菩薩等の所得なり。一切色等の法戲論を對治し、戲論分別無きが故に無分別と名づく。諸の無爲法は、一切の分別の所依處にあらざるが故に無分別と名づく。

又出世の後の所得も亦出世と名づく。出世に依止するが故なり。是くの如き諸蘊の一分と、及び三界と二處との一分と是れ出世なり。獨存を執著する我を捨せんが爲めの故に出世を觀察す。

【二七】 次に出間を辯ず。

【二八】 次に出世間を辯ず。

是くの如く乃至有染にも爾所の量あり。耽嗜に依るも亦爾なり。耽嗜と合することを執著する我を捨せんが爲めの故に耽嗜に依りて觀察す。

[二四]云何んが出離に依るや。幾ばくか是れ出離に依るや。何んの義の爲めの故に出離に依りて觀ずるや。謂く、耽嗜に依ると相違する是れ出離に依るの義なり。乃至無染にも爾所の量あり。出離も亦爾なり。耽嗜を離れんことを執著する我を捨せんが爲めの故に出離を觀察す。

[二五]云何んが有爲なるや。幾ばくか是れ有爲なるや。何んの義の爲めの故に有爲を觀ずるや。謂く、若しは法に生滅住異の知るべきあり、當に知るべし是れ有爲の義なり。一切皆是れ有爲なり。唯だ法界と法處との一分のみを除く。無常を執著する我を捨せんが爲めの故に有爲を觀察す。

[二六]云何んが無爲なるや。幾ばくか是れ無爲なるや。何んの義の爲めの故に無爲を觀ずるや。謂く、有爲と相違する是れ無爲の義なり。法界と法處との一分是れ無爲なり。常住を執著する我を捨せんが爲めの故に無爲を觀察す。

問ふ、無取の五蘊は、當に有爲と言ふべきや。當に無爲と言ふべきや。答ふ、彼には有爲と無爲とを言ふべからず。何を以ての故に。諸の業煩惱の爲めにせられざる所なるが故に、有爲と言ふべからず。欲に隨ひて現前し現前せざるが故に、無爲と言ふべからず。

所以云何んとならば、無取の諸蘊は、欲樂する所に隨ひ、若しは現前し、若しは現前せず。無爲は爾らず、常住なるを以ての故なり。

問ふ、薄迦梵の說き給へるが如し。一切の法に二種あり。謂く、有爲と無爲となり。云何んが今此の法は有爲にもあらず無爲にもあらずと說くや。

答ふ、此れ亦二種を離れざるが故なり。所以は何ん。

若しは此の義に由りて說いて有爲と名づけ、此の義を以て說いて無爲と名づけず。若しは此の義に

【二四】次に出離に依ることを辨ず。

【二五】次に有爲を辨ず。

【二六】次に無爲を辨ず。

[二〇]云何んが無諍なるや。幾ばくか是れ無諍なるや。何んの義の爲めの故に無諍を觀ずるや。謂く、有諍と相違する是れ無諍の義なり。乃至無漏にも爾所の量有り、無諍も亦爾なり。諍を離ることを執著する我を捨せんが爲めの故に無諍を觀察す。

[二一]云何んが有染なるや。幾ばくか是れ有染なるや。何んの義の爲めの故に有染を觀ずるや。謂く、若しは是くの如き貪瞋癡に依るが故に後有の自身を染著す。彼の自性なるが故に。彼の相屬なるが故に。彼の所縛なるが故に。彼の隨逐なるが故に。彼の隨順なるが故に。彼の種類なるが故に。是れ有染の義なり。

後有を染著すとは、謂く貪瞋癡は是れ染著なり。後有は因なるが故に染と名づく。云何んが瞋恚は是れ染著、後有は因なるや。謂く、諸の淸淨法を憎嫉するに由りて後有を染著するが故なり。

是の如く乃至有諍に爾所の量あり、有染も亦爾なり。染と合することを執著する我を捨せんが爲めの故に有染を觀察す。

[二二]云何んが無染なるや。幾ばくか是れ無染なるや。何んの義の爲めの故に無染を觀ずるや。謂く、有染と相違する是れ無染の義なり。乃至無諍にも爾所の量あり。無染も亦爾なり。離染を執著する我を捨せんが爲めの故に無染を觀察す。

[二三]云何んが耽嗜に依るや。幾ばくか是れ耽嗜に依るとなるや。何んの義の爲めの故に耽嗜に依ることを觀ずるや。謂く、若しは是くの如き貪瞋癡に依るが故に五欲に染著す。彼の自性なるが故に。彼の相屬なるが故に。彼の所縛なるが故に。彼の隨逐なるが故に。彼の隨順なるが故に。彼の種類なるが故に。是れ耽嗜に依るの義なり。

何等か瞋恚能く染著を起すや。謂く、出離を憎嫉するなり。

【二〇】次に無諍を辯ず。

【二一】次に有染を辯ず。

【二二】次に無染を辯ず。

【二三】次に耽嗜に依ることを辯ず。

は、謂く、漏と共に心心法及び眼等ありて、漏と相應するが故に、漏の所依なるか故に、其の次第の如く有漏と名づく。漏の所縛とは、謂く有漏の善法、漏の勢力に由りて後有を招くが故なり。漏の所隨とは、謂く餘地の法、亦餘地の諸漏の麁重の爲めに隨逐せらるるが故なり。漏の[一六]隨順とは、謂く順決擇分にして、煩惱麁重の爲めに隨せらるると雖も、然かも建立して無漏性と爲すことを得て、一切の有に背き彼の對治に順ずるを以ての故なり。漏の種類とは、謂く阿羅漢は有漏の諸蘊の前生の煩惱の所起なるが故なり。

五取蘊と[一七]十五界と十處との全と及び三界と二處との少分とは、是れ有漏なり。謂く最後の三界と二處との少分と聖道の眷屬と及び諸の無爲とを除く。有漏に非ざるが故なり。

[一八]云何んが無漏なるや。幾ばくか是れ無漏なるや。何んの義の爲めの故に無漏を觀ずるや。謂く、有漏と相違する是れ無漏の義なり。五無取蘊の全と、及び三界と二處との少分と、是れ無漏なり。漏と合することを執著する我を捨せんが爲めの故に有漏を觀察す。漏を離れんことを執著する我を捨せんが爲めの故に無漏を觀察す。

[一九]云何んが有諍なるや。幾ばくか是れ有諍なるや。何んの義の爲めの故に有諍を觀ずるや。謂く、是くの如き貪瞋癡に依るを以ての故に、刀杖を執持し、一切の鬪訟違諍を發起す。

刀杖を執持する等は是れ諍の因なり。貪等は是れ諍の自性なり。是くの如く、彼の自性なるが故に。彼の相屬なるが故に。彼の所縛なるが故に。彼の所隨なるが故に。彼の隨順なるが故に。彼の種類なるが故に。是れ有諍の義なり。乃至有漏に爾所の量あり、有諍にも亦爾り。彼の所隨の義なるが故に。諍と合することを執著する我を捨せんが爲めの故に有諍を觀察す。

【一六】了義燈には隨漏順を以ての「漏隨順義異地不增」と稱し、同學鈔五之四には「漏隨順」の論題を設けあり、往見すべし。

【一七】十五界を有漏と爲すに就きて成唯識論十（P. 20, c）以下に三師の義をあげたり。前二師は此の文は佛身の前十五界には關せざる文なりとなし、第三師正義家は此の文を以て隨轉理門の說と爲せり。又同學鈔十之三に「法界色攝」の論題ありて今の問題を論ず。

【一八】次に無漏を辯ず。

【一九】次に有諍を辯ず。

能く往來を礙ぐる是れ有對の義なり。此れ唯だ互に能礙と爲るとのみ言ふべし。復た互に所礙と爲ると言ふ所以は、光明等の色は是れ有對なりと建立せんが爲めの故なり。彼は唯だ是れ所礙のみにして能礙の性にあらざるを以てなり。性自ら爾るが故なり。種類は是れ自性の義なり。

積集とは、謂く極微已上なり。

一極微に對礙なきを以ての故なり。

不修治とは、謂く三摩地自在轉の色に非ず。

定の自在力に轉ぜらるる諸の色は對礙なきが故に。平等心の諸天の如し。

又損害する依處は是れ有對の義なり。

謂く、若しは依、若しは緣、能く瞋恚を生ずるを名づけて有對と爲す。卽ち是くの如き有對の義を以ての故なり。

一切皆是れ有對なり。或は所應に隨ふとは。

謂く所餘の義なり。

不遍行を執著する我を捨せんが爲めの故に有對を觀察す。

[一四]云何んが無對なるや。幾ばくか是れ無對なるや。何んの義の爲めの故に無對を觀ずるや。謂く、有對と相違する是れ無對の義なり。一切皆是れ無對なり。或は所應に隨ふ。遍行を執著する我を捨せんが爲めの故に無對を觀察す。

[一五]云何んが有漏なるや。幾ばくか是れ有漏なるや。何んの義の爲めの故に有漏を觀ずるや。謂く、漏の自性なるが故に。漏の相屬なるが故に。漏の所縛なるが故に。漏の所隨なるが故に。漏の隨順なるが故に。漏の種類なるが故に。是れ有漏の義なり。

漏の自性とは、謂く諸の漏の自性、漏の性と合するが故に、名づけて有漏と爲す。漏の相屬と

【一四】次に無對を辯ず。

【一五】次に有漏を辯ず。

有色を執著する我を捨せんが爲めの故に、有色を觀察す。

[一〇]云何んが無色なるや。幾ばくか是れ無色なるや。何んの義の爲めの故に無色を觀ずるや。謂く、有色と相違する是れ無色の義なり。一切皆是れ無色なり。或は所應に隨ふ。無色を執著する我を捨せんが爲めの故に無色を觀察す。

一切是れ無色とは、謂く無色と相ひ繫屬するが故なり。

[一一]云何んが有見なるや。幾ばくか是れ有見なるや。何んの義の爲めの故に有見を觀ずるや。謂く、眼が所行の境是れ有見の義なり。餘の差別は有色に說けるが如し。

謂く前に色の自性等より乃し示現に至るまで、說いて有色と名づくと說けるが如く、是くの如く有見の自性等より乃し示現に至るまで、說いて有見と名づくなり。

一切皆是れ有見なり。或は所應に隨ふ。

一切是れ有見とは、謂く有見等に相屬するなり。所以云何んとならば、諸の無色の法は有見の色と相屬するが故に亦有見と名づく。

眼の境を執著する我を捨せんが爲めの故に有見を觀察す。

[一二]云何んが無見なるや。幾ばくか是れ無見なるや。何んの義の爲めの故に無見を觀ずるや。謂く、有見と相違する是れ無見の義なり。一切皆是れ無見なり。或は所應に隨ふ。眼の境に非ざるを執著する我を捨せんが爲めの故に無見を觀察す。

[一三]云何んが有對なるや。幾ばくか是れ有對なるや。何んの義の爲めの故に有對を觀ずるや。謂く、諸の有見のもの皆是れ有對なり。又三因の故に說いて有對と名づく。謂く種類の故に、積集の故に、積集の故に、不修治の故に。

種類とは、謂く諸の色法の互に能礙と爲り、互に所礙と爲るなり。

【一〇】次に無色を辯ず。

【一一】次に有見を辯ず。

【一二】次に無見を辯ず。

【一三】次に有對を辯ず。

が故に有色と名づく。諸の大種の色は展轉して合するが故に有色と名づく。憙集とは、即ち有色の法は憙を以て集と爲すを名づけて憙集と爲す。現在の憙楽が先の觸受等を以て集と爲すを名づけて憙集と爲すが如きには非ず。方所有りとは、分量を有するが故なり。處遍滿とは、形量が十方に遍ずるが故なり。方所可說とは、此に在り彼方に在りと說く可きが故なり。方處所行とは、謂く所住の方に隨ひて所緣の性なるが故なり。二同所行とは、謂く二の有情の共所緣の性なるが故に。無色の法の自の所受の如く、他は取すること能はざるが如きものには非ざるが故なり。相屬とは、謂く眼識等をも亦有色と名づく、有色根に繫屬するが故なり。隨逐とは、謂く無色界に生じたる異生は諸色の種子の隨逐する所なるが故なり。顯了とは、謂く諸の尋思の能く所緣の境を顯了するに由るが故なり。變壞とは、謂く五蘊の手等に觸れられ、受等に切せらるるに由り、其の所應に隨ひて卽便ち變壞す。變壞は是れ色の義なるを以ての故なり。顯示とは、謂く諸の言說が義を顯示するが故なり。積集建立とは、謂く極微已上の色は微細の分ありて建立すべきが故なり。外門とは、謂く欲界の色は妙欲愛の所生なるが故なり。內門とは、謂く色界の色は定心愛の所生なるが故なり。此の道理に由り、彼の諸色を說いて意生身と名づく。長遠とは、謂く異生の色は建立すべからず、前後兩際邊量あるが故なり。分限とは、謂く有學の色は已に生死の分限を作すが故なり。暫時とは、謂く無學の色は唯だ現在一有の身のみを餘すが故なり。示現とは、謂く如來等の所現の諸色は、唯だ是れ示現のみにして眞實に非ざるが故なり。

一切皆是れ有色なり。或は所應に隨ふ。

一切是れ有色とは、謂く變壞の色なり。所應に隨ふとは、謂く餘の色にして外門等の六なり。

色の差別當に知るべし、受等と共なり。

見者等の言は、當に知るべし、見者・聞者・嗅者・嘗者・觸者・識者を顯はさんが爲めなり。

[八]云何んが所通達なるや。幾ばくか是れ所通達なるや。何んの義の爲めの故に所通達を觀ずるや。謂く、轉變の故に。隨聞の故に。入行の故に。來の故に。往の故に。出離の故に。是れ所通達の義なり。

所通達と言ふは、謂く六神通所有の境界なり。如意通の運轉を以て差別顯はさるるが故に、此の所通達の境界を說いて名づけて轉變と爲す。天耳通を以て種種なる異趣の音聲に了達するが故に隨聞と名づく。他心通を以て有貪等の種種なる心行を了するが故に入行と名づく。宿住通を以て過を生より展轉し來れる事を了するが故に來と名づく。天眼通を以て未來に往生さるる事を了達するが故に往と名づく。漏盡通を以て三界を解脫すべき方便を了知するが故に出離と名づく。

是くの如き一切皆是れ所通達なり。

後の三通を以て遍く一切の境界を緣ずるが故なり。

自の威德を執著する我を捨せんが爲めの故に所通達を觀察す。

[九]云何んが有色なるや。幾ばくか是れ有色なるや。何んの義の爲めの故に有色を觀ずるや。謂く、色の自性なるが故に。大種に依るが故に。藂集の故に。有方所の故に。處遍滿の故に。方所可說の故に。方處所行の故に。二同所行の故に。相屬の故に。隨逐の故に。顯了の故に。變壞の故に。顯示の故に。積集建立の故に。外門の故に。內門の故に。長遠の故に。分限の故に。暫時の故に。示現の故に。是れ有色の義なり。

色の自性とは、謂く卽ち色法を用つて自性と爲すが故に、名づけて有色と爲す。餘の色と合するが故に、名づけて有色と爲すに非ず。是の故に最初に色の自性を說けり。大種に依るとは、此れ餘の色と合するが故に、有色と名づくることを顯はす。諸の所造の色は大種の色と合する

【八】次に所通達を辯ず。

【九】次に有色を辯ず。

[七]云何んが所識なるや。幾ばくか是れ所識なるや。何んの義の爲めの故に所識を觀ずるや。謂く、無分別なるが故に。有分別なるが故に。因なるが故に。轉なるが故に。相なるが故に。相の所生なるが故に。能治所治なるが故に。微細差別なるが故なり。當に知るべし、是れ所識の義なり。

無分別とは、謂く五識身なり。有分別とは、謂く意識身なり。因とは、謂く阿賴耶識なり。轉とは、謂く所餘の識なり。相とは、謂く根と及び義となり。相所生とは、謂く根と義とより生ぜらるる諸の識なり。能治所治とは、謂く有貪と離貪と、有瞋と離瞋と、有癡と離癡と、是くの如き等なり。微細差別とは、謂く七種の識了別差別の難きなり。七種の識了別の難きとは、一には不可知了別器了別なり。謂く、一切時に無分別の行相なるが故に。二には種種行相了別なり。謂く、一法一行に種種の相あり。此れ建立し難し、是の故に微細なり。三には俱有了別なり。謂く、一の時間に諸識俱に起り、云何んが各別に自の境界を了するや。此れ建立し難し、是の故に微細なり。當に知るべし、此の微細の言は一切處に通ず。四には能治所治速疾迴轉了別なり。謂く具縛の者、云何んぞ貪等の心ありて須臾にして轉變し離貪等の心を起すや。五には習氣了別なり。謂く、諸業の現行心に熏習し、云何んぞ心に離れて外に別に習氣あるにあらざるや、亦心に卽するにもあらざるや。又果を與ふる時次第して轉ずるや。六には相續了別なり。謂く、無量の種自身の業を感じ熏習して識に在り、云何んぞ餘に於て明了に、將に命終せんとする位に暫く覺悟を起し、餘の業を熏習して異趣に轉じ、生をして相續せしむるや。七には解脫了別なり。謂く、阿羅漢の心第一無戲論の法性を證得し、生死と曾て積習せし所の一切種の有漏行とを超過す、云何んぞ此の心の行相流轉するや。此れ建立し難し、是の故に微細なり。是くの如く當に知るべし。

一切皆是れ所識とは、能見者等を執著する我を捨せんが爲めの故に、所識を觀察す。

【七】次に所識を辯ず。

なり。若しは此の分位に於て、若しは此の清淨性なり。此れに由依するが故に、一切皆是れ所知なり。

處とは、謂く色法なり。所染淨とは、謂く心法なり。能染淨とは、謂く貪等信等の心所有法なり。其の次第の如し。分位とは、謂く色と、心と及び心法の分位に假立せる心不相應行法なり。淸淨性とは、謂く淸淨なる無爲法なり。其の所應の如く一切には非ず。所以云何んとならば、唯だ法界と及び擇滅と是れ淸淨の性なるが故なり。

又所知の法とは、謂く信解智の所行なるが故に。道理智の所行なるが故に。不散智の所行なるが故に。內證智の所行なるが故に。他性智の所行なるが故に。下智の所行なるが故に。上智の所行なるが故に。厭患智の所行なるが故に。不起智の所行なるが故に。無生智の所行なるが故に。智智の所行なるが故に。究竟智の所行なるが故に。大義智の所行なるが故なり。當に知るべし、此の中十三種の智の所緣の境界なるを以て、所知の義を顯示す。

十三の智とは、謂く聞所生智と思所生智と世間の修所生智と勝義智と他心智と法智と種類智と苦智と集智と滅智と道智と盡無生智と大乘智となり。是くの如き諸の智、其の次第に隨ひて是れ信解等の智なり。他心智を他性智と名づくるは、謂く他心を緣じて境と爲すが故なり。法智を下智と名づくるは、謂く諸の諦に於て最初に生ずるが故なり。種類智を上智と名づくるは、謂く法智より後に生ぜらるゝが故なり。患を厭ふ爲めの故に厭患智と名づく。起らざる爲めの故に不起智と名づく。無生を緣ずるが故に、無生智と名づく。智を緣ずるが故に智智と名づく。究竟を緣ずるが故に究竟智と名づく。大義を緣ずるが故に大義智と名づく。自利と利他とを名づけて大義と爲す。

知者見者を執著する我を捨せんが爲めの故に所知を觀察す。

名言と此の餘とを待つ根と境とは、是れ假有の義なり。一切皆是れ假有なり。實有の我を執著するを捨せんが爲めの故に假有なりと觀察す。

云[四]何んが世俗有なるや。幾ばくか是れ世俗有なるや。何んの義の爲めの故に世俗有と觀ずるや。謂く雜染の所緣は是れ世俗有の義なり。一切皆是れ世俗有なり。雜染の相を執著する我を捨せんが爲めの故に世俗有と觀察す。

雜染の所緣とは、能く一切の雜染を發す義なるが故なり。雜染相の我とは、我を執じて雜染の因と爲すが故なり。

云[五]何んが勝義有なるや。幾ばくか是れ勝義有なるや。何んの義の爲めの故に勝義有と觀ずるや。謂く清淨の所緣は是れ勝義有の義なり。一切皆是れ勝義有なり。清淨を執著する我の相を捨せんが爲めの故に勝義有と觀察す。

清淨の所緣とは、清淨を得んが爲め此の境界を緣ず、是れ最勝智が所行の義なるが故なり。一切皆是れ勝義有とは、一切法は眞如を離れざるを以ての故なり。諸法の無我性是れを眞如と名づく。彼の無我性は眞實有なるが故なり。

云[六]何んが所知なるや。幾ばくか是れ所知なるや。何んの義の爲めの故に所知を觀ずるや。謂く所知に五種あり、色と心と心所有法と心不相應行と無爲となり。

色とは、謂く色蘊なり。十色界と十色處と、及び法界と法處とに攝むる所の諸色となり。心とは、謂く識蘊なり。七識界と及び意處となり。心所有法とは、謂く受蘊と想蘊と相應の行蘊と、及び法界と法處との一分となり。心不相應行とは、謂く不相應の行蘊と、及び法界と法處との一分となり。無爲とは、謂く法界と法處との一分なり。

若しは是の處に依り、雜染と清淨となり。若しは所雜染及び所清淨なり。若しは能雜染及び能清淨

【四】次に世俗有に就きて辯ず。

【五】次に勝義有に就きて辯ず。

【六】次に所知に就きて辯ず。

卷の第三

本事分中、三法品、第一の三

復た次に蘊と界と處とを廣く分別すること云何。嗢拕南に曰く。[一]

實有性等と所知等と
色等と漏等と已生等と
過去世等と諸緣等とは

云何んが幾ばくの種なりや、何の義の爲めにするや。

問ふ、蘊と界と處との中、云何んが實有なるや、幾ばくか是れ實有なるや、何の義の爲めの故に實有なりと觀ずるや。[二]

答へて謂く、名言と此の餘とに待たず、根と境とは是れ實有の義なり。一切皆是れ實有なり。實有の我を執著するを捨せんが爲めの故に、實有を觀察す。

此の三問を建立する所以は、相と事との二の愚と、及び增益の執とを斷ぜんが爲めの故なり。云何んが實有なるやとは、實有の相を辯じ、相愚を斷ぜんが爲めなり。一切實有なりとは、事愚を斷ぜんが爲めなり。實我に著せるを捨すとは、增益の執を斷ぜんが爲めなり。是くの如く餘處も理の如く應に知るべし。名言を待たざる根と境ととは、謂く色受等の名言を分別せずして、自の所取の義を取るなり。此の餘に待たざる根・境とは、謂く此の所餘の義を待たずして、自の所覺の境を覺するなり。瓶等の事に於て要ず名言と、及び、色香等とを待ちて、方に瓶等の覺を起すが如きには非ず。

云何んが假有なるや。幾ばくか是れ假有なるや。何んの義の爲めの故に假有なりと觀ずるや。謂く[三]

【一】蘊・界・處三科を廣分別す、中に於て先づ總じて頌を說き次に長行釋。長行釋中、實有性等と所知等と色等と漏等と已生等と過去世等と諸緣等との七段六十項と爲る。而して次に三の差別を辯す。

【二】長行の中、初に實有に就きて辯ず。

【三】次に假有に就きて辯ず。

〔三一〕復た次に佛の所說の如く、色は聚沫の如し、受は浮泡の如し、想は陽焰の如し、行は芭蕉の如し、識は幻化の如し。

問ふ、何の義を以ての故に、色は聚沫の如く、乃至、識は幻化の如くなるや。

答ふ、無我を以ての故に、離淨の故に、少味の故に、不堅實の故なり。謂く虛妄を遠離することあるに非ざるを不堅實の義とす。是れ經に說く所の諸句の義なり。又我と淨と樂と常との四顚倒を對治する爲めの故に、其の次第の如く無我等の諸句の差別を說けり。

【三一】經の諸句を會す。

し易し、復た分別せず。

又苦の相は廣大なるが故に名づけて蘊と爲す。大材蘊の如し、色等に依止して生等の廣大なる苦を發起するが故なり。經に是くの如く純大の衆苦蘊集と言へるが如し。又雜染の擔を荷ふが故に名づけて蘊と爲す、肩に荷擔するが如し。

　雜染の擔を荷ふとは、謂く煩惱等の諸の雜染法は色等に依るが故なり。譬へば世間の身の一分が能く擔を荷ふ、即ち此の一分を肩とも名づけ、蘊とも名づくるが如し。色等も亦爾なり。能く雜染の擔を荷ふが故に、之を名づけて蘊と爲す。

二九 問ふ、界の義とは云何。

答ふ、一切法の種子の義なり。

　謂く、阿賴耶識中の諸法の種子に依り、說いて名づけて界と爲す。界は是れ因の義なるが故なり。

又能く自相を持するの義、是れ界の義なり。又能く因果の性を持するの義、是れ界の義なり。

　能く因果の性を持するとは、謂く十八界の中に於て根と境との諸界と、及び六識界となり、其の次第の如し。

又一切法の差別を攝持する義、是れ界の義なり。

　一切法の差別を攝持するとは、謂く諸の經に說けり、地等の諸界と、及び所餘の界となり、其の所應に隨ひ皆十八界の攝なり。

三〇 問ふ、處の義とは云何。

答ふ、識生長門の義、是れ處の義なり。

　當に知るべし、種子の義、一切法の差別を攝するの義、亦是れ處の義なり。

【二九】界の義を明す。

【三〇】處の義を明す。

若しは是の處に依りて染淨を起すとは、謂く、有根身に依るなり。若しは領受に由るとは、謂く有染・無染等の受に由る、其の次第の如く染汚と淸淨となり。若しは取相と造作とに由るとは、謂く如理と不如理とに由りて轉ずるが故に、其の次第の如く染汚と淸淨となり。若しは所染汚と及び所淸淨ととは、謂く心麁重有るにも、麁重無きにも生ずるが故なり。

〔二六〕何が故に諸界是の如く次第するや。世事の差別に隨ひて轉ずるに由るが故に。云何んが世事差別して轉ずるや。謂く諸の世間最初に相見ゆ、既に相見へ已り更に相問訊す。既に問訊し已り卽ち牀浴・塗香・花鬘を受く。次に種種の上妙なる飲食を受く。次に種種の臥具と侍女とを受く。然る後に意界處處に分別す。內界の次第を以ての故に外界を建立す。此の次第に隨ひて識界を建立す。界の次第の如く、〔二七〕處も亦是くの如し。

〔二八〕問ふ、蘊の義とは云何。

答ふ、諸の所有る色、若しは過去、若しは未來、若しは現在。若しは內、若しは外。若しは麁、若しは細。若しは劣、若しは勝。若しは遠、若しは近。彼の一切を略して一の色蘊と說く。積集の義の故に、財貨蘊の如し。是くの如く乃し識蘊に至る。

〔二九〕當に知るべし、十一種の愛の所依處に依止するが故に、色等の法に於て過去等の差別を建立す。十一種の愛とは、謂く顧戀愛と希望愛と執著愛と內我愛と境界愛と欲愛と定愛と惡行苦愛と妙行樂愛と遠愛と近愛となり。是くの如き愛の所緣の境に由るが故に、其の次第の如く過去等の種種の差別を立つ。又差別あり、謂く已生と未生との差別の故に。能取と所取との差別の故に。外門と內門との差別の故に。染と不染との差別の故に。近と遠との差別の故に。其の所應の如く色等の諸法に於て、過去等の差別を建立す。已生とは、謂く過去と現在となり。未生とは、謂く未來なり。外門とは、謂く不定地なり。內門とは、謂く諸の定地なり。餘の句は了

〔二六〕諸界建立の次第を明す。

〔二七〕處の建立次第を界の建立に例同す。

〔二八〕蘊の義を明す。

界に生長すれば、卽ち色行の身を以て、還つて自地の觸を覺す。彼の界の自性は定んで香味なし、段食の食を離るるが故なり。此の道理に由りて亦鼻舌の兩識なし。若し欲界に生長すれば、卽ち欲行の意を以て、三界の法と及び無漏法とを了す。欲界に生長するが如く、是くの如く色界に生長す。若し無色界に生長すれば、無色行の意を以て、無色行の自地の法と及び無漏法とを了す。若しは無漏の意を以て、三界の法と及び無漏法とを了す。

無色行の意〔を以て〕無色行の自地の法と及び無漏法とを了すとは、謂く聖弟子に依りて說けり。若し外の異生ならば、唯自地の法を了す。若し此の法に住する者は、或は先の聞熏習力に由りて亦上地を緣ずるあり、彼を起す爲の故なり。

〔三五〕問ふ、何が故に諸蘊是の如く次第するや。

答ふ、識住に由るが故に。謂く四識住と及び識となり。又前を後の依と爲すが故に。其の色相の如くして領受するが故に。領受する所の如くして了知するが故に。了知する所の如くして思作するが故に。思作する所の如くして彼彼の處に隨ひて了別するが故なり。

其の色相の如く領受すとは、謂く樂受等に隨順する根と境との二力に由るが故に樂受等生ずるなり。領受する所の如くして了知すとは、謂く所受に隨ひて諸の相を取るが故なり。了知する所の如くして思作すとは、謂く所想に隨ひて諸の業を造るが故なり。思作する所の如く彼彼の處に隨ひて了別すとは、謂く所作の業に隨ひて諸の境界と及び異趣の中に於て、識轉變するが故なり。

又染汚と清淨とに由るが故に。謂く若しは是の處に依りて染淨を起し、若しは領受と取相と造作とに由るが故に染汚と清淨となり、若しは所染汚と及び所清淨となり。此の理に由るが故に蘊の次第を說く。

【三五】諸蘊建立の次第を明す。

舌と身と耳等の界と其の所應に隨ひて盡く當に知るべし。

阿羅漢の最後の眼とは、謂く涅槃に入る時の最後の刹那には、爾の時、眼にして眼界に非ず。餘の眼の因に非るが故なり。無色界の異生の有する眼の因とは、謂く彼より退墮して當に有色界に生ずれば、阿賴耶識眼の種子を持し、定んで當に眼を生ずべきを以ての故に。彼に生ずる衆聖は退還せざるが故に眼界あることなし。

身界ありて身なしとは、謂く唯だ無色界に生ぜる異生なり。彼れ唯だ身の因あるが故に、卵殼等に處するには非ず、彼は必ず身あるが故に。若し身壞滅すれば壽命も亦なし。

問ふ、若しは意にして亦意界なるありや。設は意界にして亦意なるありや。

答ふ、或は意にして意界に非るあり。謂く阿羅漢の最後の意なり。或は意界にして意に非るあり。謂く滅定に處せる者の所有の意の因なり。或は意にして亦意界なるあり。謂く、所餘の位に於ける〔所相〕なり。或は無意にして無意界なるあり。謂く、已に無餘依涅槃界に入れるなり。

唯だ意界ありて意に非る中、無想定に入れることを取らざる所以は、彼には染汚の意あるを以ての故なり。

〔三〕問ふ、若し彼の地に生長すれば、即ち彼の地の眼を用つて、還つて彼の地の色を見るや。

答ふ、或は即ち彼の地の眼を用つて、還つて彼の地の色、或は復た餘地を見るあり。謂く、欲界に生長して、欲行の眼を用つて還つて欲行の色を見、或は色行の眼を用つて色行の色を見、或は上地の眼を用つて下地の色を見る、眼を以て色に對する如く、是くの如く耳を以て聲に對す。欲界に生長する如く、是くの如く色界に生長す。

生とは、謂く、初めて生を受くる時なり。長とは、謂く後の增長なり。

若し欲界に生長すれば、即ち欲行の鼻・舌・身を以て、還つて欲行の香・味・觸を嗅・嘗・覺す。若し色

【三】次に上下相緣を明す。

りて所依の身を莊嚴するが故に。六には聖教に由る、經の中に眼能く色を見るが故にと說けるが如し。是くの如く說ける所の六種の相貌は、識等の中に於ては皆不可得なり。

識の動轉とは、當に知るべし、多種差別して生起するなり。

〔三一〕何が故に無爲は立ちて界と處とのみに在りて、蘊に在らざるや。蘊の義なきが故なり。所以云何んとならば、色等の諸法に、去來等の種種の差別あり。總略して積聚を說いて名づけて蘊と爲す。聚積の義是れ蘊の義なり。常住の法には此の義あることなし。此の故に無爲は蘊の攝むる所に非るなり。

〔三二〕何が故に即ち是くの如きの法を、蘊と界と處との〔三〕門の差別を以て說くや。所化の有情をして、廣略の門に於て善巧を生ぜしめんと欲するが故なり。所以云何んとならば、蘊門の中に於ては略して色と識とを說き、界と處との門に於ては、其の所應に隨ひて廣く十七を說く。又蘊門に於ては廣く受等を說き、界と處との門に於ては略說して一の法界法處と爲す。又蘊門の中には唯有爲法の相を建立することを說き、界門には廣く能取と所取とを建立し、及び、取の體性を說く。處門には唯だ能取と所取とを建立することを說く、此れに由りて唯だ取生門を顯はすが故なり。已に傍乘の義を辯ぜり。今當に本文を釋すべし。問ふ、經の中に、

〔三三〕眼と及び眼界とを說けるが如き、若しは眼にして亦眼界なりや、設(もし)は眼界にして亦眼なりや。

答ふ、或は眼にして眼界に非るあり。謂く、阿羅漢の最後の眼なり。或は眼界にして眼に非るあり。謂く卵殼に處すると、羯邏藍時と頞部陀時と閉尸時との母の腹中に在るとは、若しは眼を得せず。設は得して已に失す、無色〔界〕に生じたる異生の所有の眼の因の若(ごと)し。或は眼にして亦眼界なるあり。謂く餘の位に於ける〔相〕なり。或は無眼にして無眼界なるあり。謂く、已に無餘涅槃界に入れると、及び、諸の聖者の無色界に生ぜるとなり。眼と眼界との如く、是くの如く、耳と鼻と

【三一】廣分別の中、第七に蘊性の狹なること明し、無爲を界・處の二法に立てて蘊に立てざることを辯ず。

【三二】廣分別の中第八に三科の法各別建立の意を辯ず。

【三三】以下問答分別する中に二あり、初に內の六根と界とを以て四句分別し、後に上下相緣を以て分別す。今は初なり。

一九 問ふ、若し色等を了別するが故に、名づけて識と爲すらば、何が故に但眼等の識と名づけ、色等の識と名づけざるや。　答ふ、眼等の五種の觧釋に依るを以て道理成就す、色等には非るなり。何を以ての故に、眼中の識の故に眼識と名づく、眼の處所に依りて識生ずることを得るが故に。又眼〔根〕ありて識あることを得るに由るが故なり。所以云何んとならば、若し眼根あらば眼識定んで生ず、盲瞑ならざる者は、乃至、闇中にも亦能く見るが故に。色あるに由りては眼識定んで生ぜず、盲瞑の者見ること能はざるを以ての故に。又眼〔根〕が所發の識なるが故に眼識と名づく。眼〔根〕の變異するに由りて識も亦變異す、色は變ずること無しと雖も、識に變あるが故に。迦末羅病の眼根を損壞すれば、靑等の色に於て、皆見て黃となすが如し。又眼〔根〕に屬するの識なるが故に眼識と名づく、識の種子、眼〔根〕に隨逐して生ずることを得るに由るが故に。又眼〔根〕を助くるの識なるが故に眼識と名づく、彼れ損益を作すが故に。所以云何んとならば、眼識に合し、領受する所あるに由りて、根をして損益せしむ、境界には非るが故なり。又眼〔根〕の如くなるの識なるが故に眼識と名づく、〔根と識との二法は〕俱に有情數の攝むる所なるが故に。色は則ち爾らず、不決定なるが故に。眼識旣に然り、餘の識も亦爾なり。

二〇 問ふ、眼〔根〕色を見ると爲すや、識等〔色を見る〕と爲すや。答ふ、眼〔根〕色を見るに非ず、亦識等にも非ず。一切の法は作用なきを以ての故に、和合あるに由り、假立して見と爲す。又六相に由り、眼〔根〕は色を見る中に於て最勝なり、識等〔は最勝〕にあらず。是の故に眼〔根〕能く諸色を見ると說く。何等をか六となすや。一には生因に由る、眼能く彼を生ずるが故に。二には依處に由る、見は眼に依るが故に。三には動轉無きに由る、眼常に一類なるが故に。四には自在轉に由る、緣合するを待たずして念念に生ずるが故に。五には端嚴轉に由る、此れに由

【一九】廣分別中第五に識の得名に就きて辯ず。

【二〇】廣分別の中、第六に能見者に關し根見識見に就きて辯ず。

へば一室に俱に二燈を然すが如し、同じく一光を發して照すこと極めて明了なり。是くの如く一光は二燈に依りて轉ず。當に知るべし、此の中の道理も亦爾なり。

問ふ、[一六]一一の根門に於て、種種の境界俱に現在前せん。此の多の境に於て、多識次第起ること ありと爲すや。俱に起ると爲すや。答ふ、唯だ一の識のみありて種種の行相俱時にして起る。

若し諸の段食舌根と合せば當に知るべし、身と舌との二識、恒に俱時に起る。又聲は間斷するが故に異處より展轉して生起し相續して餘方に往趣せず。然れば燈の自處に置在して能く一時に於て其の勢力に隨ひ遍く光明を發すに譬ふ。

問ふ、[一七]何が故に近障の聲に於て聞ゆること明了ならざるや。答ふ、聲は有對なるが故に。障の細隙に於て微少にして而も生ずるが故に明了ならず。

問ふ、[一八]六識の中に於て、幾ばくか分別あるや。答ふ、唯一の意識のみ三分別に由るが故に、分別あり。三分別とは、謂く自性分別と隨念分別と計度分別となり。自性分別とは、謂く現在に受る所の諸行の自相に於て行ずる分別なり。隨念分別とは、謂く昔し曾て受けし所の諸行に於て、追念して行ずる分別なり。計度分別とは、謂く去・來・現の不現見の事に於て、思搆して行ずる分別なり。復七種の分別あり、謂く所緣に於ける任運分別と有相分別と無相分別と尋求分別と伺察分別と染汚分別と不染汚分別となり。初の分別とは、謂く五識身の、所緣の相の如く異の分別なく、自の境界に於て任運に轉ずるが故なり。有相分別とは、謂く自性と隨念との二種の分別なり。過現の境の種種の相を取るが故なり。無相分別とは、謂く未來の境を希求して行ずる分別なり。所餘の分別は皆計度分別を用ひ、以て自性と爲す。所以云何んとならば、思度を以ての故に、或る時は尋求し、或る時は伺察し、或る時は染汚し、或る時は不染汚し、種種に分別するなり。

【一六】廣分別中、第二に識の用を辯ず。

【一七】廣分別中、第三に聲の有對なることを辯ず。

【一八】廣分別中第四に六識の分別を辯ず。

當に知るべし、此の中、二種の斷ずべき法あり。謂く、諸の煩惱と及び此の所依の受となり。受に二種あり。謂く、變異と及び不變異となり。其の次第の如く苦樂と非苦樂となり。當に知るべし、煩惱斷ずるが故に擇滅を建立し、二受斷ずるが故に、其の次第の如く不動と及び受想滅とを建立す。煩惱斷とは、謂く此の品の麁重を除きて得る所の轉依なり。受斷とは、謂く此の能治の定障を除きて得る所の轉依なり。是の故に第二の靜慮を得る時、苦滅を證すと雖も、而も無爲を建立せず。變異受未だ盡く斷ぜざるが故なり。

又若しは五種の色、若しは受・想・行蘊及び此の所說の八無爲法、是の如き十六を總じて法界と名づく。

[一四]云何んが處を建立するや。謂く、十色界は卽ち十色處なり。七識界は卽ち意處なり。法界は卽ち法處なり。此の道理に由り、諸の蘊・界・處三法の所攝は、謂く色蘊と法界と及び意處となり。色蘊に十色界を攝し、法界は卽ち法界を攝し、意處は七識界を攝するに由り、是の故に三法に一切法を攝す。

是の如く蘊・界・處を建立し已る。[一五]今、此の義に乘じて應に更に分別すべし。問ふ、眼と耳と鼻とに各ゝ二種あり、云何んぞ二十一界を立ざるや。答ふ、彼れに二ありと雖も、然も界は別ならず。所以云何んとならば、其の相相似して倶に眼の相なるが故に。所作相似して倶に眼の境に於ける、眼識の一所作なるが故なり。是くの如く鼻舌も理に隨ひて應に知るべし。身の端嚴なる爲に、各ゝに二種を生ず。何を以ての故に。是くの如く一界二所に分布すれば身端嚴なることを得、餘に由らざるが故なり。問ふ、常に一一の眼〔根〕に依るが故に眼識生ずることを得と爲すや、亦二に依ると爲すや。答ふ、二に依ることを得、明了に取るが故なり。所以云何んとならば、若し倶に二眼を開かば、色を取ること明了にして一を開くが如くなるには非ず。譬

【一四】以下處の建立を明し、界と處との相攝を辯ず。

【一五】以下義に乘じ師子覺更に更分別する中初め界の增減を明す。

むる所なきが故なり。

何んが故に復た此れを說いて勝義と名づくるや。最勝の聖智の所行の處なるが故なり。

何んが故に復た此れを說いて法界と名づくるや。一切の聲聞・獨覺・諸佛の妙法の所依の相なるが故なり。

善法眞如の如く、當に知るべし、不善法眞如・無記法眞如も亦爾り。

虛空とは、謂く無色性なり。一切所作の業を容受するが故なり。

無色性とは、謂く唯だ色に違して性相なき法にして、意識の境界なる是れを虛空と名づく。意識の境界とは、謂く法界に攝むが故に。唯だ色に違すると云ふ言は、受〔想行識〕等の共に、眞如・擇滅・非擇滅・無常性等を有するに別せんが爲なり。兎角等も亦是れ無性なりと雖も、然も彼は諸法と相違せず、彼は唯だ是れ畢竟無なるを以ての故なり。又兎角等は、唯だ色に違するのみに非ず、受等の諸法と共なるに由るが故に、是の故に唯色と相違すと說けり。無性相の言は、受等の無色の法と別せんが爲なり。何を以ての故に、受等の自體は、是れ有性相にして、無性相に非るが故なり。

非擇滅とは、謂く是れ滅にして離繫には非ず。

永に隨眠を害せざるが故なり。

擇滅とは、謂く是れ滅にして是れ離繫なり。

永に隨眠を害するが故なり。

不動とは、謂く已に遍淨の欲を離るるも、未だ上欲を離れざる苦樂滅の無爲なり。

想受滅とは、謂く已に無所有處の欲を離れ、止息想の作意を先と爲すが故に諸、の恒に行ぜさる心・心法及び、恒に行ずる一分の心・心法の滅〔する位に顯はるる〕無爲なり。

るが故なり。是の故に、諸蘊の中より界の建立を出し、諸界の中より處の建立を出す。

[一三]何等の界法が蘊に攝めざるや。法界中の無爲法は蘊に攝めざる所なり。此の無爲法に復八種あり。謂く、善法眞如と不善法眞如と無記法眞如と虚空と非擇滅と擇滅と不動と及び想受滅となり。

是くの如き八無爲を建立する中、當に知るべし、所依差別の故に、眞如を分析して假りに三種を立つ、自性に由らざるが故なり。

善法眞如とは、謂く無我性と、空性と、無相と、實際と、勝義法界となり。何が故に眞如を說いて眞如と名づくるや。彼の自性變異なきに由るが故なり。

謂く、一切時に無我の實性は改轉することなきが故に變異することなしと說く。當に知るべし、此れは則ち是れ無我の性なり、二我を離るるが故に。何が故に復た此れを說いて空性と名づくるや。一切雜染の行ぜざる所なるが故なり。

所以云何んとならば、此れを緣ずるに由るが故に、能く一切の諸の雜染の事をして、悉く皆空寂ならしむ。復た有時には雜染ありと說くと雖も、當に知るべし、但だ是れ客塵煩惱の染汚する所のみなり。何等かを名づけて客塵の染汚と爲すや。謂く未だ所取能取の種子を拔かざるに由るが故に、依他性の心をして、「我と法との」二の行相に轉ぜしむ、法性の心には非るなり。諸法の法性は、自性清淨なるを以ての故なり。

何んが故に復た此れを說いて無相と名づくるや。諸相寂靜の故なり。

諸相とは、謂く色受等より乃し菩提に至るまでの諸の戲論せらるる所のものは、眞如性の中には彼の相寂滅す、故に無相と名づく。

何んが故に復た此れを說いて實際と名づくるや。無倒の所緣なるが故なり。

實とは、謂く無顚倒なり。此の處究竟なるが故に名づけて實際を爲す。無我の性を過て更に求

【一三】界法にして蘊に攝めざる無爲法を辯ず。

又復六識の無間に滅する識を以て意と爲す。

當に知るべし、此の中、所緣に由るが故に、釋義の故に、相應の故に、生起の時の故に意を顯了す。何が故に聖道現前すれば染汚の意はなきや。勝義智、我見の現行と極めて相違するに由るが故なり。聖道を出でて後、阿賴耶識に從ひて復更に現起す。有學位には、未だ永に斷ぜざるを以ての故なり。又滅盡定を無想定に望むるに、極めて寂靜なるが故に、此の染汚の意現行することを得ず。

無間滅の意とは、覺に隨ふに由るが故に、無間の覺の義是れ意の義なり、當に知るべし、此の中顯なる相に隨ひて說けり。〔一〇〕

識とは、謂く六識身なり。眼識乃至意識なり。

眼識とは、謂く眼〔根〕に依りて色を緣じ、〔一一〕了別するを性と爲す。

耳識とは、謂く耳〔根〕に依りて聲を緣じ、了別するを性と爲す。

鼻識とは、謂く鼻〔根〕に依りて香を緣じ、了別するを性と爲す。

舌識とは、謂く舌〔根〕に依りて味を緣じ、了別するを性と爲す。

身識とは、謂く身〔根〕に依りて觸を緣じ、了別するを性と爲す。

意識とは、謂く意〔根〕に依りて法を緣じ、了別するを性と爲す。

當に知るべし、此の中、所依に由るが故に、所緣の故に、自性の故に識を建立す。

〔一二〕云何んが界を建立するや。謂く、色蘊は卽ち十界なり。眼等の五根界と、色等の五境界と、及び法界の一分となり、受・想・行蘊は、卽ち法界の一分なり。識蘊は卽ち七識界なり。謂く、眼等の六識界と、及び意界となり。

何が故に界と處とを建立するには別相なきや。蘊を建立する中に、已に眼等の各別の相を說け

〔一〇〕識蘊を明す中第三に識を辯ず。

〔一一〕了別に緣境了別と行相了別との二あり。眼識の心心所が共に境界の上に起るを緣境了別と云ひ、王所各別にして王は總相を、所は總と別とを各別に行ずるを行相了別と云ふ、同學鈔三之二に瑜伽論に作意を能了別と稱してゐる文を引用してゐるがそれは緣境了によつて說を爲したものであり、緣境了より云ふと心所をも了別と云ふ。

〔一二〕以上を以て蘊の建立を終り以下界の建立を明し、先に既に明し終りたる蘊と界との相攝を辯ず。

倶轉することは道理に應ぜず。所以云何んとならば、略して識の業を說くに四種あり、謂く外器を了別すると、依止を了別すると、能く我を了別すると、境界を了別するとなり。是くの如き四種の識の了別の業は、一一の刹那に倶に現ずることを得べきなり。一識一刹那の中に於て是の如き等の差別の業用あるに非ず。是の故に必ず諸識の倶起することあり。

〔問ふ〕云何んが身受の體性不可得なるや。〔答へて〕謂く、一あるが如き、或は如理に思ひ、或は不如理に思ふ。或は思惟せず、或は復た推尋す。若しは心定に在り、若しは「心」定に在らず。身受の生起すること非一衆多なり。若し阿賴耶識なくんば、是くの如き身受應に得べからざるべし。〔然るに〕既に現に得べし、是の故に定んで阿賴耶識あり。

〔問ふ〕云何んが無心定に處すること不可得なるや。〔答ふ〕世尊の說〔き給へ〕るが如し。無想定及び滅盡定に入るに、當に知るべし、爾の時識は身を離れずと。若し阿賴耶識なくんば、爾の時識は應に身を離るべし、識若し身を離るれば、便ち應に命を捨つべし。〔是の如きは〕定に處すると謂ふには非ず。

〔問ふ〕云何んが命終の識不可得なるや。〔答へて〕謂く、命終の時に臨みて、識が漸く所依の身分を捨離し、冷觸或は上〔の身分〕より、或は下〔の身分〕より發起す。彼の意識時として轉ぜざることあるに非ず、故に知んぬ、唯だ阿賴耶識のみありて、能く身を執持し身分に隨ふを。若し此の識を捨すれば冷觸を得べく、身に覺受なし。意識は然らず。是の故に若し阿賴耶識なくんば、命終の識必ず得べからず。

意[七]とは、謂く、一切時に阿賴耶識を緣じ、[八]思度するを性と爲す。四の煩惱と恒に相應す。〔四の煩惱とは〕謂く、我見と我愛と我慢と無明となり。又此の意は遍く一切の善、不善、無記の位に行じ、唯だ聖道の現前すると、若しは滅盡定に處すると、及び無學地に在るとには除く。[九]

【七】以下識蘊を明す中第二に意を辯ず。

【八】末那識の所緣に就き四說の不同あり。
1、第七緣ニ第八王所一如レ次我我所—難陀
2、第七緣ニ第八見相一—火辨
3、第七緣ニ第八現種一—安慧
4、第七緣ニ第八見分一—護法

【九】安慧は三位に末那の體なしと立て、護法は三位には末那の我愛執藏の作用は、滅するも正思量の末那の體は存すとなせり。

〔問ふ〕云何んが最初の生起不可得なるや。〔答へて〕謂く設ひ有が難じて言はん、若し阿賴耶識あらば、應に一有情に二識俱起すべしと。應に彼に告げて曰ふべし、汝は過に非ざるに於て、妄りに過の想を生ず、〔その故は〕二識俱時に轉ずることあるべきが故なり。所以云何んとならば、猶し一あるが如き、俱時に見んと欲し、乃至、識らんと欲するに隨ひて一識あるが如し、〔若し阿賴耶識なくんば〕最初の生起は道理に應ぜざるべし。何を以ての故に、爾の時、作意に差別あること無く、根と及び根と壞せずして現前す。何の因緣の故に識俱に轉ぜざらん。

〔問ふ〕云何んが明了の[六]生起不可得なるや。〔答へて〕謂く若し定んで識は俱生せずと執ずることあらば、眼等の識と俱に一境に行ずる明了の意識は應に不可得なるべし。所以云何んとならば、若し時に隨ひて、曾つて受けたる所の境を憶〔念〕するに、爾の時に〔眼等の識が俱に行ぜざるが故に〕意識は明了に生ぜず、現境に於て生ずる所の意識は、〔眼等の識と俱行するが故に〕、是くの如く不明了の〔行〕相あることを得るに非ず。是の故に應に諸識の俱轉することを信ずべし。或は應に彼の第六意識に明了の性なきことを許すべし。

〔問ふ〕云何んが種子の體性不可得なるや。〔答へて〕謂く六轉識身各各異なるが故なり。所以云何んとならば、此の六轉識は、善の無間に不善性生じ、不善の無間に善性復た生じ、「善と不善との」二〔性〕の無間に無記性生じ、下界の無間に中界生じ、中界の無間に妙界生じ、妙界の無間に、乃至、下界生じ、有漏の無間に無漏生じ、無漏の無間に有漏生じ、世間の無間に出世「間」生じ、出世〔間〕の無間に世間生ず。是くの如き相の識を種子の體と爲すは、正しき道理に應ずるに非ず。又心相續し長時に間斷し、久しきを經て流轉して息まず、是の故に轉識の能く種子を持することは道理に應ぜず。

〔問ふ〕云何んが業用不可得なるや。〔答へて〕謂く若し諸識同時に生起すること無くば、業用の

【六】瑜伽論には明了の體性となす。

の生ずる所なるが故なり。阿陀那識とは、謂く能く數數生をして相續せしめ、諸の根等を持して壞せざらしむるが故なり。又心と言ふは、謂く能く一切法の習氣を積集するが故なり。

云何んが阿賴耶識のあることを知るや。

若し此の識なくんば、執受と初と明了と種子と業と身受と無心定と命終と無ければ、皆理に應ぜざるべし。

此の伽他を釋することは、[五]攝決擇分に說くが如し。八種の相に由りて、阿賴耶識の決定して是れ有なることを證す。謂く若し阿賴耶識を離れては、依止執受すること不可得の故に。最初の生起不可得の故に。明了の生起不可得の故に。種子の體性不可得の故に。業用の體性不可得の故に。身受の體性不可得の故に。無心定に處すること不可得の故に。命終の識不可得の故なり。

〔問ふ〕云何んが依止執受すること不可得なるや。〔答ふ〕五因に由るが故なり。謂く阿賴耶識は先〔世の〕行〔業〕を因として感じ、眼等の轉識は現〔世の衆〕緣を因として發す。根と境と作意力との故に諸の轉識生ずと說けるが如し。乃至廣說す。是れを初因と名づく。又六識身に、善と惡との得べきあり。是れ第二の因なり。又六識身に、一類の異熟無記性に攝むるもの必ず得べからず。是れ第三の因なり。又六識身は、各別の〔所〕依〔の根〕に〔よりて〕轉ず、〔彼彼の〕所依止に隨ひて彼〔彼〕の識生ずる時、應に彼の〔生ずる〕識は所依止を執ずべし。餘には執受なしと〔云ふこと〕は理に應ぜざるべし。設ひ執受すと許すも、亦理に應ぜず。識を離るるを以ての故に。是れ第四の因なり。又所依止〔の根〕は、應に數數執受する〔ことあり、せざることありとの〕過失を成ずべし。所以は何ん。彼の眼識、一時には轉じ、一時には轉ぜざるに由る。餘識も亦爾なり。是れ第五の因なり。

【五】瑜伽論卷五十一初頁以下往見。

數とは、謂く諸行の一一差別するに於て、假立して數と爲す。

一一の差別とは、一に於て別なければ、二三等の數は理に應ぜざるが故なり。

和合とは、謂く因果の衆緣集會するに於て和合を假立す。

因果の衆緣集會するとは、且く識法の因果相續するに必ず衆緣を假るが如し。和合とは、謂く根壞せず境界現前して能く此の識を生ずべき作意正しく起る。是くの如く餘の一切に於ても、理の如く應に知るべし。

是くの如き等の心不相應行法は、唯だ分位差別に依りて建立するが故に、[三]當に知るべし皆是れ假有なり。謂く善・不善等の增と減との分位差別に於て、〔得の〕一種を建立し。心・心法の分位差別に於て、〔無想定と滅盡定と無想異熟との〕三種を建立し。住の分位差別に於て、〔命根の〕一種を建立し。相似の分位差別に於て、〔衆同分の〕一種を建立し。相の分位差別に於て、〔生と老と住と無常との〕四種を建立し。言說の分位差別に於て、〔名身と句身と文身との〕三種を建立し。不得の分位差別に於て、〔異生性の〕一種を建立し。因果の分位差別に於て、〔流轉と定異と乃至　和合等の如き〕餘の種〔類〕を建立す。因果とは、謂く一切の有爲法の能く餘を生するが故に因と名づけ、餘より生ずるが故に果と名づく。

[四]云何んが識蘊を建立するや。謂く心と意と識との差別なり。

心とは、謂く蘊と界と處との習氣の所熏〔處〕なり。一切の種子〔を攝藏する〕阿賴耶識をば、亦異熟識と名づけ、亦阿陀那識と名づく。能く諸の習氣を積習するを以ての故なり。

習氣とは、謂く現行の蘊等に由りて、彼の種子をして皆增益することを得せしむるなり。一切種子識とは、謂く能く蘊等の諸法を生ずる種子の積集する所なるが故なり。阿賴耶識とは、謂く能く諸法の種子を攝藏するが故に、又諸の有情、取りて我となすが故なり。異熟識とは、先業

【三】此の段は瑜伽論五十六初丁以下に廣說せり往見すべし。

【四】以上を以て色・受・想・行等の諸蘊を辨じ終り、以下識蘊を辨ず。識蘊を辨ずる中、初めに心卽ち阿賴耶識を辨ず。師子覺の釋は全く瑜伽論卷五十一以下決擇分の釋による。

異生性とは、謂く聖法を得ざるに於て異生性を假立す。
流轉とは、謂く因果相續して斷ぜざるに於て流轉を假立す。
　唯だ相續不斷に於て流轉を立つる所以は、一刹那に於て、或は間斷に於ては、此の〔流轉の〕言なきが故なり。
定異とは、謂く因果の種種差別するに於て定異を假立す。
　因果の種種差別とは、謂く可愛の果は妙行を因と爲し、不可愛の果は惡行を因と爲す。諸の是くの如き等の種種の因果の、展轉差別〔あるを云ふ〕。
相應とは、謂く因果の相稱するに於て相應を假立す。
　因果の相稱とは、復た異類と雖も因果の相順ずるも亦相稱と名づく。布施の富財を感ずる等の如きに由る。
勢速とは、謂く因果の迅疾に流轉するに於て勢速を假立す。
次第とは、謂く因果の一一流轉するに於て次第を假立する。
　因果の一一流轉するとは、謂く倶に轉ぜざる〔を云ふ〕。
時とは、謂く因果の相續流轉するに於て假立して時と爲す。
　何を以ての故に。因果相續して轉ずることあるに由るが故に。若しは此の因果の、已に生じ已に滅するに〔於て〕過去時を立て、此の〔因果の〕、若しは未だ生ぜざるに〔於て〕未來時を立て、已に生じて未だ滅せざるに〔於て〕現在時を立つ。
方とは、謂く即ち東西南北四維上下因果差別するに於て、假立して方と爲す。
　何を以ての故に。即ち十方に因果遍滿するに於て、假に方を說くが故なり。當に知るべし、此の中、唯だ色法所攝の因果のみを說く、無色の法は處所に遍布する功能なきが故なり。

の所顯なり、內の諸行の有爲の相は、生・老等の所顯の故なり。
老とは、謂く衆同分の諸行の相續變異性に於て假定して老と爲す。
住とは、謂く衆同分の諸行の相續不變壞の性に於て假立して住と爲す。
無常とは、謂く衆同分の諸行の相續變壞の性に於て假立して無常と〔爲す〕。
相續變壞とは、謂く壽を捨する時、當に知るべし此の中相續位に依りて生等を建立す、刹那には依らざるなり。
名身とは、謂く諸法の自性增言に於て名身を假立す。
自性增言とは、謂く天人の眼耳等の事を說く〔を云ふ〕。
句身とは、謂く諸法差別の增言に於て句身を假立す。
差別增言とは、謂く諸行は無常なり、一切の有情は當に死すべし、等の義を說く〔を云ふ〕。文身とは、謂く彼の二の所依の諸字に於て文身を假立す。
彼の二の所依の諸字とは、謂く自性と差別との增言の所依の諸字にして、㢤・壹・鄔等の如し。又自性差別及び此の二の言は、總じて一切を攝す。是くの如く、一切は此の三種の所詮に由りて表さる。詮表する所に由る。是の故に、此の三を建立して、名・句・文身と爲す。
此に文と言ふは、能く彼の二を彰はすが故に、此れ又、顯と名づく、能く義を顯はすが故なり。此れ復た字と名づく、異轉なきが故なり。
所以何んとならば、眼を眼と名づくる如し、此の名に異にして、外に更に、照了導等の異名ありて改轉す、彼に同じく此の想を顯はすに由るが故なり。㢤・壹等の字は、㢤・壹等の差別を離れて、外に更に差別ありて能く此の字を顯はすに非ず。故に異〔名〕の〔改〕轉なきを說いて名づけて字と爲す。異轉なしとは、謂く流變せざる〔を云ふ〕。

に現行せざる諸の心・心法、〔定の勢力に隨ひて〕暫時間滅す、〔此の滅に由るが故に〕、所依〔の身、前の心と分〕位差別あり。〔此の定の體なる〕能滅を以ての故に滅と名づく。

滅盡定とは、謂く已に無所有處の欲を離れ、有頂を超過し、暫息想の作意を先と爲すが故に、恒に行ぜざる諸の心・心法と及び恒に行ずる一分の心・心法の滅するに於て、滅盡定を假立す。

此の中、未だ上欲を離れずと言はざる所以は、有頂の欲を離るることを顯はさんが爲めなり。阿羅漢等も亦此の定を得するが故に。一分の恒に行ずる〔心・心法〕とは、謂く染汚の意の所攝なり。

無想異熟とは、謂く已に無想有情天に生じ、恒に行ぜざる心・心法の滅するに於て、無想異熟を假立す。

命根とは、謂く衆同分の先業所感〔の六處〕の住時決定に於て壽命を假立す。

衆同分とは、一生の中に於ける諸蘊の相續なり。住時決定とは、爾の所時を齊るなり。衆同分をして常に安住を得せしめ、或は百年を、或は千年を經るが等きは、業所引の功能の差別に由る。

衆同分とは、謂く是くの如き是くの如き有情の、種種の類〔に於ける〕と、自體の相似せるとに於て衆同分を假立す。

種種の類に於てとは、人。天等の種類差別に於けるなり。自體の相似せるに於てとは、一種類の性に於けるなり。

生とは、謂く衆同分の諸行の本無今有性に於て假立して生と爲す。

問ふ、外の諸色等にも亦生相あり。何が故に唯衆同分のみを擧ぐるや。答ふ、有情の相續に於て、有爲の相を建立するが爲めの故なり。所以何んとならば、外の諸色等の有爲の相は成・壞

卷の第二

本事分中、三法品第一之二

何等を名づけて心不相應行「法」と爲すや。謂く、得と無想定と滅盡定と無想異熟と命根と衆同分と生と老と住と無常と名身と句身と文身と異生性と流轉と定異と相應と勢速と次第と時と方と數と和合との等し。

是の如き心不相應行「法」、應に五門を以て差別を建立すべし。謂く、依處の故に自體の故に假立の故に作意の故に地の故なり。二の無心定は五門を具足し、無想天の異熟は作意を除き、餘は唯初の三のみなり。

得とは、謂く、善と不善と無記との法の若しは增し、若しは減ずるに於て、獲得成就を假立す。

善、不善、無記法は依處を顯はす。若しは增し、若しは減ずるとは、自體を顯はす。何を以ての故に、增すること有るに由るが故に說いて上品の信等を成就すると名づく。減ずること有るに由るが故に說いて下品の信等を成就すると名づく。獲得成就を假立するとは、假立することを顯はす。是くの如く、餘に於けるも、其の所應に隨ひて建立すること當に知るべし。

無想定とは、謂く已に遍淨の欲を離るるも、未だ上欲を離れず。出離想の作意を先となすが故に、恒に行ぜざる心、心法の滅するに於て無想定を假立す。

已に遍淨の欲を離るるとは、已に第三靜慮の貪を離る〔を云ふ〕。未だ上欲を離れずとは、未だ第四靜慮已上の貪を離れざる〔を云ふ〕。出離想の作意を先となすとは、解脫想の作意を前方便と爲すなり。恒に行ぜざる〔心・心法〕とは、轉識の所攝なり。滅とは、謂く定心所引の、恒

【一】以下心不相應行法を辨ず。

【二】瑜伽・顯揚・百法等の諸論には二十四の不相應行を數ふるも本論は不和合性を除きて二十三となれり。

て業と爲す。

信、慚等の如き〔善の心法〕は、能く不信及び無慚等〔の如き自の所治〕を斷じ、貪等の煩惱は、能く無貪〔等の如き、自〕の對治等の法を障るなり。謂く、彼を障礙して生ぜざらしむる〔を以ての〕故に。當に知るべし、忿等の諸の隨煩惱の能く慈等の各別の對治を障ふることも亦爾なり。

の性なる睡眠に依りて說く。

(六一)惡作とは、樂作と不作と、應作と不應作とに依る。是れ愚癡の分にして、心追悔するを以て體と爲し。或は善或は不善或は無記、或は時或は非時、或は應爾或は不應爾に、能く心の住するを障るを業と爲す。

樂作とは、樂欲を先と爲して善と惡との行を造る〔を云ふ〕。不樂作とは、他の勢力と及び諸の煩惱とに驅逼せらるるに由り、所作をして其の所應の如くあらしむる〔を云ふ〕。愚癡の分とは、隨煩惱の所攝なり。時とは、乃至未だ出離せざる〔時〕なり。非時とは、出離已後なり應爾とは、〔三性等の法を作せし處〕、是の處に於て〔悔を生ずるを云ひ〕、不應爾とは、〔是の處に〕あらざる〔所餘の〕處に於て〔悔を生ずるを云ふ〕。

尋とは、或は思に依り、或は慧に依りて尋求し、意言〔の境の於て〕、心をして麁に〔轉〕ぜしむるを體と爲す。

思に依り、慧に依りとは、推度と不推度との位に於て、其の(六二)次第の如く、〔諸境〕を追求するは意言に〔在り〕、〔尋の〕行相は分別なり。

伺とは、或は思に依り、或は慧に依りて伺察し、意言〔の境の於〕て、心をして細に〔轉〕ぜしむるを體と爲す。

思に依り、慧に依りとは、推度と不推度との位に於て、其の次第の如く、〔諸境を〕伺察するは意言に〔在り〕、〔伺の〕行相は分別なり。

是の如き二種は、安、不安に住する〔身心の分位が〕所依たるを業と爲す。

尋と、伺との二種の行相の相は、類するが故に麁細を以て差別を建立す。

(六三)復次に、諸の善の心法は、自の所治を斷ずるを業と爲し。煩惱と隨煩惱とは、自の能治を障るを以

【六〇】唯識述記五本(p. 48, b)。によれば、睡眠と惡作とは諸論に愚癡の一分と云へるも、それは、癡が起る位に增すが故に癡分と稱するも實には別體ありとせり。所以何んとならば、論に三性の心に通ずとあるが、若し癡の分にして別體なければ、善・無記心中には起り得ないからであり、瑜伽論五十五にも惡作と睡眠とは是れ世俗有なり、是れ愚癡の分なりと言へるを以て修とすべしと爲せり。

【六一】本論の各本には依第の字となるも恐らく次第の誤なるべし。

【六二】次に善染心所の共相の作業を說いて能所對治の關係を明す。

麁重散亂とは、我・我所の執と及び我慢品の麁重の力に依るが故に、善法を修する時、已に生起せる所有る諸の受に於て我我所と及び我慢とを起し、執受し間雜して相を取る。

謂く、我執等の麁重の力に由るが故に、已に生起せる樂等の受の中に於て、或は執じて我と爲し、或は我所と執じ、或は我慢を起す。此れに由り、修する所の善品永へに清淨ならず。執受とは、謂く〔最〕初の執著なり。間雜とは、此より已後、此の間雜に由りて諸心の相續す〔るを云ふ〕。相を取るとは、謂く即ち此の受に於て、數々異相を執るなり。

作意散亂とは、謂く餘乘と餘定とに於て、若しは〔所〕依たり若しは〔趣〕入する所有る(あらゆ)流散なり。

謂く、餘乘に依となり、或は餘定に〔趣〕入し、先に習ひし所を捨て散亂を發起す〔るを云ふ〕。

當に知るべし、〔散亂とは〕能く欲を離るるを障るを業と爲す。

謂く、隨煩惱性の散亂に依りて說く。

[五九]睡眠とは睡の因緣に依る。是れ愚癡の〔一〕分にして、心をして〔昧〕略ならしむるを體と爲し、或は善或は不善或は無記、或は時或は非時、或は應爾或は不應爾に、所作を越失する所依たるを業と爲す。

睡の因緣とは、〔先づ睡の因とは〕謂く羸瘦と疲倦と身分の沈重と闇相を思惟して諸の所作を捨つると、曾つて此を數々する時睡眠を串習するとなり。〔次に睡の緣とは、謂く〕或は他の呪術神力の所引なり、或は扇を動ずるに由りて涼風の吹くが等きなり。愚癡の分の言は、定に別せんが爲めなり。又善等の言は、此の睡が定んで癡の分にあらざることを顯はさんが爲めなり。時とは、謂く夜中の分なり。非時とは、謂く所餘の分なり。應爾とは、謂く〔佛の〕許〔し給ふ〕所の時なり。設ひ復た非時〔なりと雖も〕、或は病患に因り、或は調適の爲め、〔ならば皆應爾と名づく〕。不應爾とは、謂く所餘の分なり。所依を越失する依止たるを業と爲すとは、謂く隨煩惱

【五九】次に以下四の不定を辨ず。

爲し方便と善品とを修するを障るを業と爲す。

放逸とは、懈怠と及び貪と瞋と癡とに依止して善法を修せず、有漏の法に於て心、防護せざるを體と爲し、惡を增し善を損する所依たるを業と爲す。

忘念とは、煩惱と相應する念を體と爲し、散亂の所依たるを業と爲す。

不正知とは、煩惱と相應する慧を體と爲し此の慧に由るが故に、不正知の身と語と心との行を起し、毀犯の所依たるを業と爲す。

不正知の身と語と心との行とは、謂く往來等の事に於て正しく觀察せず、應作と不應作とを了知せざるを以つての故に毀犯する所多き〔を云ふ〕。

散亂とは、謂く貪と瞋と癡との〔一〕分にして、心流散するを體と爲す。此れに復た六種あり。謂く自性散亂と外散亂と內散亂と相散亂と麁重散亂と作意散亂となり。

自性散亂とは、謂く五識身なり。

彼の自性は、內の靜定に於て功能なきに由るが故なり。

外散亂とは、正しく善を修する時、五の妙欲に於て其の心の馳散する〔を云ふ〕。

謂く、方便して聞等の善法を修する時、彼の所緣を捨し、心は外に馳散して妙欲の中に處するなり。

內散亂とは、正しく善を修する時、〔惛〕沈と掉〔擧〕と味著とを〔起すを云ふ〕。

謂く、定を修する者、〔惛〕沈と掉〔擧〕と及び味著とを發起するが故に靜定を退失するなり。

相散亂とは、他を歸信せしめんが爲め、矯しく善を修することを示すなり。

謂く、他をして已に德あることを信ぜしめんと欲するが故に、此の相を現す。此の因緣に由り修する所の善法漸く更に退失す。

き〕敎授に任せざるに由るが故なり。

憍とは、或は少年にして無病長壽の相に依り、或は隨一の有漏榮利の事を得る貪の一分にして、心をして悅豫せしむるを體と爲し、一切の煩惱と及び隨煩惱との所依たるを業と爲す。

長壽の相とは、謂く不死の覺〔解〕を先と爲して此の相を分別し、此〔の相を分別する〕に由りて能く壽命の憍逸を生ず。隨一の有漏榮利の事とは、謂く族姓と色力と聰叡と財富と自在との等き事なり。悅豫とは、謂く染喜の差別なり。

害とは、瞋の一分にして、無哀と無悲と無愍とを體と爲し、有情を損惱するを業と爲す。

無慚とは、貪と瞋と癡との〔一〕分にして、諸の過惡に於て自ら恥ぢざるを體と爲し、一切の煩惱と及び隨煩惱との助伴たるを業と爲す。

無愧とは、貪と瞋と癡との〔一〕分にして、諸の過惡に於て他に羞ぢざるを體と爲す。業は無慚に說けるが如し。

惛沈とは、謂く愚癡の〔一〕分にして、心に堪任なきを體と爲し、毘鉢舍那を障るを業と爲す。

掉擧とは、謂く貪欲の〔一〕分にして隨つて淨相を念ずるに心寂靜ならざるを體と爲し、奢摩他を障るを業と爲す。

隨ひて淨相を念ずるとは、謂く往昔の貪欲に隨順せる戲笑等を追憶するが故に、心寂靜ならざる〔を云ふ〕。

不信とは、謂く愚癡の〔一〕分にして、諸の善法に於て心忍可せず、心淸淨ならず、心悕望せざるを體と爲し、懈怠の所依たるを業と爲す。

懈怠の所依とは、不信に由るが故に方便と加行と樂欲とあることなき〔を云ふ〕。

懈怠とは、謂く愚癡の〔一〕分にして、睡眠と倚臥とに著して樂と爲すに依り、心策勵せざるを體と

爲す。

此より後とは、謂く忿より後なり。不忍とは謂く不饒益の事を堪忍せざるを〔云ふ〕。

覆とは、所作の罪に於て、他〔者〕が正しく〔其の罪を〕擧ぐるとき、癡の一分が〔其の罪を〕隱藏するを體と爲し、悔〔惱〕して不安に住する所依たるを業と爲す。

法爾として所作の罪を覆藏する者は、心必ず憂悔す。此〔の憂悔〕に由りて、安隱にして住することを得ず。

惱とは、忿と恨との先に居する瞋の一分にして、心の戻るを體と爲し、高暴にて麁言する所依たるを業と爲し、非福を生起するを業と爲し、安隱に住せざるを業と爲す。

高暴にて麁言すとは、謂く語に凶踈を現じて人の心腑を切るなり。

嫉とは、利養に耽著し、他の榮ふるに耐へざる瞋の一分にして、心の妬むを體と爲し、心をして憂慼ならしめ、安隱に住せざらしむるを業と爲す。

慳とは、利養に耽著し、資生の具に於て〔起す〕貪の一分にして、心の悋なるを體と爲し、不捨の所依たるを業と爲す。

不捨とは、慳悋に由るを以ての故に、所用にあらざる具をも、亦恒に聚積する〔を云ふ〕。

誑とは、利養に耽著する貪と癡との一分にして、詐りて不實の功德を〔實の功德の如く〕現ずるを體と爲し、邪命の所依たるを業と爲す。

諂とは、利養に耽著する貪と癡との一分にして、矯しく方便を設け、〔己れの〕實の過惡を隱すを體と爲し、正しき敎授を障るを業と爲す。

矯しく方便を設け實の過惡を隱すとは、謂く餘の事に託して以つて餘の事を避くる〔を云ふ〕。

正しき敎授を障るとは、〔己〕が失を隱さんが爲め〕、實の如く犯せる所を發露せず、〔師友の正し

答ふ、五は是れ我見、十五は是れ我所見なり。

謂く、色は是れ我なりと計し。受・想・行・識も是れ我なりと計す。此の五は是れ我見にして、餘の十五は是れ我所見なり。

何に因りてか十五は是れ我所見なるや。我所に相應するが故に、我所に隨轉するが故に、我所に離れざるが故なり。

我所に相應するとは、謂く我は色を有す、乃至我は識を有す〔を云ふ〕。所以何んとならば、我は彼と相應し、彼を有すと說くに由るが故なり。我所に隨轉するとは、謂く色は我に屬す、乃至識は我に屬す〔るを云ふ〕。所以何んとならば、若し彼れ此の自在力に由りて轉じ、或は捨、し或は役すれば、世間は彼は是れ我所なりと說くが故なり。我所に離れずとは、謂く我は色の中に在り、乃至我は識の中に在る〔を云ふ〕。所以何んとならば、彼は實我は蘊の中に處在し、體に遍じて隨行すると計するが故なり。

問ふ、薩迦耶見は當に事に於て了と不了とを言ふべきや。

答ふ、當に事に於て決了することを得ずと言ふべし。繩の上に於て妄りに蛇の解を起すが如し。

事に於て決了せずとは、若し能く色等の實相を決了せば、必ず應に虛妄の我見を起さざるべし。譬へば人あり、欻爾に繩を見て遂に執じて蛇と爲すが如し。繩の相を了せずして、而も蛇の執を起す。

[五七]忿とは、現前の不饒益相に依止する瞋の一分にして、心の怒るを體と爲し、仗を執し憤發する所依たるを業と爲す。

當に知るべし、忿等は是れ假に建立す。瞋等を離れて外に別の性なきが故なり。[五七]

恨とは、此より已後は卽ち瞋の一分なり。怨を壞いて捨てざるを體と爲し、不忍の所依たるを業と

【五七】次に以下隨煩惱を辨ず。但し雜集論では煩惱のことをも、隨煩惱と云へり。そのことに就きては成唯識論六（p. 32, a）に辨じてあり。

【五八】隨煩惱の假實に關しては、唯識述記六末(p. 90, b)に「對法第一に當に知るべし忿等は皆是れ假有なりと云ふも、此れは總じて言ふと雖も各別の中に實と假とあり、又他の相に隨ひて總じて假有と名づけたり」と說き、雜集論の今の文を會通せり。而してその假實に關しては成唯識論六(p. 32, b)に、二十の隨煩惱の中、小の十（忿等）と大の三（妄念・放逸・不正知）とは定んで是れ假有、無慚と無愧と不信と懈怠とは是れ實有と爲し、而して掉擧と惛沈と散亂とは、有義は是れ假と爲し、護法正義は是れ實なりと判ぜり。詳しくは論、述記等往見せよ。

二とは、謂く邊執見と及び邪見となり。自相なるが故なり。一切とは、謂く五見なり。眷屬なるが故なり。

問ふ、薄伽梵は何の過失を觀ずるが故に、蘊と界と處とに於て、五種の相を以て我を計するを誹謗するや。

答ふ、彼の薩迦耶見を攝受する者を觀ずるに、五種の過失あるが故なり。謂く、異相の過失と無常の過失と不自在の過失と無身の過失と功用に由らずして解脱する過失となり。

異相の過失とは、謂く色蘊等は我の體性に非るべし、我の相に異なるを以ての故なり。無常の過失とは、謂く我は色蘊等の中に處するに非るべし、我は應に無常なるべきが故なり。所以は何んとならば、所依は無にして能依は有なりと云ふことは〔理に〕非るが故なり。不自在の過失とは、謂く我は色等を有すと觀ずべからず。我は應に不自在なるべきが故なり。所以何んとならば、我は色等に於て自在に轉ずること能はざるが故なり。無身の過失とは、謂く色等を離れて異處に我有るに非ず。我は應に身なかるべきが故なり。所以は何んとならば、身を離れて計する我は得べからざるが故なり。功用に由らずして解脱する過失とは、設ひ是くの如く〔邪に〕分別して、〔蘊に離れたる〕我相ありと〔執〕ずるも、亦理に應ぜざるべし。色等〔の蘊〕に無れたる我は、功用に由らずして解脱すべきが故なり。所以何んとならば、身縛若し無くんば我は應に任運に解脱すべきが故なり。

問ふ、五取蘊に於て二十句の薩迦耶見あり。謂く、色は是れ我なり、我は諸の色を有す、色は我に屬す、我は色の中に在りと計す。是くの如く、受・想・行・識は是れ我なり、我は識等を有す、識等は我に屬す、我は識等の中に在りと計す。此の諸の見に於て、幾ばくか是れ我見、幾ばくか我所見なるや。

因を謗るとは、謂く施與なく、愛樂なく、祠祀なく、妙行なく、惡行なき等〔を云ふ〕。果を謗るとは、謂く妙行と及び惡行との業の招く所の異熟等なし〔となすを云ふ〕。作用を謗るとは、謂く此の世間なく彼の世間もなく、母もなく父もなく、化生の有情もなし等〔と云ふ〕。異世往來の作用を誹謗するが故に、種子を任持する作用を誹謗するが故に、相續の作用を誹謗するが故なり。實事を壞すとは、謂く世間と阿羅漢となし等〔と云ふ〕。邪分別とは、謂く〔五見の中の四の見にあらざる諸の〕餘の〔邪なる〕一切の分別の倒見なり。善根を斷ずとは、謂く增上の邪見に由る一切の種〔類を云ふ〕には非ず。

問ふ、是の如き五見〔の中に於て〕幾ばくか增益の見、幾ばくか損減の見なるや。

答ふ、四は是れ增益の見なり。所知の境に於て、自性と及び差別とを增益するが故なり。諸の見の中に於て、第一と及び淸淨とを增益するが故なり。

謂く、五取蘊が所知の無我の境に於て、我と我所との自性を增益するは、是れ薩迦耶見なり。我の常と無常とを增益するは、是れ邊執見なり。諸の惡見に於て、第一を增益するは、是れ見取なり。卽ち此の見に於て、淸淨を增益するは、是れ戒禁取なり。

一は、多分是れ損減の見なり。

一は多分とは、邪分別は必ずしも損減ならざるに由るが故なり。

問ふ、前〔際〕と後際とを計する所有る諸見は、彼れ此の五〔見の中〕に於て、幾ばくの見の所攝なるぞ。

答ふ、或は二、或は一切なり。

問ふ、[五六]不可記の事に於ける所有る諸見、彼れ此の五〔見〕に於て幾ばくの見の所攝なるや。

答ふ、或は二、或は一切なり。

【五六】同學鈔六之五に「命與身一等我見」と云ふ論題があり、不可記事の自性體を我見と爲すべきや、或は師子覺の釋の如く邊見と邪見との二と爲すべきやに就きて問答せり、又、瑜伽論六十四、俱舍論十九等には不可記事に關して些細に別釋せり、往見すべし。

業と爲す。

邪決定とは、謂く顚倒の智なり。疑とは猶豫なり。雜染の生起するとは、謂く貪等の煩惱の現行なり。彼の所依とは、謂く愚癡に由りて諸の煩惱を起す〔が故なり〕。

疑とは、諦に於て猶豫するを體と爲し、善品の生ぜざる依止たるを業と爲す。

諦に於て於て猶豫するとは亦實於て猶豫するをも攝む。其の所應の如く滅道〔二〕諦に攝むるが故なり。善品生ぜずとは、謂く決せざると、造修せざるとに由るが故なり。

薩迦耶見とは、五取蘊に於て等しく隨ひて觀じ、我と及び我所とを執する諸の忍と欲と覺と觀と見とを體と爲し、一切の見趣の所依たるを業と爲す。

邊執見とは、五取蘊に於て、等しく隨ひて觀じ、若しは常若しは斷なりと執する諸の忍と欲と覺と觀と見とを體と爲し、處中の行出離を障ふるを以つて業と爲す。

處中の行とは、謂く斷と常とを離れたる緣起〔を觀ずる〕正智なり。

見取とは、謂く諸見と及び見の所依たる五取蘊等に於て隨ひて觀じ、執じて最と爲し勝と爲し上と爲し妙と爲す諸の忍と欲と覺と觀と見とを體と爲し、不正見を執ずる所依たるを業と爲す。

戒禁取とは、諸の戒禁と及び戒禁の所依たる五取蘊等に於て隨ひて觀じ、執じて清淨と爲し、解脫と爲し、出離と爲す、諸の忍と欲と覺と觀と見とを體と爲し、勞して果なき所依たるを業と爲す。

戒禁とは、謂く惡見を先と爲す。勞して果なしとは、此れに由りて出離を得ること能はざるが故なり。

邪見とは、因を謗り果を謗り、或は作用を謗り、或は實事を壞し、或は邪に分別する諸の忍と欲と覺と觀と見とを體と爲し、善根を斷ずるを業と爲し、及び不善根の堅固なる所依たるを業と爲し、不善の生起するを業と爲し、善の生起せざるを業と爲す。

防護するを體と爲し、一切の世と出世との福を成滿するを業と爲す。
謂く、正勤等を先と爲すに由りて能く一切の善法を修し及び有漏を防ぐ、是の故に此の四法に依りて不放逸の[五一]體を假立す。有漏法とは、謂く諸の漏と及び漏の處所と〔漏の〕境界となり。
捨とは、正勤と無貪と〔無〕瞋と〔無〕癡とに依止し、雜染に住すると相違し、心平等性に、心正直性に、心無功用住性に〔住せしむるを〕體と爲し、雜染を容れざる所依たるを業と爲す。
心平等性等とは、謂く初と中と後との位を以て捨の差別を辯ず。所以何んとならば、捨は心と相應するに由りて沈沒等の不平等の性を離るるが故に最初に心平等性を證得す。心平等〔性に住する〕に由りて加行を遠離し、自然に相續するが故に次に復た心正直性を證得す。心正直〔性に住する〕に由り、諸の雜染〔法〕に於て怯慮なきが故に最後に心無功用住性を證得す。
不害とは、無瞋善根の一分なり。心悲愍するを體と爲し、損惱せざるを業と爲す。
當に知るべし、不害は無瞋と離れざるが故に亦是れ假なるべし。
[五二]貪とは、三界の愛を體と爲し、衆苦を生ずるを業と爲す。[五三]
衆苦を生ずるとは、謂く愛の力に由りて五取蘊生ずるが故なり。
瞋とは、諸の有情の苦と及び[五四]苦具とに於て、心心憎恚するを體と爲し、不安隱に住する惡行の所依たるを業と爲す。
不安隱に住すとは、謂く心憎恚を懷き、多く苦に住するが故なり。
慢とは、薩迦耶見に依止して心高擧するを體と爲し、不敬と苦生との所依たるを業と爲す。
不敬とは、謂く師長と及び有德との所に於て、而も憍傲を生ずる〔を云ふ〕。苦生とは、謂く後有を生ずるが故なり。
[五五]無明とは、謂く三界の無智を體と爲し、諸法の中に於て、邪決定と疑と雜染の生起する所依たるを

【五一】不放逸の體に就き、瑜伽論記卷二十四上 (p. 15, b) によるに、景・泰兩師の異說をあげ、景師は今論上の文に三善根と精進とを以て不放逸となせる文に依りて念・慧二法に依りて不放逸を立て、泰師は念・正智の二法を以て不放逸を立ててゐる。

【五二】次に以下十煩惱を辨ず。

【五三】瑜伽論五十八、顯揚論一、五蘊論等に皆貪の行相を廣說す。

【五四】唯識述記六末 (p. 3, a) に雜集の苦具に關して、有無漏を通じて取ると有漏のみを取るとの兩義あり、而して前解を正義となせり。

【五五】無明の相は瑜伽論十、緣起經、雜集論一、四、顯揚論一等に解す、往見。

[四七]信とは、有體と有德と有能とに於て忍可し、〔心を〕清淨ならしめ、〔修斷を〕希望するを體と爲し、〔善を〕樂欲する所依たるを業と爲す。[四八]

謂く、實有の體に於ては忍可の行信を起し、實有の德に於ては清淨の行信を起し、實有の能に於ては希望の行信を起す。謂く、我に力あり能く得し能く成ず。

慚とは、諸の過惡に於て、自ら羞づるを體と爲し惡行止息の所依たるを業と爲す。

愧とは、諸の過惡に於て、他に羞づるを體と爲す。業は慚に於て說けるが如し。

無貪とは、有と有具とに於て、著することなきを體と爲し、惡行不轉の所依たるを業と爲す。

無瞋とは、諸の有情の苦と及び苦具とに於て、恚なきを體と爲し、惡行不轉の所依たるを、業と爲す。

[四九]無癡とは、報と敎と證と智とに由りて決擇するを體と爲し、惡行不縛の所依たるを業と爲す。

慚等は了し易きが故に再び釋せず。報と敎と證と智と〔云ふ〕は謂く生得と聞と思と修所生と慧なり。次での如く應に知るべし。決擇とは、謂く慧の勇勤と俱なるなり。

[五〇]勤とは、被甲と方便と無下と無退と無足とに心勇なるを體と爲し、善品を成滿するを業と爲す。

謂く、經に說けるが如し。有勢と有勤と有勇と堅猛と善軛を捨せざるとを、其の次第の如く應に被甲心勇等の諸句に配釋すべし。善品を滿すとは、謂く能く隨つて初めて入る所の根本靜慮を圓滿するを〔云ひ〕、善品を成ずるとは、謂く卽ち此に於て極めて善く修治する〔を云ふ〕。

安とは、身心の麁重を止息し、身心をして調暢ならしむるを體と爲し、一切の障礙を除遣するを業と爲す。

一切の障礙を除遣すとは、謂く此の勢力に由りて依止轉ずるが故なり。

不放逸とは、正勤と無貪と〔無〕瞋と〔無〕癡とに依止して諸の善法を修し、心に於て、諸の有漏法を

【四七】　以下善の心所に就きて辨ず。

【四八】　實・德・能に於て忍、希・欲することに關しては　揚論卷一、五蘊論にも出づるが成唯識論卷六も（p. 1, c）以下に詳細に論じてあり、又述記、了義燈、等にも些細に辨ず。猶ほ同學鈔には「且就有體」の論題ありて今文の研究をなせり。

【四九】　成唯識論卷六（p. 4, b）並に述記六本、倫記十五上等には、對法論の上の文により て對法論は無癡無體說にして其の體は別境の慧であり、隨つて其の所說は俱舍・雜心等に同ずるものであるとし、之に對して成唯識論は無癡にも亦別體ありと云ふ有體說に立つてゐる。同學鈔に「且約彰顯非實理」の論題あり。

【五〇】　勤の五種差別の相は、瑜伽論卷八十九、顯揚論卷一、成唯識論卷六等にも出づ比較すべし。

所緣の境に於て心を持すとは、謂く卽ち此の境に於て數數、心を引くなり。是の故に心定を得する者を作意を得すと名づく。[四四]

觸とは、三和合に依りて[四五]諸根の變異に分別するを體と爲し、受の所依たるを業と爲す。

謂く、識の生ずる時、所依の諸根隨順して苦樂等の受を生起する、變異の行相なり。此の行相に隨ひ分別して觸生ず。

[四六]欲とは、所樂の事に於て、彼彼に所作を引發し、希望するを體と爲し。正勤の所依たるを業と爲す。

彼彼に所作を引發し希望するとは、謂く見聞等の一切の作用を引攝せんと欲するが故なり。

勝解とは、決定の事に於て、決定する所に隨ひて、印持するを體と爲し、引轉すべからざるを業と爲す。

決定する所に隨ひて印持するとは、謂く是の事必ず爾なり餘に非ずと決了勝解する〔を云ふ〕。勝解に由るが故に所有の勝緣も引轉すること能はず。

念とは、串習の事に於て、心をして明記し忘れざらしむるを體と爲し、散亂ならざるを業と爲す。

串習の事とは、謂く先に受くるところなり。亂ならざるを業と爲すとは、念に由りて境に於て明らかに記憶するが故に、心をして散ぜざらしむるなり。

三摩地とは、所觀の事に於て、心をして專一ならしむるを體と爲し、智の所依止たるを業と爲す。

心をして專一ならしむるとは、一境界に於て、心をして散ぜざらしむるが故なり。智の所依たりとは、心靜定に處し、知ること實の如くなるが故なり。

慧とは、所觀の事に於て、法を〔簡〕擇するを體と爲し、疑を斷ずるを業と爲す。

疑を斷ずるとは、謂く慧が法を〔簡〕擇するに由りて決定することを得るが故なり。

【四四】雜集論に於ける上の作意の解釋は定の心所と區別することが出來ない、若し上の如く釋するならば散心には作意は存しないわけであり、隨つて作意を遍行となし得ないとして成唯識論卷三(p. 2, b)に破を被つてゐる。隨つて此處は、述記、了義燈、同學鈔等にも問題となつてゐる。

【四五】成唯識論卷三(p. 1, b)には今の文を引用して「根之變異」と云ひ、述記三末(p. 5, b)には諸の字は依の字となつてゐる。諸とあるは誤也、

【四六】次に別境の心所に就きて述ぶ。

想を除きたる餘の心所有法と、幷に心不相應行とを、總じて行蘊と名づく。

受と想とを除きたる一切の心所有法と、及び心不相應行とは、皆行蘊の相なりと雖も、然も思は最勝にして一切行の與めに導首となる、是の故に遍に說けり。此の義を顯さんが爲の故に、思に由りて善法等を造ると說けり。善とは、謂く當に信等を說くべし。雜染とは、謂く當に貪等の根本煩惱と及び貪等の煩惱の分と少分の煩惱とを說くべし。分位差別とは、謂く思の發する所の種種の行爲に於て假設する心不相應行なり。

問[四二]ふ、何等をか餘の心所有法と名づくるや。

答ふ、所謂る作意と觸と欲と勝解と念と三摩地と慧と。信と慚と愧と無貪と無瞋と無癡と勤と安と不放逸と捨と不害と。貪と瞋と慢と無明と疑と薩迦耶見と邊執見と見取〔見〕と戒禁取〔見〕と邪見と忿と恨と覆と惱と嫉と慳と誑と諂と憍と害と無慚と無愧と惛沈と掉擧と不信と懈怠と放逸と忘念と不正知と散亂と睡眠と惡作と尋と伺となり。

是くの如き思等の五十五法は、若しは遍行、若しは別境、若しは善、若しは煩惱、若しは隨煩惱、若しは不定にして、其の次第の如く五と五と十一と十と二十と四となることは、應に知るべし。又此の諸の心所有法の、若しは相若しは業〔に就いて〕、當に廣く分別すべし。

思[四三]とは、心に於て造作せしむる意業を體と爲し、善と不善と無記との品の中に於て、心を役するを以て業と爲す。

心に於て造作せしむる意業を體と爲すとは、此れ其の相を辯ず。善等の品の中に於て心を役するを業と爲すとは、此れ其の業を辯ず。所作の善等の法の中に於て、心を發起するを以ての故なり。

作意とは、心を發動するを體と爲し、所緣の境に於て心を持するを業と爲す。

【四二】　以下、受・想・思・所攝以外の行蘊所攝の心所を說く、作意と觸とは、前說の受・想・思の三と合して五遍行と稱せらるるものなり。欲より慧に至る五は所謂五別境の心所なり。信より不害に至る十一は所謂善の心所なり。貪より邪見に至る十は十煩惱の心所にして、百法論、五蘊論、成唯識論等では薩迦耶見以下の五見を合して一の惡見、或は不正見として全體を六煩惱としてゐる。忿より散亂に至る二十は所謂隨煩惱なり。最後の四は不定なり。心所の廢立に關しては、成唯識論卷五・六・七等を參見せよ、又心所の數も百法・五蘊・唯識等と、瑜伽と相違し、雜集は大體には百法・唯識に同じ、ただ惡見を五惡に開きたるところが相違す。

【四三】　以下行蘊所攝の六位の心所に關する相と業とを分別す、先づ遍行の心所に就きて述ぶ。

る五欲の愛と相應する受なり。依出離受とは、謂く此の愛と相應せざる受なり。

是くの如く建立することは四種の因に由りてなり。謂く、所依の故に、自體の故に、集所依の故に、雜染と清淨との故に。色の所依を集めて身受を建立し、無色の所依を集めて心受を建立す。[三九] 雜染に由るが故に有味等を建立し、清淨に由るが故に、無味等を建立す。此の愛と相應せずとは、謂く離繫と及び離繫に隨順するものとなり。

[四〇]云何んが想蘊を建立するや。謂く、六想身にして眼觸所生の想と、乃至、意觸所生の想となり。此の想に由るが故に、或は有相〔想〕を了し、或は無相〔想〕を了し、或は小〔想〕と大〔想〕と無量〔想〕とを了し。或は少として所有なき無所有處〔想〕を了す。

有相の想とは、謂く、不善の言說〔想〕と無相界の定〔想〕と及び有頂の定想とを除きたる所餘の想なり。無相想とは、謂く前に除きたる所の想なり。小想とは、謂く能く欲界の想を了する〔を云ふ〕。大想とは、謂く能く色界の想を了する〔を云ふ〕。無量想とは、謂く能く空無邊處〔想〕と識無邊處想とを了する〔を云ふ〕。無所有處想とは、謂く能く無所有處想を了する〔を云ふ〕。

不善の言說想とは、謂く未だ言語を學ばざるが故に、色に於て想を起すと雖も、而も此れを名づけて色となすことを了する能はざるが故に、無相想と名づく。無相界の定想とは、謂く色等の一切の相を離れたる無相涅槃の想なるが故に無相想と名づく。有頂の定想とは、謂く彼の想明利ならず、境に於て種種の相を圖くこと能はざるが故に無相想と名づく。小とは、謂く欲界下劣なるが故に。大とは、謂く色界增上なるが故に。無量とは、謂く空無邊處と識無邊處とは邊際なきが故に。是の故に彼を緣ずる諸の想を亦小・大・無量と名づく。

[四一]云何んが行蘊を建立するや。謂く、六思身にして眼觸所生の思と、乃至意觸所生の思となり。此の思に由るが故に、諸の善を思作し、雜染を思作し、分位差別を思作す。又卽ち此の思と、受及び

【三九】 成唯識論卷五(p. 21'b)には五識と相應するを說いて身受と名づけ、意識と相應するを心受と稱してゐるのであつて、今の釋と異同がある。

【四〇】 次に想蘊の建立を明す。

【四一】 次に行蘊の建立を明す。

若しは不可意、若しは倶相違、若しは倶生、若しは和合、若しは變異なり。

此の味を建立することは、應に香に說けるが如し。

所觸の一分とは、四大種所造の身根の所取の義なり。謂く、滑と澁と輕と重と軟と緩と急と冷と飢と渴と飽と力と劣と悶と痒と黏と病と老と死と疲と息と勇となり。

此の所觸の一分は、八因に由りて建立す。謂く、相の故に、摩の故に、稱の故に、觸の故に、執の故に、雜の故に、界不平等の故に、界平等の故なり。水と風と雜るが故に冷なり。地と水と雜るが故に黏なり、界平等なるが故に息と力と勇となり。勇とは、畏なきなり。飽は二種に由る。界不平等なるが故に飢等の餘の觸あり。

〔三七〕法處所攝色とは、略して五種あり。謂く、極略色と極迥色と受所引色と遍計所起色と自在所生色となり。

極略色とは、謂く極微の色なり。極迥色とは、謂く卽ち此れ、餘の礙觸を離れたる色なり。受所引色とは、謂く無表色なり。遍計所起色とは、謂く影像の色なり。自在所生色とは、謂く解脫靜慮所行の境色なり。

〔三八〕云何んが受蘊を建立するや。謂く、六受身にして眼觸所生の受と乃至、意觸所生の受となり。若しは樂、若しは苦、若しは不苦不樂あり。復た樂身受と苦身受と不苦不樂身受と、樂心受と苦心受と不苦不樂心受とあり。復た樂有味受と苦有味受と不苦不樂不味受と、樂無味受と苦無味受と不苦不樂無味受とあり。復た樂依耽嗜受と苦依耽嗜受と不苦不樂依耽嗜受と樂依出離受と苦依出離受と不苦不樂依出離受とあり。

身受とは、謂く五識と相應する受なり。心受とは、謂く意識と相應する受なり。有味受とは、謂く自體愛と相應する受なり。無味受とは、謂く此の愛と相應せざる受なり。依耽嗜受とは、謂く妙な

【三七】法處色に關しては義林章五末に法處色義林ありて、一には開合廢立、二には辨體性、三には釋名字、四には分別假實、五には顯質有無の五門を以て考察し、百法論、五蘊論、瑜伽論、顯揚論、雜集論等の所說を比較して研究がしてある。

【三八】次に受蘊の建立を明す。

と、長と短と方と圓と、麁と細と高と下と、若しは正と不正と、光と影と明と闇と、雲と煙と塵と霧と、迥色と表色と空一顯色となり。此に復た三種あり。謂く、妙と不妙と俱相違との色なり。

此の靑等の二十五色は、建立すること、六種の因に由る。謂く、相の故に、安立の故に、損益の故に、所依と作るが故に、作相の故に、莊嚴の故に。其の次第の如く、四と十と八と一と一と一となり。迥色とは、謂く餘の礙觸を離れたる方所に得すべきなり。空一顯色とは、謂く上に見る所の靑等の顯色なり。

聲とは、四大種所造の耳根の所取の義なり。若しは可意、若しは不可意、若しは俱相違、若しは因受の大種、若しは因不受の大種、若しは因俱の大種　若しは世の所共成、若しは成所引、若しは遍計所執、若しは聖言の所攝、若しは非聖言の所攝なり。

是の如き十一種の聲は、五種の因に由りて建立せらる。謂く、相の故に、損益の故に、因差別の故に、說差別の故に、言差別の故なり。相とは、謂く耳根の所取の義なり。說差別とは、謂く世所共成等の三なり。餘は其の所應の如し。因受の大種とは、謂く語等の聲なり。因不受の大種とは、謂く樹等の聲なり。因俱とは、謂く手鼓等の聲なり。世所共成とは、謂く世俗の語の所攝なり。成所引とは、謂く諸の聖〔者〕の所說なり。遍計所執とは、謂く外道の所說なり。

聖と非聖との言の所攝とは、謂く見等に依る八種の言說なり。

香とは、四大種所造の鼻根が所取の義なり。謂く、好香と惡香と平等香と俱生香と和合香と變異香となり。

當に知るべし、此の香は三因もて建立す。謂く、相の故に、損益の故に、差別の故なり。俱生香とは、旃彈那等なり。和合香とは、謂く和する香等なり。變異香とは、謂く熟果等なり。

味とは、四大種所造の舌根が所取の義なり。謂く、苦と酢と甘と辛と鹹と淡となり。若しは可意、

頼耶識に積集する、是れ眼識界の相なり。眼識界の如く、耳〔識界〕と鼻〔識界〕と舌〔識界〕と身〔識界〕と意識界との相も亦爾なり。

〔三四〕問ふ、處は何の相ぞや。

答ふ、界の如く應に知るべし。其の所應に隨ふ。

謂く眼は當に色を見るべし、及び此の種子等は義に隨ひて應に說くべし。

〔三五〕云何んが色蘊を建立するや。〔三六〕謂く、諸の所有る色の若しは四大種、及び四大種所造なり。所造とは、謂く四大種を以て、生〔因〕と依〔因〕と立〔因〕と持〔因〕と養因と爲すの義なり。即ち五因に依りて說いて名づけて造と爲す、生因とは即ち是れ起因なり。謂く、〔四〕大種を離れては色起らざるが故なり。依因とは即ち是れ轉因なり。謂く、〔四〕大種を捨てては諸の所造の色功能として別處に據ることあるなきが故なり。立因とは即ち隨轉の因なり。〔四〕大の變異に由りて、能依の造色も隨つて變異するが故なり。持因とは、即ち是れ住因なり。謂く、〔四〕大種に由りて諸の所造の色、相似し、相續し、生じ、持して、絕えざらしむるが故なり。養因とは、即ち是れ長因なり。謂く、〔四〕大種が彼の造色を養ひ增長せしむるに由るが故なり。

四大種とは、謂く地〔界〕と水〔界〕と火〔界〕と風界となり。地界とは堅勁の性なり。水界とは流濕の性なり。火界とは溫熱の性なり。風界とは輕動の性なり。所造の色とは、謂く眼等の五根と、色と聲と香と味と所觸の一分と、及び法處所攝の色となり。眼根とは、謂く四大種の所造にして、眼識所依の清淨の色を體と爲す。耳根とは、謂く四大種の所造にして、耳識所依の清淨の色を體と爲す。鼻根とは、謂く四大種の所造にして、鼻識所依の清淨の色を體と藏す。舌根とは、謂く四大種の所造にして、舌識の所依の清淨の色を體と爲す。身根とは、謂く四大種の所造にして、身識所依の清淨の色を體と爲す。色とは四大種の所造にして、眼根の所行の義なり。謂く、靑と黃と赤と白

〔三四〕別して處を明す。

〔三五〕五蘊の建立に就て明し第一に色蘊の建立を明す。

〔三六〕義林章三本に「大種造色章」あり往見すべし、

中に於て、心を驅役するが故なり。

又種種の苦樂等の位に於て、心を驅役するが故なり。

〔二八〕問ふ、識蘊は何の相ぞや。

答ふ、了別の相是れ識の相なり、此の識に由るが故に、色・聲・香・味・觸・法等の種種の境界を了別す。

〔二九〕問ふ、眼界は何の相ぞや。

答ふ、謂く、眼が曾と現とに色を見、及び此の種子の異熟阿賴耶識〔中〕に積集する、是れ眼界の相なり。〔三〇〕

眼の曾見の色とは、謂く能く過去の識の受用を持する義にして、以て界の性を顯はす。現見の色とは、謂く能く現在の識の受用を持する義にして、以て界の性を顯はす。及び此の種子の積集せる異熟阿賴耶識とは、謂く眼「根」の種子が或は唯だ積集して、當來の眼根を引〔起せ〕んが爲の故に。或は已に成熟手現在の眼根を生ぜんがための故に。此の二種を眼界と名づくることは、眼の生因なるが故なり。

眼界の相の如く、耳〔界〕と鼻〔界〕と舌〔界〕と身〔界〕と意界との相も亦爾なり。

〔三一〕問ふ、色界は何の相ぞや。

答ふ、〔三二〕謂く色は眼の曾と現との見、及び眼界が此に於て增上する是れ色界の相なり。

眼界が此に於て增上するとは、謂く色根の增上力に依りて、外境生ずるが故なり。

色界の相の如く、聲〔界〕と香〔界〕と味〔界〕と觸〔界〕と法界との相も亦爾なり。

〔三三〕問ふ、眼識界は何の相ぞや。

答ふ、謂く、〔眼識が〕眼〔根〕を〔所〕依として色を緣じ、色に似て了別す。及び此の種子の、異熟阿

【二八】次に識蘊を明す。

【二九】別して界を明す中初に眼界等六根を明す。

【三〇】根の體に關する唯識學上の解釋は次の如き種類となる。

1、四大所造の淨色—瑜伽・雜集等處處の釋及安慧護法假說。
2、五識の見分の種子 ┐ 唯識二十論及び陳那の說
3、所緣の相分の種子 ┘
4、五識の業種—陳那に對する護法の救釋。
5、現行と種子—雜集の今の文、瑜伽決擇分、安慧、護法の實義。

以上述記二本(p. 13. a)以下往見すべし。

【三一】次に色界等の六境を明す。

【三二】麗本は諸色と作るも明本には謂色となす。明本を以つて可とすべし。

【三三】次に眼識等の六識界を明す。

觸對變壞とは、謂く手足乃至蚊蛇に由りて觸對せらるる時、卽便ち變壞す〔るを云ふ〕。方所示現とは、謂く方所に由りて相の示現すべき、此くの如き此くの如きの色、是くの如き是くの如きの色の或は定心に由り、或は不定〔心〕により、尋思相應して種種に搆畫する〔を云ふ〕。

方所とは、謂く現前の處所なり。此くの如き此くの如き色とは、謂く骨鎖等の所知の事と同類の影像なり。是くの如き是くの如き色とは、謂く形の差別を顯す。種種に搆畫すとは、謂く相の如くにして想ふ。

問〔二四〕ふ、受蘊は何の相ぞや。

答ふ、領納の相是れ受の相なり。謂く、受に由るが故に種種の淨不淨業の所得の異熟を領納す。

若し清淨の業ならば樂の異熟を受け、不清淨の業ならば苦の異熟を受け、淨不淨の業ならば不苦不樂の異熟を受くべし。所以何んとならば、淨不淨業に由りて異熟の阿賴耶識を感得し、恒に捨受と相應す。唯だ此の捨受のみ是れ實に異熟の體なり。苦樂の兩受は、異熟從り生ずるが故に、假に說いて異熟と名づく。

問〔二五〕ふ、想蘊は何の相ぞや。

答ふ、搆了の相是れ想の相なり。此の想に由るが故に種種諸法の像類を搆畫し、見聞覺知する所の義に隨ひて、諸の言說を起す。

見聞覺知の義とは〔二六〕、眼〔根〕の所受是れ見の義なり。耳〔根〕の所受是れ聞の義なり。自然に應に是くの如く是くの如くなるべしと思搆す是れ覺の義なり。〔鼻等の〕自ら內に受る所、是れ知の義なり。諸の言說とは、謂く詮辯の義なり。

問〔二七〕ふ、行蘊は何の相ぞや。

答ふ、造作の相是れ行の相なり。此の行に由るが故に心をして造作せしむ。謂く、善・惡・無記品の

【二四】次に受蘊を明し。

【二五】次に想蘊を明す。

【二六】見聞覺知の四種言說は唯識學上の問題を構成するところのものであつて、同學鈔八之一に見言說體、聞言說體、聞聖言量等の論題となつてゐる。第一の見言說體を一例として說くと、問題は見の體を、瑜伽・雜集の如く眼根と取るべきや、眼識と取るべきやを論じてゐるのである。瑜伽・雜集は眼根と稱してゐるが、智度論では眼識となつてゐる。のみならず、見は理量でなければならぬ、然るに眼識を體とすればよいが、眼根は現量でないから根を體とすることが出來ぬと難じてゐる。而して結極慈恩の無均稱經疏に根と識心との所和合のところを以て見等と名づくと稱してゐるのを盡理の說と爲し、而して根には生因、依處、無動、等の五義を具足してその義が强勝なるが故に强きに從つて根と稱したのだと成じてゐる。聞等に就いては往見すべし。

【二七】次に行蘊を明す。

六識なり。能持とは、謂く六根と六境との、能く六識を持するなり。所依と所縁との故なり。過・現の六識、能く受用を持するとは、自相を捨てざるが故なり。當に知るべし、十八は能持の義を以ての故に說いて界と名づく。

問[二]ふ、何に因つてか處は唯だ十二なるや。

答ふ、唯だ身と及び具とは、能く未來の六行の受用の與(ため)に生長の門と爲るが故なり。謂く、過現の六行の受用の相の、眼等の爲めに持せらるる如く、未來の六行の受用の相の、根と及び義とを以て生長の門と爲ることも亦爾なり。言ふ所の唯とは、謂く唯、根と境とに依りて十二處を立て、六種の受用の相なる識には依らざることを顯す。

問[三]ふ。云何んが取蘊と名づくるや。

答ふ。取と合とを以ての故に名づけて取蘊と爲す。取とは、謂く諸蘊の中の所有る欲貪なり。何が故に欲貪を說いて名づけて取と爲すや。謂く、未來と現在との諸蘊に於て、能く引いて捨てざるが故なり。未來を希求し、現在に染著せる欲貪を取と名づく。

欲とは希求の相なり。貪とは染著の相なり。欲が未來の自體を希求するを方便と爲すに由るが故に當蘊を引取し、起りて現前せしむ。貪が現在の自體に染著するを方便と爲すに由るが故に現蘊を執取して、捨離せしめざらしむ。此の故に此の二を說いて名づけて取と爲す。

問ふ、何が故に界と處とに取の法ありと說くや。

答ふ、應に蘊の如く說くべし。

當に知るべし、界と處とが取と合するが故に有取の法と名づく。

問[三]ふ、色蘊は何の相ぞや。

答ふ、變現の相是れ色の相なり。此れに二種あり。一には觸對變壞なり。二には方所示現なり。

【二】次に處に就きて。

【三】別して蘊を明す中初に名を釋す。

【三】次に色蘊を明し。

り。善く毘鉢舍那に順ひ增長するとは、無量の門を以て、一切所知の境界を觀察し、速に正慧をして究竟して滿〔足〕せしむるが故なり。論議決擇稱讚利益とは、是の如き諸の思擇の處に於て、善く通達するに由るが故に、一切の問答自在を成就し、諸の異論に於て畏るる所なきを得るなり。

[一七]問ふ、蘊と界と處とに各々幾ばくの種ありや。[一八]

答ふ、蘊に五種あり。謂く、色蘊と受蘊と想蘊と行蘊と識蘊となり。界に十八あり。謂く、眼界と色界と眼識界と、耳界と聲界と耳識界と、鼻界と香界と鼻識界と、舌界と味界と舌識界と、身界と觸界と身識界と、意界と法界と意識界となり。處に十二あり。謂く、眼處と色處と、耳處と聲處と、鼻處と香處と、舌處と味處と、身處と觸處と、意處と法處となり。

[一九]問ふ、何に因つてか蘊は唯五あるや。

答ふ、五種の我事を顯はさんが爲の故なり。謂く、身具我事と受用我事と言說我事と造作一切法非法我事と彼の所依止の我の自體の事とを顯はさんが爲なり。

此の五の中に於て、前の四は是れ我所の事にして、第五は即ち我相の事なり。身具と言ふは、謂く內外の色蘊の所攝なり。受等の諸蘊の受用等の義は、相〔門分別〕の中に〔於て〕當に說くべし。彼の所依止の我の自體の事とは、謂く識蘊は是れ身具等の所依にして、我相の事の義なり。所以何んとならば、世間の有情は、多く識蘊に於て計執して我と爲し、餘蘊に於て計して我所を執ず。

[二〇]問ふ、何に因つてか界は唯だ十八なるや。

答ふ、身具等の能く過・現の六行と受用とを持するに性となるに由るが故なり。

身とは、謂く眼等の六根なり。具とは謂く色等の六境なり。過・現の六行と受用ととは、謂く

【一七】總じて三科の法を擧ぐ。
【一八】蘊處界三科の法門に關しては、義林章五本に「大乘蘊界處義」なる別章ありて詳述しあり、往見すべし。
【一九】初に蘊に就きて。
【二〇】次に界に就きて。

ごとくなる諸の變化の事を起して有情の所應作を建立するが故なり。自性身とは、謂く、諸の善逝の共有する法身にして、最極微細の一切障の轉依たり眞如を體と爲すが故に。自他の利に於て、並に最勝となす、此の身を證するに由りて餘の身を得するが故なり。此の三佛身は是れ差別の義なり。當に知るべし、此の中亦法と僧との功德をも讃す。法寶とは、自性と因果等の義の所攝なるが故に。僧寶とは、此れに隨ひて修學して生ずる所なるが故に。庶くは學者をして諸の怖畏無からしめん〔が爲め〕、方に論端を造りて玆の體性を建〔立〕せり。[一四]

本事〔分〕と決擇〔分〕と、
是〔の二分〕に各々四種あり。
三法と攝と〔相〕應と成〔就〕と、
〔及び〕諦と法と得と論議となり。
幾何か因と取と相と、
建立と次第と、
義と喩と廣分別と、
總頌を集むるとなるや、應に知るべし。

[一六]問ふ、何が故に論端に〔於て〕、先づ蘊等を辯ずるや。

答ふ、學者をして、幾何か因等なりやと、諸の思擇の處に於て善巧を得せしめんと欲するが故なり。所以何んとならば、此の善巧に由りて、能く二種の稱讃利益を得、所謂る作意稱讃利益と論議決擇稱讃利益となり。作意稱讃利益とは、謂く、善く奢摩他・毘鉢舍那に順ひ增長するが故なり。善く奢摩他に順ひ增長するとは、謂く是の如き諸の思擇の處に於て、已に善巧を作し、疑なきことを得るが故に、其の所樂に隨ひ、一境界に於て正觀現前し、心定め易きが故な

立、四顯相、五三乘能起、六三身所作、七有情化別の七門を以て研究せられてゐる。往見すべし。

【一四】以上を以て第一辯揚歸敍分の兩文を終る。

【一五】此の頌より以下を第二集述本文分と稱す。而もまさしく無著の本論にして、二字下げなるは獅子覺の釋なり。第二分中、初に頌を以て總じて一部の分別を標して本事と決擇との二分あり、分中に各各四品あることを明す。

【一六】獅子覺假りに問答を興す。

の論を造れる經釋二師を供養して其の所應に隨ふ。所以何んとならば、此の論の所依と及び能起なるが故なり。[一〇]佛・薄伽梵は是れ契經等の一切の教法の平等の所依なり。師なくして自ら諸法の實性を悟り、一切の敎の起る所依處なるが故に。此れより無間に、聖弟子衆は法に依り隨つて學す。[一一]法を依となすとは、法界より流るる所なるが故なり。經釋の二師も、亦如來所說の正法の一分に契ひ、無倒に聞思修行するを依止となすが故に隨つて〔此の〕論を造るなり。初の二頌は如來・應〔供〕・正等覺の勝德の六義を顯示す。所謂る自性と因と果と業と相應と差別との義なり。[一二]諸の眞・淨・究竟の理を會しとは、自性の義を顯はす。謂く、諸佛の法身は、一切種の轉依の眞如を以つて體性と爲すが故なり。聖行の海を超えて彼の岸に昇りとは、因の義を顯はす。謂く、佛の菩提は、一切種の極喜等の十地の聖行を、無量無數の大劫に、圓滿に修習せる因從り生ぜらるるが故なり。一切法を證得して自在なりとは、果の義を顯はす。謂く、永へに一切の煩惱障と所知障と、及び彼の〔煩惱所知二障の〕餘習とを斷じて、無邊希有の功德なる無上の三菩提果を證得し、一切法に於て自在に轉ずるが故なり。善權化導不思議とは、業の義を顯はす。謂く、非一切智の境に超えたる神通・記說・敎誡との變現[一三]等と無量の調伏・方便とを以て、可化の有情を導引し、心界をして清淨ならしむるが故なり。無量希有の勝功德とは、相應の義を顯はす。謂く、尋思數量を超えたる無邊種の種難行苦行より生ずる所の無上の大悲力無畏等の功德法寶と相應するが故なり。自他並に利する所依止とは、差別の義を顯はす。謂く、如來の受用〔身〕と變化〔身〕と自性身とは、其の次第の如く、自他並に利する所依〔止〕なるが故なり。所依とは、身の義、體の義にして差別なきなり。自他並に利する所依とは、勝れたるに就いて說けり。謂く、受用身は自利最勝なり。大會の中に處して、能く第一廣大甚深なる法の聖財を受くるが故なり。變化身は他利最勝なり。遍く十方一切の世界に於て能く無間に猶し工巧業等の

【七】　無著のこと。
【八】　無著の弟子獅子覺のこと。
【九】　此の師敬の頌と、次の長行とは、安慧が參糅の意を敍したるものにして、第一讃揚歸敍分と稱す。其の中初に頌、次に長行なり。
【一〇】　同學鈔一之四に「此論所依」と云ふ論題があり、雜集論の「此論所依及能起故」の文に關し、述記、演祕等の所說を參考して論じてある。往見せよ。
【一一】　同學鈔一之四に「聖弟子依法隨學」なる論題があり、雜集論の聖弟子は凡聖に通ずるや否やを論じ、對法抄、演祕の說によつて凡に通ぜずと結してゐる。
【一二】　雜集論の卷頭の「諸會眞淨云云」の歸敬の頌を釋するのに、對法抄には、諸の字が下の敬禮に通ぜずとする一義と通ずとする一義との兩義をあげてゐる。同學鈔にも亦「諸會眞淨究竟理」と云ふ論題となつて出てゐる。往見すべし。
【一三】　神通と記說と敎誡との三者は、所謂三輪と稱せられるところのものにして、義林章六末に三輪義材なる別章があり、一出體、三辯名、三廢

大乘阿毘達磨雜集論

卷の第一

安慧菩薩糅[一]

大唐三藏法師玄奘詔を奉じて譯す

本事分中、三法品、第一之一

諸の眞・淨・究竟の[二]理を會し、
聖行の海を超えて彼の岸に昇り、
一切の法を證得して自在なると[三]、
善權化導の不思議と[四]、
無量希有の勝功德と、
自他並に利するの所依止と[五]、
是の如きの大覺尊と、無等の妙法と、
諸の聖衆とを敬禮したてまつる[六]。
開演の本論師と[七]
親しく聖旨を承けて分別する[八]者とを敬禮したてまつる。
契經と及び解釋とを悟らんがため、
爰に正勤を發して乃ち參綜せん[九]。

今此の頌の中〔に於て〕、無倒に最勝の功德を稱讚し、敬ひて頂禮を申べて、以て三寶と及び此

【一】糅。本論はもと、無著の大乘阿毘達磨集論と、その集論を釋した師子覺の釋論とが、各別に流布してゐたものを、安慧が本、釋二論を參綜して一本としたのであるから、糅と稱するのである。恰も現行の成唯識論は、もと世親の唯識三十頌を十大論師が釋した各別の釋論であつたのを、玄奘が護法を中心として他の論師達の釋論をも參綜して一本として譯出したから、これを糅譯と稱してゐるのと同樣な意味合である。

【二】初の一句は法身本有の德、斷德を顯す。

【三】次の二句は報身修生の德、智德を顯す。

【四】次の一句は應身利用の德、恩報を顯す。

【五】次の二句は法・報・應の三身を通じて自利利他圓滿なるを顯す。

【六】上の六句を以つて佛の三身を禮し、次の二句を以つて大覺尊なる佛寶と、妙法なる法寶と、聖衆なる僧寶と、

義天錄に出づ。

其の他、支那、朝鮮撰述の雜集論の末疏に六部あり、何れも解說辭典に記載なきも、煩しければ省略す。次に日本撰述をあぐるに

一、大乘阿毘達磨雜集論述記貫練編二十八巻　湛慧

一、大乘阿毘達磨雜集論述記聞決編一巻　湛惠律師說　北越功存說

一、大乘阿毘達磨雜集論圖引附述記引一巻

等ありて、佛書解說辭典に出づ。

然るに更に、

〇一、大乘阿毘達磨雜集論述記纂釋二十巻　興隆

ありて、近代名家著述目錄中に出せり。即ち以て本論の講讃並に流傳の狀況を察知すべし。

昭和十年四月十三日

譯者　常盤大定

結城令聞　識

次に淄州大師慧沼は、唯識了義燈卷一本に、本論を以て瑜伽十支中の隨一に數へて、或は分別名數論と云ひ、或は廣陳體義論と說けり、又以て本論と瑜伽論との關係を察知すべし。

四、本論の飜譯

一、本論は梵名を Abhidharmasamuccayavyākhyāna nāma と云ひ西藏には Mṅon-pa chos kun nas btus-paḥi rnam-par bçad-pa shes-bya-ba と稱し、而して西藏には最勝子造と傳說せり。今は譯して大乘阿毘達磨雜集論と云ひ。大唐三藏法師玄奘の奉詔譯にして沙門玄賾等の筆受(開元錄八)なり。

二、譯時に關しては次の如き二の異說あり。

一、唐貞觀十九年(A. D. 645)說。——內典錄八、大周錄六。

二、唐貞觀二十年正月甲子(十七日)——二月(二十九日)——慈恩傳六、開元錄八。

三、譯場は內典錄六、開元錄八、共に長安弘福寺翻經院と爲せり。

五、講讚の末疏

次に本釋兩論の末疏を擧ぐれば、次の如き多數に及べり。頭に○を附加したるものは未だ佛書解說辭典に載せられざるものなり。

○一、大乘阿毘達磨集論釋　淨月

成唯識論述記卷一本に「梵云戍陀戰達羅、唐言淨月、安慧同時、造勝義七十釋、及集論釋之論師也」と云ふ。勿論、未渡未翻なり。以上印度撰述。

○一、大乘阿毘達磨集論疏二卷

撰者未詳なれども、奈良朝現在錄に出せり。勿論亡逸せるものにして支那撰述の書なり。

以上は集論の疏なり。

○一、大乘阿毘達磨雜集論疏五卷　智仁

智仁は新羅法師なり、惜しい哉亡逸せり。永超錄、法相法門錄、謙順錄等に出せり。

○一、大乘阿毘達磨雜集論疏十六卷　靈雋

平祚錄、藏俊錄等に出づ、亡逸の書なり。

一、大乘阿毘達磨雜集論述記十卷　基

現存す。佛書解說辭典にも出づ。

一、大乘阿毘達磨雜集論疏十六卷　玄範

大正勘同錄に鮮本現存すと傳ふも未だ見ず。平祚錄、永超錄、藏俊錄等にも記載あり。

○一、大乘阿毘達磨雜集論疏五卷　元曉

永超錄、謙順錄等に出づ。逸亡。

○一、大乘阿毘達磨雜集論疏十二卷　勝莊

永超錄、藏俊錄等に出づ。逸亡。

○一、大乘阿毘達磨雜集論疏

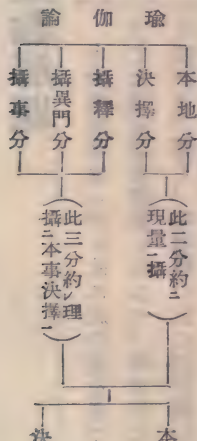
撰者不明なるも奈良朝現在錄に見へたり

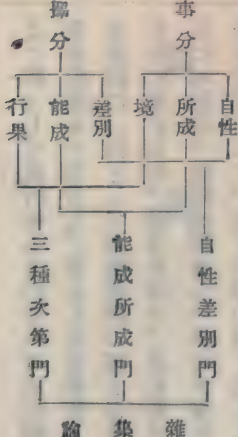
○一、大乘阿毘達磨雜集論古迹記四卷　太賢

中本事分は、第一巻より第五巻に至る前五巻にして、此中に於て蘊・界・處の三科の自性を分別するにあり。其の中、更に四品ありて、三法品第一は三科の體義を明し、攝品第二は三科の寛狹を辨じ、相應品第三は性相の順違を說き、成就品第四は諸法の得失を判ぜり。更に要を撮りて之を云へば、上四品の中、最初の一品は體品にして、後の三品は義品と稱することを得べし。

次に第二決擇分は第六巻より最後に至る十一巻にして、其の中に、又、諦・法・得・論議の四品あり。而して諦品第一は、四諦十六行相等の所詮の理を明し、法品第二は、妙行起修等の能詮の行を說き、得品第三は、行修所得の果を辨じ、論議品第四は、摧邪顯正に就きて論を爲せり故に若し、此の決擇分を前の本事分に對して考察し來る時は、本事分の四品は諦品と稱するを得べく、それに對する決擇分の四品は義品と稱すべき關係にあり。若し能所を以て分別せば、本事の四品は所觀にして決擇の四分は能觀と云ふべく、又境行果の三に約して論を爲さば、初は境、後は行果と稱するを得べし。對法鈔主慈恩大師は二分の因緣を述べて、「此れ何の因緣ありてか總じて二分と爲すや。本事分の中には略して廣く諸法の體事を分別し、決擇分の中には略して廣く深密の要義を決擇せり」と云へり。各別の品目は本文に至りて委悉すべし。

本論主無著、並に雜糅師安慧の傳記は世に周知のことなり、師子覺の傳に關しては、西域記巻五、唯識了義燈巻一之本等に見ゆるを以て、こゝに贅辯せず。

三、瑜伽論との對檢

對法鈔主慈恩大師云く、「一切法に略して二種り、一には自性、二には差別、初は自性を明すを宗と爲し、後は差別を明すを宗と爲す。又法義を陳ぶれば二種に過ぎず、一には所成、二には能成、前は所成を明すを宗と爲し、後は能成を明すを宗と爲す。又敎の所明に總じて三種あり、謂く境と行と果となり。初は境を明すを宗と爲し、後は行果を明す。果は行に依りて成じ、行は能く果を生ず」といへり。

今この自性差別門、能成所成門、三種次第門の三種に依りて、瑜伽及雜集兩論の相攝關係を圖示せば、即ち次の如し。

大乘阿毘達磨雜集論解題

一、本論と釋論と糅論

本論は無著の造にして大乘阿毘達磨集論なり。之に師子覺の加へたる釋論あり本釋兩論を同糅して、混一たらしめたるを、安慧の糅論と爲す。大乘阿毘達磨論中、代表的の大作にして、隨つて古來大に研究せられたり。內容廣汎にして理論實際の兩面に亘り、而してその論述形式は當時大に發達せる論理の法則に從ひ微に入り細を穿ちて、分析を累ね、簡別を爲し、時に煩瑣と思はるまでに及ぶ。若し當時流布せる大乘法相を知悉せんとする要求よりせば、糅論大に可なりと雖も史的研究を爲さんとするに至りては、本釋二論を判別するを、最も然るべしと爲す。之を爲すに多少の困難ありと雖も、今初めて之を區分するを得たるは、譯者の欣快とする所なり。

本論主無著は「何が故に此の論を名づけて大乘阿毘達磨集と云ふや。略するに三義あり。謂く、等所集の故に遍所集の故に、正所集の故に」と云ひ、釋論主師子覺は「遍所集とは、謂く、遍く一切の大乘阿毘達磨經中の諸の思擇處を攝するが故に」と說き、而して對法鈔主は「此の論の所釋は阿毘達磨經にして、瑜伽に依りて諸の要義を集む」と述べたり。蓋し此等の文に依ると、本論の所釋は、單一の大乘阿毘達磨經のみにあらずして、當時流行せし一切の大乘阿毘達磨經を所依となして等集し、遍集し、而して正集せしものなるべし。然も慈恩大師が「瑜伽に依りて」と稱せしより見て、瑜伽師地論と密接なる關係を有することは言を待たずと雖も、瑜伽師地論は、決定藏論中に本地經と稱せられし如く、他面、古くより經として流行せしものなれば或は瑜伽師地論の一部分も、恐らくは大乘阿毘達磨經の一種として本論所釋の經となるものに非ざるか。後考を待つ。之を要するに本論は、當時流行せし一切の大乘阿毘達磨經を以て、廣く所釋の經と爲して以て大成せられたる大乘阿毘達磨集論七卷なり。無著の資に密行通達し、高才を以て世に聞えたる師子覺あり、梵に佛陀僧訶（Buddhasiṁha）と云ふものこれに釋を加へたり。其の後に唯識十六論師中の隨一なる安慧あり、本・釋二論を雜糅し、之に歸敬序を附して、以て大乘阿毘達磨雜集論十六卷を成せるもの、卽ち是れ現流の雜集論十六卷なり。世に雜集論を以て安慧の釋と稱する人あるは、もとより誤なり。

二、一部の大要

雜集論一部十六卷を大別して、第一本事分と第二決擇分との二分と爲す。其の

凡例

一、本書は大正大藏經所收の麗本を以て原本と爲せり。但し他本と比較して、明らかに他本を以て妥當と見做さるべき場合には他本に從ひ、脚註に其の旨を述べ置けり。

二、原本は糅本なるが故に、本釋二論の區別なきも今は集論と對校して、釋論は二字下げと爲し本論と區別せり。

三、本釋二論を區別せるも、本論はもと糅本なるを以て、時に文勢に乘じて問、答等の文字を挿入して集論を潤色せるところ往々にしてあれども、他は悉く合致するを以て、潤色の文字をも取り入れて本論の文と爲し置けり。

譯者

目次

瑜伽部 十

常盤大定
結城令聞 共譯

國譯一切經

大東出版社藏版